

# レ・ミゼラブル

第三部 マリユス

ビクトル・ユーゴー

豊島与志雄訳



第一編 パリーの微分子

一 小人間

パリーは一つの子供を持ち、森は一つの小鳥を持つている。  
その小鳥を雀すずめと言い、その子供を浮浪少年うき浪少年と言う。

パリーと少年、一つは坩堝るつぼであり一つは曙あけぼのであるこの二つの  
観念をこね合わし、この二つの火花をうち合わしてみると、そ  
れから一つの小さな存在がほとばしり出る。ホム、ン、チ、オ（小人）  
とプラウツスは言うであらう。

この小さな人間は、至つて快活である。彼らは毎日の食事もしていない、しかも気が向けば毎晩興行物を見に行く。肌にははだシヤツもつけず、足には靴くつもはかず、身をおおう屋根もない。まったくさういうものを持たない空飛ぶ蠅はえのようである。七歳から十三歳までで、隊を組んで生活し、街路を歩き回り、戸外に宿り、踵かかとの下までくる親譲りの古いズボンをはき、耳まで隠れてしまうほかの親父おやじからの古帽子をかぶり、縁の黄色くなつた一筋きりのズボンつりをつけ、駆け回り、待ち伏せし、獲物をさがし回り、時間を浪費し、パイプをくゆらし、暴言を吐き、酒場に入りびたり、盗人と知り合い、女とふざけ、隠語を用い、卑猥ひわいな歌を歌い、しかもその心のうちには何らの悪もないのである。その魂のうちにあるものは、一つの真珠たる潔白である。真珠は泥の中にあつてもとけ去らぬ。人が年少である間は、神

も彼が潔白ならんことを欲する。

もし広大なる都市に向かつて、「あれは何だ？」と尋ぬるならば、都市は答えるだろう、「あれは私の子供だ。」

## 二 その特徴の若干

パリーの浮浪少年は、小なる巨人である。

何ら誇張もなくありのままを言えば、この溝どぶの中の天使は時としてシャツを持つてゐることもあるが、それもただ一枚きりである。時としては靴を持つてゐることもあるが、それも底のすり切れたものである。時には住居を持つていて、母親がいるのでそれを愛することもあるが、しかし自由だからと言って街路の方を好む。独特の遊びがあり、独特の悪戯いたずらがある。そしてその

根本は中流市民に対する憎悪ぞうおである。また独特な比喻ひゆがある。死ぬことを、たんぽぽを根から食うという。また独特な仕事をつじばしや持っている。辻馬車を連れてき、馬車の踏み台をおろし、豪雨のおりに街路の一方から他方へ人を渡してやっていわゆる橋商、売をなし、フランス民衆のためになされた当局者の演説をふれ回り、舗石しきいしの間を掃除そうじする。また独特の貨幣を持っている。往来に落ちてゐる種々な金物でできてる不思議な貨幣で、ぼろと言われていて、その小さな浮浪少年の仲間にごく規則だった一定の流通をする。

最後に、彼らは独特な動物を持っていて、すみずみでそれを熱心に観察する。臙脂虫えんじむし、油虫、足長蜘蛛あしながぐも、二つの角のある尾を曲げて人をおびやかす黒い昆虫こんちゆうの「鬼」。また物語にあるような怪物をも持っている。腹に鱗うろこがあるけれど、蜥蜴とかげでもなく、背

中に疣いぼがあるけれど、蟄がまでもなく、古い石灰竈かまどやかわいた水溜みずためなどの中に住んでいて、まっ黒で毛がはえ、ねばねばして、あるいは遅くあるいは早くはい回り、声は出さないがじつと見つめ、だれもかつて見たこともないような恐ろしいものであって、彼らはその怪物を「つんぼ」と呼んでいる。石の間に「つんぼ」をさがし回ることは、身の毛のよだつような楽しみである。なお別の楽しみは、急に舗石しきいしを上げて草鞋虫わらじむしを見つけることである。またパリーの各地は、そこで見つかる種々なおもしろいもので名がとおっている。ユルシュリーヌの建築材置き場の中にははさみ虫、パンテオンには百足虫むかで、練兵場の溝どぶの中にはおたまじやくしがいる。

彼らの言葉はタレーラン（訳者注 機才に富んだ弁舌で有名な当時の政治家）に匹敵する。同様に冷笑的であり、またいつ

そう正直である。まったく思いもかけないような快弁を持つていて、その大笑いで店屋の者を狼狽ろうばいさせることもある。その調子は大喜劇から狂言に至るまでの間を快活にはね回る。

葬式の行列が通る。そのうちに医者がいるとする。するとひとりの浮浪少年は叫ぶ、「おや、医者の野郎、自分の仕事の取り入れをするなんて、いつから初めやがったんだ。」

群集の中に浮浪少年のひとりがいる。そして眼鏡めがねや鎖をつけたひとりの堂々たる男が怒つてふり返りながら言うとする、「やぐざ者め、俺の妻の腰ふところに手をかけたな。」

「僕が！ では僕の懐ふところに手をつつ込んでみたらいいだろう。」

### 三 その愉快さ

晩になると、いつもいくらかの金をどうにか手に入れて、この小人は芝居しばいに行く。ところがその蠱惑こわくてき的な闕しきいを一度またぐと、彼らの様子は変わってしまう。浮浪少年だったのが、小僧つ児になつてしまう。芝居小屋は船を裏返したようなもので、上方に船底がある。小僧つ児がつめ込むのはその船底へである。小僧つ子と浮浪少年との関係は、ちようど蛾がと青虫との関係である。羽がはえて空中を飛び回る代物しろものである。芝居小屋のその狭い、臭い、薄暗い、不潔な、不健康な、たまらない、のろうべき船底が、天国ともなるためには、彼らがそこにいさえすれば十分である、光り輝くその幸福と、その力強い心酔と喜悅と、羽音のようなその拍手とをもつて。

あるひとりの者に無用さを与え、その必要さを取り去つてしまえば、そこに一つの浮浪少年ができ上がる。

浮浪少年は、一種の文学的直覚を持つていないこともない。その傾向は、多少遺憾ながら、決してクラシック趣味ではなさそうである。彼らは生まれながらにしてあまりアカデミックではない。その一例をあぐれば、この喧騒けんそうな少年らの小社会におけるマルス嬢の評判は、一味の皮肉さで加味されていた。浮浪少年は彼女のことをまる、まる、嬢と言っていた。

彼らは怒鳴り、やゆ擲揄し、ちようろう嘲弄し、けんか喧嘩をし、こじき乞食小僧のよう

なぼろをまとい哲人のような弊衣をつけ、下水の中をあさり、

ちりだめ塵溜ちりだめの中を狩り、汚物のうちから快活を引き出し、町の巷ちまたに天

下の奇想をまき散らし、冷笑し風刺し、口笛を吹き歌を歌い、

歓呼し罵詈ばりし、アレリュイアとマタンチュルレットと（訳

者注 歓呼の賛歌とのろいの賛歌と）をあわせ用い、デ・プロフォンデイスからシアンリまで（訳者注 荘重な聖歌から卑し

い俗歌まで)あらゆる調子を口ずさみ、求めずして見だし、知らないことをも知り、すりを働くほどに謹厳であり、賢者たるまでにばかであり、不潔なるまでに詩的であり、神々の上にならずくまり、糞便ふんべんの中に飛び込んで星を身につけて出て来る。実にパリーの浮浪少年は小ラブレール(訳者注 十六世紀の快活な風刺詩人)である。

彼らは時計入れの内隠しがついてるズボンでなければ満足しない。

彼らはあまり驚くことがなく、恐れることはなお更少なく、迷信を軽蔑し、誇張をへこまし、神秘を愚弄ぐろうし、幽霊をばかにし、架空をうち倒し、浮誇を滑稽化こっけいかする。それは彼らが散文的だからでは決してない。反対に彼らは、荘重な幻影を道化どうけた幻と変えるまでである。もしアダマストール(訳者注 ヴァスコ・ダ・

ガマの前につつ立つたという喜望峰を守っている巨人）が彼らに現われたとしても、彼らは言うであろう、「おやあ、案山か子がめが！」

#### 四 その有用な点

パリーは弥次馬やじうまに初まり、浮浪少年に終わる。この二つは他のいずれの都市にも見られないものである。一つはただながめるだけで満足する消極的なものであり、一つは進取的に限りない手段をめぐらす。プリュドンムとフーイユーとである（訳者注 無能尋常の典型と悪戯発明の典型）。パリーのみがこの二つをその博物誌のうちに持っている。各王政は弥次馬のうちにあり、各無政府は浮浪少年のうちにある。

パリーの場末のこの青白い子供は、困苦の中に、社会の現実と人間の事がらとの前に考え深く目を開きながら、生活し生長し、熟し発達してゆく。彼らは自分をむとんちやくだと思つてゐる。しかし実際はそうでない。彼らはじつとながめていて、何事にも笑い出そうとしてゐるが、しかしまた他のことをも仕出かそうとしている。いかなる種類のものであろうとも、およそ、特権、濫用、らんよう破廉恥、压制、不正、専制、不法、盲信、暴虐、などと名のつくものは、このぼかんとしてゐる浮浪少年に用心するがいい。

この少年はやがて大きくなるだろう。

いかなる土で彼らはできてゐるか？　ごくありふれた泥からである。一握りの泥と一つの息吹、いきふきそれだけでアダムができ上がる。ただ一つの神が通ればそれで足りる。そして神は一つや

はりこの浮浪少年の上を通つた。運命はこの少年に働きかける。ただここで運命という言葉は、多少偶然という意味をこめて用いるのである。それ自身普通のつまらぬ土の中にこね上げられ、無知で、無学で、放心で、卑俗で、微賤びせんであるこの侏儒しゅじゆは、やがてイオニア人（哲人）となるであろうか、またはベオチア人（ぼか）となるであろうか。まあ待つがいい。世は輪廻りんねだ。パリーパリーの精神、偶然で子供を作り宿命で人を作るその悪魔は、ラテンの壺屋つぼやの車を逆さに回して、新しい壺を古代の壺にしようとしている。

## 五 その境界

浮浪少年は、心のうちに知恵を持っていて、町を愛しまた静

寂を愛する。フスキスのように町の愛人であり、フラックスの  
ように田野の愛人である。

考えながら歩くこと、すなわち逍遙しやうようすること、それは哲学者  
にとつてはいい時間つぶしである。ことに、多少私生児的な、  
かなり醜い、しかも奇怪な、二つの性質からできてゐる田舎いなかにお  
いて、ある種の大都会なかんづくパリーを取り囲んでゐる田舎  
において、そうである。郊外を觀察することは、すなわち水陸  
両棲物りようせいぶつを觀察することである。木立ちの終わり、軒並みの初ま  
り、雑草の終わり、舗石しきいしの初まり、田圃たんぼの終わり、商店の初ま  
り、轍わだちの終わり、擾乱じょうらんの初まり、神の囁きささやの終わり、人の喧騒けんそう  
の初まり、それゆゑに異常な興味がある。

それゆゑに、あまり人の心をひかず常に通行人からうら寂し  
い、という形容詞をかぶせられてゐるそれらの地に、表面上何らの

目的もない散歩を夢想家がなすのである。

これらのページを書いている著者も、昔は長い間パリ郊外の散策者だった。そして著者にとってそれは深い思い出の源である。あの平坦な芝地、あの石多い小道、あの白堊はくあ、あの石灰、あの石膏せっこう、あの荒地や休耕地のきびしい単調さ、奥深い所に突然見えてくる農園の早生わせの植物、僻地へきちと都市との混合した景色、兵營の太鼓が騒々しく合奏して、遠く戦陣の轟とどろきをもたらず片すみの人なき広い野原、昼間の寂寞せきぼく、夜間の犯罪、風に回つて揺らめく風車、石坑の採掘車輪、墓地のすみの居酒屋、太陽の光を浴び蝶ちようの群れ飛んでる広茫こうぼうたる地面を四角に切り取つて、いる大きな黒壁の神秘的な魅力、それらのものに著者の心はひかれていた。

次のような特殊な場所を知っている者が世にあるだろうか。

グラシエール、キュネット、砲弾で斑点をつけられてるグルネルの恐ろしい壁、モン・パルナス、フォス・オー・ルー、マルヌ川岸のオービエ、モンスーリ、トンブ・イソアール、それからまたピエール・プラト・ド・シャージェイヨン、そこには廃れた古い石坑が一つあって、今ではただ茸きのこがはえるだけのことで、腐った板の引き戸で地面にふたがしてある。ローマの田舎いなかは人にある観念を与えるが、パリーの郊外もまた他の一つの観念を人に与える。眼前に現われてる地平線以内に、ただ野と人家と樹木とのみを見ることは、その表面にのみ止まることである。あらゆる事物の光景は、神の考えを含んでいる。平野が都市と接している場所には、人の心を貫くある言い知れぬ憂鬱ゆううつが印せられている。そこでは自然と人類とが同時に口をきいている。地方的特色がそこに現われている。

パリーの郭外に接しているそれら寂寥せきぱくの地、パリーの縁とも称し得べきそれらの地、それをわれわれのように逍遙しょうようしたことがある者は、そこここに、最も寂しい場所に、意外の時に、薄まがきい籬かきのうしろやわびしい壁のすみに、泥にまみれ塵ちりにまみればろをまとい髪をぼうぼうとさした色の青い子供らが、がやがやと集まつて、矢車草の花を頭にかぶつて、めんこ遊びをしているのを、おそらくだれも見たことがあるだろう。それは貧しい家から飛び出してきた子供らである。市外の大通りは彼らの自由に息をつくべき場所である。郊外ひせんの地は彼らのものである。彼らはその辺をいつも遊び回る。卑賤ひせんな歌を無邪気に歌い回る。彼らはそこにいて、あるいはむしろそこに生存して、すべての人の目をのがれ、五月六月の柔らかな光の中で、地面に掘った穴のまわりにうずくまり、親指の先でおはじきをして一文二文を

争い、何らの責任もなく放縦で放漫で幸福なのである。しかも市人の姿を認むるや、一つの仕事があることを思い出し、糧かてを得なければならぬことを思い出し、こがね虫のいっぱいはいつた古い毛糸の靴足袋くつたびや一束のリラの花などを売りつけようとす。その不思議な子供らと出会うことは、同時におもしろいまた悲しいパリー付近の風致の一つである。

時とするとそれらの男の児の群れには、女の児が交じつてゐることもある。彼らの姉妹でもあるのか？ まだ年若い娘で、

やせて、いらいらして、手の皮膚はかさかさになり、雀斑そばかすがで

きていて、裸麦や美人草の穂を頭につけ、快活で、荒つぽくて、はだし蹴足はだしになつてゐる。畑の中でさくらんぼうを食べてる者もいる。

夕方になると笑つてる声も聞こえる。ま昼の暑い光に照りつけられてゐるその群れ、あるいは夕方の薄ら明りのうちに透かし見

られるその群れ、それは長く夢想散步者の頭を占めて、夢のうちにもその幻が交じつてくるであらう。

パリーは中心で、郊外はその円周である。これらの子供にとってはそれが全土である。決して彼らはその外に出ようとしない。あたかも魚が水から出ることのできないように、彼らはもはやパリーの雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気<sup>き</sup>から出ることができない。彼らにとつては、市門から二里離るればもはや空虚である。イヴリー、ジャンテイイー、アルクイユ、ベルヴィル、オーベルヴィリエ、メニルモンタン、シヨアジー・ル・ロア、ピランクール、ムードン、イツシー、ヴァンヴル、セーヴル、プウトー、ヌイイー、ジャンヌヴィリエ、コロンプ、ロマンヴィル、シャトウー、アスニエール、ブージヴァル、ナンテール、アンガン、ノアジー・ル・セク、ノジャン、グールネー、ドランシー、ゴネス、そこに彼ら

の世界は終わるのである。

## 六 その歴史の一片

本書の物語が起こった時代には、もとよりそれもほとんど現代ではあるが、その頃には今日のように街路の角に巡査かどがいはいしなかつた（今はそれを論ずる時でないのは仕合わせである）。浮浪の少年がパリーにいつぱいになつていた。困いのない土地や、建築中の家や、橋の下などで、巡邏じゅんらの警官らから当時毎年拾い上げられた宿無しの子供は、統計によると平均二百六十人くらいはあつた。それらの巢のうちで有名なのは、いわゆる「アルコル橋の燕つばめ」と言わるるに至つた。もとよりそれは社会の最も不幸な兆候の一つであつた。人間のあらゆる罪悪は子供の浮

浪から初まる。

けれどもパリーはその例外としてよろしい。われわれが今持ち出した思い出が痛ましいにもかかわらず、ある点までこの除外例は正当である。他のすべての大都市においては、浮浪の少年は沈淪ちんりんした人間である。ほとんどどこにおいても、孤立した少年は必ず世の不徳に巻き込まれるままに投げ出され打ち捨てられたもので、ついにはそれによつて正直さと本心とを食いつくさるるに至る。しかるにパリーの浮浪少年は、あえて言うが、パリーの浮浪少年は、表面いかにも磨滅まめつされ痛められてはいるが、内部においてはほとんど純全たるままである。思つても輝かしい一事は、そしてフランス民衆革命の燦爛さんらんたる誠実さのうちには光輝を放つてゐる一事は、実に大洋の水のうちにある塩分から生ずるように、パリーの空気のうちにある観念から生ずる、

一種の非腐敗性である。パリーを呼吸することは、魂を保存することである。

しかもわれわれがここに説くことも、分散した家族の網目を引きずつてるかのように見えるこれらの少年のひとりに出会う時に、人が感ずる悲痛な感情を、少しも和らげるものではない。まだはなはだ不完全なる現今の文明においては、多くの家族の者らは暗闇くらやみのうちに散り失せ、自分の子供らがいかになつたかも知らず、いわば往来の上におのれの臟腑ぞうふを落としてゆくのは、さほど珍しいことではない。そこから陰惨な境涯が起こつてくる。この悲しき一事も一つの成句を作り出して、そのことを「パリーの舗石しきいしの上に投げ出される」(訳者注 家なく職なき境涯に投ぜらるるの意)と云う。

ついでに言うが、かく子供を放棄することは、昔の王政によつ

でも決して救済しようとはされなかつた。エジプトやボヘミアの一部の下層社会は、上層の便宜にのみ供され、勢力家の意のままになつていた。下層民衆の子弟を教育することに対する嫌悪けんおは、一般の信条となつていた。「半可通」が何の役に立つものか？　そういうのが合い言葉だつた。ところで、浮浪の子供は無学な子供の必然の帰結である。

その上、王政は時として子供の必要を生じた。そういう時には、往来から子供を拾い上げていた。

古いことはさておいて、ルイ十四世の時であるが、王は一艦隊を造ろうとした。それは道理あることで、よい考えだつた。しかしその方法はどうかだつたか。風のまにまに漂わされる帆船に相並んで、それを必要に応じて曳舟えいしゅうするために、あるいはかい櫂かいによりあるいは蒸気によつて自由な方向に進み得る船を有しな

ければ、艦隊なるものは存在し得ない。ところが当時の海軍にとって、帆と櫂とによる軍艦があたかも今日の蒸気による軍艦のごときものだった。それで帆と櫂との軍艦が必要となった。しかしそういう軍艦は漕刑囚人そうけいによつてのみ動かされていたので、従つて漕刑囚人が必要となつた。で宰相コルベールは、地方の監察官と諸侯の議政府とに命じて、でき得る限り多くの囚人をこしらへさせた。役人らは彼の歡心を求めて大いに力を尽した。歌唱行列の前に帽子をかぶつたまま立つてゐる男がゐると、新教徒的な態度だといつて、すぐに漕刑場へ投じた。往来で子供に出会ふと、その子供が十五歳になつていてかつ宿所を持たない場合には、すぐに漕刑場へ送つた。それが偉大なる治世であり偉大なる世紀だったのである。

ルイ十五世の下では、浮浪の子供はパリーになくなつてしまつ

た。人知れぬある秘密な使途にあてんために、警察は子供を奪い去つてしまった。人々は王の赤血の沐浴もくよくについて恐ろしい推測を戦慄しながらささやきかわした。バルビエはそれらのことを率直に書き留めている。時として警吏は、子供が少なくなつたので父親のある子供まで捕えることがあつた。父親は絶望的になつて警吏につつかかつていった。そういう場合には高等法院が中にはいつて、絞罪に処した。だれを？ 警吏をか、否、父親を。

## 七 その階級

パリーの浮浪少年階級はほとんど一つの閥族である。だれでもはいれるものではないと言つてさしつかえないほどである。

この Gamin (浮浪少年) という語は、一八三四年に初めて印刷の上に現われて、俗語の域から文学上の言葉のうちにはいつてきたのである。この語が現われたのは、ク、ロ、ード、グ、ー、(訳者注 これも本書の作者ユーゴーの作である) と題する小冊子の中であつた。激しい物議を起こした。がその語は一般に通用されるに至つた。

浮浪少年らの中で重きをなす原因にはきわめて種々なものがある。われわれが知つてゐるし交わりもしたひとりには、ノートル・ダムノートルダムの塔の上から落ちる人を見たといふので、ごく尊敬され感心されていた。ある者は、アンヴァリードアンヴァリドの丸屋根につける彫像が一時置かれていた裏庭に忍び込んで、その鉛を少し「ちよろまかした」といふので、ごく尊敬されていた。ある者は、駅馬車馬車がひっくり返るのを見たといふので、ごく尊敬されていた。

またある者は、市民の目をほとんどえぐり出そうとしたひとり  
の兵士と「知り合いである」というので、ごく尊敬されていた。

パリーの一浮浪少年の次の嘆声、俗人がその意味をも解しな  
いでただ笑い去ってしまう深い文句、それを以上のことは説明  
するものである。「ああああ、いやになつちまう、まだ六階から  
落つこつた者を見ないんだからな！」（この言葉は彼ら特有の発  
音で言われたのである）。

確かに次のようなのは田舎者いなかもの式のみごとな言葉である。「父とちつあ

ん、お前のお上さんは病気で死んだじゃないか。なぜお前は医  
者を呼びにやらなかつたんだ？」「何を言わつしやるだ、わしら  
貧乏人はな、人手を借りねえで死にますだ。」ところでもし田舎  
者の消極的な愚弄ぐろうが右の言葉のうちにもつてるとするならば、  
郭外の小僧の無政府的な自由思想は、確かに左の言葉のうちに

こもつてゐるであらう。すなわち、死刑囚が馬車の中できようかいし教誨師の言葉に耳を傾けていると、パリーの子供は叫ぶ。「あいつ、牧師め、と話をしてやがる、卑怯者ひきようだな！」

宗教上のことに対するある大胆さは、浮浪少年を高めるものである。唯我独尊ということが大事である。

死刑執行に立ち会うことは、一つの義務となつてゐる。断頭台を互いにさし示しては笑い、種々なあだな綽名を浴びせかける。「飯の食い上げ——ふく脹れつ面つら——天国婆——おしまいの一口——その他。」事がらを少しも見落とすまいとしては、壁をのり越え露台によじ上り、木に登り、鉄門にぶら下がり、煙筒につかまゐる。浮浪少年は生まれながらの水夫であり、また生まれながらの屋根職人である。いかなるマスト檣をも屋根をも恐れはしない。グレーヴの刑場ほどのお祭り騒ぎはどこにも見られない。サンソ

ンとモンテス師とは広く知られてる名前である。処刑囚を励ますために皆呼びかける。時としては賛美することさえある。浮浪少年のラスネールは、恐るべきドータンが勇ましく死に就くのを見て、行く末を思わせる次の言葉を発した、「うらやましいな。」浮浪少年の仲間には、ヴォルテールのことは知られていないが、パパヴォアアヌのことは知られている。彼らは「政治家」と殺害者とを同じ話のうちに混同してしまう。そういうすべての人々が最後に着た服装を言い伝えている。彼らは知っている、トレロンは火夫の帽子をかぶっていた、アヴリルは川獺かわうその帽子をかぶっていた、ルーヴェルは丸い帽子をかぶっていた、老ドラポルトは禿頭はげあたまで何もかぶっていなかった、カスタンはまっかなきれいな顔をしていた、ボリーはロマンティックな鬚あごひげをはやしていた、ジャン・マルタンはなおズボンつりをかけてい

た、ルクーフェは母と言ひ争つた。「ね、このことを、ぐずぐず言  
うなよ、」とひとりの浮浪少年はその二人に叫んだ。またあるひ  
とりはドバツケルが通るのを見ようとしたが、群集の中で自分  
があまり小さかつたので、川岸の街燈柱を見つけてそれに登り  
初めた。するとそこに立っていた憲兵が眉まゆをしかめた。「登らし  
て下さい、憲兵さん、」と少年は言つた。そして彼の心を和らげ  
るためにつけ加えた、「落ちはしませんから。」「落ちようとそん  
なことはかまわないさ」と憲兵は答えた（訳者注 上にある多  
くの人物はみな重罪によつて死刑に処せられし人）。

浮浪少年の間では、著名な事件は非常に尊ばれる。深く「骨  
までも」傷をした者があると、仲間の尊敬の頂上までも上りつ  
めることができる。

拳固げんこを食わせることも、かなり尊敬さるる方法である。浮浪

少年が最も好んで言う一事は、「おれはすてきに強いんだぞ、いか！」ということである。左ききであることは、非常にうらやましがられる。やぶにらみもまた尊敬される。

## 八 前国王のおもしろき言葉

夏には、彼らは蛙かえるに変化する。そして夕方、まさに暮れんとする頃、オーステルリッツ橋やイエナ橋の前で、石炭いかにだの筏せんたくおんなや洗濯女の小舟などの上から、まっさかさまにセーナ川に飛び込んで、秩序取り締まりの規則や警察の目をのがれて種々なことをやる。しかるに巡查らは見張りをしている。その結果、まったく劇的光景を演じ、親愛なる記憶すべき叫び声を生んだこともある。一八三〇年ごろ有名だったその叫び声は、仲間から仲間へ通ず

る戦略的合い図である。ホメロスの詩のように句格がそろい、パナテネー祭（訳者注 ミネルヴ神の祭典）におけるエルージアの町の歌にも比ぶべき言葉に尽し難い調子がこもつていて、古代のエヴォエ（訳者注 バッカス神をたたえる巫子らの叫び）がそこに復活して来るのである。すなわち次のようなものである。「おーい、仲間、おーい！ でかだぞ、いぬだぞ、用意しろ、逃げろ、下水からだ！」

時とするとそれらの蚊どものうちには——彼らは自ら蚊と<sup>あだな</sup>綽名している——字の読める者もいることがあり、また字の書ける者もいることがある。しかし皆いつも楽書きすることは心得ている。いかなる不思議な相互教育によってかわからないが、彼らは皆公の役に立ち得るあらゆる才能を示す。一八一五年から三〇年までは、七面鳥の鳴き声をまねていたが、一八三〇年か

ら四八年までは、壁の上に梨なしを書きつけて回っていた（訳者注）  
七面鳥は前の時の国王ルイ十八世の紋章、梨は後の時の国王ルイ・フィリップの紋章）。ある夏の夕方、ルイ・フィリップは徒歩で帰ってきたところが、まだ小さな取るに足らぬ浮浪少年のひとりが、ヌイイー宮殿の鉄門の柱に大きな梨を楽書きせんとして、背伸びをし汗を流してるのを見つけた。王は先祖のア  
ンリ四世からうけついできた心よさをもつてその少年の手助けをし、ついに梨なしを書いてしまつて、それから彼にルイ金貨を一つ与えながら言った、「これにも梨がついて、いるよ。」また浮浪少年は喧騒けんそうを好むものである。過激な状態は彼を喜ばせる。彼らはまた「司祭輩」をきらう。ある日ユニヴェルシテ街で、一人の小僧がその六十九番地の家の正門に向かつてあかんべーをしていた。通行人が彼に尋ねた、「この門に向かつてなぜそんな

ことをしてゐるんだ？」すると彼は答えた、「司祭がここに住んでるんだ。」実際そこは、法王の特派公使の住居であつた。けれども、彼らのヴォルテール主義（訳者注 反教会）が何であろうと、もし歌唱の子供となれるような機会がやってくると、それを承諾することもある。そしてそういう場合には、丁重に弥撒ミサの勤めに従う。それから、タンタルス（訳者注 永久の飢渴に処せられし神話中の人物）のように彼らが望んでいた二つのことがある。彼らはいつもそれを望みながら永久にそれを得ないでいる。すなわち、政府を顛覆てんぷくすることと、ズボンを仕立て直すこと。

完全なる浮浪少年は、パリーのすべての巡査を知悉ちしつして、そのひとりに出会えばすぐに名指なさすことができる。各巡査をくわしく研究している。その平常を調べ上げて、それぞれ特殊な

記録をとつてゐる。その心の中を自由に読み取つてゐる。彼らはすらすらと滞りなく言い得る、「某は反逆人だ、——某はごく、意地悪だ、——某は偉い奴だ、——某は滑稽な奴だ。」（これらの、反逆人、意地悪、偉い奴、滑稽な奴、などという言葉は、彼らに言われる時は特殊な意味を有するのである）「あいつは、ポン・ヌーフ橋を自分の物とでも思つてるのか。欄干の外の縁を歩くことを世間に禁じやがる。それから向こうのは、人の耳を引つ張る癖がある。云々、うんぬん云々、云々。」

## 九 ゴールの古き魂

市場の兎なるボクランのうちに、またポーマルシェーのうちに、この種の少年の氣質があつた（訳者注 二人とも著述家、次

に出て来る人々も同じ)。浮浪少年気質はゴール精神の一特色である。それは妥当な常識に交わると時としてそれに力を与える。あたかも葡萄酒ぶどうしゅにアルコールを加えるがごときものである。また時とすると欠点ともなる。ホメロスは無駄口むだぐちをたたくと云えるならば、ヴォルテールは浮浪少年気質を發揮すると言ふべきであろう。カミーユ・デムーランは郭外人であつた。奇蹟をけなしたシャンピオンネはパリーの舗石しきいしから出てきた。彼はまたごく小さい時から、サン・ジャン・ド・ボーヴェー会堂やサン・テティエンヌ・デュ・モン会堂などの回廊に侵入していた。そして彼はサント・ジュヌヴェイエーヴ会堂の聖櫃せいひつを不法に取り扱つて、サン・ジャンヴェイエの聖壺に命令を下していた。

パリーの浮浪少年は、敬意と皮肉と横柄さとを持つている。食を十分に与えられず胃袋が嘆いているので、ががつした歯

を持つている。また機才を持つているので、美しい目をしてい  
る。エホバの神がいるとしても、彼らは天国の階段を飛びはね  
て上つてゆくであろう。彼らは足蹴あしげに強い。彼らはあらゆる方  
面に成長をなし得る。彼らは溝どぶの中で遊んでいる、けれど騒動  
があるとなすつくと立ち上がる。霰弾さんだんの前にもたじろがないほど  
豪胆である。いたずらつ児だつたのが英雄となる。テバン（訳  
者注 偶像を廃棄して惨殺せられし古ローマの一団体）の少年  
のように獅子ししの背をもなでるであろう。鼓手のバラ（訳者注  
大革命の時の勇敢な少年）はパリーの一浮浪少年であつた。あ  
たかも聖書の戦馬が「ヴァー！」とうなるように、彼らは「前  
へ！」と叫ぶ、そしてたちまちのうちに小童こわっぱから巨人となる。  
この泥中の少年は、また理想中の少年である。モリエールか  
らバラに至るまでのその翼の長さを計つてみるがよい。

要するに、そして一言に概括すれば、浮浪少年とは不幸なるがゆえに嬉戯きぎする一個の人物である。

十　ここにパリーあり、ここに人あり

なおすべてを概説せんには、今日のパリーの浮浪少年ガマシヤンは、いにしへのローマのギリシヤ人のように、年老いた世界の皺しわを額ひたいに有する年少民衆である。

浮浪少年は国民にとつて一つの美であり、また同時に一つの病である。なおさなければならぬ病である。いかにしてなおすか？　光明をもつてである。

光明は人を健やかにする。

光明は人を輝かす。

あらゆる社会的の麗しい光輝は、科学、文学、美術、および教育から生ずる。人を作れ、人を作れよ。彼らをして汝に温暖を与えしめんがために、彼らに光を与えよ。いつかは普通教育の光輝ある問題は、絶対的真理の不可抗な権威をもつて確立されるに至るであろう。そしてその時におよんでこそ、フランス精神の監視の下に政事を行なう人々は、次の選択をなさなければならぬだろう、すなわちフランスの少年かもしくはパリーの浮浪少年か、光明のうちに燃ゆる炎か、もしくは暗黒のうちにひらめく<sup>りんか</sup>燐火か。

浮浪少年はパリーを表現し、パリーは世界を表現する。

なぜかなれば、パリーは全部であるからである。パリーは人類の天井である。この驚くべき一大都市は、過去現在のあらゆる風習の縮図である。パリーを見るは、所々に天空と星座とを

有する全歴史を見通すに等しい。カピツールとしては市庁を、パルテノンとしてはノートル・ダム寺院を、アヴェンティノの丘としてはサン・タントアーヌの一郭を、アシナリオムとしてはソルボンヌ大学を、パンテオンとしてはパンテオンの殿堂を、ヴィア・サクラとしてはイタリアン大通りを、アテネの風楼としては輿論よろんを、パリーはみな有している。そしてゼモニエ（訳者注 古ローマにて処刑人の死体を陳列するカピツール山の階段）としては嘲弄ちやうろうがもって代えている。そのマホー（スペインの伊達者だてしや）をめかしやと言ひ、そのトランステヴェレノ（ローマのチベル彼岸の民）を郭外人と言ひ、そのハンマル（インドの籠舁かごかき）を市場人足と言ひ、そのラツアロネ（ナポリの乞食）を組合盜賊と言ひ、そのコクニー（ロンドンっ児）を洒落者しやれものと言ひ。世界中にあるものは皆パリーにもある。デユマルセーの

描いた魚売り女はエウリピデスの草売り女と一対である。円盤  
投戯者のヴェジヤヌスは綱渡り人フォリオゾのうちに復活して  
いる。テラポンティゴヌス・ミレスは擲弾兵てきだんへいヴアドボンクール  
と腕を組み合つて歩くであろう。骨董商こつとうしやうダマジプスはパリーの  
古物商人のうちに納まり返るであろう。アゴラ（アテネの要塞ようさい）  
はデイドローを監禁するであろうが、それと同じくヴァンセヌ  
の要塞はソクラテスをつかみ取るであろう。クルテイルスがはりねずみ狷  
の炙肉あぶりにくを考え出したように、グリモン・ド・ラ・レーニエール  
は油でいためたロースト・ビーフを考えついた。プラウツスの  
書いた鞦韆ぶらんこはエトアールがいせんもん凱旋門の気球の下に現われている。ア  
プレイウスが出会つたペシルの剣食い芸人はポン・ヌーフ橋の  
上の刃呑みの芸人である。ラモアの甥おいは寄食者クルクリオンと好  
一対をなすものである。エルガジルスも喜んでエーグルフィユ

によつてカンバセレスの家に導かれるだろう。ローマの四人の遊治郎ゆうやろうアルセジマルクス、フェドロムス、ディアボルス、アルジリツペは、クールティーユからラバテユの馱馬車に乗り込む。アウルス・ジュリウスはコングリオの前に長くたたずんだが、シャルル・ノデイエはポリシネルの前に長くたたずんだ。マルトンは虎とらとは言えないが、しかしパリダリスカも決して竜ではなかつた。道化者パントラビュスはイギリス・カフエーで遊蕩児ゆうとうじノメンタヌスをも愚弄ぐろうする。ヘルモジェヌスはシャン・ゼリゼーのテノル歌手とも言い得べく、そのまわりには乞食こじきのトラジウスがボベーシュ流の服を着て金を集めている。チュイルリー公園にはうるさく服のボタンをつかまえて引き留むる者がいて、テスブリオンから二千年後の今日もなお同じ抗議を人に言わする、「マントを引つ、張るのはだれだ、私は急ぐんだ。」スユレー

ヌの葡萄酒ぶどうしゅはアルバの葡萄酒に肩を並べる。デゾージエの赤縁あかぶちのコップはバラトロンの大杯にも匹敵する。ペール・ラシェー  
ズの墓地は夜の雨の中にエスキリエの丘と同じようなすごい光  
を発する。そして五年間の契約で買われた貧民の墓は、いにし  
えの奴隷どれいの借り棺と同じである。

パリーにないものがあるかさがしてみるがいい。トロフォニ  
ウスの染甕そめがめの中にあつたものは皆、メスマルの桶おけの中にある。  
エルガフィラスはカグリオストロのうちによみがえる。バラモ  
ン僧ヴァサフアンタはサン・ジェルマン伯のうちうちに化身してい  
る。サン・メダールの墓地はダマスクスの回教寺院ウームーミ  
エに劣らぬ奇蹟を行なっている。

パリーはイソツプとしてマイユを有し、カニディアとしてル  
ノルマン嬢を有する。パリーはデルフ町のように、あまり痛烈

なる現実の幻に驚いている。ドドナの町で占考の椅子が震え動いたように、パリーではテーブルがひっくり返っている。ローマが娼婦しょうふを玉座にのぼしたように、パリーは浮気女工うわきじよこうを玉座にのぼしている。そして要するに、ルイ十五世はクラウディウス皇帝より悪いとしても、デュ・バリール夫人はメッサリナよりも勝まさっている。われわれはそれを排斥したのであるが、本当に生きてた異常な一典型タイブのうちにパリーは、ギリシャの赤裸とヘブライの潰瘍かいようとガスコーニュの悪諺あくぎやくとを結合している。パリーはディオゲネスとヨブとペラースとを混合し、コンステイテュシオネル（立憲）新聞の古い紙で一つの幽霊に着物を着せて、コドリユク・デュクロスを作り出している。

暴君はほとんど老いることなしとプルタルコスは言っているけれど、ローマはドミチアヌス皇帝の下におけると同じくシル

ラの下に自らあきらめて、甘んじてその酒に水を割った。多少正理派のきらいはあるがヴァルス・ヴィビスクスがなした次の賛辞を信ずるならば、チベル川は一つのレテ川（訳者注 地獄の忘却の川）と云うべきであつた。「吾人は、グラツクス兄弟に、対してチベル川を有す、チベルの水を飲むは反乱を忘るることなり。」しかるにパリーは一日に百万リットルの水を飲む。しかしそれにもかかわらず、場合によつては非常ラツパを鳴らし警鐘を乱打する。

それを外にしては、パリーは善良なる小児である。彼は堂々とすべてを受け入れる。彼はヴィーナスの世界においても気むずかしくはない。そのカリーピージュのヴィーナスはホットテントット式である。彼は一度笑えば、もはやすべてを許す。醜悪も彼を喜ばせ、畸形きけいも彼を上きげんにし、悪徳も彼の気を慰む

る。滑稽こっけいでさえあれば、卑しむべき人たるも許されるであらう。偽善でさえも、その最上の卑劣も、彼の気をそこなわない。彼は文学者であるから、バジルの前にも鼻つまみをしなない。プリアポスの「しゃくり」を気にしなかつたホラチウスのごとく、タルチュフの祈祷きとづをも怒らない。世界の各面相はパリーの横顔のうちにある。マビーユの舞踏会はジャニクロムのポリムニア女神のダンスとは言えないが、しかし婦人服売買婦はじつと洒落女しやれおんなを見張っていて、あたかも周旋婦のスタッフイラが処女のプラネジオムを待ち伏せしてようである。コンバの市門はコリゼオムの劇場とは言えないが、しかしシーザーがそこに見物しているかのように人々は勢い込んでいる。シリアの上かみさんはサゲー小母おぼさんよりも愛嬌あいぎょうがあるだろうが、しかしヴィルギリウスがローマの居酒屋に入り浸つたとするならば、ダビド・ダンジェ

やバルザックやシャルレなどはパリーの飲食店にはいり込んで  
いる。パリーは君臨する。天才はそこに燃え出し、赤リボンの  
道化者どうけものはそこに栄える。アドナイは雷と電光との十二の車輪を  
そなえた車に乗ってパリーを過ぎる。シレヌスは驢馬ろばに乗って  
パリーにはいつて来る。これをパリーではランポンノ爺じいさん  
と言う。

パリーはコスモス(宇宙)と同意義の語である。パリーは、ア  
テネであり、ローマであり、シバリスであり、エルサレムであ  
り、パンタンである。パリーにはあらゆる文明が概括され、ま  
たあらゆる野蛮が概括されている。パリーは一つの断頭台を欠  
いても気を悪くするであろう。

グレーヴ処刑場の少しを有するはいいことである。そういう  
香味がなかったならば、この永久の祭典はどうなるであろう。

われわれの法律は賢くもそこにそなわっている、そしてそれによつて、この肉切り包丁はカルナヴァル祭最終日に血をしたたらせる。

十一 嘲笑し君臨す  
ちようしよう

パリーに限界があるか、否少しもない。おのれが統御する者らをも時として愚弄するほどのこの権勢を持つていた都市は、他に一つもない。「喜べ、ア、テ、ネ、人、よ！」とアレクサンデルは常に叫んでいた。パリーは法律以上のものを、流行を作る。パリーは流行以上のものを、慣例を作る。もし気が向けばかとなることもある。時としては自らそういう贅沢ぜいたくもする。すると世界はパリーとともにばかとなる。それからパリーは目をさまし、

目をこすりながら言う、「ほんとに俺はばかげてる！」そして人類の面前に向かつて放笑す。そういう都市は何と驚くべきものではないか。不思議にも、その偉大さとその滑稽さとは親しく隣合ひ、その威厳はその戯言から少しも乱さるることなく、同じ一つの口が、今日は最後の審判のラツパを吹き、明日は蘆笛を吹き得るのである。パリーは主権的な陽気さを持つている。その快活は火薬でできており、その滑稽は帝王の笏を保っている。その颯風は時として一の渋面から出て来る。その爆発、その戦乱、その傑作、その偉業、その叙事詩は、世界の果てまでも響き渡る、そしてその諧謔も世界の果てにおよぶ。その笑いはすべての土をはね上げる火山の口である。その嘲弄は火炎である。彼は各民衆にその風刺と理想とを課する。人間の文明の最も高い記念塔は、彼の皮肉を受け入れ、彼の悪戯を恒久のも

のたらしむる。彼は壮大である。彼は世界を開放せしむる偉大なる一七八九年七月十四日を持つてゐる。彼はあらゆる国民に憲法制定の宣誓をなさせる。一七八九年八月四日のその一夜は、わずか三時間のうちに封建制度の一千年を解決した。彼はその理論をもつて、満場一致の意志の筋力とする。彼はあらゆる壮大なる形の下に仲間を増してゆく。ワシントン、コスキュースコ、ボリヴァール、ボツアリス、リエゴ、ベム、マニン、ロペス、ジョン・ブラウン、ガリバルデーなど、彼はおのれの光によつて彼らを皆満たしてやる。未来が光り輝く所にはどこにも彼はゐる、一七七九年にはボストンに、一八二〇年にはレオン島に、一八四八年にはペストに、一八六〇年にはパレルモに。ハーパス・フェヤリーの小舟に集まつたアメリカの奴隷どれいはいしとういん廃止党員の耳に、またゴツイー旅館の前の海辺アルキーにひそかに集まつ

たアンコナの愛国者らの耳に、彼は自由、という力強い標榜語ひょうぼうごを  
ささやく。彼はカナリスを作り出し、キロガを作り出し、ピザ  
カーヌを作り出す。彼は偉大なるものを地上に光被する。バイ  
ロンがミソロンギで死に、マツエツトがバルセロナで死ぬの  
は、彼の息吹いぶきに吹きやられてである。彼はミラボーの足もとで  
は演壇となり、ロベスピエールの足もとでは噴火口となる。そ  
の書籍、その劇、その美術、その科学、その文学、その哲学な  
どは、人類の宝鑑である。パスカル、レニエ、コルネイユ、デ  
カルト、ジャン・ジャック・ルソーを彼は有し、各瞬間にわ  
たるヴォルテールを、各世紀にわたるモリエールを有している。  
彼はおのれの言葉を世界の人々の口に話させる、そしてその言  
葉は「道」ことばとなる（訳者注 太初に道（ことば）あり道は神と偕  
にあり道は即ち神なり云々——ヨハネ伝第一章）。彼はすべての

人の精神のうちに進歩の觀念をうち立てる。彼が鍛える救済の信条は、各時代にとつての枕刀まくらがたなである。一七八九年いらい各民衆のあらゆる英雄が作られたのは、彼の思想家および詩人の魂をもつてである。それでもなお彼は悪戯する。そしてパリーと称するこの巨大なる英才は、その光明によつて世界の姿を変えながら、テセウスの殿堂の壁にブージニエの鼻を楽書きし、ピラミッドの上に盗人クレドヴィルと書きつける。

パリーはいつも齒をむき出してゐる。叱咤しつたしてゐない時は笑つてゐる。

そういうのがすなわちパリーである。その屋根から立ち上る煙は、全世界の思想である。泥どろと石との堆積たいせきであると言わば言え、特にそれは何よりも精神的に存在である。それは偉大以上であつて、無限大である。そして何ゆえにそうであるか？ あ

えてなすからである。

あえてなす。進歩が得らるるのはそれによつてである。

あらゆる莊嚴なる征服は、みな多少とも大胆の賜物である。革命が行なわれるには、モンテスキューがそれを予感し、ディドロがそれを説き、ボーマルシエーがそれを布告し、コンドルセーがそれを計画し、アルーエがそれを準備し、ルーソーがそれを予考する、などのみにては足りない。ダントンがそれを敢行しなければいけない。

果敢！ の叫びは一つの光あれ（訳者注 神光あれと言いたまいければ光ありき）である。人類の前進のためには、常に高峰の上に勇氣という慢らかな教訓がなければならぬ。豪胆は歴史を輝かすものであつて、人間の最も大なる光輝の一つである。曙光は立ち上る時に敢行する。試み、いどみ、固執し、忍

耐し、自己に忠実であり、運命とつかみ合い、恐怖の過少をもつてかえつて破滅を驚かし、あるいは不正なる力に対抗し、あるいは酔える勝利を侮辱し、よく執しゅうしよく抗する、それがすなわち民衆の必要とする実例であり、民衆を奮起せしむる光明である。その恐るべき光こそ、プロメテウスの炬火たいまつからカンブロンヌの煙管パイプに伝わってゆくところのものである。

## 十二 民衆のうちに潜める未来

パリーの民衆は、たとい大人おとなに生長しても、常に浮浪少年ガマンである。その少年を描くことは、その都市を描くことである。驚わしをその磊落らいらくなる小雀こすずめのうちにわれわれが研究したのは、このゆえである。

あえて力説するが、パリ―民族が見られるのは特にその郭外においてである。そこに純粹の血があり、眞の相貌そうぼうがある。そこにこの民衆は働きかつ苦しんでいる。苦惱と労働とは人間の二つの相である。そこに名も知られぬ無数の人々がいる。そしてその中に、ラーペの仲仕からモンフォーコンの屠獸者とじゆうしやに至るまであらゆる奇体クタイブな典型が群がっている。町の掃きだめとキケロは叫び、憤つたバークは愚衆せんみんと言い添える。賤民せんみんどもであり、群衆どもであり、平民どもである。そういう言葉は早急に発せられたものである。しかしまあおくとしよう、それが何のかかわりがあるう。彼らのはだしで歩いているとしても、それが何であろう。けれども悲しいかな、彼らは文字を知らない。そしてそのために彼らは見捨てらるべきであらうか。彼らの窮迫をののしりの一材料とすべきであらうか。光明もそれらの密層を

貫くことはできないであろうか。顧みて、光明！ というその叫びを聞き、それに心をとどめようではないか。光明！ 光明！ その混濁も透明となり得ないことがあるか。革命は一つの変容ではないか。行け、哲人らよ、教えよ、照らせよ、燃やせよ、声高に考えよ、声高に語れよ、日の照る下に喜んで走れよ、街頭に親しめよ、よき便りをもたらせよ、ABCを豊かに与えよ、権利を宣言せよ、マルセイエーズを歌えよ、熱誠をまき散らせよ、<sup>かし</sup>檜の青葉を打ち落とせよ。そして思想をして旋風たらしめよ。あの群集は昇華され得るであろう。時々にはひらめき激し震えるあの広大なる主義と徳との燎原<sup>りょうげん</sup>の火を、利用し得る道を知ろうではないか。あの露<sup>あ</sup>わな足、露<sup>あ</sup>わな腕、ぼろ、無知、卑賤<sup>ひせん</sup>、暗黒、それらは理想の実現のために使用し得らるるであろう。民衆を通してながめよ、さすれば真理を認め得るであろう。人が

足に踏みにじり、炉のうちに投じ、溶解し、沸騰せしむる、あの賤いやしき石くれも、やがては燦爛さんらんたる結晶体となるであらう。ガリレオやニュートンが天体を発見し得るのは、実にそれによつてである。

### 十三 少年ガヴローシュ

この物語の第二部に述べられた事件から八、九年たった時、タンプル大通りやシャトー・ドオーの方面において、十一、二歳のひとりの少年が人の目をひいていた。その少年は、唇くちびるには年齢にふさわしい笑いを持つていたが、それとともにまったく陰鬱いんうつな空虚な心を持つていた。もしそういう心さえなかつたらば、上に述べた浮浪少年の理想的タイプをかなり完全にそな

えているとも称し得るものだった。大人おとなのズボンを変なふうにはいていた。しかしそれは親譲りのものではなかった。また女用の上衣をつけていた。しかしそれは母親からもらったものではなかった。だれかがかわいそうに思つてそういうぼろを着せてやったものだろう。といつても、彼は両親を持つていた。ただ、父親は彼のことを気にも止めず、母親は彼を少しも愛していなかった。彼はあらゆる子供のうちでも最もあわれむべき者のひとりだった。父と母とを持ちながらしかも孤児でもある子供のひとりだった。

この少年は、往来にいる時が一番楽しかった。街路の舗石しきいしも彼にとつては、母の心ほどに冷酷ではなかった。

彼の両親は彼を世の中に蹴けり捨ててしまつたのである。

彼はただ訳もなく飛び出してしまつたのである。

彼は、騒々しい、色の青い、すばしこい、敏感な、いたずら者で、根強いかつ病身らしい様子をしていた。街頭を行き来し、歌を歌い、錢投げをし、溝どぶをあさり、少しは盗みをもした。しかし猫ねこや雀すずめのように快活に盗みをやり、悪戯者いたずらものと言われれば笑い、悪者と言われれば腹を立てた。住居もなく、パンもなく、火もなく、愛も持たなかった。しかし彼は自由だったので、いつも快活だった。

かかるあわれな者らおとながもし大人である時には、たいていは社会の秩序という石臼いしうすがやって来て押しつぶしてしまふものである。しかし子供である間は、小さいからそれをのがれ得る。ごく小さな穴さえあればそれで身を免れることができる。

この少年は前に述べたとおりまったく放棄されていたけれど、時とすると三カ月に一度くらいは、「どれどれひとつ阿母おっかあにでも

会つてこよう！」と言うことがあつた。すると彼はもう、その大通りも曲馬場もサン・マルタン凱旋門も打ち捨てて、川岸に行き、橋を渡り、郭外に出で、サルペートリエール救済院のほとりに行き、それから、どこへ行くのか。それはまさしく、読者が既に知っているあの五十・五十二番地という二重番地の家、ゴルボー屋敷へである。

いつも住む人がなく、「貸し間」という札が常にはりつけられていたその五十・五十二番地の破屋あばらやには、その頃珍しくも、大勢の人が住んでいた。もとよりパリーのことであるから、大勢の人と言つても互いに何らの縁故も関係も持たなかつた。皆赤貧の部類に属する者たちだつた。赤貧の階級は、まず困窮な下層市民から初まり、困苦から困苦へとしだいに社会のどん底の方へ沈んでゆき、物質的文明の末端である二つのものとなつて

しまうのである。すなわち、泥を掃き除ける溝どいぶさら深ふかい人と、ぼろを集める屑屋くずやとである。

ジャン・ヴァルジャンのいた頃の「借家主」の婆さんはもう死んでいて、後あとにはそれとちようど同じような婆さんがきていた。だれかある哲学者が言ったことがある、「婆というものは決してなくならないものだ。」

この新たにきた婆さんは、ビュルゴン夫人と言って、その生涯に重立ったことと言っては、ただ三羽の鸚鵡おうむを飼ったくらいのもので、それらの鸚鵡が三代順次に彼女の心に君臨したのである。

その破屋あばらやに住んでいた人々のうちで最も惨みじめなのは、四人の一家族だった。父と母ともうかなり大きなふたりの娘とで、前に述べておいたあの屋根部屋の一つに、四人いっしょになつて

住んでいた。

その一家族は、極端に貧窮であるというほかには、一見したところ別に変わつた点もないようだった。父親は室へやを借りる時、ジョンドレットという名前だと言つた。引つ越してきてから、と言つても、借家主婆さんのうまい言い方を借りれば、それはまったく身体だけの引つ越しにすぎなかつたが、その後しばらくしてジョンドレットは、前の婆さんと同じく門番でまた掃除女そうじおんなであるその借家主婆さんに、次のように言つたことがある。「婆さん、もしだれかひよつとやつてきて、ポーランド人とか、イタリア人とか、またスペイン人とかを尋ねる者があつたら、それは私のことだと思つていてもらいましょう。」

その一家族は、あの愉快なはだしの少年の家族だった。少年はそこへやつてきて、見いだすものはただ貧窮と悲惨とだけ

で、それになおいつそう悲しいことには、何らの笑顔をも見いださなかつた。竈かまども冷えておれば、人の心も冷えている。彼ははいつてゆくと、家の者は尋ねた、「どこからきたんだい。」彼は答えた、「おもてからさ。」また彼が出て行こうとすると、家の者は尋ねた、「どこへ行くんだい。」彼は答えた、「おもてへさ。」母親はいつも言った、「何しに帰つてきたんだい。」

その少年は、あなぐら窖の中にはえた青白い草のように、まったく愛情のない中に生きていた。けれども彼はそれを少しも苦にせず、まただれをも恨まなかつた。彼はいつたい両親というものはどうあるべきものかということをもよくは知らなかつた。

それでも、母親は彼の姉たちをかわいがつていた。

言うのを忘れていたが、タンプル大通りではこの少年を小僧ガヴローシュと言つていた。なぜガヴローシュと呼ばれたかと

いうと、おそらくその父親がジヨンドレットというからだつたろう。

家名を断つということは、ある種の悲惨な家族における本能らしい。

ジヨンドレット一家が住んでいたゴルボー屋敷の室は、廊下へやの端の一番奥だった。そしてそれと並んだ室にはマリユス君と  
いうごく貧しいひとりの青年が住んでいた。

このマリユス君が何人なんびとであるかは、次に説明しよう。

## 第二編 大市民

## 一 九十歳と三十二枚の齒

ブーシユラー街やノルマンディー街やサントンジユ街などは、ジルノルマンという爺じいさんのことを覚えていて喜んで話してくれる昔からの住人が、今なおいくらか残っている。彼らが若い頃その人はもう老人だった。過去と称する漠然たる幻の立ちこめた曠野こうやを憂鬱ゆううつにながめる人たちの頭には、その老人の姿がタンブル修道院に隣していた迷宮のような小路のうちにおぼ

ろに浮かんでくる。その一郭の入り組んだ小路にはルイ十四世の頃はフランスの各地方の名前がつけられていて、あたかも今日ティヴオリの新しい街区の小路に欧州の各首都の名前がつけられてるのと同じであつた。ついでに言うが、それは一つの前進であつてそこに進歩が見られるではないか。

ジルノルマン氏は一八三一年には飛び切りの長寿者だつた。そしてその長く生きてきたという理由だけで滅多に見られない人となつており、昔は普通の人だつたが今はまったくひとりつきりの人であるという理由で不思議な人となつていた。独特な老人で、いかにも時勢はずれの人で、十八世紀式の多少傲慢なごうまん完全な真の市民であり、侯爵らが侯爵ふうを持っているようにその古い市民ふうをなお保つていた。九十歳を越えていたが、腰も曲がらず、声も大きく、目もたしかで、酒も強く、よく食

い、よく眠り、<sup>いびき</sup>鼾までかいた。齒は三十二枚そろつていた。物を読む時だけしか<sup>めがね</sup>眼鏡をかけなかった。女も好きだったが、もう十年この方断然そして全然女に接しないと自ら言つていた。「もう女の気に入らない」と言つていた。しかしそれにつけ加えて、「あまり年取つたから」とは決して言わず、「あまり貧乏だから」と言つていた。そしてよく言つた、「私がもし尾羽うち枯らしていなければ……へへへ。」實際彼にはもう一万五千フランばかりの収入きり残つていなかった。彼の夢想は、何か遺産でも受け継いで、<sup>めかけ</sup>妾を置くために十万フランばかりの年金を得ることだった。明らかに彼は、ヴォルテール氏のように生涯中死にかかつてた虚弱な八十翁の類い<sup>たぐ</sup>ではなかった。龜裂<sup>ひび</sup>のはいつた長生きではなかった。この元気な老人は常に健康だった。彼は浅薄で、気が早く、すぐに腹を立てた。何事にも、多くは条

理もたたないのに、煮えくり返った。その意見に反対しようものなら、すぐに杖つえを振り上げた。大世紀（訳者注 ルイ十四世時代）のころのようになぐりつけまでした。もう五十歳以上の未婚の娘を持つていたが、怒おこった時にはそれをひどくなくりつけ、また鞭むちでよくひっぱたいた。彼の目にはその老嬢も七、八歳の子供としか見えなかつた。彼はまた激しく召し使いどもに平手を食わした、そして「このひきずり奴めが！」とよく言った。彼が口癖ののしり語の一つは、足が額にくつつこうとも、というのだった。ある点について彼は妙に泰然としていた。毎日ある理髪屋に顔をそらせていた。その理髪屋はかつて気が狂つたことのある男で、愛嬌あいぎょうもの者のきれいな上かみさんである自分の女房のことについてジルノルマン氏を妬やんでいたもので、従つて彼をきらつていた。ジルノルマン氏は何事にも自分の鑑識に自ら感心

していて、自分は至つて機敏だと公言していた。次に彼の言い草を一つ紹介しよう。「實際私は洞察力わし どうさつりよくを持つてるんだ。蚤のみがちくりとやる場合には、どの女からその蚤がうつつてきたか、りっぱに言いあてることができる。」彼が最もしばしば口にする言葉は、多感な男たかんというのと自然じぜんというのだった。この第二の方の言葉は、現代使われてるような広大な意味ではなかつた。そして彼は炉辺のちよつとした風刺のうちに独特な仕方そでそれを挿入そうにゆうしていた。彼は言った。「自然は、あらゆるものを多少文明に持たせるため、おもしろい野蛮の雛形ひながたまでも文明に与えている。ヨーロッパはアジアやアフリカの小形の見本を持つている。猫ねこは客間の虎とらであり、蜥蜴とかげはポケットの鱈わにである。オペラ座の踊り子たちは薔薇ばらのような野蛮女である。彼女らは男を食いはしないが、男の脛すねをかじっている。というよりも、魔術使

いだ。男を牡蠣かきみたいにはかにして、貪り食うむさぼ。カリブ人は人を食つてその骨だけしか残さない、だが彼女らはその殻だけしか残さない。そういうのがわれわれの風俗だ。われわれの方はのみ下しはしないが、かみつくだ。屠りほふはしないが、引つかくのだ。」

二 この主人にしてこの住居あり

彼はマレーのフィーク・デュ・カルヴェール街六番地に住んでいた。自分の家であつた。この家はその後こわされて建て直され、パリーの各街路の番地変更の時にやはりその番地も変えられたはずである。当時彼はその二階の古い広い部屋に住んでいた。それは街路と庭とを両方に控え、ゴブランやボーヴェー製

の牧羊の絵のついてる大きな布で天井までもすつかり張られていた。天井や鏡板かがみいたについてる画題は、小さくして肱掛椅子ひじかけいすにも施されていた。またその寝台は、コロマンデル製のラック塗りぬりの大きな九枚折り屏風びょうぶで囲まれていた。窓には長く広い窓掛けかが下がっていて、いかにもみごとな大きな縮れ襪ひだをこしらえていた。庭はすぐそれらの窓の下にあつたが、愉快げに老人が上り下りする十二、三段の階段で角かどになつてる一つの窓から、これによく見られた。室に接している文庫のほかに、彼がごく大事にしてる納戸部屋なんどべやが一つあつた。それはりっぱな小室へやで、そこに張つてある素敵な壁紙には百合ゆりの花模様や種々な花がついていた。その壁紙は、ルイ十四世そうけいじょうの漕刑場そうけいじょうでこしらえられたもので、王の情婦のためにヴィヴオンヌ氏が囚人らに命じて作らせたものだった。ジルノルマン氏はそれを、百歳も長寿を保つ

て死んだ母方の大変な大叔母から譲り受けたのだった。彼は二度妻を持ったことがあつた。彼の様子は朝臣と法官との中間に止まつていた。しかし彼はかつて朝臣であつたことはないが、法官にはなろうとすればなれないこともなかつたかも知れない。彼は快活であり、気が向けば人をいたわつてやつた。世には、最もふきげんな夫であるとともに最もおもしろい情人であるために、いつも妻からは裏切られるが決して情婦からは欺かれることのないような男がいるものだが、彼も若い頃はそういう男のひとりだつた。彼は絵画の方面に鑑識があつた。彼の室にはだれかのみごとな肖像が一つあつた。ヨルダンスの手に成つたもので、荒い筆触で様々な細部まで描かれていて、乱雑にでたらめに書かれたものらしかった。ジルノルマン氏の服装は、ルイ十五世式でもなければ、ルイ十六世式でもなく、執政内閣時代の

アシンクローアイヤブル  
軽薄才子のような服装だった。彼はそれほど自分を若いと思つていて、その流行をまねたのだった。その上衣は軽いラシヤで、広い折り襟えりと、長い燕尾えんびと、大きな鉄のボタンとがついていた。それに加うるに、短いズボンと留め金つきの靴くつ。そしていつも両手をズボンのポケットにつっ込んでいた。彼は堂々と言つていた、「フ、ランス、大革命は無頼漢どもの寄り合いだ。」

### 三 リュク・エスプリ

十六歳の時に彼は、当時成熟していてヴォルテールから歌いはやされた有名なふたりの美形カマルゴ嬢とサレ嬢とから、同時に色目を使われるの光榮に浴した。そして両方の炎の間にはさまれて、勇ましい退却を行ない、ナアンリーという小さな

踊り子の方へなびいていった。その娘は彼と同じ十六歳で、まだ子猫こねこのように名も知られない者だったが、彼はそれに恋したのだった。彼はいつもその思い出をいつぱい持っていた。彼はよく叫んだ。「あのギマール・ギマルデイニ・ギマルデイネットは実にきれいだった。最後にロンシャンで会った時には、髪の毛こまげを神々しくちぢらし、世にも珍しいトルコ玉の飾りをつけ、赤ん坊の頬ほほの色のような長衣を引っかけ、ふさふさしたマツフを持っていた。」彼はまた青春の頃にナン・ロンドランのチョッキをつけてたことがあつて、そのことを心ゆくばかり語っていた。「私は日の出る東あずまのトルコ人のような服を着ていた、」と彼はよく言った。二十歳のころ彼はふとブーフレル夫人に見られて、「ばかにかわいい人」と言われたことがあつた。政治界や官界に現われてる名前は、どれもこれも皆下等で市民的である

と言つて憤慨していた。彼は新聞を、彼のいわゆる新報紙だの報知紙だのを、笑いをおさえながら読んでいた。彼はよく言つた。「何という者どもだ、コルビエール、ユマン、カジミール・ペリエ、そういうのが大臣だつて。まあ新聞に大臣ジルノルマン氏と書いてあるとしてごらん、おかしいだらうじゃないか。ところでまあ彼らときたら、結構それで通るくらいばかりだからな。」彼は上品も下等もおかまいなしの言葉で何でも快活に言つてのけ、女の前であろうと少しもはばからなかつた。野卑なこと、猥褻わいせつなこと、不潔なこと、それを語るにも一種の落ち着きをもつてし、風流の冷静さをもつてした。まったく彼が属する前世紀の不作法さである。婉曲えんきよくなる詩の時代はまた生々なまなましい散文の時代であつたことは注意すべきである。彼の教父は、彼が他日天才になるだらうと予言して、次の意味深い二つの洗礼名

を彼に与えていた、すなわちリユク・エスプリと（訳者注 使徒ルカ・精霊の意）。

#### 四 百歳の志願者

彼は子供の時、故郷のムーランの中学校で幾つかの褒賞ほうしょうをもらい、彼がヌヴェール公爵と呼んでいたニヴェルネー公爵の手から親しく授かった。国約議会も、ルイ十六世の処刑も、ナポレオンも、ブルボン家の復歸も、その褒賞の思い出を彼の心から消すことはできなかつた。ヌヴェール公爵は、彼にとつては時代の最も偉い大立て物だつた。彼はよく言つた。「何といふりつばな大貴族だつたらう、あの青い大綬たいじゆをつけられたところは何というみごとさだつたらう！」ジルノルマン氏の目には、

カテリナ二世はベステュシエフから三千ルーブルで黄金精液の秘法を買い取ったので、ポーランド分割の罪をつぐなつたことになるのだつた。彼は叫んだ。「黄金精液、ベステュシエフの黄色い薬、將軍ラモットの液、それは十八世紀では半オンスびん壘が一ルイ（二十フラン）もしたものだ。恋の災厄に対する偉大な薬で、ヴィーナスに対する万能薬だ。ルイ十五世はその二百壘を法王に贈られたものだ。」もし彼に、その黄金精液は実は鉄の過塩化物にすぎないのだと言つたら、彼は非常に絶望し狼狽ろうばいしたに違いない。ジルノルマン氏はブルボン家を賛美し、恐怖のうちに一七八九年を過ぎた。そしていかなる方法で恐怖時代をのがれていたか、いかに多くの快活と機才とが首を切られないためには必要であつたかを、彼は絶えず語つていた。もしある若い者が彼の前で共和政を賛美でもしようものなら、彼

は顔の色を変え息もつけないほどにいらだつのだつた。時とすると彼は自分の九十歳ということに関連さして、こんなことを言つた。「私は九十二という年を二度と見たくない。」（訳者注）  
ルイ十六世の死刑が行なわれた一七九三年にかけた言葉）しか  
またある時には、百歳までは生きるつもりだと人にもらして  
いた。

## 五 バスクとニコレット

彼は定説を持つていた。その一つは次のようなものだつた。  
「もし人が熱烈に女を愛し、しかも自分には、醜い、頑固な、正  
当な、権利を有し、法律を楯にとり、場合によつては嫉妬を起  
こすがよような、あまり気に入らない正妻がある時には、それに

処して平和なるを得る方法はただ一つあるのみである。すなわち、妻に財布のひもを任せることである。権利をすてて自由の身になるのだ。すると妻はその方に心を奪われ、貨幣の取り扱いに熱中し、指に緑青ろくしょうを染め、折半小作人や請作人を仕込み、代言人をよび、公証人を指揮し、弁護士をわずらわし、法官を訪れ、裁判を起こし、証書を作り、契約を書かせ、得意になり、売り、買い、計算し、命令し、約束し和解し、契約し取り消し、譲歩し譲与し還付し、整理し、混乱させ、蓄財し、浪費する。その他種々のばかなことを行ない、それが権柄けんべいてき的なまた個人的な喜びとなり、それで自ら慰める。夫おつとから軽蔑されてる間に、夫を破産さして満足するものである。」この理論を彼は自分自身に適用し、自分の履歴とまでなっていた。彼の二番目の妻は、彼の財産をかなり賢く管理していたので、ある日彼女が死んだ

時、彼には食べるだけのものが残っていた、すなわちほとんど全部を終身年金に預けて年収一万五千フランほどにはなつた。がその大部分は彼とともに消え失せることになつていた。彼は別に驚きもしなかつた、遺産を残すことなんかあまり考えてもいなかつたから。それにまた、世襲財産はあぶなつかしいものであつて、たとえば国有財産になることもあるのを、彼は見てきたのだつた。整理公債の変動に立ち会つてきたのだつた。そして彼は公債大帳をあまり信用しなかつた。「カン、カン、ポア、街の銀行だけじゃないか、」と彼は言つていた。フィーユ・デュ・カルヴェール街の家は、前に言つたとおり自分のものであつた。  
「おすめす牡と牝と」ふたりの雇い人がいた。新しい雇い人がやつて来る時には、ジルノルマン氏は新たに洗礼名をつけてやるのを常とした。男の方にはその出生地の名前を与えた、ニモア、コント

ア、ポアトヴァン、ピカールなどと。最後の下男は、ふとつてよぼよぼした息切れのする五十歳ばかりの男で、二十歩とは走れなかった。しかしバイヨンヌ生まれであるところから、ジルノルマン氏は彼にバスクという名前を与えていた（訳者注　ピレネー山間の剽悍なる民にバスク人というのがある）。下女の方は皆ニコレットという名前をもらっていた。（後に出てくるマニヨンという女もそうであつた。）ある日、門番に見るような背せの高いつんとしたすてきな料理女が彼の家にやつてきた。ジルノルマン氏は尋ねた。「給金は月にいくらほしいんだ。」「三十フランです。」「何という名前だ。」「オランピーと申します。」「よろしい五十フランあげよう、そしてニコレットという名前にしたがいい。」

## 六 マニヨンとそのふたりの子供

ジルノルマン氏においては、心痛は憤怒となつて現われた。彼は絶望すると狂猛になつた。彼はあらゆる偏見を持つていて、あらゆるわがままを行なつた。彼の外部の特徴を形造つていたものの一つで、また彼の内心の満足であつたところのものは、前に指摘しておいたとおりに、老いても血氣盛んだということでは、是非ともそういうふう<sup>う</sup>に装う<sup>ま</sup>ということだつた。彼はそれを「りつぱな評判」を得ることと称していた。りつぱな評判は彼に時とすると、不思議な意外な獲物をもたらすことがあつた。ある日、相当な産着<sup>うぶぎ</sup>にくるまれ泣き叫んでる生まれたばかりの大きな男の児が牡蠣籠<sup>かきかご</sup>みたいな籠の中に入れられて、彼の家に持ち込まれた。六カ月前に追い出されたひとりの下女が、その赤ん坊は

彼の児だと言ったのである。ジルノルマン氏はその時ちようど八十四歳いっぱいになつていた。まわりの者は大変に腹を立てわき返るような騒ぎをした。恥知らずの売女ばいためが、いつたいだれに赤ん坊を育てさせようと思つてるのか。何という大胆さだ。何と忌まわしい中傷だ！ とところがジルノルマン氏の方は、少しも腹を立てなかつた。彼は中傷によつてへつらわれた好々爺こうこうやらしい快い微笑を浮かべて、その赤児をながめた、そして他人事ひとごとのように言つた。「なあに、なんだと、どうしたと、いつたいどうしたんだと？ みんなばかに驚いてるな。なるほど無学な者どもだわい。シャール九世陛下の庶子アングレーム公爵閣下は、八十五歳になつて十五の蓮葉娘はすはむすめと結婚された。ボルドーの大司教だつたスールデー枢機官の弟のアリユーイ侯爵ヴィルジナル氏は、八十三歳で議長ジャカン夫人の小間使いによつて

ひとりの児を設けられた、真の恋愛の児で、後にマルタ団の騎士となり軍事顧問官となつた人だ。近代の偉人のひとりであるタバロー修道院長は、八十七歳の人の設けた児である。そんなことは何も不思議とするには当たらない。聖書を見てもわかる。ただこのお児さんは、私わのでないということ宣言する。がまあ世話してやるがいい。このお児さんが悪いのではない。」そのやり方はいかにも善良だった。女はマニヨンという名だったが、次の年にまた第二の子供を彼に贈つてきた。それもやはり男の児だった。そしてこんどはジルノルマン氏もついに降参した。彼はふたりの子供を母親に送り返して、該母親が再びかか  
ることをしないとという条件で、その養育料として毎月八十フランを与えることにした。彼はつけ加えて言った。「もちろん母親はふたりを大事にしなければいけない。時々私が見に行くこと

にする。」そして彼は実際それを行なつた。彼はまた牧師になつてゐるひとりの弟を持つていた。その弟はポアティエ学会の會長を三十三年間もしてゐて、七十九歳で死んだ。「若く、亡くなつた」とジルノルマン氏は言つていた。彼はその思い出をあまり多く持つていなかつた。弟はおとなしい吝嗇家りんしょくかで、牧師だから貧しい人々に出会えば施与をしなければならぬと思つてはいたが、小錢だの法価を失つた銅貨だのしか恵まなかつた、そして天国の道によつて地獄に行く方法を見いだしてゐた。兄のジルノルマン氏の方は、施与をおしまないで、好んでまた鷹揚おうように与えていた。彼は親切で、性急で、恵み深く、もし金がかたくさんあつたらそのやり口はみごとなものだつたらう。自分に關係することなら何でも、たとひ騙詐かたりでも、堂々とやつてもらいたがつていた。ある日、ある相続の件について、厚かましい

明らかかなやり方でその道の者からごまかされた時、彼は次のようにおごそかに叫んだ。「チェッ！　いかにも卑しいやり方だ！　かかる我利我利を私は恥ずかしく思う。この節ではすべてが、悪者までが墮落している。断じて、それは私のような者から盗むべきやり口ではない。森の中で盗まれたようなものだ、しかも悪い盗み方だ。森は督政官コンスユルの名を汚さざらんことを。」（訳者注　森の中で盗まれることは、大胆な避くる道のない方法で盗まれることを言う）彼はまた、前に言つたとおり二度妻を持つた。第一の妻にひとりの娘があつて、結婚しないでいた。第二の妻にもひとりの娘があつた。この方は三十歳ばかりで死んだが、その前に、一兵卒から成り上がりの軍人と、愛し合つたのが偶然でき合つたのかまたは何かで、結婚していた。その軍人は、共和政および帝政の頃に軍隊にはいつていて、アウステル

リッツの戦に勲章をもらい、ワートルローでは大佐になっていた。「これは私の家の恥だ、」と老市民は言っていた。彼はまたひどく煙草たばこが好きだった。それからことにちよつと手先でレースの襟飾えりかざりをちぢらすのに巧みだった。彼はあまり神を信じていなかった。

## 七 規定——晩ならでは訪客を受けず

リユク・エスプリ・ジルノルマン氏とは右のような人物であった。彼は少しも頭髪を失わず、白髪しらがというよりもむしろ灰色の髪をしていて、いつも「犬の耳」式にそれをなでつけていた。要するに、そしてそれらのことをいっしよにして、彼は一個の敬愛すべき人物だった。

彼は十八世紀式の人物であつて、けいちよう軽佻にして偉大であつた。

王政復古の初めのころ、まだ若かつたジルノルマン氏は——彼は一八一四年には七十四歳にすぎなかつた——サン・ジェルマン郭外セルヴァンド二街のサン・スユルピス会堂の近くに住んでいた。彼がマレーに退いたのは、八十歳に達した後、社会から隠退してであつた。

そして社会から隠退して閉じこもり、自分の習慣のみを守つた。原則として、そして彼はそれに一徹であつたが、昼間はまったく門を閉ざし、決して晩にしか訪客を受けなかつた。だれであらうといかなる用件があるうと、晩に限るのだつた。五時に夕食をして、それから門が開かれた。それは彼の世紀の習慣であつて、それを少しも改めようとしなかつたのである。彼は言つていた。「昼間は物騒で、雨戸を閉ざすべきである。りつぱな

紳士は、蒼空そうくうが星を輝かす時に、おのれの精神を輝かすのである。』そして彼はすべての人に対して、たとひ国王に対してさえ、しようへき墻壁を高く築いていた。彼の時代の古い都雅である。

## 八 二個は必ずしも一対をなさず

ジルノルマン氏のふたりの娘については、上に少しく述べておいた。ふたりは十年の間を置いて生まれた。若い頃、ふたりにはほとんど似寄った所がなかった。その性質から言っても容貌ようぼうから言っても、これが姉妹かと思われるほどだった。妹の方はかわいい心根を持っていて、すべて輝かしい方へ心を向け、花や詩や音楽に夢中になり、光榮ある世界をあこがれ、熱烈で、高潔で、子供の時から頭の中である勇壮な者に身をささげていた。

姉の方もまた自分の夢を持っていた。ある御用商人、ある金持ちで恰幅かつぶくのいい糧秣りょうまつか係り、あるいかにもお人よしの夫おつと、ある成金、またはある県知事、そういうものを蒼空そうくうのうちに夢みていた。県庁の招待会、首に鎖をからました控え室の接待員、公の舞踏会、市町村長の祝辞、「知事夫人」たること、そういうものが彼女の想像のうちに渦巻いていた。そのようにしてふたりふたりの姉妹は若いころ、めいめい自分の夢のうちにさまよい出ていた。ふたりとも翼はねを持っていた、ひとりひとりは天使のように、ひとりは鷺鳥がらぶのように。

いかなる野心も、少なくともこの世では、十分に満たさるることはない。いかなる天国も、現代の時勢では、地上のものとなることはない。妹は自分の夢想中の男と実際結婚したが、その後死んでしまった。姉の方は一度も結婚をしなかった。

われわれのこの物語の中に現われてくる頃の彼女は、一片の老いぼれた徳であり、一個の燃焼し難い似而非貞女えせていじよであり、最もがった鼻の一つであり、およそ世にある最も遅鈍な精神の一つであつた。特殊な一事としては、その狭い家庭外にあつてはだれも彼女の呼び名を知つてゐる者のないことだつた。人々は彼女を姉のジルノルマン嬢と呼んでいた。

偽君子的なことでは、姉のジルノルマン嬢はイギリスの未婚婦人よりも一日の長があつたらう。彼女は暗闇くらやみにまで押し進められた貞節であつた。生涯のうちの恐ろしい思い出と自称してゐることは、ある日靴下留めの紐ひもをひとりの男に見られたということだつた。

年とともにその無慈悲な貞節はつのもろばかりだつた。その面布かおぎぬはかつて十分に透き通つたものにされたことがなく、かつて十

分に高く引き上げられたことがなかつた。だれものぞこうともしない所にまで、やたらに留め金や留め針が使われた。貞節を装うことの特性は、要塞ようさいが脅かされること少なければ少ないほどますます多くの番兵を配置することである。

けれども、その古い潔白の秘密を説明するものとするならしめてもいいが、彼女はひとりの槍騎兵そうきへいの将校に抱擁お擁されることを、別に不快がりもせず許していた。それは彼女の甥おいの子で、テオデュールという名前だつた。

そのかわいがつてる槍騎兵がひとりありはしたが、われわれが彼女に与えた似而非貞女し而非貞女という付札は、まったくよく適当していた。ジルノルマン嬢は一種の薄明の魂であつた。貞節を装うことは半端はんぱの徳でありまた半端の不徳である。

彼女は貞節を装うことのほかになお狂信癖を持つていた。実

によく適当した裏地である。彼女はヴェイエルジュ会にはいつており、ある種の祭典には白い面紗ヴェールをつけ、特殊な祈祷きとうをつぶやき、「聖なる血」を尊び、「聖きよき心」を敬い、普通一般の信者どもには許されない礼拝堂の中で、ロココ・ゼジュイット式の祭壇の前に数時間じつと想を凝らし、そしてそこで、大理石像の群の間に、金箔きんぱくをかぶせた木材の大きな円光の輻やの中に、自分の心を翔かけらせるのであった。

彼女は礼拝堂での友だちをひとり持つていた。同じく年老いた童貞の女で、名前をヴォーボアと言ひ、全然愚蒙ぐもうな婆おばさんであつて、ジルノルマン嬢はそのそばで一つの俊敏しゅんびんな驚おどろたるの愉快を感じていた。アグニユス・デイやアヴェ・マリア（訳者注 神の羊のものにて人はあるなり云々——めでたしマリアよ恵まるるものよ云々——という祈祷）のほかにはヴォーボア嬢は、

種々な菓子を作る方法を心得てるきりで、他に何らの教養もそなえていかなかった。一点の知力の汚点しみもない愚昧ぐまいの完全な白紙であった。

なお付記すべきことは、ジルノルマン嬢は老年になるにつれて悪くなるというよりもむしろよくなつていった。それは消極的な性質の者には通例のことである。彼女はかつて意地悪だつたことはなかつた。意地悪でないというのの一つの相対的な善良さである。それからまた、年ごとに圭角けいかくがとれてきて、時とともに穏和になつてきた。彼女のうちには言い知れぬ哀愁がこめていて、自分でもその理由を知らなかつた。彼女の様子のうちには、まだ初まらないうちに既に終わつた一生涯がもつところの茫然ぼうぜん自失じしつがあつた。

彼女は父の家を整えていた。あたかもビヤンヴニユ閣下が自

分のそばに妹を引きつけていたように、ジルノルマン氏は自分のそばに娘を引きとめていた。老人と老嬢との世帯は決して珍しいものではなく、ふたりの弱い者が互いによりかかつてるありさまは常に人の心を打つ光景である。

この一家の中には、以上の老嬢と老人とのほかに、なおひとの少年がいた。小さな男の児で、いつもジルノルマン氏の前に身を震わして黙っていた。ジルノルマン氏がその子供に口をきく時は、いつもきびしい声を上げ、時として杖つえを振り上げまでもした。「おいで、横着さん！——いたずらさん、こちらへおいで！——返事をしなさい、おばかさん！——顔をお見せ、ろくでなしさん！——云々うんぬん、云々。」そして彼はその子供を無性にかわいがっていた。

それは彼の孫であつた。この少年のことはおいおい述べると



## 第三編 祖父と孫

## 一 古き客間

ジルノルマン氏はセルヴァンド二街に住んでいたころ、幾つかのごくりっぱな上流の客間サロンに出入りしていた。彼は中流市民ではあつたが、拒まれはしなかつた。否かえつて、彼は二重の機才を、一つは實際持つてゐるものであり一つは持つてると人から思われていたものであるが、二重の機才をそなえていたので、喜んで迎えられる歓待された。彼は自分が羽振りをきかせ得る所

へでなければどこへも出入りしなかつた。どんな価を払つても常に勢力を欲し常にもてはやされることを欲する者が世にはある。彼らは自分が有力者であり得ない所では、道化物となるものである。ところがジルノルマン氏はそういう性質の人ではなかつた。出入りする王党の客間サロンにおける彼の羽振りは、彼の自尊心を少しも傷けないものだった。彼は至る所で有力者だった。ド・ボナルド氏やバンジー・プユイ・ヴァレー氏にまで匹敵するほどになつていた。

一八一七年ごろ、彼はきまつて一週に二回はその午後を、近くのフェルー街のT男爵夫人の家で過ごすことにしていた。彼女はりっぱな尊敬すべき人物で、その夫はルイ十六世の時にベちゅうしんざつルリン駐劄ちゅうしんざつのフランス大使だったことがある。このT男爵は、生存中磁気の研究に無我夢中になつていたが、革命時の亡命に

零落してしまい、死後に残した財産としてはただ、メスマルとその小桶（訳者注　メスマルは動物磁気研究の開祖）に関するきわめて不思議な記録を赤いモロッコ皮の表紙で金縁にしてとじ上げた、十冊の手記のみだった。T夫人は品位を保つてそれらの記録を出版しなかった、そして、どうして浮き出してきかだれにもわからないあるわずかな年収で生活をささえていた。彼女は彼女のいわゆる雑種の社会たる宮廷から離れて、高い矜ほこらかな貧しい孤立のうちに暮らしていた。一週に二回数人の知人が、その寡婦かふの炉のまわりに集まることになっていて、そこに純粋な王党派の客間サロンをこしらえていた。皆お茶を飲んだ。そして時勢だの憲法だのブオナパルト派（訳者注　ブオナパルトはボナパルトの皮肉な呼称）だの青色大綬を市民へ濫発らんぱつすることだのルイ十八世のジャコバン主義だのについて、風向きが

悲歌的であるか慷慨的こうがいてきであるかに従つて、あるいは嘆声を放ち  
 あるいは嫌悪けんおの叫びを上げた。そしてシャルル十世以来初めて  
 王弟によつてほの見えてきた希望のことを、低い声で語り合つ  
 た。

そこでは、ナポレオンのことをニコラと呼ぶ俗歌が非常に喜  
 ばれた。社交界の最もやさしい美しい公爵夫人らが、「義勇兵  
 ら」(訳者注 ナポレオンがエルバ島より帰還せし時の)に向け  
 られた次のような俗謡に我を忘れて喝采かつさいした。

ズボンの中に押し込めよ、  
 はみ出たシャツの片端を。

白き旗を愛国者らは

掲げたりと人に言わずな。(訳者注 白き旗は王党の旗)

また人々は、痛烈なものだと思つてる地口を言つてはおもしろがり、皮肉だと思つてる他愛もない洒落言葉しやれことばを言つてはおもしろがり、四行句や対連句を言つてはおもしろがった。たとえばドウカーズやドウゼール氏らが連なつていた穏和なデソール内閣についての次のような句。

ぐらつく王位を固めんためには、  
ソール土地、セル室、カーズ小屋を取り代うべし。

あるいはまた、「おぞましきジャコバン院」である上院の名簿を作り、その中に種々な名前を組み合わせて、たとえば次のような句をこしらへ上げた。「ダ、マス、サ、ブラン、グー、ヴィ、オン、

サン・シール、（訳者注　みな王党の人々）。」そして非常に愉快がった。

その仲間だけでまた革命の道化歌を作った。彼らは革命の暴威をあべこべに革命者どもの方へ向けさせようとする一種の下心を持っていた。人々はその小唄こうたの「よからん」を歌った。

噫あゝ、よからん、よからん、よからんや！

ブオナパルト派は絞首台！

小唄は断頭台のようなものである。何らおかまいなしに、今日はこちらの首を切り、明日はあちらの首を切る。それは一つの変化にすぎない。

当時一八一六年の事件たるフュアルデス事件については（訳

者注 行政官フユアルデス暗殺事件)、人々は暗殺者バステイードやジョージオンの味方をした。なぜならフユアルデスは「ブオナパルト派」であつたから。また人々は自由派を「兄弟、同志」と<sup>あだな</sup>綽名した。それは侮辱の極度のものであつた。

教会堂の鐘楼に鶏形風見があるように、T男爵夫人の客間も二つの勇ましい<sup>おんどり</sup>牡鶏を持つていた。一つはジルノルマン氏で、一つはラモト・ヴァロア伯爵であつた。この伯爵のことを人々は一種の敬意をもつて互いにささやき合つた。「御存じですか、あれが首環事件のラモト氏です。」(訳者注 一七八五年ごろラモト伯爵夫人によつて惹起せられた有名な首環紛失事件)。仲間の間ではそのような特殊な容捨も行なわれるのである。

なおここにちよつと付言する。市民間においては、光榮ある地位はあまりに容易な交際を許す時にはその光を減ずるもので

ある。だれに出入りを許すかを注意しなければいけない。冷たいものが近づく時に温うんき気が失われるように、一般に軽蔑される人物を近づける時には尊敬が減るのである。しかし古い上流社会は、他の法則と同じくこの法則をも意に介しなかった。ポンパドール夫人の兄弟であるマリニーはスービーズ侯の家に出入りした。兄弟であつたけれども、ではない、兄弟であつたから、である。ヴォーベルニエ夫人の教父デュ・バリーはリシユリユー元帥の家で歓待された。そういう社会はオリンポスの山である。メルキュール神もゲメネ侯も等しくそこに住む。盗賊であろうとも、それが一個の神でさえあれば、そこに許されるのである。

ラモト伯爵は、一八一五年には七十五歳の老人で、いくらか人の目につく所と言つてはただ、黙々たるもつたいぶつた様子

と、角立かどだつた冷やややかな顔つきと、きわめて丁重な態度と、首の所までボタンをかけた服と、燃えるような濃黄土色の長いだぶだぶのズボンをはいていつも組み合わしてゐる大きな足だけだった。その顔もズボンと同じ色をしてゐた。

ラモト氏がこの客間のうちで「もてて」いたのは、その高名のゆえであり、また言うもおかしいがしかも確かなことは、そのヴァロアという名前のゆえであつた。

ジルノルマン氏の方に対する敬意は、まったく彼のよい地金じがねのゆえであつた。彼は上に立つべき人だつたから上に立つていたのである。彼はごく気軽であり快活であるうちにも、市民的に尊大な威圧的な堂々たる率直な作法を持っていた。その上老年の重みまで加わつてゐた。人は事なく百年も長生きすることはほとんどできないものである。ついには歲月のために尊むべ

き蓬髪ほうはつを頭のまわりに生ずるのが普通である。

その上彼は、まったく昔気質のひらめきとも称すべき名句の才を持っていた。ある時プロシヤ王は、ルイ十八世を王位に復してやった後、リュパン伯爵として王を訪問してきたところが、そのルイ十四世大王の後裔こうえいたる王によつて、かえつてブランデングブルグ侯爵として最も微妙な横柄さをもつて待遇せられた。ジルノルマン氏はそれを喜んで、そして言った。「フランス王でない、国王は、皆ただ、一州の王たるに過ぎない。」またある日、彼の前で次のような問答がなされた。「クーリエ・フランセー紙の編集者はどういう刑に処せられましたか。」「ていし、刑（発行停止刑）です。」するとジルノルマン氏は横から言葉をはさんだ。「てい、だけ多すぎる。」（すなわち死刑）その種の言葉は人に一つの地位を得させるものである。

ブルボン家復帰の記念謝恩日に、タレーラン（訳者注 革命、帝政、王政復古、と順次に節を曲げし政治家）が通るのを見て彼は言った。「彼<sup>あそこ</sup>に魔王閣下<sup>、</sup>が行く。」

ジルノルマン氏はいつても自分の娘と小さな少年とを連れてきた。娘というのはあの永遠の令嬢で、当時四十歳を越していたが、見たところは五十歳くらいに思われた。少年の方は、六歳の美しい児で、色が白く血色がよく生々<sup>いきいき</sup>としていて、疑心のない幸福そうな目つきをしていた。しかし彼がその客間に現われると、いつもまわりで種々なことを言われた。「きれいな子だ！」「惜しいものだ！」「かわいそうに！」この子供は前にちよつと述べておいたあの少年である。人々は彼のことを「あわれな子」と呼んでいた。なぜなら彼の父は「ロアールの無頼漢」（訳者注 ナポレオン旗下の軍人）のひとりだったからである。

そのロアールの無頼漢は、既に述べておいたジルノルマン氏の婿むこで、彼が「家の恥」と呼んでいた人である。

## 二 当時の残存赤党のひとり

その頃、ヴェルノンの小さな町にはいつて、やがて恐ろしい鉄骨の橋となるべき運命にあつたあの美しい記念の橋の上を歩いたことのある者は、橋の欄干を越してひとりの男を見ることのできたであろう。その男は五十歳ばかりの老人で、鞣革なめしがわの帽子をかぶり、灰色の粗末なラシャのズボンと背広とをつけ、その背広には赤いリボンの古く黄色くなつてゐるのが縫いつけてあり、木靴きぐつをはき、日に焼け、顔はほとんど黒く頭髪はほとんどまっ白で、額ほおから頬ほおへかけて大きな傷痕きずあとがあり、腰も背も曲が

り、年齢よりはずつと老ふけていて、手には鋤すきか鎌かまかを持ち、ほとんど一日中そこにある多くの地面の一つをぶらついていた。それらの地面は皆壁に囲まれ、橋の近くにあつて、セーヌ川の左岸に帯のように続いており、美しく花が咲き乱れて、も少し広かつたら園とも言うべく、も少し狭かつたら叢くさむらとも言うべきありさまだった。それらの囲いの土地はどれも皆、一端に川を控え他端に一つの人家を持つていた。上に述べた背広と木靴きぐつの男は一八一七年ごろには、それらの地面のうちの最も狭くそれらの家のうちの最も粗末なものに住んでいた。彼はそこにひとり寂しく黙々として貧しく暮らしていた。そして若くもなく老年でもなく、美しくも醜くもなく、田舎者いなかもでも町人でもないひとりの女が、彼の用を足していた。彼が自分の庭と称していたその四角な土地は、彼の手に培養さるる美しい花によつて、町

で評判になつていた。花を作るのが彼の仕事だつた。

労力と忍耐と注意とまた桶おけの水とによつて、彼は造物主に次いで巧みな創造をすることができた。そして自然から忘られていたようなみごとなチューリップやダリヤを作り出した。彼ははなはだ巧妙だつた。アメリカや支那からきた珍しい貴重な灌木かんぼくを培養するために小さな石南土かたまの塊りを作ることに、おいては、スーランジュ・ボダンにもまきつていた。夏には夜明けから庭の小道に出て、芽をさしたり、枝をはさんだり、草を取つたり、水をやつたり、花の間を歩き回つたりして、善良な悲しげなまた安らかな様子をし、あるいは夢みるように数時間じつとたたずんでは、木の中にさえずる小鳥の歌やどこかの家からもれる子供の声などに耳を傾け、あるいはまた、草の葉末に宿る露の玉が太陽の光に紅宝玉のように輝くのを見入つていた。彼の食

卓はごく質素で、また葡萄酒ぶどうしゅよりも多くは牛乳を飲んでいた。子供に対しても彼は一步を譲り、召し使いからまでしかられていた。気味悪いくらいに内気で、めったに外出することはなく、顔を合わせる者としてはただ、彼のもとへやってくる貧民どもと、親切な老人である司祭のマブーフ師のみだった。けれども、町の人だのまたは他国の人だのだれであろうと、チューリップや薔薇ばらを見たがってその小さな家を訪れて来る時には、彼はほほえんで門を開いてくれた。それがすなわち前に言った「ロアールの無頼漢」だったのである。

それからまた、軍事上の記録や、伝記や、機関新聞や、大陸軍の報告書などを読んだことのある者は、そこにかなりしばしば出て来るジョルジュ・ポンメルシーという名前を頭に刻まれたであろう。そのジョルジュ・ポンメルシーはごく若くしてサン

トンジュ連隊の兵卒であった。そのうちに革命が起こった。サントンジュ連隊はライン軍に属することになった。王政からの古い連隊は、王政顛覆後てんぷくもなおその地方の名前を捨てないでいて、旅団に編成されたのはようやく一七九四年のことだったのである。さてポンメルシーは各地に転戦し、スピレス、ウォルムス、ノイスタット、ツルクハイム、アルゼー、マイヤンスなどで戦ったが、このマイヤンスの時などは、ウーシャールの後衛たる二百人のうちのひとりだった。彼は十二番目にいて、アンデルナツハの古い胸壁の背後でヘッセ侯の全軍に対抗し、胸壁の頂から斜面まですべて敵砲のために穿たれるうがまでは本隊の方に退却しなかった。マルシエンヌおよびモン・パリセルの戦いの際にはクレベルの下に属し、後者の戦いでは腕をビスカイヤン銃弾に貫かれた。次に彼はイタリー国境に向かい、ジューベール

とともにテンデの峽路きょうろをふせいだ三十人の擲弾兵てきだんへいのひとりだった。その時の武勲により、ジューベールは高級副官となり、ボンメルシーは少尉となった。ロデイーの戦いでは、霰弾さんだんの雨注する中にベルテイエのそばに立っていた。「ベルテイエは砲手であり、騎兵であり、擲弾兵であつた」とボナパルトをして言わしめたのは、その戦いである。またノヴィーにおいては、自分の古い將軍たるジューベールが剣を上げて「進め！」と叫んでる瞬間にたおれるのを見た。また戦略上自分の一隊を引率して小船に乗り、ゼノアからやはりその海岸のある小さな港へ向かつた時には、七、八艘そうのイギリス帆船の網の中に陥つた。ゼノア人の船長の考えでは、大砲を海中に投じ、兵士を中甲板に隠し、商船と見せかけて暗中をのがれたがつた。しかるにボンメルシーは、旗檣ししやうの綱に三色旗を翻えさし、毅然きぜんとしてイギリス二等艦の砲

弾の下を通過した。それから二十里ばかり行くうちに、彼の大胆さはますます加わり、その小船をもつてイギリスの大運送船を襲つて捕獲した。その運送船はシシリアに兵士を運んでいたのであつて、舷側げんそくまでいっぱいになるほど人員と馬とを積んでいた。一八〇五年には、フェルディナンド大公からグンズブルグを奪つたマールレル師団の中にいた。ウエツティンゲンにおいては、弾丸の雨下する中に、竜騎兵第九連隊の先頭に立つて致命傷を受けたモープティ―大佐を腕に抱き取つた。アウステルリツツていけいにおいては、敵の砲火の下を冒してなされたあの驚嘆すべき梯形行進中ていけいにあつて勇名を上げた。ロシア近衛騎兵このえきへいが歩兵第四連隊の一隊を壊滅させた時、その近衛騎兵をうち破つて返報をした者の中にポンメルシーもいた。皇帝は彼に勲章を与えた。次に、マンテュアにてウルムゼルを捕虜とし、アレキサ

ンドリアにてメラスを捕虜とし、ウルムにてマツクを捕虜とした各戦争に彼は参加した。モルティエに指揮されてハンブルグを奪取した大陸軍の第八軍団に彼は属していた。次に昔のフランドルの連隊だった歩兵第五十五連隊に代わった。エイラウにおいては、本書の著者の伯父たる勇敢なルイ・ユーゴー大尉が、八十三人の一隊を提げて二時間の間敵軍の攻撃をささええたあの墓地に、彼もいた。彼はその墓地から生き残つて脱してきた三人のひとりだった。彼はまたフリードランドの戦いにも参加した。次に彼はモスコーを見、ベレジナを見、ルツチェン、バウチエン、ドレスデン、ワルシャワ、ライプツヒなどを見、ゲルンハウゼンの隘路あいろを見、次に、モンミライ、シャトー・ティエリー、クラン、マルヌ川岸、エーヌ川岸、恐るべきランの陣地を見た。アルネー・ル・デュックにおいては、大尉になっていて、

十人のコザック兵をなぎ払い、將軍の生命をではないが部下の伍長の生命を救った。その時彼は方々に負傷し、左腕からだけでも二十七個の弾丸の破片が見いだされた。パリ―陥落の八日前には、彼は一同僚と地位を代わつて騎兵にはいった。彼は旧制度の下でいわゆる二重の手と呼ばれたものを持つていた、すなわち、兵士としては劍と銃とを同じく巧みに操縦し、將校としては騎兵隊と歩兵隊とを同じく巧みに操縦し得る能力を持つていた。そういう能力が更に軍隊教育によつて完成さるる時に、特殊な軍隊が生まれたのである。全体として騎兵でありまた歩兵であつた竜騎兵はその一例である。ポンメルシーはナポレオンに従つてエルバ島に赴いた。おもむワートルローにおいては、デュボア旅団中の胸甲騎兵中隊の指揮官だつた。ルネブルグ隊の軍旗を奪つたのは彼であつた。彼はその軍旗を持ち帰つて皇帝

の足下に地に投じた。彼は血にまみれていた。軍旗を奪う時、劍の一撃を顔に受けたのである。皇帝は満足して叫んだ。「汝は、今より大佐であり、男爵であり、レジオン・ドンヌール勲章の、オフ、イ、シエ、受、賞、者、だ、ぞ。」ポンメルシーは答えた。「陛下、やがて、寡婦たるべき妻のために、御礼を申します。」一時間後に彼はオーアンの峽路におちいった。さてこのジョルジュ・ポンメルシーとは何人なんびとであつたか。それはやはりあの「ロアールの無頼漢」その人であつた。

以上が彼の経歴の大略である。ワートルローの戦いの後、読者は思い起こすであろうが、ポンメルシーはオーアンの凹路おうろから引き出され、首尾よく味方の軍隊に合することができ、野戦病院から野戦病院へ運び回され、ついにロアールの舎営地に落ち着いたのである。

王政復古のために彼は俸給を半減され、次にヴェルノンの住居へ、すなわち監視の下に、置かれることになった。国王ルイ十八世は一百日（訳者注 ナポレオンの再挙の間のこと）のうち起こつたすべては無効であると考えていたので、彼に対しても、レジオン・ドンヌール勲章のオフィシエ受賞者であることも、大佐の階級も、男爵の肩書きも、少しも認めてはくれなかつた。彼の方ではまた、あらゆる場合に陸軍大佐、男爵、ポンメルシーと署名することを欠かさなかつた。彼は古い青服を一つしか持たなかつた。そして外出する時にはいつも、レジオン・ドンヌール勲章のオフィシエりやくじゆの略綬をそれにつけていた。検察官は彼に「該勲章の不法はいよう佩用」について検事局が起訴するかも知れないと予告してやつた。その注意がある公然の規定をふんで手もとに達した時、ポンメルシーはにがにがしい微笑を浮か

べて答えた。「私の方でもはやフランス語を了解しなくなつたのか、あるいはあなたの方でもはやフランス語を話さなくなつたのか、いずれだか知れないが、とにかく私にはあなたの言うことがわからない。」それから彼は一週間続けてその赤い略綬をつけて外出した。だれもあえてとがめる者はなかつた。また二、三度陸軍大臣と管轄の司令官とは、「ポ、ン、メ、ル、シ、ー少佐殿へ」として手紙を贈つた。それらの手紙を彼は封も開かないで返送してしまつた。やはりちようどそのころ、セ、ン、ト、ヘ、レ、ナにいたナポレオンは、「ボ、ナ、パ、ル、ト將軍へ」としたハドソン・ローの信書を同じようにつき返したのである。ポンメルシーはついに、こういう言葉を許していただきすが、皇帝と同じ唾液だえきを口の中に持つに至つたのである。

それと同じく、昔はローマにおいてカルタゴ兵の捕虜らは、

督政官フラミニウスに敬礼することを拒み、多少ハンニバルと同じ魂を持つていたのである。

ある日の朝、ポンメルシーはヴェルノンの町で検察官に出会い、彼の前に進んでいつて言った。「検察官殿、顔の傷はこのままつけておいてもよろしいですか。」

彼は騎兵中隊長としてのわずかな俸給の半額のほか何らの財産も持たなかつた。それゆえヴェルノンでできるだけ小さな家を借りた。そこに彼はひとりで住んでいた。そのありさまは上に述べたとおりである。帝政時代に、両戦役の間に、彼はジルノルマン嬢と結婚するだけの時間の余裕があつた。老市民であるジルノルマン氏は、内心憤りながらもその結婚に承諾せざるを得なかつた。そして嘆息しながら言った、「最も高い家柄でも、余儀ないことだ。」ポンメルシー夫人はいずれの点から見ても

りつぱな婦人で、教養がありその夫に恥ずかしからぬ珍しい婦人であつた。しかし一八一五年に、ひとりの子供を残して死んだ。その子供は、孤独な生活における大佐の慰謝だつたはずである。しかるに祖父は、権柄ごんがらずくでその孫を請求し、もし渡さなければ相続権を与えないと宣告した。父親は子供のために譲歩した。そしてもはや子供をも手もとに置くことができなくなつたので、花を愛し初めた。

その上彼はすべてを思い切つてしまい、何らの活動もせず計画もしなかつた。彼は自分の考えを、現在いまなしている無垢むくな事がらと過去になした偉大な事がらとに分かち与えていた。あるいは石竹せきちくの珍花を育てんと望み、あるいはアウステルリツツの戦いを回想して、その時間を過ごしていた。

ジルノルマン氏はその婿と何らの交渉も保たなかつた。大佐

は彼にとつてはひとりの「無頼漢」であり、彼は大佐にとつてひとりの「木偶漢」でくのぼうにすぎなかつた。ジルノルマン氏が大佐のことを口にするのはただ、時々その「男爵閣下」ちようしやうを嘲笑の種にする時くらいのものであつた。子供が相続権を奪われて追い戻されはしないかを気づかつて、ポンメルシーは決して子供に会おうともせず言葉をかけようともしないだろうということとは、前後の事情から明らかだつた。ジルノルマン家に対しては、ポンメルシーは一つの疫病神やくびようがみにすぎなかつた。一家のものは自分たちだけで思い通りに子供を育てるつもりだつた。そういう条件を受け入れたのは大佐の方もおそらく誤つていたかも知れない。しかし彼はそれに甘んじて、別に悪いこととも思わず、自分だけを犠牲にすることだと思つていた。ジルノルマン氏の遺産は大したものではなかつたが、姉のジルノルマン嬢の遺産は莫大ばくだい

なものだった。この伯母おばは未婚のまま、物質的に非常に富裕だった。そしてその妹の子供は当然その相続者だった。

子供はマリユスという名だったが、自分に父のあることを知っていた。しかしそれ以上は何もわからなかった。だれもそれについてには聞かしてくれなかった。けれども、祖父から連れてゆかれる社交場での、人々のささやきや片言や目くばせなどは、長い間に子供の目を開かせ、ついに子供に多少の事情をさとらした。そして、言わば彼の呼吸する雰囲気であるそれらの思想や意見は、自然と彼のうちに徐々に浸潤し侵入してきて、いつのまにか彼は、父のことを思うと一種の屈辱と心痛とを感ずるようになった。

彼がそういうふうにして生長している間に、二、三カ月に一度くらいは、大佐は家をぬけ出し、監視を破る刑人のようにひ

そかにパリーにやつてきて、伯母のジルノルマンがマリユスを弥撒ミサに連れて行くところを見計らい、サン・スウルピス会堂の所に立っていた。そこで、伯母がふり返りはしないかを恐れながら、柱の陰に隠れ、息を凝らしてじつとたたずんで、子供を見るのだった。顔に傷のある軍人も、その老嬢をかくまで恐れていたのである。

そういうところから、彼はまたヴェルノンの司祭マブーフ師とも知り合いになったのである。

そのりっぱな牧師は、サン・スウルピス会堂のひとりの理事と兄弟だった。理事はあの男があの子供をながめてる所を幾度も見た、そして男の大きな頬ほおの傷と目にいっぱいあふれてる涙とを見た。大丈夫らしい様子をしながら女のように泣いているのが、理事の心をひいた。その顔つきが頭の中に刻み込まれた。

ところがある日彼は、兄に会いにヴェルノンへ行くと、橋の上で大佐に出会い、それがあのサン・スユルピス会堂の男であることを認めた。理事はそのことを司祭に語り、ふたりして何かの口実の下に大佐を訪れた。そしてそれをきっかけに何度も訪問するようになった。大佐は初めいつさい口をつぐんでいたが、ついに事情を打ち明けた。それで司祭と理事とは、大佐の身上をことごとく知り、ポンメルシーが自分の幸福を犠牲にして子供の未来をはかつてる事情を知るに至った。そのために、司祭は大佐に対して敬意と温情とをいだし、大佐の方でもまた司祭を好むようになった。その上、もしどちらも至つてまじめであり善良である場合には、およそ世の中に老牧師と老兵士とほど、容易に理解し合い容易に融合し合うものはない。根本において彼らは同じ種類の人間である。一は下界の祖国に身をさ

さげ、一は天上の祖国に身をささげている。ただそれだけの違いである。

年に二度、一月一日と聖ジョルジュ記念日（訳者注 四月二十三日）とに、マリユスは義務としての手紙を父に書いた。それは伯母が口授したもので、形式的な文句の書き写しともいえるようなものだった。ジルノルマン氏が許容したことはただそれだけだった。すると父親はきわめて心をこめた返事をよこした。祖父はそれを受け取って、読みもしないでポケットに押し込んだ。

### 三 彼らに眠りあれ

T夫人の客間サロンは、マリユス・ポンメルシーの世間に対する知

識のすべてだった。彼が人生をながむることのできる窓は、それが唯一のものだった。けれどその窓は薄暗くて、その軒窓ともいふべきものから彼にさして来るものは、温暖よりも寒気の方が多く、昼の光よりも夜の闇やみの方が多かつた。その不思議な社会にはいつてきた当時、喜悦と光明とのみであつた少年は、間もなく悲しげになり、その年齢になおいつそう不似合いなこ  
とには、沈鬱ちんうつになつてきた。それらの尊大な独特な人々にとり  
巻かれて、彼は心からの驚きをもつて周囲を見回した。すると  
すべてのものは、ただ彼のうちにその茫然ぼうぜんたる驚きを増させる  
だけだった。T夫人の客間のうちには、きわめて尊むべき貴族  
の老夫人らがいた、マタン、ノエ、それからレヴィと発音され  
てるレヴィス、カンビーズと発音されてるカンビス、などとい  
う夫人が。それらの古めかしい顔つきとそれらのバイブルにあ

る名前とは、少年の頭の中で、彼が暗唱している旧約書の中にはいり込んできた。そして彼女らが、消えかかった暖炉のまわりに丸くすわり、青い覆おおいをしたランプの光にほのかに照らされ、きびしい顔つきをし、灰色かまたは白い頭髮をし、寂しい色しかわからない時勢おくれの長い上衣を着、長い間を置いては時々堂々たるまたきびしい言葉を発しながら、みなそこに集まっている時、小さなマリユスはびっくりした目で彼女らをながめて、婦人というよりもむしろ古代の長老や道士を見るような気がし、実在の人物というよりもむしろ幽霊を見るような気がした。

それらの幽霊に交じつてまた、その古い客間には常客たる数人の牧師がおり、それから数人の貴族らがいた。ベリー夫人の第一秘書役たるサスネー侯爵、シャール・ザントアンヌという匿

名で単韻の短詩を出版したヴァロリー子爵、金の絢総よりふさのついた緋ビロードひの服をつけ首筋を露あらわにしてこの暗黒界を脅かしてゐるきれいな才ばしつた妻を持ち、かなり若いのに胡麻塩ごましおの頭を持つていたボーフルモン侯、最もよく「適宜な礼儀」を心得ていたフランス中での男たるコリオリ・デスピヌーズ侯爵、愛嬌あいぎょうのある頤あごをした好人物アマンドル伯爵、王の書斎と言われているルールの図書館の柱石であるポール・ド・ギー騎士。このポール・ド・ギー氏は、年取つたというよりもむしろ古くなつたという方が適当な禿頭はげあたまの人で、その語るところによると、一七九三年十六歳のおり、忌避者として徒刑場に投ぜられ、やはり忌避者たる八十歳の老人ミールポア司教と同じ鎖にながれたそうである。ただし彼の方は兵役忌避者であつたが、司教の方は僧侶法忌避者であつた。それはツーロンの徒刑場だつた。彼らの役

目は、夜間断頭台の所へ行つて、昼間そこで処刑された者の首と身体とを拾つて来ることだった。彼らは血のしたたる胴体（がいとう）を背にかついできた。そして徒刑囚としての赤い外套は、朝にはかわき晩にはぬれて、首筋の後ろに血潮の厚い皮ができるようになったそうである。そういう悲壮な物語はT夫人の客間に満ち満ちていた。そしてマラーをののしる勢いに駆られて、トレスタイヨンまでを賞揚した。過激王党的な数人の代議士は、ホイストの勝負を争っていた、テイボール・デュ・シャラール氏、ルマルシャン・ド・ゴミクール氏、および右党で名高い嘲笑者（ちやうしやうしや）のコルネー・ダンクール氏など。大法官フェルレットは、その短いズボンとやせた足とをもつて、タレーランの家へ行く途中に時々この客間を見舞つた。彼はもとアルトア伯爵の遊び仲間であつた。そして美婦カンパスの前に膝（ひざ）を折つたアリストテ

レスと反対に、女優ギマールを四つ足で歩かし、それによつて哲学者の仇を大法官が報じたことを古今に示したのである。

牧師の方には次のような人々がいた。アルマ師、これはフードル紙上の仲間たるラローズ氏が、「へ、へ、何者だ、五十歳にも満たないで、たぶん黄口の少年輩だろう、」と云つたその人である。それから、国王の説教師であるルツールヌール師。まだ伯爵でも司教でも大臣でも上院議員でもなく、ボタンの取れた古い教服を着ていたフレイシヌー師。サン・ジェルマン・デ・プレ会堂の司祭クラヴナン師。次に、法王の特派公使。これは當時ニジビの大司祭マツキ閣下と称し後に枢機官になつたが、その瞑想的な長い鼻で有名だつた。なおもひとりイタリーの高僧がいたが、次のような肩書きがついていた、すなわち、パルミエリ師、宮廷教官、七人の法王庁分担大書記官のひとり、リベ

リア本院の記章帶有のキャノン牧師、聖者代弁人すなわち聖者の請願師、これは列聖事務に關係あることで、ほとんど天国区隊の参事官ともいふべき意味である。終わりにふたりの枢機官、リュゼルヌ氏とクレルモン・トンネール氏。リュゼルヌ枢機官は文筆の才があり、数年後にはコンセルヴァトゥール紙にシャトーブリアンと相並んで執筆するの光榮を有した。クレルモン・トンネール氏はツールーズの司教であつて、しばしばパリーにやつてきて、陸海軍大臣だつたことのある甥おいのトンネール侯爵の家に滞在した。彼は快活な背の低い老人で、教服をまくつて下から赤い靴下くつしたを出していた。その特長は、大百科辞典をきらうことと、撞球たまつきに夢中になることとであつた。当時、クレルモン・トンネールの館やかたがあつたマダム街を夏の夕方などに通る者は、そこに立ち止まつて、撞球の音を聞き、随行員でカリスト

の名義司教たるコトレー師に向かつて、「点数、三つ、当りだ、」と叫ぶ枢機官の鋭い声を聞いたものである。クレルモン・トンネール枢機官は、元のサンリスの司教で四十人のアカデミー会員のひとりである彼の最も親しい友人ロクロール氏から、T夫人の客間に連れてこられたのである。ロクロール氏は、その背の高い身体とアカデミーへの精励とによつて有名だった。当時アカデミーの集会所となっていた図書室の隣の広間のガラス戸越しに、好奇な者らは木曜日には必ず元のサンリスの司教を見ることができた。彼はいつも立っていて、あざやかに化粧をし紫の靴下くつしたをはき、明らかにその小さなカラーをよく見せんためであろうが、戸に背を向けていたものである。右のような聖職者らは、その大部分教会の人であるとともに宮廷の人だったが、T夫人の客間の莊重な趣をますます深からしめていた。また五

人の上院議員、ヴィブレー侯爵、タラリュ侯爵、エルブーヴィル侯爵、ダンブレー子爵、ヴァランティノア公爵らは、客間の貴族的な趣を増さしていた。このヴァランティノア公爵は、モナコ侯すなわち他国の主権者ではあつたが、フランスおよび上院議員の位を非常に尊敬していて、その二つを通じてすべてのものを見ていた。「枢機官はローマのフランス上院議員であり、卿はイギリスのフランス上院議員である」と言っていたのは彼である。けれども、この世紀には革命は至る所にあるはずであつて、この封建的な客間でも、前に言つたとおりひとりの市民が勢力を振るつていた。すなわちジルノルマン氏がそこに君臨していたのである。

実にこの客間のうちに、パリーの白党の本質精髓があつた。世に名高い人々は、たとい王党であらうと、そこから遠ざけら

れていた。名声のうちには常に無政府臭味があるものである。シャトーブリアンがもしそこにはいつていつたら、ペール・デュシェーヌ（訳者注 民主主義の代表的人物）がはいつてきたほどの騒ぎをきたしたであろう。けれども、四、五の共和的王政派の人々は、この正教的な社会のうちにはいることを特別に許されていた。ブーニョー伯爵も条件つきで迎えられていた。

今日の「貴族」の客間は、もはやそれらの客間と似寄った点を少しも持たない。今日のサン・ジェルマン郭外には異端派的なおいがある。現今の王党らは、誉むべきことには、もはや一種の民主派である。

T夫人の客間においては、皆秀ひいでた階級の人々であつたから、花やかな礼容の下に、趣味は洗煉せんれんされまた尊大になつていた。習慣は無意識的なあらゆる精緻せいじさを含んでいた。そしてこの精

緻きこそ、既に埋められながらなお生きている旧制そのものだったのである。その習慣のうちのあるものは、特に言葉の上のそれは、いかにも奇妙に思われるものだった。ただ表面だけを見る観察者らは、単に老廃にすぎないものを田舎式いなかしきだと見誤ったかも知れない。女に対して將軍夫人などという言葉がまだ言われていた。連隊長夫人という言葉もまったく廃れてはすたいなかつた。美しいレオン夫人は、おそらくロングヴィル公爵夫人や、シュヴルーズ公爵夫人などの思い出によつてであろうが、侯爵夫人という肩書きよりもそういう名称の方を好んでいた。クレキー侯爵夫人も自ら連隊長夫人と言つていた。

チュイルリー宮殿において、王に向かつて親しく言葉を向ける時には、いつも国王という三人称を用いて、決して陛下と言わない巧妙を作り出したのは、やはりこの上流の小社会であつ

た。なぜなら陛下、という称号は、「篡奪者さんだつしゃ」（訳者注 ナポレオン）によつて汚された」からである。

そこでまた人々は、事件や人物を批判した。人々は時代をあざけり、ために時代ということを了解しないで済んだ。人々は互いに驚きの情を深め合つた。また互いにその知識を分かち合つた。メッセラはエピメニデスに物を教えた（訳者注 共に太古の人物で、前者は長命を以つて後者は長眠を以つて有名である）。聾者ろうじゃは盲者の手を引いた。彼らはコブレンツ（訳者注 一七九二年王党の亡命者が集合せし地）以来経過した時間をなないものだとした。ルイ十八世が神のお陰によつて治世二十五年目であつたのと同じく、移住者らもまさしくその青年期の第二十五年目だったのである。

すべては調和がとれていた。何物もあまりに生き生きとしてる

ものはなかった。人の言葉はようやく一つの息吹いきぶきにすぎなかった。新聞は客間と一致して一つの草双紙にすぎないらしかった。若い人々もいたが、それもみな多少死にかかっていた。控え室においても、接待員はみな老耄おいぼれだった。まったく過去のものとなつてゐるそれらの人物には、やはり同じ種類の召し使いが仕えていた。それらのようすを見ると、もう長い前に生命を終えながら、なお頑固がんこに墳墓と争つてゐるかのようだった。保存する、保存、保存人、そういうのが彼らの辞書のほとんど全部の文字だった。「に、おい、が、いい」（評判がいい）ということが問題だった。実際それらの尊ぶべき群れの意見のうちには香料があつた、そしてその思想にはインド草かおの香りがしてゐた。それは木乃伊ミイラの世界だった。主人はいい香りをたき込まれており、従僕はくせいは剥製

にされてゐた。

亡命し零落したひとりのりっぱな老侯爵夫人は、もうひとり  
の侍女しか持つていなかったが、なお言い続けていた、「私の女  
中ども」と。

T夫人の客間のうちで人々は何をしていたか？ 彼らはみな  
過激王党派だったのである。

過激派である、というこの言葉は、それが表現する事物はお  
そらくまだ消滅しつくしてはいないであろうが、言葉自身は今  
日ではもはや無意味のものとなっている。その理由は次の通り  
である。

過激派であるということは、範囲の外まで逸することである。  
王位の名によって王笏を攻撃し、祭壇の名によって司教の冠を  
攻撃することである。おのれが導くものを虐待することである。  
後ろに乗せて引き連れてるものを後足あとあしでけることである。邪教

徒の苦痛の程度が少ないと言つて火刑場を悪口することである。崇拜されることが少いと言つて偶像を非難することである。過度の尊敬によつて侮辱することである。法王に法王主義の不足を見いだし、国王に王権の不足を見いだし、夜に光の過多を見いだすことである。白色の名によつて石膏や雪や白鳥や百合の花などに不満をいだくことである。敵となるまでに深く味方たることである。反対するまでに深く賛成することである。

過激的な精神は、ことに王政復古の第一面の特質である。

およそ歴史中、一八一四年ごろから初まり右党の手腕家ヴェルル氏が頭をもたげた一八二〇年ごろに終わったこの小期間に、相似寄つた時期は一つもない。その六年は実に異様な一時期であつて、騒然たると同時に寂然として、嬉々たると同時に沈鬱で、あたかも曙の光に照らされてるがようであると同時に、な

お地平線に立ちこめてしだいに過去のうちに沈み込まんとする  
大災厄だいさいやくの暗雲におおい隠されてるがようであつた。その光と影  
との中に、新しくまた古く、おかしくまた悲しく、年少でまた老  
年である一小社会があつて、目をこすつていた。復起かくせいと覚醒と  
ほど互いによく似寄つてるものはない。ふきげんにフランスを  
ながめ、またフランスから皮肉にながめられてる一群。街路に  
満ちてる人のいい老梟ろうふくろうたる公爵ら、帰国せる者らとよみがえつ  
た者ら、すべてに驚きあきれてる旧貴族ら、祖国を再び見て歡喜  
し、もとの王政を再び見得ないで絶望して、フランスにあること  
をほほえみまた泣いている善良な貴族ら、帝国の貴族すなわち  
軍国の貴族に恥辱を与える十字軍の貴族。歴史の意義を失つた  
歴史的人種。ナポレオンの仲間を輕蔑するシャルマーニュ大  
帝の仲間。上に述べきたつたとおり、劍戟けんげきは互いに凌辱りようじよくし合つ

た。フオントノアの剣は笑うべきものであり、一つの錆さびくれにすぎなかつたと言う。マレンゴの剣は擯斥ひんせきすべきもので、一つのサーベルにすぎなかつたと言ひ返す。昔は昨日をけなした。人々はもはや、偉大なるものに対する感情も持たず、嘲笑ちやうしょうすべきものに対する感情も持たなかつた。ナポレオンを称してスカパンと言う者もいた（訳者注 スカパンとはモリエールの喜劇中の人物にて、奸知にたけた悪従僕の典型）。しかしそういう社会は今もうなくなっている。くり返して言うが、今日ではもう影も止めていない。で、今日、偶然その相貌そうぼうを多少つかんできて、頭の中に浮かべようとする時には、あたかもノアの洪水こうずい以前の世界ほどに不思議なものに思われる。そしてまた實際その社会も一の洪水によつてのみ込まれてしまったのである。二つの革命によつて姿を消してしまったのである。思想とはいか

に大なる波濤はとうであるか！ 破壊し埋没すべく命ぜられたすべてをいかに早くおおい隠し、恐るべき深淵をいかにたちまちの間にこしらえることか。

そういうのが、このはるかな廉潔な時代の客間のありさまであつた。そしてそこでは、マルタンヴィル氏はヴォルテールよりもいつそうの機才を持つていたのである。

それらの客間は、自分だけの文学と政治とを持つていた。フィエヴェーが信用を得ていた。アジエ氏が法令をたれていた。マラーケ―川岸の古本出版商コルネ氏が種々批評を受けていた。ナポレオンはそこでは、まったくコルシカの食人鬼にすぎなかつた。その後、国王の軍隊の陸軍中将ブオナパルテ侯爵（訳者注 ナポレオンのこと）という語が歴史の中に入れられたのは、時代精神への讓歩であつた。

それらの客間は、長く純潔であることはできなかつた。既に一八一八年ごろより、数人の正理派は芽を出し初めて、不安な影となつた。それらの人々のやり方は、王党であるとともにそれを弁明することだつた。過激派らがきわめて傲然ごうぜんとしていたところに、正理派らは多少の恥を感じていた。彼らは機才を持つていたし、沈黙を持つていた。その政治的信条には、適当に倨傲きよごうさが交じえられていた。その成功は当然だつた。彼らは白い襟飾えりかざりりとボタンをすつかりかけた上衣とを濫用したが、それももとより有効だつた。正理派の過誤もしくは不幸は、老いたる青春をこしらえたことだつた。彼らは賢者のような態度をとつた。絶対過激なる主義に一つの穏和なる権力を接木つぎぎしようとした。破壊的自由主義に保守的自由主義を対立させ、しかも時としては珍しい伶俐れいりさをもつてそれをした。人々は彼らがこう言うの

を聞いた。「勤王主義に感謝せよ。勤王主義は少なからざる役目をした。それは伝統と教養と宗教と尊敬とを再びもたらした。忠実で正直で誠実で仁愛で献身的であつた。たとい自ら好んでではなかつたとはいへ、国民の新しい偉大さに王国古来の偉大さを交じえた。そしてその誤ちは、革命と帝国と光榮と自由と、若き思想と若き時代と若き世紀とを、理解していないことである。しかしそれが吾人に対して有する誤ちは、吾人もまた時としてそれに対して有しなかつたであらうか。吾人がその後を継いだ革命は、すべてに聡明そうめいなるべきはずである。勤王主義を攻撃することは、自由主義の矛盾である。何たる過失であり、何たる盲目であるか。革命のフランスは、歴史のフランスに、言い換えればその母に、また言い換えればそれ自身に、敬意を欠いている。一八一六年九月五日以後王国の高貴さが受けている

待遇は、あたかも一八一四年七月八日以後帝国の高貴さが受けた待遇と同じである。彼らは驚わしに対して不正であつたが、吾人は百合ゆりの花に対して不正である。かくて人は常に酷遇すべき何かを欲するのであるか。ルイ十四世の王冠の金を去り、アンリ四世の紋章を取り除くことは、有用なことであるか。イエナ橋からNの字（訳者注 ナポレオンの頭字）を消したヴォーブラン氏を吾人は嘲笑ちやうしょうする。しかしいつたい彼は何をなさんとしたのであるか。吾人がなしてることと同じことをではないか。マレンゴと同じくブルーヴィーヌも吾人のものである。Nの字と同じく百合の花も吾人のものである。それは吾人のつぐべき遺産である。それを削除することが何のためになるか。現在の祖国と同じく過去の祖国をも否認してはいけない。何ゆえに歴史のすべてを欲してはいけないのか。何ゆえにフランスのすべて

を愛してはいけないのか。」

そういうふうには正理派らは、批評されるのを喜ばずまた弁護されるのを憤っていた勤王主義を、批評しまた弁護したのである。

過激派は勤王論の第一期を画し、融合はその第二期の特質となつた。熱狂に次ぐに巧妙をもつてしたのである。そしてわれわれはこれをもつてそのスケッチの終わりとしよう。

この物語の途中において、本書の著者は、近世史のこの不思議な一時期に出会つた。そして通りすがりに一瞥いちべつを与えて、今

日もはや知られないその社会の奇怪な状態を少しく述べざるを得なかつたのである。しかし著者は急速に、また何ら苦々にがにがしい

ちようししやうてき

嘲笑的な考えもなしに、それをなすのである。思い出は、母たる祖国に関するものであるから親愛と尊敬とを起こさせ、著者

をこの過去の一時期に愛着せしむる。かつまたその一小社会も、偉大さを持つていたことを言っておきたい。人はそれをほほえむことはできよう、しかしそれを軽蔑しまたは憎むことはできない。それは昔のフランスだったのである。

さて、マリユス・ポンメルシーは普通の子供と同じくいくらか勉強をした。伯母のジルノルマン嬢の手から離れた時祖父は彼を、最も純粹な古典に通ずるりっぱな教師に託した。開けかかつていた彼の若い心は、似而非貞女えせていじよから腐儒の手に移った。それから彼は数年間中学校に通い、次に法律学校にはいった。彼は王党で熱狂家で謹厳であつた。彼は祖父の快活と冷笑とを不快に感じてあまり好まなかつた。そしてまた父のことを思うと心が暗くなつた。

それに彼は、上品で寛容で誇らからで宗教的で熱誠で、冷熱あ

わせ有する少年だった。厳酷なるまでに気品があり、粗野なるまでに純潔であつた。

#### 四 無頼漢の死

マリウスが古典の勉強を終えたのとジルノルマン氏が社交界から退いたのとは、ほとんど同時だった。老人はサン・ジェルマン郭外とT夫人の客間とに別れを告げて、マレーのフィュー・デュ・カルヴェール街にある家に住んだ。そして召し使いとしては、門番のほかに、マニョーンの次にきた小間使いのニコレッツトと、前に述べておいた息切れがしてぜいぜいいつてるバスクとがいた。

一八二七年に、マリウスは十七歳に達した。ある晩外から帰つ

て来ると、祖父は手に一通の手紙を持っていた。

「マリユス、」とジルノルマン氏は言った、「お前は明日ヴェルノンへ行くんだ。」

「どうしてですか。」とマリユスは尋ねた。

「父に会いにだ。」

マリユスは震えた。何でも期待してはいたが、ただこれだけは、いつか父に会うようになろうとは、まったく思いもかけなかった。彼にとっては、これほど意外なことは、これほど驚くべきことは、そしてまたあえて言うがこれほど不愉快なことは、何もあり得なかった。それは遠ざかろうとするものに似いて近づけられることだった。一つの苦しみのみではなかった、一つの賦役だった。

マリユスは政治的反感の理由のほかになお、いくらか気がや

わらいだ時にジルノルマン氏が呼んだように猪武者いのししむしやである父は、自分を愛していないと思ひ込んでいた。父が彼を今のように見捨てて他人の手に任しておくのを見ても、そのことは明らかだつた。自分が愛せられていないと感じて、彼もまた父を愛しはしなかつた。これほどわかりきつたことはない、と彼は思つた。彼はまつたく呆然ぼうぜんとして、ジルノルマン氏に訳を尋ねることもしかねた。祖父はまた言つた。

「病氣らしいのだ。お前に会いたいと言つている。」  
そしてちよつと口をつぐんだ後に、彼は言い添えた。

「明日の朝、出かけなさい。フォンテーヌの家に、六時にたつて夕方向こうに着く馬車があるはずだ。それに乗るがいい。至急だということだから。」

それから彼は手紙をもみくちやにして、ポケットに押し込ん

だ。実はマリユスは、その晩にたつて翌朝は父のそばに行けたのである。ブーロア街の馭馬車が、当時夜中にルアン通いをやっていた、ヴェルノンを通ることになっていた。しかしジルノルマン氏もマリユスも、それを聞き合わしてみようとは考えもしなかった。

翌日薄暮の頃、マリユスはヴェルノンに着いた。もう灯火あかりのつき初める頃だった。彼は出会い頭がしらの男に、「ポンメルシーさん、家」を尋ねた。なぜなら、彼は内心復古政府と同意見を持つていて、やはり父を男爵とも大佐とも認めてはいなかった。

彼は父の住居を教えられた。呼び鈴を鳴らすと、ひとりの女が手に小さなランプを持って出てきて、戸を開いてくれた。

「ポンメルシーさんは？」とマリユスは言った。

女はじつとつつ立っていた。

「ここがそうですか。」とマリユスは尋ねた。

女は頭でうなずいた。

「お目にかかれましようか。」

女は頭を振った。

「でも私はその息子です。」とマリユスは言った。「私を待つて  
いられるんです。」

「もう待つてはおられません。」と女は言った。

その時彼は、女が泣いているのに気づいた。

彼女はすぐ入り口の室へやの扉とびらを彼にさし示した。彼ははいつて  
行つた。

その室は、暖炉の上に置かれてる一本の脂蠟燭あぶらろうそくの光に照らさ  
れ、中に三人の男がいた。ひとりは立つており、ひとりはひぎ  
まづいており、ひとりはシャツだけで床ゆかの上に長々と横たわつ

ていた。その横たわつてるのが大佐だった。

他のふたりは医者と牧師とで、牧師は祈祷きとうをしていた。

大佐は三日前から、脳膜炎にかかった。病気の初めから彼はある不吉な予感がして、ジルノルマン氏へ息子をよこしてくれるように手紙を書いた。果たして病気は重くなつた。マリユスがヴェルノンへ着いたその夕方、大佐には錯乱の発作が襲つてきた。彼は女中が引き止めようとするにもかかわらず起き上がつて叫んだ。「息子はこない！ 私の方から会いに行くんだ。」それから彼は室を飛び出して、控え室の上に倒れてしまった。そしてそれきり息が絶えたのである。

医者と牧師とが呼ばれた。医者は間に合わなかつた。牧師も間に合わなかつた。息子のきょうもまたあまり遅かつた。

蠟燭ろうそくの薄暗い光で、そこに横たわつてる青ざめた大佐の頬ほおの

上に、もはや生命のない目から流れ出た太い涙が見えていた。目の光はなくなっていたが、涙はまだかわいていかなかった。その涙こそ、息子の遅延のゆえであつた。

マリユスはこれを最初としてまた最後として会つたその男をじつとながめた、尊むべき雄々しいその顔、もはや物の見えないうその開いた目、その白い髪、そして頑丈がんじょうな手足、その手や足の上には、劍の傷痕きずあとである黒い筋と弾丸の穴である赤い点とが、そこそこに見えていた。また彼は、神が仁慈をきざんだその顔の上に勇武をきざみつけてる大きな傷痕きずあとをながめた。そして彼は、その男が自分の父であり、しかももはや死んでいることを考え、慄然りつぜんとして立ちつくした。

しかし彼が感じた悲哀は、およそ人の死んで横たわつてのを見るおりに感ずる普通の悲哀だつた。

悲痛が、人の心を刺す悲痛が、その室へやの中にあつた。下女は片すみで嘆いており、司祭は祈祷きとうしながら嗚咽おえつの声をもらしており、医者いしやは目の涙をふいていた。死骸しがい自身も泣いていた。

その医者と牧師と女とは、一言も発せず、痛心のうちにマリユスをながめた。彼はその間にあつてひとり門外漢だつた。マリユスはほとんど心を動かしていなかった、そして自分の態度をきまり悪く感じ、また当惑した。彼は手に帽子を持つていたが、悲しみのためそれを手に保つ力もなくなつたと見せかけるため、わざと下に取り落とした。

と同時に彼は一種の後悔の念を感じ、自らその行ないを卑しんだ。しかしそれは彼が悪いのだつたらうか。いかんせん、彼は父を愛していなかつたではないか！

大佐の遺産とては何もなかつた。家具を売り払つても葬式の

費用に足るか足らずであつた。下女は一片の紙を見つけて、それをマリユスに渡した。それには大佐の手で次のことが認めてあつた。

予が子のため、——皇帝はワーテルローの戦場にて予を男爵に叙しぬ。復古政府は血をもつて贖あがないたるこの爵位を予に否認すれども、予が子はこれを取りこれを用うべし。もとより予が子はそれに価するなるべし。

その裏に大佐はまた書き添えていた。

なおこのワーテルローの戦争において、ひとりの軍曹ぐんそう予の生命を救いくれたり。その名をテナルデイエという。最近

彼はパリー近傍の小村シエルもしくはモンフェルメイユに  
おいて、小旅亭を営めるはずなり。もし予が子にしてテナ  
ルデイエに出会わば、及ぶ限りの好意を彼に表すべし。

父に対する敬虔けいけんの念からではなかつたが、常に人の心に強い  
力を及ぼす死に対する漠然たる敬意から、マリユスはその紙片  
を取つて納めた。

大佐のものとは何も残つていなかった。ジルノルマン氏は  
その剣と軍服とを古物商に売り払わせた。近所の人々はその庭  
を荒らして、珍しい花を持つて行つた。その他の花卉かきは、蕁麻いらぐさ  
や藪やぶとなり、あるいは枯れてしまった。

マリユスはヴェルノンに四十八時間しか留まつていなかった。  
葬式の後彼はパリーに帰つて、また法律の勉強にかかり、もは

や父のことはかつて世にいなかった者のように思い出しもなかった。二日にして大佐は地に埋められ、三日にして忘られてしまった。

マリユスは帽子に喪章をつけた。ただそれだけのことだった。

## 五 弥撒ミサに列して革命派となる

マリユスは子供の時から宗教上の習慣を守っていた。ある日曜日に彼は、サン・スウルピス会堂に行き、小さい時いつも伯母おばから連れてこられたそのヴェルジュ礼拝堂で弥撒ミサを聞いた。その日は平素よりぼんやりして何か考え込んでいて、一本の柱の後ろに席を占め、理事マブーフ氏の背に書いてあるユトレヒトのビロードを張った椅子いすの上にうずくまって、それに

自ら気もつかないでいた。弥撒が初まったかと思うと、ひとりの老人が出てきて、マリユスに言った。

「あなた、ここは私の席です。」

マリユスは急いで横にのいた。そして老人はその椅子にすわった。

弥撒がすんでからも、マリユスは考え込みながら四、五歩向こうにじつとしていた。老人はまた彼の所へ近づいて、そして言った。

「先刻はお邪魔してすみませんでした。それでも一度お許し下さい。きつとうるさい奴とおぼし召すでしょうが、その訳を申しますから。」

「いえ、それには及びません。」とマリユスは言った。

「ですが、私を悪く思われるといけませんから。」と老人は言っ

た。「私はあの席が好きなんです。同じ弥撒ミサでもあすこで聞くと、一番よく思われます。なぜかって、それは今申します。あの席から私は、長年の間、きまつて二、三カ月に一度は、ひとりのりっぱな気の毒な父親がやって来るのを見たのです。その人は自分の子供を見るのにそれ以外には機会も方法もありませんでした。家庭の都合上、子供に会うことができなかったのです。でもいつも子供が弥撒に連れてこられる時間を計らつて、その人はやつてきました。子供の方は、父親がそこにいることは夢にも知りませんでした。おそらく父親があることさえも知らなかったでしょう。罪のないものです。父親は、人に見られないうようにあの柱の後ろに隠れていました。そして子供を見ては涙を流していました。その子供を大変愛していたのです。かわいそうな人です。私はそのありさまを見たのです。そしてあの

場所は、私にとってでは聖い場所きよとなりまして、いつもそこで弥撒をきくことになったのです。私は理事として当然すわり得る理事席よりも、あの席の方が好ましいのです。また私は多少その不幸な人の身分を知っています。しゅうと舅と金持ちの伯母おばと、それから親戚もあつたのでしようが、とにかくその人たちは、父親が子供に会うなら子供に相続権を与えないとおどかしていたのです。でその人は、子供が他日金持ちになり仕合わせになるように、自分を犠牲にしていました。政治上の意見から遠ざけられたのです。なるほど政治上の意見も結構ですが、世には意見を意見だけに止めない人がいます。まあ、ワートルローの戦いに加わったからと言って、それが悪魔だとは言えません。そういう理由で親と子供とをへだてるわけはありません。その人はボナパルトの下に大佐でした。もう死んだと思います。司祭

をしてる私の兄と同じくヴェルノンに住んでいました。何でも、ポンマリーとかモンペルシーとか……言っていました。確か剣で切られた大きな傷痕きずあとがありました。」

「ポンメルシーではありませんか。」とマリユスは顔の色を変えて言った。

「さよう、さよう、ポンメルシーです。あなたもその人を知っていましたか。」

「ええ、」とマリユスは言った、「それは私の父です。」  
老理事は両手を組んで、叫んだ。

「え！ あなたがその子供！ なるほど、そうです、今ではもう大きくなっていられるはずですよ。まあどうでしょう、あなたを深く愛していたお父さんがいられたのですよ。」

マリユスは老人に腕を貸して、その宅まで送っていった。そ

して翌日、彼はジルノルマン氏に言った。

「友人と狩猟の約束をしましたから、三日間ばかり出かけた  
いんですが。」

「四日でもよい、」と祖父は答えた、「遊んでおいで。」

そして彼は目をまたたきながら低い声で娘に言った。

「何か女のことだな。」

## 六 会堂理事に会いたる結果

マリウスはどこへ行つたか。それは少し後にわかるだろう。

マリウスは三日間の不在の後、パリーに帰つてきて、すぐに法律学校の図書館に行き、機関紙のとじ込みを借り出した。

彼はその機関紙を読み、共和および帝政時代のあらゆる歴史、

「セント・ヘレナ追想記」、あらゆる記録、新聞、報告書、宣言、などを片端からむさぼり読んだ。大陸軍の報告書の中に初めて父の名を見いだした時は、一週間も興奮した。彼はまた、ジョルジュ・ポンメルシーが仕えていた將軍らを、なかんずくH伯爵を訪れた。彼が再び尋ねて行つたマブーフ理事は、大佐の隠退やその花やその孤独など、ヴェルノンの生活のありさまを聞かしてくれた。ついにマリユスは崇高で穏やかで世に珍しいその男のことを、自分の父であつた獅子羊ししひつじとも言うべきその人のことを、十分に知り得るに至つた。

かくて、すべての時間と考えとをささげたその研究にふけてる彼は、ほとんどジルノルマン一家の人々と顔を合わせるこゝとがなくなつた。食事の時には姿を見せたが、あとでさがすともういなかつた。伯母おおばは不平をもらした。ジルノルマン氏は微

笑して言った、「なあに、ちやうど娘のあとを追う年頃だ。」時とする<sup>と</sup>と彼はつけ加えた、「いやはや、ちよつとした艶事<sup>つやごと</sup>と思つていたが、どうも本気の沙汰<sup>さた</sup>らしいぞ。」

いかにもそれは本気の沙汰<sup>さた</sup>だった。

マリユスは父を崇拜し初めていた。

同時に、彼の思想のうちには異常な変化が起こりつつあった。その変化の面は、数多くてしかも次から次へと移っていった。本書はわれわれの時代の多くの精神の歴史を語らんとするものであるから、この変化の面を一步一步たどりそのすべてを指摘することは、無益の業<sup>わざ</sup>ではないと思う。

今マリユスが目を通した歴史は、彼を驚駭<sup>きょうがい</sup>せしめた。

第一の結果は眩惑<sup>げんわく</sup>であつた。

その時まで彼にとつては、共和、帝国、などという言葉はただ

恐ろしいものにすぎなかつた。共和とは薄暮のうちの一段頭台であり、帝国とは暗夜のうちの「一サーベルであつた。しかるに今彼はその中をのぞき込んで、混沌こんとんたる暗黒をのみ予期していたところに、恐れと喜びとの交じつた一種の異様な驚きをもつて、星辰せいしんの輝くのを見たのである。ミラボー、ヴェルニオー、サン・ジュスト、ロベスピエール、カミーユ・デムーラン、ダントン、それから、上り行く太陽のナポレオン。彼は自分がどこにあるかを知らなかつた。彼はそれらの光に眼くらんで後退あとじきつた。そのうちしだいに驚きの情が去り、それらの光輝になれ、眩惑げんわくなしにそれらの事業をながめ、恐怖の情なしにそれらの人々を見調べた。革命と帝国とは、彼の夢見るような瞳ひとみの前に遠景をなして光り輝いた。そして彼は、その事変と人物との二つの群れが、二つの偉業のうちにつづまるのを見た。民衆に還付され

た民権の君臨のうちにある共和国と、全欧州に課せられたフランス思想の君臨のうちにある帝国。そして革命のうちから民衆の偉大なる姿が現わるるのを見、帝国のうちからフランスの偉大なる姿が現わるるのを見た。実にすばらしいことだ、と彼は自ら内心に叫んだ。

あまりに総合的な彼の第一の評価が眩惑のために見落としたことを、ここに指摘するの必要はあるまいと思う。ここに語られるものは、前進する一精神の状態である。すべて進歩というものは、皆一躍してなされるものではない。そしてこのことを、前後すべてにわたって一度に言っておきながら、物語の先を続けよう。

マリユスは、自分の父を了解していなかったと同じく今まで自分の国を了解していなかったことに、その時初めて気づいた。

彼は両者いずれをも知らなかつたのである。そして好んで自分の眼に一種の闇やみをきせていたのである。しかるに今や彼は眼を開いてながめた。そして一方では賛嘆し、一方では愛慕した。

彼は愛惜と悔恨との情に満たされ、心にあることを語り得るのは今や一つの墳墓に向かつてのみであることを思つて、絶望の念に駆られた。ああ父がなお生きていたならば、父がなおあつたならば、神がそのあわれみといつくしみとをもつてなお父を生かしておいてくれたならば、彼はいかにそのそばに走り行き、いかにしかと身を投げかけ、いかに父に叫んだことであろう！

「お父さん！ 来ましたよ。私です。私はあなたと同じ心を持っています。私はあなたの児です！」いかに彼は父の白い頭を抱き、その髪を涙でぬらし、その傷をながめ、その手を握りしめ、その服をなつかしみ、その足に脣くちびるをつけたことであろう。ああ

なぜに父は、長寿を保たず、天の正しき裁きをも受けず、息子の愛をも受けないうで、かくも早くいつてしまったのか。マリユスは心の中で絶えずすすりなきし、常にそれを「ああ！」と言葉にもらした。同時に彼はまた、いつそう本当にまじめになり、いつそう本当に沈重になり、自分の信念と思想とにいつそう固まった。各瞬間に、真なるものの光が彼の理性を補っていった。彼のうちには一種の内的発育が起こってきた。自分の父と自分の祖国と、彼にとつては新しいその二つのものがもたらしてくる、一種の自然の生長を彼は感じた。

鍵かぎを手にしたがようにすべては開けてきた。彼は今まできらつていたものを了解し、今まで憎んでいたものを見通した。それ以来彼は、嫌忌けんきすべく教えられた偉業について、のろうべく教えられた偉人らについて、天意的にしてまた人間的なる犯すべ

からざる意義を明らかに見た。昨日のものでありながら既に古い昔のもののように思われる以前の意見を考へる時には、自ら憤り自ら微笑を禁じ得なかつた。

父に対する意見を改めるとともに、彼は自然にナポレオンに對する意見をも改めるに至つた。

けれども、第二の方は多少の努力を要したことを、言つておかなければならない。

子供の時から彼は、ボナパルトに関する一八一四年の当事者らの意見に浸されていた。およそ復古政府のあらゆる偏見や、利己的な考えや、本能などは、ナポレオンを變形しがちだつた。復古政府はロベスピエールよりもなおいつそうナポレオンの方をきらっていた。そしてかなり巧みに国民の疲労や母親らの恨みを利用した。ボナパルトはついにほとんど伝説的な怪物と化

し去つた。前に述べてきたとおり子供の想像に似た民衆の想像裏に、彼を浮かび出させるについて、一八一四年の当事者らはあらゆる恐るべき仮面を次々に持ち出し、壮大となるほど恐ろしいものから、奇怪となるほど恐ろしいものに至るまで、チベリウスからクロクミテーヌに至るまで（訳者注 前者は残忍なるローマ皇帝後者は残酷なる怪物）すべて持ち出した。かくてボナパルトのことを話す時、心底に憎悪の念がありさえすれば、すすり泣こうと笑い出そうと勝手だった。マリウスもいわゆる「あの男」について、頭の中にそれ以外の考えをかつて持たなかつた。またそういう考えは、彼の性質のうちにある執拗しつようさにからみついていて、彼のうちにはナポレオンを憎む頑固がんこな小僧がいた。

歴史を読みながら、ことに種々の記録や材料のうちに歴史を

調べながら、マリユスの目からナポレオンを隠していた被<sup>お</sup>いは  
しだいに取れてきた。彼は何かある広大なるものを瞥<sup>べっけん</sup>見した、  
そして他の事におけると同じようにナポレオンについても、今  
まで思い違いをしていたのではないかと疑った。日がたつにつ  
れてますますはつきり見えてきた。そして初めはほとんど不本  
意ながら、後にはあたかも不可抗な幻にひかさされたがように夢  
中になって、徐々に一步一步と、最初は暗い階段を、次にはお  
ぼろに照らされた階段を、最後には光に満ちた燦<sup>さんぜん</sup>然たる心酔の  
階段を、彼はよじのぼり初めた。

ある夜、彼はひとりで屋根裏にある自分の小さな室<sup>へや</sup>にいた。  
蝋<sup>ろうそく</sup>燭がともっていた。彼はテーブルに肱<sup>ひじ</sup>をついて開いた窓のそ  
ばで本を読んでいた。各種の夢想が空間から浮かんできて、彼  
の考えに混入した。何という大なる光景で夜はあるか！ どこ

から来るとも知れぬほのかな響きが聞こえる。地球より二百倍も大きい火星が炬火たいまつのようにまっかに輝いているのが見える。大空は黒く、星辰はひらめいている。驚くべき光景である。

マリユスは大陸軍の報告書を、戦場において書かれたホメロスの文句をその時読んでいた。間においては父の名前が出てき、絶えず皇帝の名前が出てきた。大帝国の全局が現われてきた。彼は自分のうちに、潮のようなものがふくれ上がりわき上がってくるのを感じた。時とすると、息吹いぶきのように父が自分のそばを通って、耳に何かささやくかと思われた。彼はしだいに異常な気持ちになつていった。太鼓の音、大砲のとどろき、ラッパの響き、歩兵隊の歩調を取った足音、騎兵の茫漠ぼうぼくたる遠い疾駆の音、などが聞こえてくるかと思われた。時々彼は目を天の方へ上げて、きわまりなき深みのうちに巨大な星座の輝くのを

ながめ、それからまた書物の上に目を落として、そこにまた他の巨大なるものが雑然と動くのを見た。彼の胸はしめつけられた。彼は感きわまり、身を震わし、息をあえいだ。とにわかにな、心のうちに何がありまた何に動かされてるのかを自ら知らないで、彼は立ち上がり、両腕を窓の外に差し伸ばし、陰影を、静寂を、暗黒なる無窮を、永劫えいごうの広漠こうぼくを、じつとながめ、そして「皇帝万歳！」を叫んだ。

その瞬間以来、いつさいが決定した。コルシカの食人鬼——  
篡奪者さんだつしや——暴君——自分の姉妹に愛着した怪物——ルマタ（訳者注 ナポレオンがひいきにした俳優）の教えを受けた道化役者——聖地ジャファの攪乱者かくらんしや——猛虎——ブオナパルテ——すべてそれらは消散してしまい、そのあとには彼の頭の中に漠然たるしかも光り輝く光明が現われて、そこには届き難い高みに、

シーザーの大理石像の青白い幻が光っていた。皇帝は彼の父にとつては、人々の賛嘆し献身する親愛なる将帥にすぎなかつた。しかしマリウスにとつては、それ以上の何かであつた。世界統一の業をローマ人の一団より継承するフランス人の一団を建設すべく、使命を帯びたる者であつた。破壊の驚くべき建造者であり、シャルルマーニュ、ルイ十一世、アンリ四世、リシュリユー、ルイ十四世、公安委員会、などの後継者であつた。またもとより、汚点や欠点や罪惡をも有したであらう。換言すれば人間であつたであらう。しかしその欠点のうちにもおごそかであり、その汚点のうちにも光り輝き、その罪惡のうちにも強力であつた。あらゆる国民をしてフランスを「大国民」なりと言わしめるため、天より定められた人であつた。否なおそれ以上であつた。手に保つ劍によつてヨーロッパを征服し、放射する

光によつて世界を征服したる、フランス自身の権化であつた。マリウスは常に辺境に突つ立つて未来をまもる赫々たる映像を、ボナパルトのうちに認めた。専制君主ではあるがしかし執政官であり、共和より生まれて革命の結末をつける専制君主であつた。イエスが神人であるごとく、彼にとつてはナポレオンは民衆人であつた。

新たに一宗教にはいつた者のように、明らかにその帰依は彼を酔わしてしまつた。彼はそこに飛び込んで執着し、あまりに深入りしすぎた。それは彼の性質上、やむを得なかつた。一度坂道にさしかかると、途中でふみ止まることがほとんどできなかった。そして剣に対する熱狂は彼をとらえ、その思想に対する心酔と頭の中でからみ合つた。彼は自ら気づかずして、天才とともにそして天才と一体になつて、力を賛美した。言い換え

れば、彼は自ら知らずして、偶像崇拜の二つの室へやの中に身を置いた、一方は神性なるもの、一方は獸性なるもの。多くの点について、彼はなお誤った方向をたどっていた。彼はすべてを承認した。人は真理の方へ進みながら途中誤謬ごびゆうに出会うことがある。彼は一種の熱烈な誠意を持っていて、すべてを一塊ひとかたまりにしてのみ込んだ。新たにはいつた道理において、あたかもナポレオンの光栄を測るがように旧制の誤謬を判別しながら、酌量すべき事情をすべて閑却して顧みなかった。

それにしても、驚くべき一步はふみ出されたのである。昔王政の墜落を見たところに、今はフランスの高揚を見た。彼の方向は変わっていた。昔、西であったものは、今は東になっていた。彼は向きを変えていた。

すべてそれらの革新は、家の人々が気づかぬ間に彼のうちに

成し遂げられた。

そのひそかな仕事のうちに、ブルボン派であり過激王党派だった古い外皮をまったく捨ててしまった時、貴族派、一性論派、王党派、の衣を脱した時、革命派となり、深き民主派となり、ほとんど共和派となった時、その時彼はオルフェーヴル川岸のある印刷屋に行つて、男爵マリウス・ポンメルシーという名前の名刺を百枚注文した。

それは彼のうちに起こつた変化の、父を中心としてすべてが引き寄せられるに至つた変化の、きわめて当然な結果の一つにすぎなかつた。ただ彼はひとりも知己を持たず、どの門番の家へもその名刺をふりまくことができなかつたので、それをポケットの中に蔵しまい込んだ。

またも一つの自然な結果として、彼は父に近づくに従つて、

父の記憶に近づくに従つて、大佐が二十五年間奮闘してきた事物に近づくに従つて、祖父から遠ざかるに至つた。前に言つたとおり、ジルノルマン氏のむら気は既に長い前から彼の好むところでなかつた。既に彼らの間には、軽佻けいちようなる老人に対する沈重なる青年のあらゆる不調和が存していた。ジェロントの快活はウエルテルの憂鬱ゆううつを憤らせいら立たせるものである。同じ政治的意見と同じ思想とがふたりに共通である間は、それを橋としてマリユスはジルノルマン氏と顔を合わしていた。しかし一度その橋が落つるや、ふたりの間には深淵しんえんが生じた。それからまた特に、愚かな動機によつて彼を無慈悲にも大佐から引き離し、かくて父から子供を奪い子供から父を奪つたのは、実にジルノルマン氏であつたことを思うと、マリユスは言うべからざる反撥はんぱつの情を覚えた。

父に対する愛慕のために、マリウスはほとんど祖父を嫌悪するに至った。

けれどもそれらのことは、前に言ったとおり、外部には少しも現われなかった。ただ彼はますます冷淡になって、食事も簡単にすまし、家にいることも少なくなった。伯母おぼがそれについて小言こごとを言った時、彼はごくおとなしくしていて、その口実に、勉強だの学校の講義だの試験だの講演会だの種々なことを持ち出した。祖父の方はその一徹な見立てを少しも変えなかった。「女のことだ。よくわかつてる。」

マリウスは時々家をあけた。

「あんなにしてどこへ行くのでしょうか。」と伯母は尋ねた。

その不在はいつもごくわずかな時日だったが、そのうちに彼はある時、父が残したいいつけを守らんために、モンフェルメ

イユに行つて、昔のワーテルローの軍曹ぐんそうである旅亭主テナルデイエをさがした。しかしテナルデイエは破産して、宿屋は閉ざされ、どうなつたか知つてる者はいなかつた。その探索のために、マリユスは四日間家をあけた。

「確かにこれは調子が狂つてきたんだな。」と祖父は言つた。彼がシャツの下に何かを黒いリボンで首から胸にかけてるのを、ふたりは見たようにも思つた。

## 七 ある艶種つやだね

ひとりの槍騎兵そうきへいのことを前にちよつと述べておいた。

それはジルノルマン氏の父方ちちかたの系統で、甥おいの子に当たり、一族の外にあつて、いずれの家庭からも遠く離れ、兵營の生活を

送っていた。そのテオデュール・ジルノルマン中尉は、いわゆるきれいな将校たるすべての条件をそなえていた。「女のような身体つき」をし、揚々たる態度でサーベルを引きずり、髭を上ひげに巻き上げていた。時にパリーに来ることがあったが、それもごくまれで、マリユスはかつて会ったことがないくらいだった。ふたりの従いとこ兄弟は互いに名前だけしか知ってはいなかった。前に言ったと思うが、テオデュールはジルノルマン伯母おばの気に入りだった。そしてそれも、常に顔を合わしていないからに過ぎなかった。常に会っていないといろいろよく思われるものである。

ある日の朝姉のジルノルマン嬢は、その平静さのうちにもさすがに興奮して、自分の室へやに戻ってきた。マリユスがまた祖父に向かつて、ちよつと旅をしたいと申し出たのである。しかも

すぐその晩にたちたいと言った。「行つておいで、」と祖父は答えた。そしてジルノルマン氏は額の上まで両の眉まゆを上げながら、ひとりして言った、「また家をあけるんだな。」それでジルノルマン嬢は非常に心痛して自分の室に上つてゆきながら階段の所で、「あまりひどい！」と憤慨の言葉をもらし、「だがいつたいどこへ行くんだらう？」と疑問の言葉をもらした。何か道ならぬ艶事つやごと、ある影の中の女、ある媾あいびき、ある秘密、そういうことに違いないと彼女は思い、少しばかり探つてみるのも当然だと考えた。秘密を探つて味わうことは、悪事を最初にかぎ出すのと同じ趣味で、聖きよい心の者もそれに不快を覚えないものである。熱心な信仰の人の心のうちにも、汚れたる行ないに対する好奇心があるものである。

それで彼女は、事情を知りたいという漠然ぼくぜんとした欲望にとら

われた。

平素の落ち着きにもかかわらず、多少不安なその好奇心をまぎらすために、彼女は自分の技芸のうちに逃げ込んで刺繍ししゅうを初めた。それは車の輪がたくさんにある帝政および復古時代の刺繍の一つで、綿布の上に綿糸でなすのだった。退屈な仕事に頑固がんこな女工という形である。そうして彼女は幾時間もの間椅子いすにすわりきりでいた。すると扉とびらが開いた。ジルノルマン嬢は顔を上げた。中尉のテオデュールが前に立っていて、軍隊式の礼をしていた。彼女は喜びの声を上げた。お婆さんであり、似而非貞女えせていじよであり、信者であり、伯母おばであつても、自分の室へやに一人の槍騎兵そうきへいがはいって来るのを見ては、うれしからざるを得ないわけである。

「まあ、テオデュール！」と彼女は叫んだ。

「ちよつと通りかかりましたので。」

「まあ初めに……。」

「ええ今！」とテオデュールは言った。

そして彼は伯母を抱擁した。ジルノルマン伯母は机の所へ行って、その抽出<sup>ひきだ</sup>しをあげた。

「少なくとも一週間くらいは泊まってゆくんでしょね。」

「いえ、今晚帰ります。」

「そんなことがお前！」

「でもそうなんです。」

「でもテオデュールや、泊まっていっておくれ、お願いだから。」

「私の心ははいと言いますが、命令がいえと言います。ごく簡単な事情です。私どもの兵營が変わって、今までムロンだったのが、ガイヨンになったんです。で元の營所からこんどの營所

へ行くには、パリーを通らなければなりません。それで私は、ちよつと伯母おばさんに会つて来ると言つてやつてきました。」

「そしてこれはその骨折りのためにね。」

彼女はルイ金貨を十個彼の手に握らした。

「いえお目にかかる私の喜びのためにと言つて下さい、伯母さん。」

テオデュールは彼女をまた抱擁した。その時、軍服の金モールのために首筋がちよつとすりむけたのを、彼女はかえつてうれしく感じた。

「でお前は連隊について馬で行くんですか。」

「いいえ伯母さん。あなたにお目にかかりたかつたんです。それで特別の許可を受けてきました。従卒が馬をひいていつてくれますから、私は馭馬車で行きます。それについて、少しお尋

ねしたいことがありますか。」

「何ですか。」

「いとこ従弟のマリウス・ポンメルシーも旅行するんですか。」

「どうしてそれを知っています？」と伯母はにわか**に**強い好奇心にそそられて言った。

「こちらへ着いてから、前部の席を約束しておこうと思つて馬車屋へ行きました。」

「すると？」

「するとひとりの客が上部の席を約束していました。私はその名札を見ました。」

「何という名でした。」

「マリウス・ポンメルシーというんです。」

「まあ何ということでしょう。」と伯母おばは叫んだ。「お前のいとこ従弟

はお前のようにちゃんとした子ではないんですよ。駅馬車の中で夜を明かそうなんて。」

「私と同じようにですね。」

「いえお前の方は義務ですからね。あれのは無茶なんです。」

「おやおや！」とテオデュールは言った。

そこで姉のジルノルマン嬢に一事件が起こった。ある考案が浮かんだのである。もし男だったら額をたたくところだった。彼女はテオデュールに尋ねはじめた。

「お前の従弟はお前を知ってるでしょうか。」

「いいえ。私の方は従弟を見たことはありません、けれど向こうでは一度も私に目を向けたことはありません。」

「でお前さんたちはちょうどいつしよに旅するわけですね。」

「ええ、彼は上部の席で、私は前部の席で。」

「その駅馬車はどこへ行くんです。」

「アンドリーへです。」

「ではマリユスはそこへ行くんでしようね。」

「ええ、私のように途中で降りさえしなければ。私はガイヨンの方へ乗り換えるためにヴェルノンで降ります。私はマリユスがどの方へ行くつもりかは少しも知りません。」

「マリユスって、まあ何て賤しい名いやでしょうね。どうしてマリユスなんていう名をつけたんでしょう。ただどお前の方はまあ、テオデュールというんですからね。」

「でもアルフレッドという方が私は好きです。」と将校は言った。

「まあ聞いておくれよ、テオデュール。」

「聞いていますよ、伯母おぼさん。」

「気をつけてですよ。」

「気をつけていますよ。」

「いいですかね。」

「はい。」

「ところで、マリユスはよく家をあけるんですよ。」

「へえー。」

「旅をするんですよ。」

「ははあ。」

「泊まってくるんですよ。」

「ほほう。」

「どうしたわけか知りたいんですがね。」

テオデュールは青銅で固めた人のように落ち着き払って答えた。

「何か艶種つやだねでしょう。」

そしてまちがいないというような薄ら笑いをして、彼は言い添えた。

「女ですよ。」

「そうに違いない。」と伯母おばは叫んだ。彼女はジルノルマン氏の言葉を聞いたような気がし、大伯父おおおじと甥おいの子とからほとんど同じように力をこめて言われた女という言葉によつて、自分の思っていたところも確かなものとなつたように感じた。彼女は言つた。

「私たちの頼みをきいておくれよ。マリユスのあとを少しつけておくれよ。向こうではお前を知らないから、わけはないでしょう。女がいるとすれば、それも見届けるようにね。そして始終のことを知らしておくれ。お祖父じいさんも喜ばれるでしょうから。」

テオデュールはそんな探索の役目にあまり趣味を持たなかつ

た。しかし彼はルイ金貨十個にひどく心を打たれていたし、も一度もらえるかも知れないと思つた。でその仕事を引き受けて言つた、「承知しました、伯母さん。」そして彼は一人でつけ加えた、「監督になつたわけだな。」

ジルノルマン嬢は彼を抱擁した。

「テオデュールや、お前はそんな悪戯いたずらはしないでしようね。お前はただ規律に従い、命令を守り、義務を果たす謹直な人で、家ですてて女に会いに行くなどということはないでしょうね。」

槍騎兵そうぎへいは凶賊カルトウーシュが誠直だと言つてほめられたよ  
うな満足の渋面をした。

そういう対話が行なわれた日の夕方、マリユスは監視されてることに気もつかずに、馱馬車に乗つた。監視人の方では、第一にまず眠つてしまつた。それは他意ない眠りだつた。アルゴ

ス（訳者注 百の目をそなえ五十の目ずつ交代に眠るといふ怪物）は終夜<sup>いびき</sup>をかいて眠つてしまったのである。

夜明けに御者は叫んだ。「ヴェルノン、ヴェルノン宿<sup>しゆく</sup>、ヴェルノンで降りる方！」そして中尉のテオデュールは目をさました。「そうだ、」と彼はまだ半ば夢の中にあつてつぶやいた、「ここで降りるんだつた。」

それから、目がさめるにつれて記憶がしだいに明らかになつてゆき、伯母<sup>おば</sup>のこと、ルイ金貨十個のこと、マリユスの挙動を知らせると約束したことなどを、彼は思い出した。そしてひとりで笑い出した。

「もう馬車にいはすまい。」と彼はふだんの軍服の上衣のボタンをかけながら考えた。「ポアシーに止まつたかも知れない。トリエルに止まつたかも知れない。それとも、ムーランで降りな

かつたらマントかな。あるいはロルボアーズで降りたかな。またはパツシーまでできたかな。そして左へ曲がつてエヴルーの方へ行つたか、右へ曲がつてラローシュ・ギーヨンの方へ行つたかな。追っかけようたつてだめだし、お人よしの伯母へは、さて何と書いてやつたものだろう。」

その時上部の室から降りる黒いズボンが、前部の室のガラス戸から見えた。

「マリウスかしら？」と中尉は言った。

それはマリウスだった。

馬車の下には、馬や御者などの間に交じつて、小さな田舎娘いなかむすめが旅客に花を売つていた。「おみやげの花はいかが、」と彼女は呼んでいた。

マリウスはそれに近寄つて、平籠ひらかごの中の一番美しい花を買つ

た。

「なるほど、」と前の部屋へやから飛び降りながらテオデュールは言った、「これはおもしろくなってきた。どんな女にあの花を持つてつてやるのかな。あんなきれいな花を持つてゆくくらいだから、よほどの別嬪べっぴんに違いない。ひとつ見てやろう。」

そしてもう今度は、言いつかつたためではなく、自分の好奇心からして、あたかも自ら好きで狩りをする犬のように、彼はマリユスのあとをつけはじめた。

マリウスはテオデュールに何らの注意も払わなかった。りっぱな女たちが馱馬車から降りてきたが、彼はその方にも目を注がなかった。彼は周囲のこと何一つ目にはいらないようだった。

「よほど夢中になつてゐるな。」とテオデュールは考えた。

マリウスは教会堂の方へ向かつて行つた。

「すてきだ。」とテオデユールは自ら言った。「会堂だな。弥撒ミサでちよつと味をつけた媾あいびき曳ひきはいいからな。神様の頭越しに横目とはしやれてるからな。」

教会堂まで行くと、マリユスはその中にはいらないうで、裏手の方へ回つていった。そして奥殿の控壁かどの角に見えなくなつた。「外で会うんだな。」とテオデユールは言った。「ひとつ女を見てやるかな。」

そして彼は靴くつの爪つまさき先で立つて、マリユスが曲がつた角の方へ進んで行つた。

そこまで行くと、彼は呆然ぼうぜんと立ち止まつた。

マリユスは額を両手の中に伏せて、一つの墓くさむらの叢むらの中にひざまずいていた。花はそこに手たむ向けられていた。墓の一端に、その頭部のしるしたる小高い所に、黒い木の十字架が立っていて、

白い文字がしるしてあつた、「陸軍大佐男爵ポンメルシー。」マリユスのむせび泣く声が聞こえた。

女とは一基の墓だつたのである。

## 八 花崗岩と大理石

マリユスが初めてパリーを去つて旅したのは、そこへであつた。ジルノルマン氏が「家をあげるんだな。」と言つたたびごと  
に彼が立ち戻つたのは、そこへであつた。

中尉テオデュールは、意外にも墳墓に出くわしてまつたく<sup>あぜん</sup>唾然とした。墳墓に対する敬意と大佐に対する敬意との交じつた、自ら解き得ない一種の不思議な不安な感情を覚えた。そしてマリユスをひとり墓地に残して退いた。その退却には規律があつ

た。死者は大きな肩章をつけて彼に現われ、彼はそれに対して拳手の札をしようとまでした。伯母おばに何と書いてやっていいかわからないので、結局何にも書いてやらないことにした。そしてそのままでは、マリユスの恋愛事件についてテオデュールがなした発見からは、おそらく何らの結果も起こらなかったであろうが、しかし偶然のうちにしばしばある不思議な天の配剤によつて、ヴェルノンのそのできごとの後間もなく、パリーで一つの事件がもち上がった。

マリユスは三日目の朝早くヴェルノンから帰ってきて、祖父の家に着いた。そして馱馬車の中で二晩過ごしたためにすっかり疲れていて、水泳場に一時間ばかり行って不眠を補いたくなくなったので、急いで自分の室へやに上がって行き、旅行用のフロックと首にかけていた黒い紐ひもとを脱ぐが早いのか、すぐに水泳場へ出か

けて行つた。

ジルノルマン氏は健康な老人の例にもれず朝早くから起きていて、マリユスが帰つてきた音をきいた。それで老年の足の及ぶ限り大急ぎで、マリユスの室へやがある上の階段を上がつていった。そしてマリユスを抱擁し、抱擁のうちに種々尋ねてみて、どこから帰つてきたかを少し知ろうと思つた。

しかし八十以上の老人が上がつて来るのよりも、青年が下りてゆく方が早かつた。ジルノルマン老人が屋根部屋やねべやにはいつてきた時には、マリユスはもうそこにいなかった。

寢床はそのままになつており、その上には何の気もなしに、フロックと黒い紐ひもとが散らかしてあつた。

「この方がよい。」とジルノルマン氏は言った。

そして間もなく彼は客間にはいつてきた。そこには既に姉の

ジルノルマン嬢が席についていて、例の車の輪を刺繡ししゅうしていた。ジルノルマン氏は得意げにはいつてきたのである。

彼は片手にフロックを持ち、片手に首のリボンを持っていた。そして叫んだ。

「うまくいった。これで秘密が探れる。底の底までわかる。悪戯者いたずらものの放蕩ほうとうに手をつけることができる。種本を手に入れたようなものだ。写真もある。」

実際、メダルに似寄った黒い粒革つぶかわの小箱がリボンに下がって  
いた。

老人はその小箱を手を取って、しばらく開きもしないでじつとながめた。あたかも食に飢えた乞食こじきが自分のでないりっぱなごちそうが鼻の先にぶら下がってるのをながめるような、欲望と喜悦と憤怒との交じってる様子だった。

「これは確かに写真だ。こんなことを私はよく知っている。胸にやさしくつけてるものだ。実にばかげた者どもだ。見るもぞつとするような恐ろしい下等な女に違いない。近ごろの若い者はまったく趣味が墮落してるからね。」

「まあ見ようではありませんか、お父さん。」と老嬢は言った。ばねを押すと小箱は開いた。中にはただ、ていねいに畳んだ一片の紙があるのみだった。

「同じことは一つことだ。」と言ってジルノルマン氏は笑い出した。「これもわかつてる。艶文いろぶみというやつだ。」

「さあ読んでみましよう。」と伯母おぼは言った。

そして彼女は眼鏡めがねをかけた。ふたりはその紙を開いて、次のようなことを読んだ。

予が子のため、——皇帝はワーテルローの戦場にて予を男爵に叙しぬ。復古政府は血をもつて購あがないたるこの爵位を予に否認すれども、予が子はこれを取りこれを用うべし。もとより予が子はそれに価するなるべし。

父と娘とが受けた感情は、とうてい言葉には尽し難い。彼らは死人の頭から立ち上る息吹いそぎで凍らされでもしたように感じた。互いに一言もかわさなかつた。ただジルノルマン氏は自分自身に話しかけるように低い声で言った。

「あのサーベル奴めの字だ。」

伯母はその紙を調べ、種々ひっくり返してみ、それから小箱の中にしまった。

同時に、青い紙にくるんだ小さな長方形の包みが、フロック

のポケットから落ちた。ジルノルマン嬢はそれを拾い上げて、青い紙を開いてみた。それはマリユスの百枚の名刺だった。彼女はその一枚をジルノルマン氏に差し出した。彼は読んだ、「男爵、マリユス・ポンメルシー。」

老人は呼び鈴を鳴らした。ニコレットがやってきた。ジルノルマン氏はリボンと小箱とフロックとを取り、それらを室へやのまんなかに、床ゆかにたたきつけた。そして言った。

「そのぼろ屑くずを持つてゆけ。」

一時間ばかりの間はまったく深い沈黙のうちに過すごされた。老人と老嬢とは互いに背中合わせにすわり込み、各自に、そしてたぶんは同じことを、思いめぐらしていた。終わりにジルノルマン伯母おぼは言った。

「よいぎまだ！」

やがてマリウスが現われた。戻つてきたのである。そして室の闕しきいをまたがないうちに、祖父が自分の名刺を一枚手に持つてゐるのを見た。祖父は彼の姿を見るや、何かしらてきびしい市民的な冷笑的な高圧さで叫んだ。

「これ、これ、これ、これ、お前は今は男爵だな。お祝いを言つてあげよう。いったい何という訳だ？」

マリウスは少し顔を赤らめて答えた。

「私は父の子だという訳です。」

ジルノルマン氏は冷笑をやめて、きびしく言った。

「お前の父というのは、私だ。」

「私の父は、」とマリウスは目を伏せ厳格な様子をして言った、  
「謙遜なそして勇壮な人でした。共和とフランスとにりっぱに仕

えました。人間がかつて作った最も偉大な歴史の中の偉人でした。二十五年余りの間露営のうちに暮らしました、昼は砲弾と銃火の下に、夜は雪の中に、泥にまみれ、雨に打たれて暮らしました。軍旗を二つ奪いました。二十余の傷を受けました。そして忘れられ捨てられて死にました。しかもその誤ちと言つてはただ、自分の国と私と、ふたりの忘恩者をあまりに愛しすぎたということばかりでした。」

それはジルノルマン氏の聞くにたえないことだった。共和という言葉で彼は立ち上がった、否なおよく言えばつつ立つた。そしてマリウスの発する一語一語に、鉄工場の鞆ふいごの息を炭火の上に吹きかけるようなさまが、その王党の老人の顔に現われた。彼の顔色は薄墨色から赤となり、赤から真紅となり、真紅から炎の色と変じた。

「マリユス！」と彼は叫んだ、「言語道断な奴だ！ お前の親父おやじがどんな男だったか、そんなことは私は知らん。知ろうとも思わん。いつさい知らん、顔も知らん。ただ私が知ってるのは、奴らが皆悪党だったことだけだ。人非人、人殺し、赤帽子、盗人、だけだったことだ。皆そうだ。皆そうだ。私はだれも知らん。皆いつしよにして言うんだ。わかったか、マリユス！ お前が男爵だって！ ロベスピエールに仕えた奴らは皆山賊だ。ブ：オ：ナ：パルテに仕えた奴らは皆無頼漢だ。正当な国王に背そむき、背そむき、背いた奴らは皆謀反人むほんにんだ。ワートルローでプロシア人とイギリス人との前から逃げ出した奴らは皆卑怯者ひきようものだ。私わしが知ってるのはそれだけのことだ。お前の親父さんもその中にいたかどうか、私は知らん。はなはだ気の毒の至りだ。」

こんどはマリユスが炭火で、ジルノルマン氏が鞆かぶととなった。

マリユスは手足を震わし、どうなるかを知らず、頭は燃えるようだった。彼は聖餐せいさんが風に投げ散らされるのを見る牧師のようであり、偶像の上に通行人が唾つばしてゆくのを見る道士のようだった。そういうことが自分の前で臆面おくめんもなく言われるのは許すべからざることのように思われた。しかしどうしたらいいか。父は自分の面前で足下に踏みつけられ踏みにじられた。しかもだれによつてであるか。祖父によつてではないか。一方を凌辱りょうじよくすることなくして一方を復讐ふくしゅうすることがどうしてできよう。祖父を辱はずかしむることはできない、また、父の讐あだを報じないで捨ておくことも同じくできない。一方には神聖なる墳墓があり、他方には白髪がある。しばらく彼は酔ったようによろめきながら、頭の中には旋風が渦巻いた。やがて彼は目を上げ、祖父をじつと見つめ、そして雷のような声で叫んだ。

「ブールボン家なんかぶつ倒れるがいい、ルイ十八世の大豚めも！」

ルイ十八世はもう四年前に死んでいた。しかしそんなことは彼にはどうでもよかった。

老人はまっかになつていたが、突然髪の毛よりもなお白くなつた。彼は暖炉の上にあつたベリー公の胸像の方を向いて、変に莊重な態度で深く礼をした。それから黙つたままおもむろに暖炉から窓へ、窓から暖炉へと、二度室へやの中を横ぎり、石の像が歩いてるように床ゆかをぎしぎしさせた。二度目の時彼は、年取つた羊のように惘然もうぜんとしてその衝突をながめていた娘の方へ身をかがめて、ほとんど冷静な微笑をたたえて言った。

「この人のような男爵と、私わしのような市民とは、とうてい同じ屋根の下にいることはできない。」

そして急に身を起こし、まつきおになり、うち震い、恐ろしい様子になり、恐るべき憤怒の輝きに額を一段と大きくして、マリウスの方に腕を差し伸ばして叫んだ。

「出て行け。」

マリウスは家を去った。

翌日、ジルノルマン氏は娘に言った。

「あの吸血兎の所へ六カ月ごとに六十ピストル（訳者注　ピストルは金貨にして十フランに当たる）だけ送って、もう決してあいつのことを私の前で口にしてはいけません。」

まだ吐き出すべき激怒がたくさん残っており、しかもそのやり場に困って、彼はそれから三カ月以上も続けて、自分の娘に他人がましい冷ややかな口をきいていた。

マリウスの方でもまた、憤って家を飛び出した。そして彼の

激昂げつこうを強めた一事があつたことをちよつと言つておかなければならぬ。家庭の紛紜ぶんうんを複雑にするそれらのこまかな不祥事が常にあるもので、たとい根本においてはそのため不正が増大するものではないとしても、損失はそのため大きくなるものである。ニコレットは祖父の命令によつて、大急ぎでマリユスの「ぼろ屑くず」をその室へやに持つてゆきながら、自分でも気づかずに、たぶん薄暗い上の階段にでもあろうが、大佐の書いた紙片がはいっている黒い粒革つぶかわの箱を落とした。そしてその紙も箱も見つからなかつた。きつと「ジルノルマン氏」が——その日以来もうマリユスは祖父のことをそういうふうにししか決して呼ばなかつた——「父の遺言」を火中に投じたものと、マリユスは思い込んだ。彼は大佐が書いたその数行を暗記していたので、結局何らの損害をも受けはしなかつた。しかしその紙、その筆

蹟、その神聖な形見、それは実に彼の心だったのである。それがどうされたのであるか？

マリユスはどこへ行くとも言わず、またどこへ行くつもりか自分でも知らず、三十フランの金と、自分の時計と、旅行鞆りょこうかばんに入れた二、三枚の衣服とを持って、家を出て行った。そして辻馬車つじばしやに飛び乗り、時間借りにして、ラタン街区の方へあてもなく進みました。

マリユスはどうなりゆくであろうか？

## 第四編 ABCの友

## 一 歴史的たらんとせし一団

外見は冷静であつたがこの時代には、一種の革命的な戦慄せんりつが漠然ぼくぜんと行き渡つていた。一七八九年および一七九二年の深淵しんえんから起こつた息吹いぶきは、空気の中に漂つていた。こういう言葉を用いるのが許されるならば、青年は声変わりの時期にあつたのである。人々はほとんど自ら知らずして、当時の機運につれて変化しつゝあつた。羅針盤らしんばんの面おもてを回る針は、同じく人の心の中を

も回っていた。各人はその取るべき歩みを前方に進めていった。王党は自由主義者となり、自由主義者は民主主義者となっていた。

それは多くの引き潮を交錯した一つの上げ潮のごときものであった。引き潮の特性は混和をきたすものである。そのためいきわめて不可思議な思想の結合を生じた。人々は同時にナポレオンと自由とを崇拜した。われわれは今ここに物語の筆を進めているが、この物語は実に当時の映像なのである。当時の人々の意見は多様な面を通過していた。ヴォルテールの勤王主義は、ずいぶんおかしなものであるが、ボナパルト的自由主義も同じく不可思議なもので、まったく好一对であった。

その他の精神的団体には、いつそうまじめなものがあつた。それらの人々は原則を探究し、権利に愛着していた。絶対なる

ものに熱狂し、無限の実現をのぞき見ていた。絶対なるものはその厳酷さによつて、人の精神を蒼空そうくうに向かわしめ、無限なるもののうちに浮動せしむる。夢想を生むには、独断に如くしものはない。そして未来を生み出すには、夢想に如くしものはない。今日の空想郷も、明日はやがて肉と骨とをそなうるに至るであらう。

進んだ思想は二重の基調を持つていた。秘奥が見えそめて来ると、疑わしい狡猾こうかつな「打ち建てられたる秩序」は脅かされるに至つた。それは最高の革命的徴候である。権力の下心は対濠たいごうのうちにおいて民衆の下心と相見あいまみゆる。暴動の孵化ふかはクーデターの予謀に策応する。

当時フランスには、ドイツのツォゲンンドブンドやイタリーのカルボナリのごとき、広汎こうはんな下層の結社組織はまだ存していな

かつた。しかし所々に、秘密な開発が行なわれ、枝をひろげつあつた。クーグールド結社はエークスにできかかつていた。またパリーにはこの種の同盟が多くあつたが、なかんずくABCの友なる結社があつた。

ABCの友とは何であつたか？ 外見は子供の教育を目的としていたものであるが、実際は人間の擡頭たいとうを目的としていたものである。

彼らは自らABCの友と宣言していた。アーペーセーABCとは、アベッセAbaisse

にして、民衆の意であつた（訳者注 両者の音が共通なるを取つたもので、アベッセは抑圧されたものという意）。彼らは民衆を引き上げようと欲していた。駄洒落だじゃれだと笑うのはまちがいで

ある。駄洒落はしばしば政治において重大なものとなることがある。その例、ナルセスを一軍の指揮官たらしめたカ、スト、ラ、ト

スはカストラへ（去勢者は陣営へ）。その例、バルバリとバルベリニ（野蛮とバルベリニ）。その例、フェロスとフェゴス（法典とフェゴス）。その例、汝はペトロスなり、我このペトラムの上に、（汝はペテロなり、我この石の上に我が教会を建てん）。

ABCの友はあまり大勢ではなかつた。それは芽ばえの状態にある秘密結社だつた。もし親しい仲間というものが英雄になり得るとすれば、ほとんど親しい仲間と言つてもいい。彼らは巴里の二カ所で会合していた。一つは市場の近くのクラントと呼ぶ居酒屋、これは後になつて問題となるものである。それから一つは、パンテオンの近くで、サン・ミシエル広場のミュザン、という小さな珈琲店、これは今日なくなつてゐる。第一の集会の場所は、労働者の出入りする所で、第二の方は学生の出入りする所だつた。

A B Cの友のふだんの秘密会は、ミューザン珈琲店コーヒーの奥室で催された。その広間は店からかなり離れていて、ごく長い廊下で店に通じ、窓が二つあり、グレー小路に面して秘密な梯子はしごがついてる出口が一つあった。人々はそこで煙草たばこをふかし、酒を飲み、カルタ遊びをし、または笑い声をあげていた。ごく高い声であらゆることを語っていたが、あることは低い声で話し合っていた。壁には共和時代のフランスの古びた地図がかけられていたが、それだけでも警官の目を光らせるには十分だった。

A B Cの友の大部分は若干の労働者らと親しく意志が疎通してる学生らであった。重なる人々の名前をあげれば下のとおりで、ある程度まで歴史のうちにはいるものである。すなわち、アンジョーラ、コンブフェール、ジャン・ブルーヴェール、フイイー、クールフェーラック、バオレル、レグルまたはレーグ

ル、ジョリー、グランテール。

それらの青年は、友情のあまり一種の家庭的な親しみを互いに持つていた。すべての人々は、レーグルは別として、南部生まれの者だった。

それは顕著なる一団であつた。しかもわれわれの背後にある目に見えない深淵しんえんの中に消えうせてしまった。しかしその青年等が悲壮なる暴拳の影のうちに没してしまふのを見る前に、われわれがたどりきたつた物語のこの所で、彼らの頭上に一条の光をさし向けてみることは、おそらく無益なことではないだろう。

われわれはアンジョーラを第一にあげたが、その理由は後にわかるだろう。彼は富裕なひとり息子であつた。

アンジョーラは、魅力のあるしかも恐ろしいことをもやり得

る青年だった。彼は天使のように美しかった。野蠻なるアンチノオス（訳者注 ハドリアナヌス皇帝の寵臣たりし非常に美しきビシニヤ人のどれい）であつた。彼の目の瞑想的なひらめきを見れば、過去のある生活において、既に革命の黙示録を涉猟したもののように思われるのだつた。彼は親しく目撃でもしたかのように革命の伝説を知つていた。偉大なる事物の些細な点まですべて知つていた。青年には珍しい司教的なまた戦士的な性質だつた。祭司であり、戦士であつた。直接の見地から見れば、民主主義の兵士であり、同時代の機運を離れて見れば、理想に仕える牧師であつた。深い瞳と、少し赤い眼瞼と、すぐに人を軽蔑しそうな厚い下脣したくちびると、高い額とを持つていた。顔に広い額があることは地平線に広い空があるようなものである。時々青ざめることもあつたが、十九世紀の始めや十八世紀の終わりに早く

から名を知られたある種の青年らのように、若い娘のようないきいきした有り余った若さを持つていた。既に大きくなつていながら、まだ子供のように見えた。年は二十二歳であるが、十七歳の青年のようだった。きわめてまじめで、この世に女性というものがいることを知らないかのようだった。彼の唯一の熱情は、権利であり、彼の唯一の思想は、障害をくつがえすことであつた。アヴェンチノ山に登ればグラックスとなり、コンヴァンション民約議会におればサン・ジュストともなつたであらう。彼はほとんど薔薇ばらを見たことがなく、春を知らず、小鳥の歌うのを聞いたことがなかつた。エヴァドネの露あちわな喉のどにも、アリストゲイトンと同じく彼は心を動かされなかつたであらう。彼にとってはハルモディオスにとつてと同じく、花は剣を隠すに都合がよいのみだつた。彼は喜びの中にあつても厳格だつた。共和以外のすべての

ものの前には、貞操を守つて目を伏せた。彼は自由の冷ややかな愛人であつた。彼の言葉は痛烈な靈感の調を帯び、賛美歌の震えを持つていた。彼は思いもよらない時に翼をひろげた。彼のそばにあえて寄り添わんとする恋人こそ不幸なるかなである。もしカンブレール広場やサン・ジャン・ド・ボーヴェー街の浮わ気女工らにして、中学から抜け出たばかりのような彼の顔、童のような首筋、長い金色の睫毛、青い目、風にそよぐ髪、薔薇色の頬、澆刺とした唇、美しい齒並み、などを見て、その曙のごとき姿に欲望をそそられ、アンジョーラの上におのが美容を試みんとするならば、意外な恐ろしい目つきが、突如として彼女に深淵を示し、ボーマルシェーの洒落者の天使とエゼキエルの恐るべき天使とを混同すべからざることを、教えてやったであらう。

革命の論理を代表せるアンジョーラと相並んで、コンブフェールは、革命の哲学を代表していた。革命の論理とその哲学との間には、次のような差異があつた。すなわち、論理は戦争に帰結され得るが、哲学はただ平和に到達するのみが可能である。コンブフェールはアンジョーラを補い訂正していた。彼の方がより低くそしてより広がつた。彼は人の精神に、一般的觀念の広い原則を注ぎ込まんとして欲した。彼は言つていた、「革命だ、しかし文明だ。」そしてつき立つた山の回りに、広い青い地平線を開いた。それゆゑ、コンブフェールの見解のうちには近づき得る実行し得るものがあつた。コンブフェールを以つてする革命は、アンジョーラをもつてする革命よりもいつそのびのびとしていた。アンジョーラは革命の神聖なる権利を表現し、コンブフェールはその自然なる権利を表現していた。前者はロベス

ピエールに私淑し、後者はコンドルセーに接近していた。コンブフェールはアンジョーラよりも多くあらゆる世界の生活に生きていた。もしこのふたりの青年にして歴史に現われることが許されたならば、一方は正しき人となり、一方は賢き人となつたであろう。アンジョーラはより男性的であり、コンブフェールはより人間的であつた。人間と男性、實際そこに彼らの色合いの差異があつた。天性の純白さによつて、アンジョーラがきびしかつたごとくコンブフェールは優しかつた。彼は市人と言ふ言葉を愛したが、人間と言ふ言葉をいつそう好んでいた。彼はスペイン人のように、ホンブル（訳者注 人間という意味でまた一種のカルタ遊びの名）と喜んで言つたであろう。彼はあらゆるものを読み、芝居に行き、公開講義を聞きに行き、アラゴから光の分極の理を学び、がいけいどうみやく外頸動脈と内頸動脈との二重作用

を説明して、一つは顔面に行き一つは脳髓に行っているという、ジョフロア・サン・ティレールの説に熱中した。彼は時勢に通曉し、一步一步学問を研究し、サン・シモンとフリーエを対照し、象形文字を読み解き、小石を見つけて碎いては地質学を推理し、記憶だけで蚕の蛾がを描き、アカデミー辞典のフランス語の誤謬ごびゅうを指摘し、ピユイゼギユールやドルーズを研究し、何物をも、奇蹟であろうとも、これを肯定せず、何物をも、幽霊であろうともこれを否定せず、機関紙のとじ込みをめくり、よく思いを凝らし、未来は学校教師の手にあると断言し、教育問題を心にかけていた。知的および道德的水準の向上、知識の養成、思想の普及、青年時代における精神の発育、などのために社会が絶えず努力することを欲した。また現在の研究法の貧弱さ、いわゆるクラシックと称する二、三世紀に限られた文学的見解のみじめ

さ、官界げんかくしや学者の暴君的専断、スコラ派の偏見、旧慣、などが  
ついにフランスの大学をして牡蠣かき（愚人）の人工培養場たらし  
むるに至りはしないかを気づかっていた。彼は学者で、潔癖  
で、几帳面きちようめんで、多芸で、勉強家で、また同時に、友人らのいわゆ  
る「空想的なるまでに」思索的であつた。彼は自分のすべての  
夢想を信じていた、すなわち、鉄道、外科手術における苦痛の減  
退、暗室中の現象、電信、軽気球の操縦など。のみならず、人類  
に対抗して迷信や専断や偏見によつて至る所に建てられた要塞ようさい  
には、あまり恐れをいだかなかつた。学問はついに局面を変え  
るに至るであらうと考へてゐる者のひとりだつた。アンジョーラ  
は首領であり、コンブフェールは指導者であつた。一方は共に  
戦うべき人であり、一方は共に歩くべき人であつた。とは言へ、  
コンブフェールとても戦うことを得なかつたのではない。彼は

障害と接戦し、澆刺<sup>はつらつ</sup>たる力と爆発とをもつて攻撃することを、あえて拒むものではなかつた。しかしながら、公理を教え着実なる法則を流布して、しだいに人類をその運命と調和させて行くこと、それが彼の喜ぶところのものだつた。そして二つの光の中で、彼の傾向は、焼き尽す光よりもむしろ輝き渡る光の方にあつた。火事は疑いもなく曙<sup>あけぼの</sup>を作ることができるのであろう。しかし何ゆえに太陽の登るのを待つてはいけないか。火山は輝き渡る、しかし暁の光はいつそうよく輝き渡るではないか。コンブフェールは崇高の炎よりも、美の純白の方をおそらく好んだであらう。煙に悩まされたる光、暴力によつてあがなわれたる進歩は、この優しくまじめなる精神を半ばしか満足せしめなかつた。一七九三年のように、民衆がまつさかさまに真理の中に飛び込むことは、彼を恐れさせた。しかし彼にとつては、停

滞はなおいつそう嫌悪けんおすべきものであつた。彼はそこに腐敗と死滅とを感じた。全体として言え、彼は瘴癘しょうれいの気よりも泡沫ほうまつを愛し、下水よりも急流を愛し、モンフォーコンの湖水よりもナイヤガラ瀑布ばくふを愛した。要するに彼は、止まることをも急ぐことをも欲しなかつたのである。騒々しい友人らが、絶対なるものに勇ましく心ひかれて、輝かしい革命的冒険を賛美し、それを呼び起こさんとしている中であつて、コンブフェールはただ、進歩をして自然に進ませようと欲した。それは善良な進歩であつて、おそらく冷ややかではあろうがしかし純粹であり、方式的ではあろうがしかし難点なきものであり、平静ではあろうがしかし揺るがし得ないものであつたらう。コンブフェールは自らひざまずいて手を合わせ、未来が純潔さをもつて到来せんことを祈り、何物も民衆の広大有徳なる進化を乱すものなから

んことを祈つたであろう。「善は無垢ならざるべからず、」と彼は絶えず繰り返していた。そしてたとい革命の偉大さは、眩惑せしむるばかりの理想を見つむることであり、血潮と猛火とを踏みにじりつつ雷電の中を横ぎつて、理想に向かつて飛びゆくことであるとしても、進歩の美は、無垢なることに存するに違いない。そして一方を代表するワシントンと、他方の化身たるダントンの間には、白鳥の翼を持った天使と鷲の翼を持った天使とをへだてる差違がある。

ジャン・ブルーヴェールは、コンブフェールよりもなおいっそう穏やかなはだ合いの人物だった。彼は自らジュアン（訳者注 ジャンを中世式にしたもの）と呼んでいた。それは中世紀の非常に有用な研究が生まれ出た強く深い機運に立ち交じつているという、あのかつたらぬ一時の空想からであった。ジャン・

ブルーヴェールは情緒じょうちゆう深く、鉢植はちうえの花を育て、笛を吹き、詩を作り、民衆を愛し、婦人をあわれみ、子供のために泣き、未来と神とを同じ親しみのうちに混同し、気高き一つの首を、すなわちアンドレ・シェニエの首をはねたことを、革命に向かつて難じていた。平素は繊細であるが突如として雄々しくなる声を持っていた。博学と言えるほど学問があり、ほとんど東方語学者であった。またことに善良であった。善良さがいかに偉大に近いものであるかを知っている人にはごくわかりきったことであるが、詩の方面において彼は広大なるものを愛していた。彼はイタリー語、ラテン語、ギリシヤ語、ヘブライ語を知っていた。しかもそれはダンテとユヴェナリスとアイスキロスとイザヤの四詩人を読むことに使われたのみだった。フランス人ではラシーヌよりもコルネイユを、コルネイユよりもアグリッパ・

ドービネを好んでいた。燕麦からすむぎや矢車草のはえている野を喜んで散歩し、世の中の事件とほとんど同じくらいに雲のことを気にしていた。彼の精神は人間の方面と神の方面と、二つの態度を有していた。あるいは研究し、あるいは静観していた。終日彼は社会問題を探究していた。すなわち、給料、資本、信用、婚姻、宗教、思想の自由、恋愛の自由、教育、刑罰、貧窮、組合、財産、生産、分配、すべて人類の群れを暗き影でおおう下界の謎なぞを探究していた。そして夜になると、あの巨大なる存在者たる星辰せいしんをながめた。アンジョーラのごとく、彼は金持ちでひとり息子であった。彼はもの柔らかに話をし、頭を下げ、目を伏せ、きまり悪るげにほほえみ、ぞんざいな服装をし、物なれな様子をし、わずかなことに赤面し、非常に内気だった。それでもまた勇敢であった。

フイイーは、扇作りの職工で、父も母もない孤児で、一日辛うじて三フランをもうけていた。そして彼は世界を救済するといふ一つの考えしか持たなかつた。それからなおも一つの仕事を持っていた、すなわち学問をすること、それを彼はまた自己を救済することと呼んでいた。彼は独学で読むこと書くことを学んだ。彼のあらゆる知識はただひとりで学んだのだつた。彼は寛大な心を持っていた。広大な抱擁力を持っていた。この孤児は民衆を自分の養児としていた。母がいなかつたので、祖国の事を考えていた。祖国を持たぬ人間の地上に居ることを欲しなかつた。民衆の人たる深い洞察力をもつて、われわれが今日民族観念と呼ぶところのものを心の中にはぐくんでいた。悲憤もよくその原因を知悉した上のことでありたいといふので、特に歴史を学んだ。ことにフランスのことのみを考えている若々

しい夢想家らの寄り合いの中にあつて、彼はフランス以外を代表していた。そして専門として、ギリシヤ、ポーランド、ハンガリー、ルーマニヤ、イタリー、などのことを知っていた。彼は権利としてのような執拗しつようさをもつて、場合の適當不適當をかまわず、以上の国名を絶えず口にしていた。クレート島およびテッサリーにおけるトルコ、ワルソーにおけるロシヤ、ヴェニスにおけるオーストリア、などの暴行は彼を憤慨ふんがいさせた。なかに、一七七二年の大暴逆（訳者注　ポーランドの分割）は彼を激昂げっこうさせた。憤りの中に眞実を含むほどおごりかな雄弁はない。彼はそういう雄弁を持つていた。一七七二年という汚れたる日付、裏切りによつて覆滅ふくめつされたるすぐれた勇敢な民衆、あの三国の罪惡、あの奇怪きがいきわまる閹撃やみうち、などのことを彼はあくまでも論じていた。それは実に、その後多くのすぐれた国民

を襲い、言わばその出生証書を塗抹とまつしたる、あの恐るべき国家的抑圧の典型となり標本となつたのである。現代のあらゆる社会的加害は、ポーランドの分割より胚胎はいたいする。ポーランドの分割は一つの定理であり、それより現代のあらゆる政治的罪悪が導き出される。最近一世紀以来のすべての専制君主とすべての反逆人とは皆、不可変更のポーランド分割調書を作り、確認し、署名し、花押かおうしたのである。近世の大逆の史を閲すると、右の事がらが第一に現われてくる。ウィーン会議はおのが罪悪を完成する前に、その悪事を相談したのである。一七七二年は獵の勝鬨からどきであり、一八一五年は獲物の腐肉である。とそういうのがフイイーのいつもの文句であつた。このあわれな労働者は正義の擁護者となり、正義は彼を偉大ならしめて彼にむくいた。實際正当の権利の中には無窮なるものがあつたからである。ワル

ソーを韃靼化せんとするのは、ヴェニスをゼルマン化せんとするよりもはなはだしい。いかなる国王もそういうことをする時には、ただ労力と名誉とを失うのみである。うち沈められたる祖国も、やがては水面に浮かび上がって再び姿を現わすであらう。ギリシヤは再びギリシヤとなり、イタリーは再びイタリーとなる。事実に対する権利の抗議は永久に残存する。一民衆を盗むの罪は、時効にかかつて消滅するものではない。それら莫大なる詐欺取財は、未来に長く続くものではない。国民はハンカチのように模様を抜き去られるものではない。

クールフェーラックは、ド・クールフェーラック氏と言われ、父を持つていた。王政復古の中流階級が貴族または華族ということについていだいている愚かな考えの一つは、実にこの分詞のド、という一字を貴重がったことである。人の知るとおり、

この分詞には何らの意味もない。しかし、ミ、ネ、ル、ヴ、時代（訳者注 王政復古の初期）の市民らはこの下らないド、の文字をあまりに高く敬っていたので、それを廃止しなければならぬと思われるほどになった。かくてド・ショールヴァン氏はただショールヴァンと呼ばせ、ド・コーマルタン氏はコーマルタンと、ド・コンスタン・ド・ルベック氏はバンジヤマン・コンスタンと、ド・ラファイエット氏はラファイエットと呼ばせるに至った。クールフェーラックもそれにおくれを取るまいとして、ただ簡単にクールフェーラックと自ら呼んだのである。

クールフェーラックについては、それだけでほとんど十分である。そしてただ、クールフェーラックならばまずトロミエスを見よ、と言うだけに止めておこう。

実際クールフェーラックは、機才めの美とも称し得る若々し

い元氣を持つていた。ただ後になるとそういうものは、小猫のやさしさがなくなるように消え失せてしまい、その優美さも二本の足で立てば市民となり、四本の足で立てば牡猫おすねことなるものである。

かかる種類の精神は、代々の学生に、代々の若々しい芽に、相次いで伝えられ手から手へ渡りゆき、競争者のごとくに走り回り、そして常に何らの変化をもほとんど受けけないものである。かくして、前に述べたとおり、一八二八年のクールフェーラックの言うことを聞く者は、一八一七年のトロミエスの言うことを聞く思いがするであろう。ただクールフェーラックは善良な男であった。見たところ外部的の精神は同じであるが、彼とトロミエスとの間には大なる差違があつた。彼らのうちに潜在している人間は、前者と後者とではひどく異なつていた。トロミ

エスのうちには一人の検事があり、クールフェーラックのうちには一人の洒落武士しやれぶしがあつた。

アンジヨールは首領、コンブフェールは指導者、クールフェーラックは中心であつた。他の二者がより多く光明を与えたとすれば、彼はより多く温熱を与えた。実際、彼は中心たるすべての特長、丸みと喜色とを持つていたのである。

バオレルは一八二二年六月の血腥い騒動ちなまぐさの時、若いラールマンの葬式おくりの顔に出したことがあつた。

バオレルはいつも上きげんで、悪友で、勇者で、金使いが荒く、太つ腹なるまでに放蕩者ほうとうもので、雄弁なるまでに饒舌じようぜつで、暴慢なるまでに大胆であつた。最も善良なる魔性の者であつた。大胆なチョッキをつけ、まつかかな意見を持つていた。偉大なる騒擾者そうじようしや、言いかえれば、騒乱のない時には喧嘩けんかほど好きなものはなく、

革命のない時には騒乱ほどの好きなものではなかった。いつでも窓ガラスをこわしたり、街路の舗石しきいしをめくつたり、政府を顛覆てんぷくしたりすることをやりかねない男で、そういうことをして結果を見たがっていた。十一年間も大学にとどまっていた。法律のにおいをかいだが、それを大成したことはなかった。「決して弁護士にならず」というのをモットーとし、寢床側のテーブルを戸棚とし、その中に角帽が見えていた。法律学校の前に現れることはまれだったが、そういう時はいつも、ラシヤがいとら外套はまだ発明されていなかったもので、フロツクのボタンをよくかけて衛生上の注意をしていた。学校の正門について、「何というひどい老いばれ方だ！」と言い、校長のデルヴァンクール氏について、「何という記念碑だ！」といていた。講義のうちに歌の材料を見つけたら、教授らのうちに漫画の種を見いだしたりしていた。

かなり多額な学資、年に三千フランほども、くだらないことに費やしてしまった。彼には田舎者のいなかもの両親があつたが、その親たちに自分を深く尊敬させるような術を心得ていた。

彼は両親のことをこう言つていた。「彼らは田舎者で、市民ではない。だからいくらか頭があるんだ。」

気まぐれなバオレルは、多くのカフェーに出入りした。他の者はどこかなじみの家を持つていたが、彼はそんなものを持たなかつた。彼はやたらに彷徨ほうこうした。錯誤は人間的で、彷徨はパリーつ児的である。彼の奥底には洞察力があり、見かけによらぬ思索力があつた。

彼はABCの友と、未だ成立しないが早晩形造られるべき他の団体との間の、連鎖となつていた。

それら青年の集会所のうちには、ひとり禿頭はげあたまの会員がいた。

ルイ十八世が国外に亡命せんとする日、それを辻馬車つじばしやの中に助け入れたので公爵となされたアヴァレー侯爵が、次のような話をした。一八一四年、フランスに戻らんとして王がカレーに上陸した時、ひとりの男が王に請願書を差し出した。「何か望みなのか、」と王は言った。「陛下、郵便局が望みでござります。」

「名は何という?」「レーグルと申します。」

王は眉まゆをひそめ、請願書の署名をながめ、レーグルと書かれた名を見た。このいくらかボナパルト的でない綴字つづりじに（訳者注）レーグルとは驚の意にしてナポレオンの紋章）王は心を動かされて、微笑を浮かべた。「陛下、」と請願書を差し出した男は言った、「私には、レーグル（訳者注 顎の意）という綽名あだなを持つていました犬番の先祖がありまして、その綽名が私の名前となつたのであります。私はレーグルと申します。それをつづめてレ

グル、また少しかえてレーグルと申すのであります。」それで王はほほえんでしまった。後に、故意にかあるいは偶然にか、王は彼にモーの郵便局を与えた。

はげあたま

禿頭の会員は、実にこのレグルもしくはレーグルの息子で、レーグル（ド・モー）と署名していた。彼の仲間は、手軽なので彼をボシユエと呼んでいた。

ボシユエは、不幸を有する快活な男であつた。彼の十八番は、何事にも成功しないことだつた。それでかえつて彼は何事をも笑つてすましていた。二十五歳にして既に禿頭だつた。彼の父は一軒の家屋と一つの畑とを所有するに至つた。しかしその息子たる彼は、投機に手を出したのがまちがいの元で、まつききにその家と畑とをなくしてしまつた。それでもう彼には何物も残つていなかつた。彼は学問があり才があつたが、うまくゆか

なかつた。すべての事がぐれはまになり、すべてのことがくい違つた。自分でうち立てるすべての物が、自分の上にくずれかかつた。木を割れば指を傷つける、情婦ができたかと思えばその女には他にいい人があるのを間もなく発見する。始終何かの不幸が彼に起こつてきた。そういうところから彼の快活が由来したのである。彼は言つていた、「僕は瓦かわらがくずれ落ちる、屋根の下に住んでゐるんだ。」驚くことはまれで、なぜなら事変が起こるのがあらかじめわかつてゐるのだから、いけない時でも平気に構えており、運命の意地悪さにも笑つていて、まるで冗談をきいてる人のおようだった。貧乏ではあつたが、彼の上ぎげんのポケットはいつも無尽蔵だった。すぐに一文なしになつてしまふが、笑い声はいつまでも尽きなかつた。窮境がやつてきても彼はその古馴染なじみ染に親しく会釈した。災厄をも親しく遇した。不

運ともよく馴染み、その綽名あだなを呼びかけるほどになっていた。「鬼門きもんさん、今日は、」と彼はいつも言った。

その運命の迫害が、彼を発明家にしてしまった。彼は種々の妙策を持っていた。少しも金は持たなかったが、気が向くと「思うままの荒使い」をする術すべを知っていた。ある晩、彼はある蓮葉女はすはおんなと夜食をして、ついに「百フラン」を使い果たしてしまった。そしてそのほか騒ぎのうちに、次のようなすてきな言葉を思いついた。「サン・ルイの娘よ、僕の靴をぬげ。」（訳者注 サン・ルイは百フラン、そしてまたルイ王にかけた言葉）

ボシユエは弁護士職の方へ進むのに少しも急がなかった。彼はバオレルのようなやり方で法律を学んだ。ボシユエはほとんど住所を持っていなかった。ある時はまったくなかった。方々を泊まり歩いた、そしてジョリーの家へ泊まることが一番多かつ

た。ジョリーは医学生だった。彼はボシユエよりも二つ若かった。

ジョリーは、若い神経病みだった。医学から得たところのものは、医者となることよりむしろ病人となることだった。二十三歳で彼は自分を多病者と思い込み、鏡に舌を写して見ることに日を送っていた。人間は針のように磁気に感ずるものだと断言して、夜分血液の循環が地球の磁気の大流に逆らわれないようにと、頭を南に足を北にして牀とこを伸べた。嵐のある時は自分で脈を取って見た。その上連中のうちで一番快活だった。若き、病的、気弱さ、快活さ、すべてそれら個々のものは、うまくいっしよに同居して、それから愉快な変人ができ上がって、それを仲間らは、音をたくさん浪費して、ジョリリリリと呼んでいた。「君は四り（四里）も飛び回れるんだ」とジャン・プルー

ヴェールは彼に言っていた。

ジョリーはステッキの先を鼻の頭につける癖があつた。それは鋭敏な精神を持つてゐるしるしである。

かようにそれぞれ異なつてはいるが、全体としてはまじめに取り扱ふべきであるこれらの青年は、同じ一つの信仰を持つていた。それは「進歩」ということである。

すべての人々は、フランス大革命から生まれた嫡子であつた。

けいちよう

最も軽佻な者でも、一七八九年という年を言うときはおごそか

になつた。彼らの肉身の父は、中心党で王党で正理党で、ある

かまたはあつた。しかしそれはどうでもいいことである。若い

彼らの雑多な前時代は彼らには少しも關係を及ぼさなかつた。

主義という純潔な血が、彼らの血管には流れていた。彼らは何ら中間の陰影もなく直接に、清純なる権利と絶対なる義務とに

愛着していた。

その主義にいったん加盟入会した彼らは、ひそかに理想を描いていた。

すべてそれら燃えたる魂のうちに、確信せる精神のうちに、ひとりの懷疑家があつた。彼はどうしてそこにはいつてきたのであるか。あらゆる色の取り合わせによつてであつた。その懷疑家をグランテールと呼び、いつもその判じ名のRを署名した（訳者注　グランテールという音は大字Rという意を現わす）。

グランテールは何事をも信じようとはしなかつた男である。それに彼は、パリー学問の間に最も多く種々なことを知つた学生の一ひとりだつた。最もよい珈琲コーヒーはランブラン珈琲店にあり、最もよい撞球台たまつきだいはヴォルテール珈琲店にあることを知っていた。メーヌ大通りのエルミタージュにはよい菓子とよい娘とがある。

こと、サゲーお上さんの家にはみごとな鶏料理ができること、  
キュネットの市門にはすばらしい魚料理があること、コンバの  
市門にはちよつとした白葡萄酒しろぶどうしゅがあること、などを知っていた。  
あらゆるものについて、彼は上等の場所を知っていた。その上、  
足蹴術を心得ており、舞踏をも少し知っており、また桿棒術に長  
じていた。そのほかまた非常な酒飲みだつた。彼は極端に醜い  
男だつた。当時の最もきれいな靴縫くつぬい女であつたイルマ・ボア  
シーは、彼の醜さにあきれて、「グラ、ン、テールは、し、よ、う、が、な、い、  
という判決を下した。しかしグランテールのうぬぼれはそれを  
少しも意としなかつた。彼はいかなる女でもやさしくじつと見  
つめ、「俺が、思、い、さ、え、し、た、ら、な、あ、に、」と言うようなうすをし  
て、一般に女にもてると仲間たちに信じさせようとしていた。

民衆の権利、人間の権利、社会の約束、フランス仏蘭西革命、共和、民

主義、人道、文明、宗教、進歩、などというすべての言葉は、グランテールにとつてはほとんど何らの意味をもなさなかつた。彼はそれらを笑つていた。懷疑主義、この知力のひからびた潰瘍かいようは、彼の精神の中に完全な観念を一つも残さなかつた。彼は皮肉とともに生きていた。彼の格言はこうであつた、「世には一つの確かなることあるのみ、そはわが満ちたる杯なり。」兄弟であらうと父であらうと、弟のロベスピエールであらうとロアズロールであらうと、すべていかなる方面におけるいかなる献身をも彼はあざけていた。

「死んだとはよほどの進歩だ。」と彼は叫んでいた。十字架像のことをこう言つていた、「うまく成功した絞首台だ。」ほうこう 彷徨者で、とぼく 賭博者で、ほうとう 放蕩者で、たいてい酔つ払つてゐる彼は、絶えず次のような歌を歌つて、仲間の若い夢想家らに不快を与えていた。

「若い娘が、かわいいよ、よい、葡萄酒が、かわいいよ。」節は「アンリ四世万々歳」の歌と同じだった。

それにこの懷疑家は、一つの狂信的信仰を有していた。それは觀念でもなく、教理でもなく、芸術でもなく、学問でもなかった。それはひとりの人間で、しかもアンジヨールであった。グランテールはアンジヨールを賛美し、愛し、尊んでいた。この無政府的懷疑家が、それら絶対的精神者の一群の中にあつて、だれに結びついたかというに、その最も絶対的なるものであつた。いかにしてアンジヨールは彼を征服したか。思想をもつてか。否。性格をもつてである。これはしばしば見られる現象である。信仰者に懷疑家が結びつくということは、補色の法則の示すとおり至つて普通なことである。われわれに欠けているものはわれわれを引きつける。盲人ほど日の光を愛するものはない。侏儒

は連隊の鼓手長を崇拜する。慕<sup>がま</sup>は常に目を空の方に向ける、なぜであるか、鳥の飛ぶのを見んがためである。心中に懐疑<sup>ひしよう</sup>のはい回つてるグランテールは、アンジョーラの中に信仰の飛翔するのを見るのを好んだ。彼にはアンジョーラが必要だった。彼は自らそれを明らかに意識することなく、自らその理由を解こうと考えることなく、ただアンジョーラの清い健全な確固な正直な一徹な誠実な性質に、まったく魅せられてしまった。彼は本能的にその反対のものを賛美した。彼の柔軟なたわみやすいはずれがちな病的な畸形<sup>きけい</sup>な思想は、背骨にまといつくがようにアンジョーラにまといついた。彼の精神的背景は、アンジョーラの確固さによりかかった。グランテールもアンジョーラそばにいれば、一個の人物のようになつた。また彼自身は、外見上両立し難い二つの要素から成つていた。彼は皮肉であり、信

実であつた。彼の冷淡さは愛を持つていた。彼の精神は信仰なくしてすますことができたが、彼の心は友情なくしてすますことができなかった。それは深い矛盾である。なぜなれば愛情は信念であるから。彼の性質はそういうものだった。世には物の裏面となり背面となり裏となるために生まれた人々がある。ポルークス、パトロクロス、ニソス、エウダミダス、エフェスチオン、ペクメヤ、などはすなわちそれである（訳者注 皆献身的友情を以つて名ある古代の人物）。彼らは他人によりかかるという条件でのみ生きている。彼らの名は扈從こじゆうである、そして接続詞の、という字の次にしか書かれることがない。彼らの存在は彼ら自身のものではない。自分のものでない他の運命の裏面である。グランテールはそういう人物のひとりだった、彼はアンジョーラの背面であつた。

それらの結合はほとんどアルファベットの文字で始まつてると言うこともできるであろう。一続きになす時はOとPとが離すべからざるものとなる。もしよろしくばOとPと言う方がいい、すなわちオレステスとピラデスと（訳者注 物語中のオレステスとその友人ピラデス。彼らの頭字はOとP。またアンジョーラとグランテールとの頭字はEとG）。

アンジョーラの本当の従者であつたグランテールは、この青年らの会合のうちに住んでいた。彼はそこに生きていた。彼の気に入る場所はそこのみだつた。彼は彼らの後にどこへでもついて行つた。酒の気炎の中に彼らの姿がゆききするのを見るのが彼の喜びだつた。人々は彼の上きげんのゆえに彼を仲間に許していた。

信仰家なるアンジョーラは、その懐疑家を軽蔑していた。自分

が節制であるだけにその酔つ払いをいやしんでいた。また昂然こうぜんたる憐憫れんびんを少しはかけてやっていた。グランテールは少しも認められない。ピラデスであった。常にアンジヨールに苛酷に取り扱われ、てきびしく排斥され拒絶されていたが、それでもまたやってきて、アンジヨールのことをこう言っていた。「何という美しい大理石のような男だろう。」

## 二 ブロンドーに対するボシユエの弔辞

ある日の午後、前に述べておいた事件とちようど一致するこ  
とになるが、レーグル・ド・モーはミューザン珈琲店コーヒーの戸口の  
柵飾りわくかざの所によりかかつてうつとりとしていた。彼は浮き出し  
にされた人像柱のようなありさまをしていた。ただ自分の夢想

にふけつていた。彼はサン・ミシエル広場をながめていた。よ  
りかかることは立ちながら寝ることで、夢想家にとつては少し  
もいやなことではない。レーグル・ド・モーは前々日法律学校  
でふりかかたくだらない失策のことを考えていたが、別に憂  
わしいふうもなかった。それは彼一個の将来の計画、もとより  
ずいぶんぼんやりしたものではあつたが、その計画を変化させ  
てしまったのである。

夢想していても馬車は通るし、夢想家とても馬車は目につく。

ぼんやりとあちらこちらに目をさ迷わせていたレーグル・ド・

モーは、その夢現ゆめうつのうちに、広場にさしかかつてきた二輪馬車

を認めた。馬車は並み足でどこを当てともなさそうに進んでい

た。あの馬車はだれの所へ行こうとするのだろう。どうして並  
み足でゆつくり行くのだろう。レーグルはそれをながめた。馬

車の中には、御者のそばに一人の青年が乗っていた。そして青年の前には、かなり大きな旅行鞆りよこうかばんが置いてあった。鞆に縫いつけられた厚紙には、大きな黒い文字の名前が見えていた、「マリウス・ポンメルシー。」

その名前を見てレーグルの態度は変わった。彼はぐつと身を起こして、馬車の中の青年を呼びかけた。

「マリウス・ポンメルシー君！」

呼びかけられた馬車は止まった。

その青年もやはり深く考え込んでるようだったが、目を上げた。

「えー？」と彼は言った。

「君はマリウス・ポンメルシー君だろう。」

「もちろん。」

「僕は君をさがしていたんだ。」とレーグル・ド・モーは言った。  
「どうして？」とマリユスは尋ねた。彼はまさしく祖父の家を  
飛び出してきたばかりのところだった。そして今眼前に立つて  
るのはかつて見たこともない顔だった。「僕は君を知らないが。」  
「僕だつてそのとおり。僕は君を少しも知らない。」とレーグル  
は答えた。

マリユスは道化者にでも出会つたように思い、往来のまんなか  
でまやかしを初められたのだと思つた。彼はその時あまりき  
げんのいい方ではなかつた。眉まゆをひそめた。レーグル・ド・モー  
は落ち着き払つて言い続けた。

「君は一昨日学校へこなかつたね。」

「そうかも知れない。」

「いや確かにそうだ。」

「君は学生なのか。」とマリウスは尋ねた。

「そうだ。君と同じだ。一昨日、ふと思いついて僕は学校へ行つてみた。ねえ君、ときどきそんな考えだつて起こるものさ。教師がちやうど点呼をやつていた。君も知らないことはないだろうが、そういう時やつ奴らは実際滑稽こっけいなことをするね。三度名を呼んで答えがないと、名前が消されてしまふんだ。すると六十フラン飛んでいってしまふさ。」

マリウスは耳を傾け初めた。レーグルは言い続けた。

「出席をつけたのはブロンドーだった。君はブロンドーを知つてるかね、ひどくとがたつたずいぶん意地悪そうな鼻をしている奴さ。欠席者をかぎ出すのを喜びとしてる奴さ。あいつ狡猾こうかつにホ、という文字から初めやがった。僕は聞いていなかつた。そういう文字では僕は少しも損害をうける訳がないんだからね。点

呼はうまくいった。消される者は一人もなかった。皆出席だったんだ。ブロンドーの奴悲観していたね。僕はひそかに言つてやった、ブロンドー先生、今日は少しもいじめる種がありませんね。すると突然ブロンドーは、マリウス・ポンメルシーと呼んだ。だれも答えなかつた。ブロンドーは希望にあふれて、いつそう大きな声でくり返した、マリウス・ポンメルシー。そして彼はペンを取り上げた。君、僕には腸はらわたがあるんだからね。僕は急いで考えたんだ。これは豪えらい奴だぞ、名を消されようとしてゐる。待てよ。ずばらなおもしろい奴に違ひない。善良な学生ではないな。床の間の置き物みたいな奴ではないな。勉強家ではないな。科学や文学や神学や哲学を自慢する嘴くちばしの黄色い術げんがくしや学者ではないな。くだらぬことにおめかししてる愚物ではないな。敬すべきなまけ者に違ひない。そこらをうろついでるか、

転地としやれ込んでるか、浮わ気女工とふざけてるか、美人をつけ回してるか、あるいは今時分俺おれの女のもとへでも入り浸ってるかも知れないぞ。よし助けてやれ。一つブロンドーの奴をやつつけてやれ！ その時ブロンドーは抹殺まっさつの黒ペンをインキに浸して、茶色の目玉で聴講者を見回して、三度目に繰り返した、マリユス・ポンメルシー！ 僕は答えた、はい！ それで君は消しを食わなかつたんだ。」

「君！……」とマリユスは言った。

「そしてそれで、僕の方が消しを食っちゃった。」とレーグル・ド・モーは言い添えた。

「君の言うことはわからない。」とマリユスは言った。

レーグルは言った。

「わかってるじゃないか。僕は返事をするために講壇の近くに

いて、逃げ出すために扉とびらの近くにいたんだ。教師は僕を何だかじつと見つめていた。するとブロンドーの奴やつ、ボアローが説いた意地悪の鼻に違いない、突然レの字へ飛び込んできやがった。それは僕の文字なんだ。僕はモーの者で、レグルと言うんだ。」

「レーグル！」とマリユスは言葉をはさんだ、「いい名だね。」

(訳者注 レーグルすなわち鷲はナポレオンの紋章で、彼はナポレオン崇拜家である)

「ブロンドーはそのいい名前の所へやつてきたんだ。そして叫んだ、レーグル！ 僕は答えた。はい！ するとブロンドーの奴、虎とらのようなやさしきで僕をながめ、薄ら笑いをして言いやがった。君はポンメルシーなら、レーグルではあるまい。この一言は君にとつてあまり有り難くないようだが、実はそのいまましい味をなめたのは僕だけさ。彼奴あいつはそう言つて、僕の名

を消してしまつた。」

マリユスは叫んだ。

「それは実に……。」

「まず何よりも、」とレーグルはささえぎつた、「何とかうまい賛辞のうちにはブロンドーをお陀仏だぶつにしてやりたいんだ。奴を死んだ者と仮定する。元来やせてはいるし、顔色は青白いし、冷たいし、硬こわばつてるし、変な臭においがするし、死んだところで大した変わりはないだろう。そこで僕はこう言つてやろう。——爾なんじ地を裁く者よ、思い知れ。この所にブロンドー横たわる、鼻のブロンドー、ブロンドー・ナジカ（鼻ブロンドー）、規則の牡牛おうれし、ボス・デイシプリネ（規則牛）、命令の番犬、点呼の天使、彼は実にまつすぐであり、四角であり、正確であり、厳正であり、正直であり、嫌悪けんおすべきものなりき。わが名を彼が消したるがご

とく、彼の名を神は消したまえり。」

マリユスは言った。

「僕はまつたく……。」

「青年よ、」とレーグル・ド・モーは続けて言った、「これは汝の教えとならんことを。以来は必ずきちようめんなれ。」

「何とも申し訳がない。」

「汝の隣人をして再び名を消さるるに至らしむることなかれ。」

「僕は何とも……。」

レーグルは笑い出した。

「そして僕は愉快だ。も少しで弁護士になるところだったが、その抹殺で救われたわけだ。弁護士などという月桂冠げっけいかんはおやめだ。これで後家の弁護もしなくていいし、孤児を苦しめることもしなくてすむ。弁護士服もおさらばだ、見習い出勤もおさら

ばだ。いよいよ除名が得られたわけだ。そして皆君のおかげだ。ポンメルシー君。改めて感謝の訪問をするつもりでいる。君はどこに住んでるんだ。」

「この馬車の中だよ。」とマリユスは言った。

「ぜいたくなわけだね。」とレーグルは平気で答えた。「君のためには祝そう。そこにいたら年に九千フランは家賃を払わなきやなるまいね。」

その時クールフェーラックが珈琲店コーヒーから出てきた。

マリユスは寂しげにほほえんだ。

「僕は二時間前からこの借家にいるんだが、もう出ようと思ってる。だがよくあるような話で、どこへ行っていいかわからないんだ。」

「君、」とクールフェーラックは言った、「僕の家に来たまえ。」

「僕の方に先取権はあるんだが、」とレーグルは言葉をはさんだ、「悲しいかな自分の家というのがないからな。」

「黙っておれよ、ボシユエ。」とクールフェーラックは言った。「ボシユエだと、」とマリユスは言った、「君はレーグルといふんじゃないかたかね。」

「そしてド・モーだ。」とレーグルは答えた。「変名ボシユエ。」クールフェーラックは馬車にはいつてきた。

「御者、」と彼は言った、「ポルト・サン・ジャックの宿屋だ。」そしてその晩、ポルト・サン・ジャックの宿屋の一室に、クールフェーラックの隣室に、マリユスは落ち着いた。

### 三 マリユスの驚き

数日のうちに、マリユスはクールフェーラックの親友となつてしまった。青年時代にはすぐに親密になり、受けた傷もたちまちなおるものである。マリユスはクールフェーラックのそばにいて自由な空気を呼吸した。それは彼にとってまったく新奇なことだった。クールフェーラックは彼に何も尋ねはしなかった。そんなことは考えもしなかった。そのような年ごろでは、顔つきを見れば直ちにすべてが看取されるものである。言葉などは無用である。顔がおしやべりをするという青年が世にはいる。互いに顔を見合わせれば、互いに心がわかつてしまう。けれどもある朝、クールフェーラックは突然彼にこういう問いを發した。

「時に君は何か政治的意見を持つてるかね。」

「何だつて！」とマリユスはその問に氣を悪くして言った。

「君は何派だと言うんだ。」

「民主的ボナパルト派だ。」

「鼠色ねずみいろのおとなしい奴やつだな。」とクールフェーラックは言った。

翌日、クールフェーラックはマリウスをミューザン珈琲店コーヒーに導いた。それから彼は、微笑を浮かべてマリユスの耳にささやいた、「僕は君を革命に巻き込んでやらなければならぬ。」そして彼をABCの友の室へやへ連れて行つた。彼はマリウスを仲間の者らに紹介して、低い声で「生徒だ」とただ一言言つた。マリウスにはそれが何の意味だかわからなかつた。

マリウスは多くの精神の蜂はちの巣の中に落ち込んだ。もとより彼は無口で沈重であつたが、飛ぶべき翼もなく戦うべき武器も持たない人間ではなかつた。

マリウスはその時まで孤独で、習慣と趣味とによつて独語と

傍白とに傾いていたので、まわりに飛び回つてゐる青年らにいささか辟易へきえきした。それら種々のはつらつたる若者は、同時に彼を襲い彼を引つ張り合つた。自由と活動とのうちにあるそれら精神の入り乱れた騒ぎを見ては、彼の思想は旋風のように渦うずをまいた。時とするとその思想は混乱して、遠く逃げ去つて再び取り戻し得ないかとも思われた。哲学、文学、美術、歴史、宗教、すべてが思い設けないやり方で語られるのを彼は聞いた。彼は不思議な境地を瞥見べっけんした。そして適当な視点に置いてそれらを見なかつたので、何だか渾沌こんとん界を見るような心地だった。彼は父の意見に従うために祖父の意見をすてて、自ら心が定まつたと思つていた。しかるに今や、まだ心が定まつてはいないのではないかという気がして、不安でもあるがまたそう自認もできかねた。今まですべてのものを見ていた角度は、再びぐらつき

初めた。一種の震動が彼の頭脳の全世界を動揺させた。内心の不可思議な動乱であつた。彼はそれにほとんど苦悩を覚えた。

その青年らには、「神聖にされたるもの」は一つもないがようだつた。あらゆることについて独特な言をマリユスは聞いた。それはまだ臆病な彼の精神にはわずらいとなつた。

いわゆるクラシックの古い興行物の悲劇の題が書いてある芝居の広告が出ていた。「市民らが大事にしてる悲劇なんぞやめつちまえ！」とバオレルは叫んだ。するとコンブフェールが次のように答えるのをマリユスは聞いた。

「バオレル、君はまちがつてる。市民階級は悲劇を愛するものだ。この点だけはほうっておくがいい。鬢かつらの悲劇にも存在の理由がある。僕はアイスキロスを持ち出してその存在の権利を否定する輩やからではない。自然のうちには草案があるんだ。創造のう

ちにはまつたく擬作の時代があるんだ。嘴くちばしでない嘴、翼みづかきでない翼みづかき、足でない足、笑いたくなるような悲しい泣き声、そういうもので家鴨あひるは成り立ってる。そこで、家禽かきんが本当の鳥と並び存する以上は、クラシックの悲劇も古代悲劇と並び存していけないはずはない。」

あるいはまた偶然、マリユスはアンジョーラとクールフェーラックとの間にはさまって、ジャン・ジャック・ルーソー街を通った。

クールフェーラックは彼の腕をとらえた。

「いいかね。これはプラートルリエール街だ。しかるに六十年ほど前に一風変わった家族が住んでいたために、今日ではジャン・ジャック・ルーソー街と名づけられてる。その家族というのは、ジャン・ジャックとテレーズだった。時々そこでは赤ん坊が生

まれた。テレーズがそれを生むと、ジャン・ジャックがそれを捨ててしまった。」

すると、アンジョーラはクールフェーラックをひじ腕でつついた。

「ジャン・ジャックに対しては黙っていたまえ。僕はその男を賛美しているんだ。彼は自分の子を打ち捨てはしたさ。しかし彼は民衆を拾い上げたじゃないか。」

その青年らはだれも、「皇帝」という言葉を口にしなかった。一人ジャン・プルーヴェールだけは時々ナポレオンと言った。ほかの者らは皆ボナパルトと言っていた。アンジョーラはブオナパルトと発音していた。

マリウスは漠然ぼくぜんと驚きを感じた。知恵のはじめなり。(訳者注)  
神を―帝王を―恐るるは知恵のはじめなり)

四 ミューザン珈琲店コーヒーの奥室

それらの青年らの会話には、マリユスもい合わしまた時々は口出しをしたが、そのうちの一つは、彼の精神に対して真の動揺を及ぼした。

それはミューザン珈琲店の奥室で行なわれた。その晩、A B Cの友のほとんど全部が集まっていた。燈火は煌々こうこうともされていた。人々は激せずしかも騒々しく、種々なことを話していた。沈黙してるアンジョーラとマリユスとを除いては、皆手当たりしだいに弁じ立てていた。仲間同士の話というものは、しばしばそういう平和な喧騒けんそうをきたすものである。それは会話であると同時にカルタ遊びであり混雑であつた。人々は言葉を投

げ合つては、その言葉じりをつかみ合つていた。人々は方々のすみずみで話をしていた。

だれも女はこの奥室に入るのを許されていなかった。ただルイゾンという珈琲皿を洗う女だけは許されていて、時々洗い場から「実験室」（料理場）へ行くためにそこを通つていた。

すつかりいい気持ちに酔つてるグランテールは、一隅いちぐうに陣取つてしゃべり立てていた。彼は屁理屈へりくつをこね回して叫んでいた。

「ああ喉のどがかわいた。諸君、僕には一つの望みがあるんだ。ハイドルベルヒの酒樽さかだるが中気にかかつて、蛭ひるを十二匹ばかりそれにあてがつてやりたいというんだ。僕は酒が飲みたい。僕は人生を忘れたい。人生とはだれかが考え出したいやな発明品だ。そんなものは長続きのするものではない、何の価値もあるものではない。生きることにおいて人は首の骨をくじいている。人生

とは実際の役に立たない飾り物だ。幸福とは片面だけ色を塗つた古額に過ぎない。伝道之書は言う、すべて空くうなり。おそらくかつて存在しなかつたかも知れないその善人と、僕は同様の考えを持つてゐる。零ゼロはまっ裸で歩くことを欲しないから、虚栄の衣をまとうのだ。おお虚栄！ 仰山な言葉ですべてに衣を着せたもの、台所は実験室となり、踊り児は先生となり、道化者は体育家となり、拳闘けんとう家は闘士となり、薬局の小僧は化学者となり、鬻師かつらしは美術家となり、泥工は建築師となり、御者は遊獵者となり、草鞋虫わらしむしは翼鯁虫となる。虚栄には表裏両面がある。表面は愚で、ガラス玉をつけた黒人くろんぼだ。裏面はばかで、ぼろをつけた哲学者だ。僕は前者を泣き、後者を笑う。名誉とか威厳とか言われるもの、名誉および威厳そのものも、一般に人造金でできてるに過ぎない。国王は人間の自尊心おもぢやを玩具おもちゃにしてるん

だ。カリグラは馬を督政官にした。シャルル二世は牛肉を騎士にした。ゆえに諸君は、督政官インシタツスと従男爵ローストビーフ（訳者注 前者は馬、後者は焼き肉）との間をいばり歩くべしだ。人間の真価に至つては、もはやほとんど尊敬さるる価値がなくなつてゐる。隣同士の賛辞をきいてみたまえ。白に白を重ねるとひどいことになる。白百合しろゆりが口を開くとすれば、いかに鳩はとのことを悪口するだろうか。狂信者をそしる盲信者は、蝮蛇まむしや青蛇あおへびよりももつと有害な口をきく。僕が無学なのは残念なわけだ。種々たくさん例をあげたいが、僕は何にも知らない。だが僕は常に機才を有していたんだ。グロの弟子でしになつていた時には、雑画を書きなぐるよりも林檎りんごを盗んで日を送つたものだ。ラパン（下手画工）はラピーヌ（奪略）の男性だ。僕はそれだけの人間だ。しかし君らだつて僕と同じようなものさ。僕は

諸君の完全無欠や優越や美点を何とも思わない。すべての美点は欠点のうちに投げ込まれるものだ。儉約は吝嗇りんしやくに近く、寛大は浪費に接し、勇氣はからいばりに隣する。きわめて敬虔けいけんなことを云々うんぬんする者は、多少迷信的な言葉を発するものだ。ディオゲネスの外套がいとうに穴があると同じく、徳の中にもまさしく悪徳がある。諸君はいずれを賛美するか、殺されたる者と殺したる者と、すなわちシーザーとブルツスとを。一般に人は殺した者の方に味方する。ブルツス万歳、彼は人殺しをした。すべて徳とはそんなものさ。徳というか、それもいい、しかしそれはまた狂気だ。そういう偉人には不思議な汚点がある。シーザーを殺したブルツスは、小さな男の兎の像に惚ほれ込んだ。その像はギリシャの彫刻家ストロンジリオンの作ったものだ。彼はまた美しき脚あしと呼ばれる女傑エウクネモスの姿を刻んだ。するとネロ

が旅行中にそれを持ち去ってしまった。そしてこのストロンジリオンは、ブルツスとネロとを一致せしめた二つの彫像しか後世に残さなかつた。ブルツスは一方に惚れ込み、ネロは他方に惚れ込んだ。歴史なるものは長たらしいむだ口に過ぎない。一つの世紀は他の世紀の模倣にすぎない。マレンゴの戦いはピドナの戦いの模写であり、クロヴィスのトルビアックの戦いとナポレオンのアウステルリッツの戦いとは、二滴の血潮のように似通っている。僕は戦勝を尊敬しはしない。戦いに勝つというほどばかげたことはない。真の光栄は信服せしむることにある。まあ何か証明せんと努めてみたまえ。諸君は成功して満足するが、それも何というつまらないことだ。諸君は打ち勝つて満足するが、それは何というみじめなことだ。ああ至る所、虚栄と卑怯ひきようとのみだ。すべては成功にのみ臣事している。文法ま

でがそうだ。万人成功を欲す、とホラチウスは言った。だから僕は人類を軽蔑けいべつする。全から部分へ下れと言うのか。諸君は僕に民族を賛美し初めよと言うのか。乞こうまずいかなる民族をやだ。ギリシヤなのか。昔のパリイ人たるアテネ人らは、あたかもパリイ人らがコリニーを殺したようにフォキオンを殺し、アナセフォラスがピシストラッスのことを、彼の尿は蜜蜂みつばちを呼ぶと言ったほどに、暴君に媚こびていたのだ。五十年間ギリシヤで最も著名な人物は、文法家のフィレタスだった。きわめてちつぽけなやせ男だから、風に吹き飛ばされないようにと靴くつに鉛をつけておかなければならなかった。コリントの大広場には、シラニオンが彫刻しプリニウスが類別した像が立っていた。それはエピスタテスの像だ。ところがエピスタテスという男は何をしたか。彼は足がらみを発明したにすぎない。ギリシヤとその

光栄とは、それだけのうちにあるんだ。それから他の例に移つてみよう。僕はイギリスを賞賛すべきなのか。フランスを賞賛すべきなのか。フランスだつて？　そしてその理由もパリイがあるためなのか。しかし昔のパリイたるアテネについての意見は今述べたとおりだ。またイギリスの方は、ロンドンがあるためなのか。僕は昔のロンドンたるカルタゴがきらいだ。それからロンドンには、華美の都だがまた悲惨の首府だ。チャーリング・クロス教区だけでも、年に百人の餓死者がある。アルビオン（訳者注 古代ギリシャ人がイギリスに付せし名称）とはそういう所だ。なおその上、薔薇ばらの冠と青眼鏡あおめがねとをつけて踊つてるイギリスの女を見たこともあると、僕はつけ加えよう。イギリスなどはいやなことだ。しかれば、ジョンブルを賛美しないとすれば、その弟のジョンサンを賛美せよと言うのか。僕はこの奴隷どれい

ばかりの弟は味わいたくない。時は、金なり、という言葉を除けば、イギリスには何が残るか。綿は、王なり、という言葉を除けば、アメリカには何が残るか。またドイツは淋巴液りんぱえきであり、イタリーは胆汁たんじゆうだ。あるいはロシアを喜ぶべきであるか。ヴォルテールはロシアを賛美した、また支那をも賛美した。僕とても、ロシアは美を有している、なかんずくすぐれたる専制政治を有している、ということとは認むる。だが僕は専制君主を気の毒に思うものだ。彼らの生命は弱々しいものだ。ひとりのアレキシスは斬首ざんしゆされ、ひとりのピーターは刺殺され、ひとりのポールは絞殺され、もひとりのポールは靴の踵かかとで踏みつぶされ、多くのイワンは喉を裂かれ、数多のニコラスやバジルは毒殺されたのだ。そしてそれらのことは、ロシア皇帝の宮殿が明らかに不健康な状態にあることを示すものだ。開化せるあらゆる民族は、戦争

という一事を持ち出して思想家に賛美させる。しかるに戦争は、文明的戦争は、ヤクサ山の入り口における強盗の略奪より、パス・ドートウーズにおけるコマンシユ土蛮の劫掠ごうりやくに至るまで、山賊のあらゆる形式を取り用い寄せ集めたものである。諸君は僕に言うだろう、なあに、ヨーロッパはそれでもアジアよりはすぐれたる価値を持つてゐるではないかと。僕もアジアは滑稽こっけいであることに同意する。しかし僕は諸君は達頼喇嘛ダライラマを笑い得るの権利があるとは認めない。西欧民族たる諸君は、イサベラ女王のきたない下着からフランス皇太子の厠椅子かわやいすに至るまで、威嚴の箔はくをつけたあらゆる汚物を、流行と上品とのうちに混入せしめたではないか。人類諸君、僕は諸君に、ああ止やんぬるかなと言いたい。ブラッセルでは最もよく麦酒ビールを飲み、ストックホルムでは最もよく火酒ウォッカを飲み、マドリッドでは最もよくチョコレート

を、アムステルダムでは最もよくジン酒を、ロンドンでは最もよく葡萄酒ぶどうしゅを、コンスタンチノーブルでは最もよく珈琲コーヒーを、パリでは最もよくアブサントを、人は飲むんだ。そして有用な観念はそういう所にこそ存する。全体としてはパリが一番すぐれている。パリでは、屑屋くずやに至るまで遊蕩児ゆうとうじである。デイオゲネスも、ピレウスで哲学者たるよりは、パリーのモーベル広場で屑屋たる方がいいと思うに違いない。それからなお、こういうことを学びたまえ。屑屋の酒場はこれを一口屋と称するんだ。その最も有名なのはカスロールとアバットアールとである。そこで、葉茶屋はじやや、面白屋、一杯屋、銘酒屋、寄席亭よせ、冷酒屋、舞踏亭、曖昧屋あいまいや、一口屋、隊商亭よ、僕こそまさしく快樂児だ。リシャルルの家で一人前四十スーの食事をしたこともある。クレオパトラを裸にしてころがすには、ペルシヤの絨毯じゅうたん

がなくてはいけない。クレオパトラはどこにいるんだ。ああお前か、ルイゾン、今日は。」

酩酊めいていを通り越してるグランテールは、ミュージザン珈琲店コーヒーの奥室の一隅いちぐうで、通りかかった皿洗いの女を捕えて、そんなふうにしやべり散らした。

ボシユエは彼の方へ手を差し出して、彼を黙らせようとした。するとグランテールはますますよくしやべり立てた。

「エーグル・ド・モー、手をおろせ。アルタクセルクセスの古衣を拒むヒポクラテスのようなまねをしたって、僕は何とも思やしない。僕は君のために黙りはしない。その上僕は悲しいんだ。君は僕に何を言ってもらおうというのか。人間というもののは悪い奴やつだ、見つともない奴だ。蝶々ちょうちようが勝ちで、人間が負けだ。神はこの動物をつくりそこなつた。一群の人間を取ってみると

まったく醜悪の選り抜きとなる。どいつもこいつもみじめなものだ。女は破廉恥と韻が合うんだ、そうだ、僕は憂鬱病にかかっている。メランコリーにかき回され、ノスタルジーにかかり、その上ヒポコンデリアだ。そして僕は腹が立ち、憤り、欠伸をし、退屈し、苦しみ、いや気がさしてるんだ。神なんか悪魔に行つちまえだ。」

「大文字R、まあ黙つておれつたら。」とボシユエは言った。彼はまわりの仲間と権利ということを論じていて、半ば以上裁判の専門語に浸りきつていたが、その結末はこうであつた。

「……僕はほとんど法律家とは言えず、たかだか素人検事というくらいのところだが、その僕をして言わしむれば、こういうことになるんだ。ノルマンディーの旧慣法の条項によれば、サン・ミシユルにおいては、毎年、所有者ならびに遺産受理者の

全各人によつて、他の負担は別として、当価物が貴族のために支払われなければならない、しかしてこれは、すべての永貸契約、賃貸契約、世襲財産、公有官有の契約、抵当書入契約……。」

「こた木魂よ、嘆けるニンフよ……。」とグランテールは口ずさんだ。

グランテールのそばには、ほとんど黙り返つたテーブルの上に、二つの小さなコップの間に一枚の紙とインキ壺とペンとがあつて、小唄がこうたでき上がりつつあることを示していた。その大事件は低い声で相談されていて、それに従事しているふたりの者は頭をくつつけ合つていた。

「名前を第一に見つけようじゃないか。名前が出てくれば事からも見つかるとだ。」

「よろしい。言いたまえ。僕が書くから。」

「ドリモン君としようか。」

「年金所有者か。」

「もちろん。」

「その娘は、セレスティーナ。」

「……ティーナと。それから。」

「サンヴァル大佐。」

「サンヴァルは陳腐だ。僕はヴァルサンと言いたいね。」

小唄を作ろうとしてる人々のそばには他の一群がいて、混雑にまぎらして低い声で決闘を論じていた。年上の三十歳くらいの男が年若の十八歳くらいの男に助言して、相手がどんな奴やつだか説明してやっていた。

「おい気をつけろよ。剣にはあいつかなりな腕を持つてるんだ。ねらいが確かだ。攻撃力があり、すきを失わず、小手と、奇襲はやわぎと、早術はやわぎと、正しい払いと、正確な打ち返しとに巧みなんだ。そ

して左利きだ。」

グランテールの向こうの角には、ジョリーとバオレルとがドミノ遊びをやり、また恋愛の話をしていた。

「君は幸福だね、」とジョリーは言った。「君の女はいつも笑っている。」

「それがあれの悪いところなんだ。」とバオレルは答えた。「女が笑うというのはいけないものだ。そんなことをされるとだましてやりたくなる。実際、快活な女を見ると後悔するという気は起こらなくなるものだ。悲しい顔をされてると良心が出て来るからね。」

「義理を知らない奴だな。笑う女は非常にいいじゃないか。そして君たちは決してけんかをしたこともなしさ。」

「それは約束によるんだ。僕らはちよつと神聖同盟を結んで互

いに国境を定め、それを越えないことにしている。寒風に吹きさらされてる方はヴォーに属し、軟風の方はジェックスに属するというわけだ。そこから平和が生まれるんだ。」

「平和、それは有り難い仕合わせだね。」

「だがね、ジヨリリリリ、君はどうしてまた御令嬢とけんかばかりしてるんだ。……御令嬢と言えばわかるだろう。」

「あいつはいつもきまつてふくれつ面つらばかりしてるんだ。」

「だが君は、かわいいほどやせほおけた色男だね。」

「ああ！」

「僕だったらあの女をうまく扱ってやるがね。」

「言うはやすしき。」

「行なうもまた同じだ。ムエジシエッタというんだったね。」

「そうだ。だが君、りっぱな女だぜ。非常に文学が好きで、足

が小さく手が小さく、着物の着つけもいいし、まつ白で、肉がよくついていて、カルタうらない占女のような目をしている。僕はすっかり打ち込んだじゃった。」

「それじゃあ、ごきげんを取り、上品に振る舞い、膝ひざの骨を働かせなくちやいかんよ。ストーブの家から毛糸皮のいいズボンを買ってきたまえ。それでうまくいくよ。」

「いくらくらいだ。」とグランテールが叫んだ。

第三番目のすみでは、夢中になって詩が論ぜられていた。多神教の神話はキリスト教の神話とぶつかり合っていた。オリンポスが問題となっていたが、ジャン・プルーヴェールはロマンティシズムからその味方をしていて。ジャン・プルーヴェールは静かな時しか内気ではなかった。一度興奮しだすとすぐに爆発し、一種の快活さがその熱烈の度を強め、嬉き々きたると同時に

叙情的になつた。

「神々を悪く言いたもうな。」と彼は言つた。「神々はおそらく消滅してはしない。ジュピテルは僕にとつては死んだとは思えない。神々は夢にすぎないと君らは言うのか。だが今日のような自然のうちにも、その夢が消え去つた後にもまた、あらゆる偉大な多神教的神話が出て来るんだ。たとえば、城砦じょうじょうざいの姿をしてるヴィニユマル山（訳者注　ピレーネー山脈の高峰）は、僕にとつてはなおキベール神の帽子なんだ。またパンの神が夜ごとによつてきて、柳の幹の空洞くうどうの穴を一つ一つ指でふさいで笛を吹かないとは限らない。ピスヴァーシユの滝には何かのため

にイオの神がやつてきてるに違いないと、僕はいつも思つたものだ。」

最後の第四すみでは、政事が論ぜられていた。人々は特許憲

法を酷評していた。コンブフェールは穏やかにそれに賛成していたが、クールフェーラックは忌憚きたんなく攻撃の矢を放っていた。テーブルの上には折悪しく有名なトゥーケ法の一部が置いてあった。クールフェーラックはそれをつかんで打ち振り、その紙の音を自分の議論に交じえていた。

「第一に、僕は王を好まない。経済の点から言っても好ましくない。王とは寄食者だ。王を養うには費用がかかるんだ。聞きたまえ。王というものは高価なものなんだ。フランソア一世が死んだ時、フランスの公債利子は年に三万リーヴルだった。ルイ十四世が死んだ時は、配当二十八リーヴルのものが二十六億あった。それはデマレーの言によると、一七六〇年の四十五億に相当し、今日では百二十億に相当する。第二に、コンブフェールにははなはだ気の毒の至りだが、特許憲法は文明の悪い手段

だ。過渡期を救う、推移を円滑にする、動揺をしずめる、立憲の擬政を行なつて国民を王政から民主政に自然に転ぜしむる、そういう理屈はすべて唾棄すべきものだ。否々、偽りの光でもつて民衆を啓発すべきではない。そういう憲法の害あなぐらの中では、主義は萎靡いびし青ざめてしまふ。廃退は禁物である。妥協は不可である。王が民衆に特許憲法を与えるなどとは断じていけない。すべてそういう特許憲法には卑劣な第十四条というのがある。与えんとする手の傍かたわらには、つかみ取らんとする爪がある。僕は断然君のいわゆる憲法を拒絶する。憲法というのは仮面だ。裏には虚偽がある。憲法を受くるには民衆は讓歩しなければならぬ。法とは全き法のみである。否、憲法なんかはだめだ。」

時は冬であつた。二本の薪まきが暖炉の中で音を立てて燃えていた。いかにも人を誘うがよう、クールフェーラックはそれに

ひかされた。彼は手の中で哀れなトウーケ法をもみくちやにして、火中に投じた。紙は燃えた。コンブフェールはルイ十八世の傑作が燃えるのを哲学者のようにながめた。そしてただこう言つて満足した。

「炎に姿を変えた憲法だ。」

かくして、きし譏刺、あくぎやく客氣、あくぎやく悪諛、活氣と呼ぶるフランス氣質、ユーモアと呼ぶるイギリス氣質、善趣味と悪趣味、道理と屁理屈へりくつ、對話のあらゆる狂氣火花、それが室へやの四方八方に一時に起こり乱れ合つて、一種の快活な砲戦のありさまを人々の頭上に現出していた。

## 五 地平の拡大

青年の間の精神の衝突は驚嘆すべきものであつて、その火花を予測しその輝きを解くことはできないものである。忽然としこっぜんて何がほとばしり出るか、それはまったく測り知るを得ない。悲しんでいるかと思えば呵々かか大笑し、冗談を言っているかと思えば突然まじめになる。その導火線は偶然に発せらるる一言にかかつている。各人の思いつきはその主人となる。無言の所作さえも意外な平野を展開させるに足りる。たちまちにして視界の変化する急激な転向を事とする対話である。偶然がかかる会話の運転手である。

言葉のかち合いから妙なふうに起こつてきた一つの嚴肅な思想が、グランテール、バオレル、プルーヴェール、ボシユエ、コンブフェール、クールフェーラツクらの入り乱れた言葉合戦の中を、突如としてよぎつていった。

対話の中にいかにして一つの文句が起こってくるか。いかにしてその文句が突然聞く人々の注意をひくに至るのか。今述べたとおり、それはだれにもわからないことである。ところで、喧囂けんごうの最中に、ボシユエはふいにコンブフェールに何か言いかけて、次の日付でその言葉を結んだ。

「一八一五年六月十八日、ワートルロー。」

そのワートルローという言葉に、水のコップをそばにしてテールひじに肱をついていたマリユスは頤おとがいから拳こぶしをはずして、じつと聴衆をながめ初めた。

「そうだ、」とクールフェーラックは叫んだ、「この十八という数は不思議だ。実に妙だ。ボナパルトに禁物の数だ。前にルイという字を置き後に霧月という字を置いて見たまえ（訳者注）ルイ十八世およびナポレオンがクーデターを断行した十八日霧月

共和八年、——また六月十八日のワーテルロー。始めと終わりとがつきまとう意味深い特質をもったこの人間の全宿命が、そこにあるんだ。」

アンジョーラはその時まで黙っていたが、沈黙を破ってクルフエーラツクに言った。

「君は贖罪しよくざいという語をもつて、罪悪を意味させるんだろう。」  
突然ワーテルローという語が現われたので既にいたく激していたマリユスは、この罪悪ざいあくという語を聞いてもうたえ切れなくなった。

彼は立ち上がって、壁にかかっているフランスの地図の方へおもむろに歩み寄った。地図の下の方を見ると、一つの小さな島が別に仕切りをして載っていた。彼はその仕切りの上に指を置いて言った。

「コルシカ島、これがフランスを偉大ならしめた小島だ。」

それは凍った空気の息吹いぶきのようだった。人々は皆口をつぐんだ。何か起こりかけていることを皆感じた。

バオレルはボシユエに何か答えながら、いつもやる半身像めいた姿勢をとろうとしていたが、それをやめて耳をそばだてた。

だれも見ないでその青い眼をただ空間に定めてるようなアンジョーラは、マリユスの方をも顧みないで答えた。

「フランスは偉大となるためには何もコルシカ島などを要しない。フランスはフランスだから偉大なんだ。我の名は獅子ししなればなりだ。」

マリユスはそれで引つ込もうとしなかった。彼はアンジョーラの方を向き、内臓をしぼって出て来るようなおののいた声で叫んだ。

「僕はあえてフランスを小さくしようとするのではない。ナポレオンをフランスに結合することは、フランスを小ならしむる所以ゆえんとはならない。この点を一言さしてくれたまえ。僕は君らの中では新参だ。しかし僕は君らを見て驚いたと言わざるを得ない。いったいわれらの立脚地はどこにあるのか。いったいわれらは何者なのか。君らは何人なんびとか。僕は何人なんびとか。まず皇帝のこゝとを説こう。僕の聞くところでは、君らは王党のように力を入れてブオナパルトと言っている。が僕の祖父はもつとまゝく発音していると君らに知らしてやりたい。祖父はブオナパルテと言っているんだ。僕は諸君を青年だと思っていた。しかるに諸君は熱情をどこにおいてるのか。そしてその熱情を何に使おうとしているのか。もし皇帝を賛美しないとしたら、だれを賛美しようとするのか。それ以上に、諸君は何を欲するのか。

かかる偉大を欲しないとしたら、いかなる偉人を欲するのか。彼はすべてを持つていたのだ。彼は完璧かんぺきであつた。彼はその頭脳の中に、人間の能力の全量を収めていた。彼はユスチニアヌスのように法典を作り、シーザーのように命令し、タキツスの雷電とパスカルの閃光せんこうとを交じえた談話をし、自ら歴史を作り自らそれを書き、イリヤツドのような報告をつづり、ニュートンの数理とマホメットの比喩ひゆとを結合し、ピラミッドのように偉大な言葉を近東に残した。テイルシットでは諸皇帝に威厳を教え、学芸院ではラプラスに応答し、参事院ではメルランに對抗し、一方では幾何学に他方では訴訟に魂を与え、検事らとともにあつては法律家であり、天文学者らとともにあつては星学家だつた。クロンウエルが二本の蠟燭ろうそくの一本を吹き消したように、彼はタンブルの殿堂へ行つて窓掛けの総ふさに難癖をつけた。

彼はあらゆることを見、あらゆることを知っていた。しかもなお赤児の揺籃ゆりかごに対しては人のいい笑いを浮かべた。そしてたちまちにして、ヨーロッパは色を失い耳をそばだて、軍隊は行進を初め、砲車は回転し、船橋は河川に渡され、雲霞うんかのような騎兵は颶風ぐふうの中を駆けり、叫喚の声、ラツパの響き、至る所王位は震動し、諸王国の境界は地図の上に波動し、鞘さやを払った超人の剣の音は鳴り渡り、そして人々は、彼が手に炎を持ち、目に光を帯び、大陸軍と老練近衛軍との二翼を雷鳴のうちに展開して、地平にすつくと立ち上がるのを見た。それは実に戦いの天使だったのだ。」

皆は沈黙していた。そしてアンジョーラは頭を下げていた。沈黙は多くの場合、承認かあるいは一種の屈服の結果である。マリユスはほとんど息もつかずに、ますます熱烈さを増して言

い続けた。

「諸君、正しき考えを持つとうではないか。そういう皇帝の帝国たるは、一民衆にとつていかにも光輝ある運命ではないか。そしてこの民衆が実にフランスであり、この民衆はその才能をこの人物の才能に結合したのだ。出現し君臨し、進み行き、勝利を博し、あらゆる国都を宿場とし、自分の擲弾兵を取つて国王となし、諸王朝の顛覆を布告し、一蹴してヨーロッパを変造し、攻め寄せる時には神の劍の柄を執れるかの感を人にいだかしめ、ハンニバル、シーザー、シャールマーニユを一身に具現した者、そういう者に従い、目ざむる曙ごとに光彩陸離たる戦勝の報知をもたらす者の民となり、アンヴァリードの砲声を起床の鐘となし、マレンゴー、アルコラ、アウステルリッツ、イエナ、ワグラムなど、永久に赫々たる驚嘆すべき戦勝の名を光明の淵に

投じ、幾世紀の最高天に毎瞬時戦勝の星座を開かしめ、フランス帝国をローマ帝国と比肩せしめ、大国民となり大陸軍を生み出し、山岳が四方に鷲を飛ばすがように、地球上にその軍隊を飛躍せしめ、戦勝を博し、征服し、撃ち碎き、ヨーロッパにおいて光栄の黄金をまとう唯一の民衆となり、歴史を通じて巨人のラツパを鳴り響かし、勝利と光耀こうようとによつて世界を二重に征服すること、それは実に崇高ではないか。およそこれ以上に偉大なるものは何があるか。」

「自由となることだ。」とコンブフェールは言った。

こんどはマリウスの方で頭をたれた。その簡単な冷ややかな一語は、鋼鉄の刃のように彼の叙事詩的な激語を貫き、彼はその激情が心の中から消えてゆくのを覚えた。彼が目を上げた時、コンブフェールはもうそこにいなかった。彼の賛美に対するに

その一言の返報でおそらく満足して、出て行ってしまった。そしてアンジョーラを除くのほか、皆その後についていった。室へやの中はむなしかつた。アンジョーラはマリユスのそばにただ一人居残つて、その顔をおごそかに見つめていた。けれどもマリユスは、再び思想を少し建て直して、自分を敗北した者とは思わなかつた。彼のうちにはなお慷慨こうがいのなごりがさめず、まさにアンジョーラに向かつて三段論法の陣を展開せんとした。その時ちようど立ち去りながら階段の所で歌う声が聞こえた。それはコンブフェールであつた。その歌はこうである。

よしやシーザーこのわれに

誉なと戦を与うとも、

母に対する恩愛を

打ち捨て去るを要しなば、

われシーザーにかく言わん、

笏しやくと輦くるまは持ちて行け、

われは母をばただ愛す、

われは母をばただ愛す。

コンブフェールが歌うそのやさしい粗野な調子は、歌に一種の不思議な偉大さを与えていた。マリユスは考え込んで、天井を見上げ、ほとんど機械的にくり返した。「母？……」

その時、彼は自分の肩にアンジョーラの手が置かれたのを感じた。

「おい、」とアンジョーラは彼に言った、「母とは共和のことだ。」

六 逼迫ひつぱく

その晩のことは、マリウスに深い動揺を残し、彼の心のうちに悲しい暗黒を残した。麦の種を蒔まくために鉄の鋤くわで掘り割られる時に、地面が受くるような感じを、彼もおそらく感じたであろう。その時はただ傷をのみ感ずる。芽ぐみのおののきと実を結ぶ喜びとは、後日にしかやってこない。

マリウスは陰鬱いんうつになった。彼はようやく一つの信仰を得たばかりだった。それをももう捨ててしまわなければならぬのか。彼は自ら否と断言した。疑惑をいなくを欲しないと自ら宣言した。それでもやはり疑い初めた。二つの宗教、一つはいまだ脱し得ないもの、一つはいまだ入り込み得ないもの、その中間にあるはたえ難いことである。かかる薄暮の薄ら明りは、蝙蝠こうもりのよ

うな心をしか喜ばせない。マリユスははつきりした眸ひとみであつた。彼には真の光明が必要だつた。懐疑の薄明は彼を苦しめた。彼は今あるがままの場所にとどまりたいと願ひ、そこに固執していたいと願つた。しかしうち勝ち難い力によつて、続行し、前進し、思索し、思考し、いつそう遠く進むべく余儀なくされた。どこに彼は導かれんとするのであろうか。かくばかり前方に踏み出して父に近づいた後になつて、更にこんどは父より遠ざかる歩みを続けてゆくこと、それを彼は恐れた。新たに起こつてきたあらゆる反省によつて、彼の不安は増していった。嶮崖けんがいが彼の周囲に現われてきた。彼は祖父とも友人らとも融和していなかつた。一方の目から見れば彼は無謀であり、他方の目から見れば彼はおくれていた。そして彼は一方に老年と他方に青年と、両方から二重に孤立していることを認めた。彼はミューザ

ン珈琲店コーヒーに行くことをやめた。

本心がかく悩まされて、彼は生活のまじめなる方面はほとんど少しも考えていなかった。しかし人生の現実には、忘れ去らるるを許さない。現実突然彼に肱ひじの一撃を与えにきた。

ある日、宿の主人はマリユスの室へやへはいつてきて、彼に言った。

「クールフェーラックさんが、あなたのことを引き受けて下さるんですね。」

「そうです。」

「ですが私は金がいるんですが。」

「クールフェーラック君に、話があるからきてくれと言って下さい。」とマリユスは言った。

クールフェーラックはやってき、主人は去って行った。マリ

ユスは彼に、今まで口にしようとも思わなかつたことを、自分は世界に孤独の身で親戚もないということを語つた。

「君はいつたい何になるつもりだい。」とクールフェーラックは言つた。

「わからないんだ。」とマリユスは答えた。

「何をするつもりだい。」

「わからない。」

「金は持つてるのか。」

「十五フランだけだ。」

「では僕に貸せというのか。」

「いや決して。」

「着物はあるのか。」

「あれだけある。」

「何か金目かねめのものでも持つてるのか。」

「時計が一つある。」

「銀か。」

「金きんだ。このとおり。」

「僕はある古着屋を知っている。君のフロックとズボンを買つてくれるだろう。」

「そいつは好都合だ。」

「ズボンとチョッキと帽子と上衣うわぎとを一つずつ残しておけばたくさんだろう。」

「それから靴くつと。」

「何だつて！ 跣足はだしで歩くつもりじゃないのか。ぜいたくな奴やつだね。」

「それだけで足りるだろう。」

「知ってる時計屋もある。君の時計を買ってくれるだろう。」

「それもいいさ。」

「いやあまりよくもない。ところでこれから先君はさきどうするつもりだ。」

「何でもやる。少なくとも悪いことでさえなければ。」

「英語を知ってるか。」

「いや。」

「ドイツ語は？」

「知らない。」

「困ったね。」

「なぜだ？」

「僕の友人に本屋があるんだが、百科辞典のようなものを作るので、ドイツ語か英語かの項でも翻訳すればいいと思ったのさ。」

あまり報酬はよくないが、食つてはいける。」

「では英語とドイツ語を学ぼう。」

「その間は？」

「その間は着物や時計を食つてゆくさ。」

彼らは古着屋を呼びにやった。古着屋は古服を二十フランで買った。彼らは時計屋へ行った。時計屋は四十五フランで時計を買った。

「悪くはないね。」と宿に帰りながらマリユスはクールフェーラックに言った。「自分の十五フランを加えると八十フランになる。」

「そして宿の勘定は？」とクールフェーラックは注意した。

「なるほど、すっかり忘れていた。」とマリユスは言った。

宿の主人は勘定書を持ってきた。すぐに払わねばならなかつ

た。七十フランになつていた。

「十フラン残つた。」とマリユスは言った。

「大変だぞ、」とクールフェーラックは言った、「英語を学ぶ間に五フランを食い、ドイツ語を学ぶ間に五フランを食つてしまふ。語学を早くのみ込んでしまふか、百スーをゆつくり食いつぶすかだ。」

そうこうするうちに、悲しい場合になるとかなり根が親切なジルノルマン伯母おばは、マリユスの宿をかぎつけてしまった。あの日の午前、マリユスが学校から帰つて来ると、伯母の手紙と、密封した箱にはいつた六十ピストル、すなわち金貨六百フランとが、室へやに届いていた。

マリユスはうやうやしい手紙を添えて、三十のルイ金貨を伯母のもとへ返してやつた。生活の方法を得たし今後決してさし

つかえない程度にはやってゆけると彼は書いた。その時彼にはただ三フラン残ってるのみだった。

伯母おばは祖父をますます怒らせはしないかを気づかって、その拒絶を少しも知らせなかった。その上祖父は言っておいたのである、「あの吸血児のことは決して私の前で口にするな。」

マリユスはそこで借金をしたくなかったので、ポルト・サン・ジャックの宿を引き払った。

## 第五編 傑出せる不幸

## 一 窮迫のマリウス

マリウスにとって生活は苦しくなつた。自分の衣服と時計とを食うのは大したことではない。彼はいわゆる怒つた牝牛めうしという名状すべからざるものを食つたのである（訳者注 怒つたる牝牛を食うとは困窮のどん底に達するの意）。それは実に恐るべきもので、一片のパンもない日々、睡眠のない夜々、蠟燭ろうそくのない夕、火のない炉、仕事のない週間、希望なき未来、肱ひじのぬけ

た上衣うわぎ、若い娘らに笑われる古帽子、借料を払わないためしめ出される夕の戸、門番や飲食店の主人から受くる侮辱、近所の者の嘲りあざけ、屈辱、踏みにじられる威厳、選り好みのできない仕事、嫌悪けんお、辛苦、落胆、などあらゆるものを含んでいる。そしてマリウスは、いかにして人がそれらを貪り食むさうか、いかにし**ば**し**ば**人はそれらのもののほかのみ下すべきものがないか、それを学んだのである。愛を要するがゆえに自尊をも要する青春の頃において、服装の賤いやしいゆえにあざけられ、貧しいゆえに冷笑されるのを、彼は感じた。いかめしい矜持きやうじに胸のふくれ上がるのを覚ゆる青年時代において、彼は一度ならず穴のあいた自分の靴の上に目を落としては、困窮の不正なる恥辱と痛切なる赤面とを知った。それは驚くべき恐るべき試練であつて、それを受くる時、弱き者は賤劣せんれつとなり強き者は崇高となる。運命

があるいは賤夫をあるいは半神を得んと欲する時、人を投ずるるつぽ 坩堝である。

なぜなれば、かえつて小さな奮闘のうちにこそ多くの偉大なる行為がなされる。窮乏と汚行との必然の侵入に対して、影のうち的一步一步身をまもる執拗しつような人知れぬ勇氣があるものである。何人にも見られず、何らの誉れも報いられず、何らの歓呼のラツパにも迎えられぬ、気高い秘密な勝利があるものである。生活、不幸、孤立、放棄、貧困、などは皆一つの戦場であり、またその英雄がある。それは往々にして、高名なる英雄よりもなお偉大なる人知れぬ英雄である。

堅実にして稀有けううなる性格がかくしてつくり出さるる。ほとんど常に残忍なる継母である困窮は時として真の母となる。窮乏は魂と精神との力を産み出す。窮迫は豪胆の乳母うばとなる。不幸

は大人物のためによりき乳となる。

苦しい生活のある場合には、マリユスは自ら階段を掃き、八百屋でブリーのチーズを一スーだけ買い、夕靄ゆうもやのおりるのを待つてパン屋へ行き、一片のパンをあがなつて、あたかも盗みでもしたようにそれをひそかに自分の屋根部屋へ持ち帰ることもあつた。時とすると、意地わるな女中らの間に肱ひじで小突かれながら、片すみの肉屋にひそかにはいつてゆく、ぎごちない青年の姿が見えることもあつた。彼は小わきに書物を抱え、臆病おくびょうらしいままの立つた様子をして、店にはいりながら汗のにじんだ額かみから帽子をぬぎ、あつけにとられてる肉屋の上さんの前にうやうやしく頭を下げ、小僧の前にも一度頭を下げ、羊の筋肉ろくにくを一片求め、六、七スーの金を払い、肉を紙に包み、書物の間にはさんでわきに抱え、そして立ち去つていった。それはマリユスだつた。

彼はその筋肉を自ら煮、それで三日の飢えをしのぐのであった。初めの日は肉を食い、二日目はその脂あぶらを吸い、三日目にはその骨をねぶった。

幾度も繰り返してジルノルマン伯母おばは、六十ピストルを贈つてみた。しかしマリユスはいつも必要がないと言つてそれを送り返した。

前に述べた心の革命が彼のうちに起こつた時も、彼は父に対する喪服をなおつけていた。その時以来彼はもうその黒服を脱がなかつた。しかし衣服の方が彼から去つていった。ついにはもう上衣がなくなつた。次にズボンもなくなりかけていた。いかんとも術すべはなかつた。ただ彼もいくらかクールフェーラックに力を貸してやったことがあるので、クールフェーラックは彼に古い上衣を一枚くれた。マリユスはある門番に頼んで三十スー

でそれを裏返してもらつた。それで新しい一枚の上衣となつた。しかしその地色は緑だつた。それからは日が暮れなければマリユスは外に出なかつた。夜になると上衣の緑は黒となつた。常に喪服をつけていたいと願つて、彼は夜のやみを身にまとつたのである。

そういう境涯を通つて、彼はついに弁護士資格を得た。彼は表面上クールフェーラツクの室へやに住んでることにした。それはかなりの室で、そこには取つて置きはほんの幾冊かの法律の古本もあり、少しばかりの小説の端本はほんで補われ、弁護士としての規定だけの文庫には見られた。手紙も一切クールフェーラツクの所へあてさした。

マリユスは弁護士となつた時、冷ややかではあるが恭順と敬意とをこめた手紙を書いて祖父に報じた。ジルノルマン氏は身

を震わしながらその手紙を取り、それを読み下し、そして四つに引き裂いて屑籠くずかごに投げ込んだ。それから二、三日してジルノルマン嬢は、父がただ一人室の中で何か声高に言ってるのを聞いた。そういうことは、彼がきわめて激昂げっこうした時いつも起こることだった。ジルノルマン嬢は耳を傾けた。老人はこう言っていた。「貴様がばかできえなければ、同時に男爵で弁護士であるなどということができないのが、わかるべきはずだ。」

## 二 貧困のマリユス

貧窮も他の事と同じである。ついにはたえ得らるるものとなる。いつかはある形を取り、それに固まってゆく。人は貧窮にも生長する、換言すれば、微弱ではあるがしかし生きるには十

分な一種の仕方で発達してゆく。マリユス・ポンメルシーの生活がいかなる具合に整えられていったかは、次のとおりである。彼は最も狭い峠を越した。前にひらけた峽路はいくらか広くなった。勤勉と勇氣と忍耐と意思とをもつて、彼はついに年に約七百フランを働き出すようになった。彼はドイツ語と英語とを学んだ。クールフェーラックから友人の本屋に關係をつけてもらつて、その文学部の方につまらぬ端役を勤めることになった。広告文をつづり、新聞の翻訳をし、出版物に注を入れ、伝記を編み、その他種々のことをやった。それでともかく毎年、七百フランはきまつて収入があつた。それで生活を立てた。必ずしもひどい生活ではなかつた。どういふふうにして？ それに次に述べよう。

マリユスは年三十フランで、ゴルボー屋敷のきたない室へやを一

つ借り受けた。書齋とは言っていたが暖炉もなく、道具としてはただ是非とも必要なものだけしかなかった。そのわずかな道具は自分のものだった。毎月三フランずつ借家主の婆さんに与えて、室を掃除そうじしてもらい、毎朝少しの湯と新しい鶏卵を一つと一スーのパンとを持ってきてもらった。彼はそのパンと卵とで朝食をすました。卵の高い安いによつてその昼食は二スーから四スーまでの間を高低した。晩の六時にサン・ジャック街に出ていつて、マテュラン街の角かどにある版画商バッセの店と向き合つたルーソーという家で夕食をした。スープは取らなかつた。食べるのは、六スーの肉の一皿、三スーの野菜の半皿、三スーのデザート。それからまた三スーで随意のパン。葡萄酒ぶどう酒の代わりには水を飲んだ。その頃はいつもでっぷりふとつてまだ色艶いろつやのよかつたルーソーの上かみさんが、いかめしく帳場に陣取つていた

が、彼はそこで金を払い、給仕に一スーを与えると、上さんは笑顔を見せてくれた。それから彼はそこを出た。十六スーで笑顔と夕食とを得るのだった。

そのルーソーの飲食店では、酒を飲むよりも水を飲む者の方が多く、料理屋レストランというよりもむしろ休憩所と言ったほどの所だった。今日はもうなくなっている。主人はおもしろい綽名あだなを持っていて、水のルーソーと呼ばれていた。

そういうふうにして、四スーで昼食をし十六スーで夕食をして、食べるの一日二十スーだけかかった。それで一年に三百六十五フランとなった。それに室代へやだいが三十フラン、婆さんに三十六フラン、その他少しの雑費。合計四百五十フランで、マリウスは食事と室と雑用とをすました。それから衣服が百フラン、シャツが五十フラン、洗たくが五十フラン。全部で六百五十フ

ランを出なかつた。そして手元に五十フラン残つた。彼は豊かであつた。場合によつては十フランくらいは友人に貸してやつた。クールフェーラックは一度六十フランも借りたことがあつた。火については、暖炉がなかつたのでマリユスはそれを「簡便に」しておいた。

マリユスはいつも二そろいの衣服を持つていた。一つは古くて「平素ふだんのため」のであり、一つは新しく特別の場合のためのであつた。両方とも黒だつた。またシャツは三つきりなかつた、一つは身につけ、一つは戸棚に入れて置き、も一つは洗たく屋にいつていた。損いたむにつれてまた新しくこしらえた。しかし普通いつも破けていたので、頤あごの所まで上衣のボタンをかけた。

マリユスがそういう立身をするまでには、幾年かの月日を要

した。それはきびしい年月で、過ぎるに困難な年であり、よじのぼるに困難な年であった。しかしマリユスは一日たりとも意気沮喪そそうしなかつた。彼は困苦ならばすべてを受け入れ、負債を除いてはあらゆることをなした。自分は何人なんびとにも一文の負債おいめもないと、彼は自ら公言していた。彼に言わすれば、負債は奴隷どれいの初まりであつた。債権者は奴隷の主人よりも悪いと彼は思っていた。なぜなれば、主人は単に人の身体を所有するのみであるが、債権者は人の威厳を所有しそれを侮辱することができるからである。金を借りるよりはむしろ食わない方を彼は望んだ。そして幾日も絶食したことさえあつた。彼はあらゆる極端が相接することを思い、注意しなければ物質的の零落は精神の墮落をきたすことを思つて、深く心の矜ほこりに注意していた。違つた境遇にあつたならば恭敬とも思われたかも知れない儀礼や行為

をも、今は屈辱と思われて、昂然こうぜんと頭を高くした。退くことを欲しないので、少しも無謀なことをやらなかつた。顔にはいつもいかめしい赤みをたたえていた。彼は苛酷かこくなるまでに内気だつた。

あらゆる困苦のうちにあつて、彼は心のうちにあるひそかな力から、励まされまた時には導かれるのを感じた。魂は身体を助ける、そしてある時には身体を支持する。籠かごをささえるのは中の鳥のみである。

マリユスの心のうちには、父の名と並んでも一つの名が刻まれている、すなわちテナルディエの名が。熱烈でまじめな性質のマリユスは、一種の円光をその男にきせていた。彼の考えでは、その男は父の生命の親であり、ワートルローの砲弾銃火の中にあつて大佐を救つた勇敢な軍曹であつた。マリユスは決して

父の記憶とその男の記憶とを離したことがなく、尊敬のうちに両者を結合していた。それは二段の礼拝で、大きな祭壇は大佐に対するものであり、小さな祭壇はテナルディエに対するものだった。そして彼の感謝の念を倍加せしめたものは、テナルディエが陥りのみ込まれたという不運のことを考えることだった。マリユスはモンフェルメイユで、不幸な旅亭主の零落と破産とを知った。それ以来彼は異常な努力をつくして、テナルディエの行方を探り、彼が没した困窮の暗黒なる深淵しんえんのうちに彼を探り出さんとつとめた。マリユスはあらゆる方面をさがし回った。シエル、ボンディー、グールネー、ノジャン、ランニー、方々へ行つてみた。三年の間彼はそれに夢中になり、たくわえたわずかの金をその探索に費やしてしまった。しかしだれひとりテナルディエの消息を知つてゐる者はなかつた。おそらく外国へで

も行つたのだらうと想像された。債権者らもまた、マリユスほどの好意はないが同じような熱心をもつて、彼をさがし回つた。しかし彼に手をつけることはできなかつた。マリユスは自分の探索の不成功を、自ら責め自ら憤つた。それは大佐が彼に残した唯一の負債で、彼は名誉にかけてそれを払おうと欲した。彼は考えた。「ああ、父が死にかかつて戦場に横たわつている時、彼テナルデイエは砲煙弾雨の中に父を見いだし、肩に担になつて連れだしてくれた。しかも彼は父に何らの恩をも受けていなかつたのである。そしてテナルデイエにかく負うところ多いこの自分分は、暗黒のうちに苦悩に呻吟しんぎんしてる彼を見い出すこともできず、彼を死より生へと連れ戻すこともできないのか。いや是非ともさがし出さなければならぬ！」実際マリユスは、テナルデイエを見いださんがためには片腕を失うも意とせず、彼を困

窮より引き出さんがためには血潮をことごとく失うも意としなかつたであらう。テナルデイエに会うこと、何かの助力を彼に与えてやること、「あなたは私を御存じない、しかし私はあなたを知っています、さあここににいるから、どんなことでも命じて下さい！」と彼に言うこと、それがマリユスの最も楽しいまた最も美しい夢想であつた。

### 三 生長したるマリユス

その頃マリユスは二十歳であつた。祖父のもとを去つてから三年になる。両方ともやはり同じような状態で、互いに近寄ろうとも会おうとしなかつた。その上、会つたとてそれが何になろう、ただ衝突するばかりである。いずれかが勝つものでもな

い。マリユスは青銅の甕かめで、ジルノルマン老人は鉄の壺つぼであつた。

マリユスは祖父の心を誤解していたことを、ここに言っておかなければならない。彼はジルノルマン氏が自分がかつて愛したことはないと思つていた。どなり叫び狂い杖つえを振り回すその気短かできびしい元気な老人は、喜劇中のジェロント型の軽薄で同時にきびしい愛情をしか自分に対して持つていないと、彼は思つていた。しかしそれはマリユスの誤解だつた。自分の子供を愛しない父親は世にないでもない、しかし自分の孫を大事にしない祖父は世に決してない。前に言つたとおり、本来ジルノルマン氏はマリユスを偶像のように大事にしていた。ただ彼は、叱責しつせきと時には打擲ちようちやくさえ交じえる自己一流の仕方であつた。そしてその子供がいなくなると、心のうちに暗い空虚を感じ

じた。もう子供のことは自分に言うなと命じながら、それがあまりによく守られたのをひそかに悔やんだ。初めのうちは、そのブオナパルテ党、ジャコバン党、テロリスト、暴虐党、セプタンプリズール、虐殺党が、再び帰つて来るだろうと希望をかけていた。しかし週は過ぎ月は過ぎ年は過ぎても、吸血兎は姿を見せなかつたので、ジルノルマン氏は深く絶望した。「といて、わしは彼奴あいつを追い出すよりほかに仕方はなかつた、」と祖父は自ら言つた。そしてまた自ら尋ねた、「もしあんなことを再びするとしたら、わしはまた同じことを繰り返すだろうか？」彼の自尊心は即座に、しかりと答えた。しかしひそかに振られた彼の年取つた頭は、悲しげに否と答えた。彼は落胆の時日を過ぎした。マリユスが彼には欠けてしまったのである。老人というものは、太陽を要するよう  
に愛情を要する。愛情は温度である。ジルノルマン氏はいかに

頑強な性質であつたとは言え、マリウスがいなくなつたため心のうちにある変化が起こつた。いかなることがあろうとも、その「恥知らず奴め」の方へ一步も曲げようとは欲しなかつたであろう。しかし彼は苦しんでいた。マリウスのことを決して尋ねはしなかつたが、常に思ひやつていた。彼はますますマレーで隠退の生活を送るようになった。なお昔のとおり快活で激烈ではあつたが、その快活さも悲しみと怒りを含んでるかのようににけいれんてき、その峻酷しゅんこくさを帯び、その激烈さも常に一種の静かな陰鬱いんうつなしょうちん銷沈しょうちんに終わった。時とすると彼は言つた、「ああ、もし歸つてきたら、したたか打つてやるんだが！」

伯母おばの方は、そう深く考えてもいず、そう多く愛してもいなかつた。彼女にとつては、マリウスはもはやただ黒いぼんやりした映像にすぎなかつた。そしてついには、おそらく彼女が飼つ

ていたに違いない猫か鸚鵡ねこ おうむほどにもマリユスのことを気にとめなかつた。

ジルノルマン老人のひそかな苦しみがいつそう増した所以ゆえんは、彼がそれを全部胸のうちにしまい込んで少しも人に覺さとられないようにしたからである。彼の苦しみは新しく発明されたあの自ら煙をも燃やしつくす竈かまどのようなものだつた。時とするとよいいな世話やきの者らがマリユスのことを持ち出して、彼に尋ねることもあつた。お孫さんは何をなさいました?……あるいは、どうなられました? すると老人は、あまりに悲しい時には溜息ためいきをつきながら、あるいは快活なふうを見せたい時には袖そでを爪ではじきながら、こう答えた。「男爵ポンメルシー君はどこかのすみで三百代言をやっているそうです。」

老人がかく愛惜している一方に、マリユスは自ら祝していた。

あらゆる善良な心の人におけるがように、不幸は彼から苦々しにがにがさを除いてしまった。彼は今やジルノルマン氏のことを考えるにもただ穏和な情をもつてするのみだった。しかし父に、対して、不親切であつた、その男からはもはや何物をも受けまいと決心していた。そしてそれは、最初の憤激が今やよほどやわらいだのを示すものだった。その上彼は、今まで苦しみ今もなお苦しんでいることを幸福に感じていた。それは父のためだったのである。生活の困難は彼を満足させ彼を喜ばせた。彼は一種の喜悅の情をもつて自ら言つていた。——これは極めて些細なささいことだ。この些細なことも一つの贖罪しよくざいだ。もしこの贖罪がなかつたならば、自分の父に對して、あのような父に對して、かつて不信にも背反したことは、必ず何らかの仕方ではいつかは罰せられるであらう。父はあらゆる苦しみをなめ自分は少しの苦しきも受け

ないということとは、正しいことではあるまい。もとより自分の労働も窮乏も大佐の勇壮な一生に比べては及びもつかないものであるろう。それからまた、父に近づき父に似んとする唯一の方法は、敵に対して父が勇敢であつたとおり自分も赤貧に対して勇壮であるということである。そこにこそ疑いもなく、「予が子は、それに価するなるべし」という大佐の言葉の意味があるのである。——その大佐の言葉こそマリユスが絶えずいただいていたところのもので、その遺言状がなくなつたので胸にはいただいていなかったが、心のうちにいただいていたのである。

そしてまた、祖父から追い出された時は彼はまだ子供にすぎなかつたが、今では既に一個の人となつていた。彼はそれを感じていた。繰り返して言うが、辛苦は彼のためになつたのである。青年時代の貧困は、うまくゆくと特殊な美点を有して、人

の意思をすべて努力の方へ転ぜしめ、人の心をすべて希望の方へ向かわしむる。貧困は直ちに物質的生活を赤裸々にして、それを嫌悪けんおすべきものたらしめ、従つて人を精神的生活の方へ飛躍せしむる。富裕なる青年は、多くのはなやかな野卑な楽しみを持つてゐる。競馬、狩猟、畜犬、煙草たばこ、カルタ、美食、その他。すべて魂の高尚美妙な方面を犠牲に供する、下等な方面の仕事である。貧しい青年は骨折つてパンを得、それを食し、食し終わった後にはもはや夢想のほか何もない。彼は神より与えられる無料の劇場おもむに赴く、彼は見る、天、空間、星辰、花、小児、その中であつて彼自ら苦しんでいる人類、その中であつて彼自ら光り輝いている創造。彼はつくづく人類をながめてそこに魂を認め、つくづく創造をながめてそこに神を認める。彼は夢想して自ら偉大なることを感じ、なお夢想して自ら温和なること

を感ずる。悶々たる人間もんもんの利己主義を脱して、瞑思めいしする人間の同情心に達する。彼のうちには賛美すべき感情が花を開く、自己の忘却と万人に対する憐憫れんびんとが。自然が閉じたる魂には拒み、開いたる魂にはささげ与え惜しまない、あの無数の怡悦いえつを考えつつ、英知の上の長者たる彼は、金銭の上の長者たる人々をあれわれむようになる。精神のうちに光明がはいつて来るに従つて、あらゆる憎しみは心から去つてゆく。それに元来彼は不幸であるか？ 否。青年の悲惨は決して悲惨なものではない。普通のいずれの青年を取つてみても、いかに貧しかろうとも、その健康、力、活発な歩調、輝ける目、熱く流るる血潮、黒き髪、あざやかな頬ほお、赤き脣くちびる、白き齒、清き息、などをもつてして、彼は常に老いたる帝王のうらやむところとなるであろう。それから毎朝彼は再びパンを得ることに従事する。そして彼の手がパ

ンを得つつある間に、彼の背骨は矜持きやうじを得、彼の頭脳は思想を得る。仕事が終わる時には、言うべからざる喜悦に、静観と歓喜とに戻つてゆく。辛苦の中、障害の中、舗石しきいしの上、荊棘いばらの中、時には泥濘でいねいの中に、足をふみ入れながら、頭は光明に包まれて、彼は生きる。彼は堅実で、清朗で、温和で、平和で、注意深く、まじめで、僅少きんしょうに満足し、親切である。そして彼は、多くの富者に欠けてる二つの財宝を恵まれたことを神に謝する、すなわち、自分を自由ならしむる仕事と自分を価値あらしむる思念とを。

マリウスのうちに起こったことは、以上のようなものであった。すべてを言えば、彼は静観の方面に傾きすぎるほどだった。ほとんど確実に食を得らるるに至った日から、彼はその状態に止めて、貧乏はいいことだとさとり、思索にふけるために仕事

を節した。そして時によると、幾日も終日瞑想のうちに過ごし、幻を見る人のように、恍惚と内心の光耀との無言の逸楽のうちに沈湎ちんめんしていた。彼は生活の方式をこう定めた。無形の仕事にでき得る限り多く働かんがために有形の仕事にでき得る限り少なく働くこと。言葉を換えて言えば、現実の生活に幾時間かを与え、残余の時間を無窮のうちに投げ込むこと。彼は何らの欠乏をも感じなかつたので、そういうふうに取り入れられた静観はついに怠惰の一形式に終わるといふことに、気づかなかつた。生活の最初の必要に打ち勝つたのみで満足したことに、そしてあまりに早く休息したことに、気づかなかつた。

明らかにわかるとおり、このように元気な殊勝な性質にとつては、それは一時の過渡期かつとうの状態にすぎなかつた。そして宿命の避くべからざる葛藤かつとうに触るるや直ちに、マリユスは覚醒かくせいする

であろう。

ところで、彼は弁護士になつてはいたけれども、またジルノルマン老人がそれをどう思ったとしても、彼は実際弁論もせず、三百代言をこね回しもしなかつた。夢想は彼を転じて弁論から遠ざけた。代言人の家に入りし、裁判のあとをつけ、事件を探る、それは彼のたえ得ないところだつた。何ゆえにそういうことをする必要があるか。彼は生活の道を変える理由を少しも認めなかつた。あの商売的なつまらない本屋の仕事は、ついに彼には確実な仕事となつていた。あまり骨の折れないことではあつたが、前に説明してきたとおり、それだけで彼には十分だつた。

彼が仕事をさしてもらつてゐる種々な本屋のうちのひとりには、マジメル氏だつたと思うが、彼を雇い込み、りつぱに住まわせ、

一定の仕事を与え、年に千五百フラン払おうと、申し出てきた。りっぱに住まう、千五百フラン、なるほど結構ではある。しかし自由を捨てる、給料で働く、一種の抱え文士となる！ マリユスの考えでは、それを承諾したら自分の地位はよくなると同時にまた悪くもなるのであった。楽な暮らしは得られるが、威厳は墮おちるのだった。完全な美しい不幸を醜いい賤いやしい窮屈きうくつに変えることだった。盲人が片目の男になるようなものだった。マリウスはその申し出を断わった。

マリウスは孤立の生活をしていた。すべてのことの局外にいたという趣味から、またあまりに脅かされたために、アンジョーラの主宰する群れにもすっきりはいり込みはしなかった。やはり仲のいい間がらではあり何か起こった場合にはできるだけの方法で助け合うことにはなっていたが、しかしそれ以上には深入

りしなかつた。マリユスは友人をふたり持つていた。ひとり  
青年のクールフェーラックで、ひとり老人のマブーフ氏だ  
た。どちらかと言えば彼はその老人の方に傾いていた。第一に、  
そのおかげで心の革命が起こったし、またそのおかげで父を知  
り父を愛したのであつた。「彼は私の内障眼（そこひ）をなおしてくれた」  
とマリユスは言つていた。

確かにその会堂理事は決定的な働きをした。

けれども、その場合マブーフ氏は、天意に代わつて静かに虚  
心平気に仕事をなしたのである。彼は偶然にそして自ら識（し）らず  
してマリユスを照らしたのであつて、あたかも人からそこに持  
ちきたされる蠟燭（ろうそく）のごときものだつた。彼はその蠟燭であつて、  
その人ではなかつた。

マリユスの内部に起こつた政見的革命については、マブーフ

氏は全く、それを了解し希望し指導することはできなかつたのである。

今後再びマブーフ氏はこの物語の中に出て来るので、ここに彼について一言費やすのもむだではあるまい。

#### 四 マブーフ氏

マブーフ氏がマリユスに向かつて、「なるほど政治上の意見も、結構です」と言った時、それは彼の精神の眞の状態を言い現わしたものだつた。あらゆる政治上の意見に、彼はまったく無関心で、そんなことはどうでもかまわないのだつた。そして自分を平和にして置いてさえくれるものだつたら、何でもかまわず是認した。あたかもギリシャ人らが、地獄の三女神フューリー

のことを、「美の女神、善良の女神、魅惑の女神」あるいはウ、  
ーメ、ニード、（親切な女神）、などと呼んだようなものである。マ  
ブーフ氏の政見といえば、植物およびことに書物の熱心なる愛  
好ということだった。当時はだれも党という終わりにくつつく  
一語なしには生きられなかつたので、彼も同じくその終わりの  
党という語を持っていたが、しかし王党でもなく、ボナパルト  
党でもなく、憲法党でもなく、オルレアン党でもなく、無政府  
党でもなく、実に書物党であつた。

世界にはながむるに足るべきあらゆる種類の苔こけや草や灌木かんぼくが  
あり、ひもとくに足るべき多くの二折形や三十二折形の書物があ  
るのに、憲法だの民主だの正権だの王政だの共和だのという兎  
戯に類することについて、人々が互いに憎み合うということをも、  
彼は理解することができなかつた。彼は有用ならんことを心掛

けていて、書物をたくわえはするが読書をもし、植物学者ではあるが園丁でもあった。彼がポンメルシー大佐を知った時、大佐が花について試みてることを彼は果実について試みてるという同感が、ふたりの間にはあった。マブーフ氏はついに、サン・ジェルマンの梨なしにも劣らぬ味を有する苗木の梨の果みを作り出すに至った。また夏の黄梅にも劣らぬ香味のある今日有名な十月の黄梅の果が生まれ出たのも、たぶん彼の工夫の一つからだっただけだ。よく弥撒ミサに行つたのも、信仰からというよりむしろ、穩和を好むからだつた。そしてまた人の顔は好きだがその声はきらいなところから、人が大勢集まつて黙つてるのは会堂で見られないからだつた。国家のために少しは尽さなければならぬと思つて、会堂理事の職を選んだのだつた。その上、女のことといつたらチューリップの球根ほどにも思つていず、男

のことといつたらオランダのエルゼヴィール版の書物ほどにも思つていなかった。もう六十の坂をとくに越していたが、ある日だれかが彼に尋ねた、「あなたは結婚したことがおありですか。」「忘れてしまいました。」と彼は答えた。時とすると、だれにもそれは起きることであるが、こう口にすることもあつた、「ああ私に金があつたら！」しかしそれは、ジルノルマン老人のようにきれいな娘を横目で見ながら言うのではなく、古書をながめながら言うのだった。彼はひとりで、年寄りの女中といつしよに住んでいた。少し手部痛風にかかつていた。そしてリユーマチから来る関節不随の指を休ませようとする時には、布を折つてそれでゆわえた。彼はコート、レ、付近の特産植物誌という彩色版入りの書物をこしらえて出版したが、かなりの評判で、その銅版を持っていて自ら売つた。そのためメジュール街の彼の

門をたたく者が日に二、三度はあつた。彼はそのため年に二千フランばかりを得ていた。それがほとんど彼の財産全部だった。そして貧しくはあつたが、忍耐と儉約と長い間のおかげで、あらゆる種類の高価な珍本を集めることができた。外出する時はいつも書物を一冊小わきに抱えていたが、帰つて来る時にはしばしば二冊となつていた。小さな庭と一階の四つの室（へや）とが彼の住居だったが、その唯一の装飾としては柶（わく）に入れた植物標本と古い名家の版画だけだった。サーベルや銃を見ると身体が凍える思いをした。生涯の間一度も大砲に近寄つたこともなく、アンゼヴァリド廃兵院に行つたこともなかつた。かなりの胃袋を持つており、司教をしてるひとりの兄があり、頭髪はまっ白で、口にも心にも歯がなくなり、身体中震え、言葉はピカルディーなまりで、子供のような笑い方をし、すぐに物におそれ、年取つた羊のような様

子をしていた。その上、ポルト・サン・ジャックの本屋の主人でロアイヨルという老人のほか、生きた者のうちには友人も知己もなかつた。その夢想は、藍あいをフランスの土地に育ててみたといふことだつた。

女中の方もまた、質朴な性質だつた。そのあわれな人のいい婆さんは、かつて結婚したことがなかつた。ローマのシクステイヌ礼拝堂でアレグリ作の聖歌でも歌いそうなスウルタンという牡猫おねこが、彼女の心を占領して、彼女のうちに残つてる愛情にとつては十分だつた。彼女の夢想は少しも人間までは及ばなかつた。決して彼女は自分の猫より先まで出ようとはしなかつた。猫と同じように口髭くちひげがはえていた。その自慢はいつもまつ白な帽子だつた。日曜日ミサに弥撒から帰つて来ると、行李こもりの中の下着を数えたり、買ったばかりで決して仕立てない反物を寢床の上にひろ

げてみたりして、時間を過ごした。読むことはできた。マブーフ氏は彼女にプリ、ユタルク、婆さんという綽名あだなをつけていた。

マブーフ氏はマリユスが好きであつた。なぜなら、マリユスは若くて穏和だつたので、彼の内気を脅かすことなく彼の老年をあたためてくれたからである。穏和な青年は、老人にとつては風のない太陽のようなものである。マリユスは武勲や火薬や入り乱れた進軍など、父が幾多の剣撃を与えまた受けたあの驚くべき戦闘で、まったく心を満たされてしまったとき、マブーフ氏を訪ねて行つた。するとマブーフ氏は、花栽培の方面からその英雄のことを語つてきかした。

一八三〇年ごろ、兄の司祭は死んだ。そしてほとんどすぐに、マブーフ氏の眼界は夜がきたように暗くなつた。破産——公証人の——は、兄と自分との名義で所有していた全部である一万

フランを、彼から奪つてしまった。七月革命は書籍業に危機をきたした。騒乱の時代にまつ先に売れなくなるものは特産植物誌などというものである。コートレー付近の特産植物誌はぱつたりその売れ行きが止まった。幾週間たつてもひとりの買い手もなかった。時とするとマブーフ氏は呼鈴ベルのなるのに喜んで飛び立った。「旦那様、水屋でございますよ、」とプリユタルク婆さんは悲しげに言った。ついにマブーフ氏はメジエール街を去り、会堂理事の職をやめ、サン・スユルピス会堂を見捨て、書物は売らなかつたが版画の一部を売り——それは大して大事にしてあるものではなかつた——そしてモンパルナス大通りに行つて小さな家に居を定めた。しかしそこには三カ月しか住まなかつた。それには二つの理由があつた。第一は、一階と庭とで三百フランもかかるのに、二百フランしか借料にあてたくなかつた

からである。第二は、ファトゥー射的場の隣だったので、終日拳銃ピストルの音がして、それにたえ得なかつたからである。

彼はその特産植物誌と銅版と植物標本と紙ばさみと書物とを  
持つて、サルペートリエール救済院の近くに、オーステルリッ  
ツ村の茅屋ぼうおくに居を定めた。そこで彼は年に五十エキュール（二百  
五十フラン）で、三つの室へやと、籬まがきで囲まれ井戸のついで一つ  
の庭を得たのである。彼はその移転を機会として、ほとんどす  
べての家具を売り払ってしまった。そして新しい住居にはいつ  
てきた日、きわめて愉快そうで、版画や植物標本をかける釘くぎを  
自分で打ち、残りの時間は庭を掘り返すことに使い、晩になつ  
て、プリユタルク婆さんが陰気な様子をして考え込んでるのを  
見ると、その肩をたたいてほほえみながら言った、「おい、藍あいが  
できるよ。」

ただふたりの訪問客、ポルト・サン・ジャックの本屋とマリユスとだけが、そのオーステルリツツの茅屋で彼に会うことを許されていた。なお落ちなく言えば、戦争にちなんだこの殺伐な地名は、彼にはかなり不愉快でもあった。

なおまた、前に指摘してきたとおり、一つの知恵か、一つの熱狂か、あるいはまた往々あるとおりの両方に、まったくとらえられてしまつてゐる頭脳は、実生活の事物に通ずることがきわめて遅いものである。自分自身の運命が彼らには遠いものである。そういう頭脳の集中からは一種の受動性が生ずるもので、それが理知的になると哲学に似寄つてくる。衰微し、零落し、流れ歩き、倒れまでしても自分ではそれにあまり気がつかない。実際ついには目をさますに至るけれど、それもずっと後のことである。それまでは、幸と不幸との賭事かけごとの中で局外者のように平

氣でいる。彼らはその間に置かれた賭金でありながら、不関焉かんせずえんとして両方をぼんやりながめている。

そういうふうにして、自分のまわりに希望が相次いで消えてゆきしだいに薄暗くなるにもかかわらず、マブーフ氏はどこか子供らしくしかもきわめて深く落ち着き払っていた。彼の精神の癖は振り子の動揺にも似ていた。一度幻でねじが巻かれると長く動いていて、その幻が消えてもなお止まらなかつた。時計は鍵かぎがなくなつた時に急に止まるものではない。

マブーフ氏は他愛ない楽しみを持つていた。その楽しみは金もかからずまた思いも寄らぬものだつた。ちよつとした偶然の機会から彼はそれを得た。ある日プリユタルク婆へやさんは室の片すみで小説を読んでいた。その方がよくわかるからと言つて声高に読んでいた。声高に読むことは読むのだと自分自身に

のみこませることである。至つて声高に物を読んで、自分は今読書をしてると自分自身に納得させるような様子をしてる者が、世にはずいぶんある。

プリユタルク婆さんはそういう元気で、手に持つてる小説を読んでいた。マブーフ氏は聞くともなしにそれを聞いていた。

そのうちにプリユタルク婆さんは次のような文句の所にきた。それはひとりの竜騎兵の将校と美人との話だった。

『……美人ブーダ（口をとがらした）、と竜騎兵は……。』

そこで婆さんは眼鏡めがねをふくためにちよつと言葉を切った。

ブーダドラゴンと竜……。』とマブーフ氏は口の中でくり返した。「なる

ほどそのとおりだ。昔一匹の竜がいて、その洞穴の奥で口から炎を吐き出して天を焦がした。既に多くの星はその怪物から焼かれたことがあり、その上奴やつは虎のような爪を持っていた。で

その時仏陀は洞穴の中にはいつてゆき、首尾よく竜を改心させたのだ。プリユタルク婆さん、お前がそこで読んでるのはいい書物だ。それ以上に美しい物語は世間はない。」

そしてマブーフ氏は楽しい空想にふけた。

## 五 悲惨の隣の親切なる貧困

マリユスはその廉直な老人を好んだ。老人は徐々に窮乏のうちち陥つてゆくのに気づき、しだいに驚いてはいたが、まだ少しも悲しみはしなかつた。マリユスはクールフェーラックにも出会い、またマブーフ氏をも訪れた。だがそれもごくまれで、月に多くて一、二回にすぎなかつた。

マリユスの楽しみは、郊外の並み木通りや、練兵場や、リュク

サンブールの園の最も人の少ない道などを、ひとりで長く散歩することだった。時には、園芸家の庭や、サラダ畑や、小屋の鶏や、水揚げ機械の車を動かす馬などをながめて、半日も過ごすことがあった。通りがかりの者は驚いて彼をうちながめ、ある者はその服装を怪しみその顔つきをすごく思った。しかしそれは、あてもなく夢想にふけつてる貧しい青年にすぎなかった。彼がゴルボー屋敷を見いだしたのは、そういう散歩の折りであつた。そしてその寂しいさまと代が安いのとにひかされて、そこに住むことにした。そこで彼はただマリユス氏という名前だけで知られていた。

父の昔の將軍や昔の同僚らのうちには、彼の身の上を知るとその邸やしきに招いてくれる者もあつた。マリユスは断わらなかつた。それは父のことを話す機会だつた。そういうふうにして彼は時々、

パジヨル伯爵やベラヴェーヌ將軍やフリリオン將軍などの邸を訪れ、また廃兵院にも行つた。音楽や舞踏などがあつた。そういう晩マリユスは新しい上衣をつけて行つた。けれども寒い凍りついた日でなければ、決してそれらの夜会や舞踏会に行かなかつた。なぜなら、馬車を雇つてゆくことができなかつたし、少しでもよごれた靴くつをはいて向こうに着くことを欲しなかつたから。

彼は時々こう言つた、しかしそれは別に皮肉のつもりではなかつた。「客間では、靴を除いては全身泥だらけでもかまわないものだ。よく迎えられるがためには、非の打ちどころのないただ一つのものさえあれば十分だ。それは良心であるか、否、靴である。」

あらゆる情熱は、愛のそれを除いては、夢想のうちに消散し

てしまうものである。マリユスの政治上の熱も、夢想のうちに消え失せてしまった。一八三〇年の革命は、彼を満足させ彼をしずめさして、それを助けた。しかし憤激を除いては、後はやはり元と同じだった。彼の意見はただ和らげられたというのみで、少しも変わりはなかった。更によく言えば、彼はもう意見などというものを持たず、ただ同感をのみ持っていた。いかなる党派かといえば、彼は人類派だった。そして人類のうちではフランスを選び、国民のうちでは民衆を選び、民衆のうちでは婦人を選んだ。彼の憐憫れんぴんが特に向けられたのはその点へであった。今や彼は事実よりも思想を好み、英雄よりも詩人を好み、マレンゴーのような事件よりもヨブ記のような書物をいつそう賛美した。それからまた、一日の瞑想の後、夕方並み木通りを帰って来る時、そして樹木の枝の間から、底なき空間を、言い

難き光輝を、深淵しんえんを、影を、神秘をながむる時、単に人類にのみ  
かかわることはすべてきわめて微小であるように彼には思えた。  
人生の真に、そして人類の哲理の真に、ついに到達したと彼  
は思っていた。おそらく實際到達していたであろう。そして今  
やもうほとんど天をしかながめなくなつた。実に天こそは、真  
理がその井戸の底からながめ得る唯一のものである。

それでもなお彼は、未来に対する計画考案組立仕組をふやして  
ゆくことはやめなかつた。そういう夢想の状態にあるマリユス  
の内部をながむるならば、その魂の純潔さにいかなる目も眩惑げんわく  
されるであろう。實際、他人の内心をのぞくことが肉眼に許さ  
れるならば、人はその思想するところのものによつてよりも、  
その夢想するところのものによつていつそう確実に判断さるる  
であろう。思想のうちには意志がある。しかし夢想のうちには

それがない。まったく自発的である夢想は、巨大と理想とのうちにあつても、人の精神の形を取りそれを保全する。燦然たるさんぜん運命の方へ向けらるる無考慮で無限度な憧憬どうけいほど、人の魂の底から直接にまた誠実に出てくるものはない。こしらえ上げ推し組み合わせた理想の中よりも、それらの憧憬の中にこそ、各人の真の性格は見いだされる。幻想こそ最もよくその人に似る。各人はその性格に従つて不可知のものと不可能のものとを夢想する。

一八三一年の中ごろ、マリユスの用を達していた婆さんは、マリユスの隣に住んでるジョンドレットというあわれな一家が、まさに追い払われようとしてることを話してきかした。ほとんど毎日外にばかり出ていたマリユスは、隣の室へやに人が住んでるかさえもよく知らなかった。

「どうして追い払われるんです。」と彼は言った。

「室代を払わないからですよ。二期分もたまっています。」

「いかほどになるんです。」

「二十フランですよ。」と婆さんは言った。

マリウスは引き出しの中に三十フランたくわえていた。

「さあ、」と彼は婆さんに言った、「ここに二十五フランあります。そのかわいそうな人たちのために払ってやり、余った五フランはその人たちにやって下さい。だが私がしたんだと言ってはいけませんよ。」

## 六 後継者

偶然にも、中尉テオデュールの属していた連隊がパリちゆうとんに駐屯

することとなつた。その好機はジルノルマン伯母おぼに第二の考案を与えた。最初彼女はテオデュールにマリユスを監視させようとしたのであつたが、こんどはテオデュールにマリユスのあとを継つがせようと謀はかつた。

とにかく、家の中に青年の面影がほしいと祖父が漠然ぼくぜんと感じているに違ちがいがない場合なので——青年という曙あけぼのは廃残の老人にとつては往々快いものである——別のマリユスを見いだすのに好都合だつた。伯母は考えた。「なに、書物の中で見当たる誤植ごせつのようなものさ。マリユスというのをテオデュールと読めばよい。」

孫おひこに当たる甥おいは直接の孫と大差はない。弁護士がいないので槍騎兵そうきへいを入れるわけである。

ある日の朝、ジルノルマン氏がコティデイエンヌ紙か何かを

読んでいた時、娘ははいってきて、一番やさしい声で彼に言った。自分が目をかけてやってる者に関することだったから。

「お父さん、今朝けさテオデユールがごあいさつに参ることになっています。」

「だれだ、テオデユールとは？」

「あなたの甥の子ですよ。」

「あー。」と祖父は言った。

それから彼はまた読み初めて、テオデユールとか何とかいうその甥おいのことはもう頭にしていなかった。そして物を読む時にはほとんどいつものことだったが、その時もやがて興奮し出した。彼が手にしていた「新聞か何か」は、もとより王党のものであったことはわかりきっているが、それが少しも筆を和らげないで、当時のパリーに毎日のように起こっていたある小事件の

一つが、翌日起こることを報じていた。——法律学校と医学校との学生が、正午にパンテオンの広場に集まることになっている、評議するために。——それは一つの時事問題に関することだった。すなわち国民軍の砲兵に関することで、ルーヴル宮殿の中庭に据えられた大砲について陸軍大臣と「市民軍」の間に起こった争論に関してだった。学生らはそのことを「評議すること」になつていた。それだけで既にジルノルマン氏の胸をいっぱいふくれさすには十分だった。

彼はマリユスのことを考えた。マリユスも学生であつて、たぶん他の者と同じく、「正午にパンテオンの広場に評議しに」行くであろう。

彼がそういうつらい考えにふけつていゝ時、中尉のテオデュールは平服を着て——平服を着たのは上手なやり方だった——ジ

ルノルマン嬢に用心深く導かれて、そこにはいつてきた。槍騎兵そうきへいはこんなふう<sup>が</sup>に考えていた。「この頑固親爺がんこおやじも財産をそっくり終身年金に入れたわけでもあるまい。金になるなら時々は人民服を着るのもいい。」

ジルノルマン嬢は高い声で父に言った。

「甥の子のテオデュールです。」

そして低い声で中尉に言った。

「何でも賛成するんですよ。」

そして彼女は室へやを出て行った。

中尉はそんなきちようめんな会見にはあまりなれていなかった。多分おずおずとつぶやいた。「伯父様おじさま、こんにちは。」そして、軍隊式敬礼の無意識的な機械的な型を普通の敬礼の型にくずした中間のおじぎをした。

「あーお前か。よくきた。まあすわるがいい。」と祖父は言った。しかしそう言ったばかりで、彼はすっかり槍騎兵そうきへいのことを忘れてしまった。

テオデユールはすわったが、ジルノルマン氏は立ち上がった。ジルノルマン氏は両手をポケットにつっ込んで、室へやをあちらこちら歩き出し、二つの内隠しの中に入れていた二つの時計を、年老いた震える指先でいじりながら、声高にしゃべり出した。

「鼻はなつたらしどもが！ パンテオンの広場に集まる。ばかな！ 昨日きのうまで乳母うばがついていた小僧あすのくせに。鼻をすつたら乳が出ようという奴やつこどもが。それで明日正午に評議する！ こんなありさまでどうなるんだ。どうなるんだ。世はまっ暗やみになるのはわかりきってる。シャツなしども（革命共和党）のおかげでこんなことになるんだ。市の砲兵！ 市の砲兵のことを評議

する！ 国民軍の大砲の音について、はばかりもなく外に出てきてがやがやしやがるとは。しかもどんな奴らが集まろうというのか。ジャコバン主義（過激民主主義）がどんなところに落ち着くか見るがいい。私は何でも賭ける。百万円でも賭ける、そして断言するんだ、そんな所へ行く奴は罪人か前科者ばかりだ。共和党に囚人、いい取り組みだ。カルノーは言った、『わたしにどうしろと言うのか、反逆人めが』フーシェは答えた。『勝手にしろばか者！』そういうのが共和党の常だ。』

『ごもつともです。』とテオデュールは言った。

ジルノルマン氏は少し頭を振り向けてテオデュールを見、そしてまた言い続けた。

「この恥知らず奴が、秘密結社のうちにはいったのは思ってもしやくにさわる！ なぜ貴様は家を出て行ったんだ、共和党に

なるためか。ばか！ 第一人民は共和なんか望んでいない。望んでいないんだ。人民は良識を持っている。常に国王があつたこと、常に国王があるべきことを知ってる。人民は要するに人民にすぎないことを知ってる。共和なんかはばかにしてるんだ。わかつたか、ぐずめが！ そんなむら気はのろうべきだ。デュシエーヌ紙（訳者注 革命時代の過激なる新聞）に惚れ込み、断頭台に色目を使い、一七九三年の舞台裏で小唄を歌いギターをひくとは、唾を吐きかけても足りん。それほど今の若者らはばかだ。皆そうだ。ひとりとしていい奴はいない。街路に流れてる空気を吸えば、それでもう気が狂つてしまう。十九世紀は毒だ。どのいたずらつ兎も、少しばかり山羊のような髯がはえ出すと、ひとかど物がわかつた気になつて、古い身内の者を捨ててしまう。何かと言えば共和だのロマンティックだのという。

いつたいロマンティックとは何だ。説明してもらいたいもんだ。ばかげきつたことばかりじゃないか。エルナ、ニがあつたのは一年前だ（訳者注 本書の作者ユーゴの戯曲で、一八三〇年その第一回公演はロマンティック運動のエポックメーカーキングのもの<sup>とせらる</sup>）。ところでそのエルナニとはどういうものか少し聞きたいもんだ。対偶法<sup>アンチテーゼ</sup>だけだ、胸くそが悪くなるようなものだ。けれど、フランス語とさえもいえないものだ。それからまたルールの中庭に大砲を据えるなどということをする。そういうことばかりが今の時代の無頼漢<sup>しわざ</sup>どもの仕業じゃないか。」

「おじさま伯父様の説はもつともです。」とテオデュールは言った。ジルノルマン氏は続けた。

「ムューゼオムの中庭に大砲を据える！ それはいつたい何のためだ。大砲をどうするつもりか。ベルヴェデーレのアポロン

に霰弾さんだんを浴びせるつもりか。弾藥囊だんやくのうとメデイチのヴィーナスと何の関係がある。今時の青年は皆手がつけれぬ奴やつらばかりだ。バンジャマン・コンスタン（訳者注 自由派の首領）なんか何と下らない奴だ。皆悪党でなければばかだ。わざわざ醜いふうをし、きたない服をつけ、女と見ればこわがり、娘つ児のまわりに乞食こじきのような様子をして下女どもから笑われる。恋愛にまでびくびくしてるあわれな奴らだ。醜い上に愚かだ。ティエルスランやポティエ式の地口をくり返し、袋のような上衣、馬丁のようなチョッキ、粗末な麻のシャツ、粗末なラシヤのズボン、粗末な皮の靴、そして吹けば飛ぶようなことをしゃべりちらしてる。そういう片言で破やぶれ靴ぐつの底でも繕うがいい。しかもそのばかな小僧つ児どもが政治上の意見を持つてるといふのか。奴らが政治に口を出すことは嚴重に禁じなければいかん。異説

を立て、社会を改造し、王政をくつがえし、あらゆる法律をうち倒し、あなぐら 窖と屋根部屋とをあべこべにし、門番と国王とを置きかえ、ヨーロッパ中をかき回し、世界を建て直し、そして洗たく女どもが車に乗る時横目でその足をのぞいて喜んでいやがる。ああマリウス！ けしからん奴だ。大道でとなり立て、議論し、討論し、手段を講ずる！ 奴らはそれを手段という。ああ、同じ紊乱びんらんでも今は小さくなって雛児ひよっこになってしまつてゐる。私は昔は混沌界こんとんかいを見たが、今はただ泥の泡あぶくだけだ。学校の生徒が国民軍のことを評議するなどは、オジブワやカドダーシュなんかの化け物のうちにも見られないことだ。羽子はねつきの羽子のようなものも頭にかぶり手に棍棒こんぼうを持つてまつ裸で歩く蛮人も、この得業士ごうまんどもほどひどくはない。取るに足らぬ小猿のくせに、尊大ごうまんで傲慢で、評議したり理屈をこね回したりする。もう世は

末だ。この水陸のみじめな地球も確かにもう終わりだ。最後の吃逆しゃやくりがいるんなら、フランスは今それをしてるところだ。評議するならしろ、やくざ者め！ オデオンの拱廊きょうろうで新聞なんか読むからそういうことになるんだ。一スーの金を出して、それでもう、やれ識見だの知力だの心だの魂だの精神だのができ上がる。そして出て来ると、家の中でいばり散らす。新聞というものは疫病神やくびようがみだ。どれもそうだ。ドラポー・ブラン紙にしたって、記者のマルタンヴェイルはジャコバン党だった。ああ、貴様は、祖父を絶望さして得意になつてゐるんだらう。貴様は？」

「そのとおりです。」とテオデュールは言った。

そしてジルノルマン氏が息をついてる間に乗じて、槍騎兵そうきへいはおごそかに言い添えた。

「新聞は機関新聞だけにし、書物は軍事年報だけにするがよろ

しいんです。」

ジルノルマン氏は言い続けた。

「シエイエスのようなものだ。国王を殺しながら上院議員になる。奴らやつの終わりはいつもそうだ。ぞんざいしないやしい言葉を使いながらついには伯爵殿と言われるようになるうというわけだ。腕のように凶太い伯爵殿だ、九月（一八九二年）の虐殺者どもだ。哲人シエイエスだ。幸いに私わしは、そういう哲人どもを、テイヴオリの道化見世物ほどにも尊敬しない。上院議員らみつばちが蜜蜂のついた紫ビロードのマントを着アンリ四世式の帽子をかぶつてマラケー河岸を通るのを、ある日私は見たことがある。胸くそが悪くなるような様子をしていた。ちようど虎とらに従う猿さるのようだ。市民諸君、私は断言する、君らのいう進歩は狂乱である、君らの人類は幻である、君らの革命は罪悪である、君らの共和

は怪物である、君らのいう純潔なる若きフランスは遊女屋から出て来るものだ。私はそれを主張する。よし君らが何であろうとも、新聞記者であり、経済学者であり、法律家であろうとも、また君らが断頭台の刃よりもよく自由平等博愛を知っていようとも！ 私は断じてそう言うのだ、わが敬愛なる諸君！」

「しかり、」と中尉は叫んだ、「まったくそのとおりです。」

ジルノルマン氏はやりかけた手まねをやめて、ぐるりと振り向き、槍騎兵<sup>そうきへい</sup>テオデュールの顔をじつと見つめ、そして言った。

「お前はばかだ。」

第六編 両星の会交

一 綽名あだな——家名の由来

当時のマリユスは、中背の美しい青年で、まつ黒な濃い髪、高い利発らしい額、うち開いた熱情的な小鼻、まじめな落ち着いた様子、そしてその顔には、矜ほこらかで思索的で潔白な言い知れぬ趣が漂っていた。その横顔は線に丸みがあるとともにまた厳げんこ乎たるところがあつて、アルザスおよびローレーヌを通じてフランス人の容貌ようぼうのうちにはいつてきたゼルマン式の優しみが

あり、ロマン種族中にあつて古ゼルマン族の特長となり獅子族ししぞくと驚族わしぞくとを区別せしむるあの稜角りょうかくの皆無さをそなえていた。頭を使う人の精神がほとんど等分に深さと無邪気さとを有する頃の年輩に、彼もちようど属していた。大事の場合に際しては、あたかも愚鈍なるかのように思われることもあり、また一転して崇高なる趣にもなつた。その態度は、内気で、冷ややかで、丁寧で、控え目であつた。脣くちびるはきわめて赤く齒はきわめて白く、いかにも魅力ある口だったので、そのほほえみは容貌の有する厳格さを償つて余りあつた。その清澄な額とその快樂的な微笑とは、ある時には不思議な対照をなした。目は小さかつたが、目つきは大きかつた。

最も窮乏していた頃、若い娘らがよく自分の後ろをふり返つて見るのに彼は気づいた。そして心のうちに冷やりとして、逃

げ出すか身を隠すかした。きつと自分の古い服を見て笑っているのだと彼は思った。しかし事實は、彼の様子のいいのを彼女は見てあこがれてるのであった。

彼と通りがかりのきれいな娘らとの間のそういう暗黙の誤解から、彼は妙に頑かたくなになった。あらゆる女の前から逃げ出したので、結局彼はいずれの女かを選んでそれに近寄ろうとすることをしなかった。かくて彼はこれと定まりのない、クールフェーラックの言葉に従えば開けない、生活をしていたのである。

クールフェーラックはまた彼に言った。「そう聖人ぶろうとするなよ。(彼らはへだてのない言葉を使っていた。へだてのない言葉を使うのは青年の友情の特質である。) まあ僕の忠告でも聞けよ。そんなに書物ばかり読まないで、少しは女でも見てみる。娘っ児も何かのためにはなるぜ、マリユス。逃げ出したり

顔を赤くしたりしていると、ばかになつちまうぜ。」

またある時、クールフェーラックはマリユスに出会つて言つた。

「やあ今日は、牧師さん。」

クールフェーラックにそういうたぐいのことを言われると、その一週間ほどの間マリユスは、老若を問わず、いつさい女というものを前よりもいつそう避け、おまけにクールフェーラックをも避けた。

しかしながら広大な天地の間には、マリユスが逃げもしなければ恐れもしないふたりの女がいた。実を言うと、それでも女だと言われたら彼は非常に驚いたかも知れない。ひとりは彼の室へやを掃除そうじしてくれる髯ひげのはえた婆さんだつた。クールフェーラックをして、「女中が髯をはやしてるのを見てマリユスは自分の髯

をはやさないんだ」と言わしめた、その婆さんだった。もひとりはある小娘で、彼はそれにしばしば出会ったがよく目を留めても見なかった。

もう一年以上も前からマリユスは、リユクサンブールの園のある寂しい道で、苗木栽培地ペピニエールの胸壁に沿った道で、ひとりの男とごく若い娘とを見かけた。ふたりはウエスト街の方に寄った最も寂しい道の片端に、いつも同じベンチの上に並んで腰掛けていた。自分の心のうちに目を向けて散歩している人によくあるように、別に何の気もなくほとんど毎日のように、マリユスはその道に歩み込んだ、そしてはいつもそこにふたりを見いだした。男は六十歳くらいかとも思われ、悲しそうなまじめな顔つきをしていて、退職の軍人かとも見える頑丈がんじょうなしかも疲れ切った様子をしていた。もし勲章でもかけていたら、「もとは将校だ

な」とマリウスに思わしたかも知れない。親切そうではあるがどこか近寄り難いところがあつて、決して人に視線を合わせることをしなかつた。青いズボンと青いフロックとをつけ、いつも新しく見える広い縁の帽子をかぶり、黒い襟飾えりかざりをし、まっ白ではあるが粗末な麻のちようどクエカー宗徒のようなシャツを着ていた。ある日ひとりの浮わ気女工がそのそばを通つて、「身ぎれいな鰥夫ひとりものだこと」と言った。頭髮はまっ白だった。

彼に連れられてきて、二人で自分のものときめたようなそのベンチに初めて腰掛けた時、娘の方はまだ十二、四歳であつて、醜いまでにやせており、ぎごちなく、別に取りどころもなかつたが、目だけはやがてかなり美しくなりそうな様子だった。けれどもただ、不快に思われるほどの厚かましきでいつもその目を上げていた。修道院の寄宿生に見るような同時に年寄りらし

いまた子供らしい服装をして、黒いメリノラシヤのまずい仕立て方の長衣をつけていた。ふたりは親子らしい様子だった。

まだそう老人とも言えぬその年取った男と、まだ一人前になっていないその小娘とに、マリユスは二、三日気を留めたが、それからもう何らの注意も払わなかった。彼らの方でも、マリユスに気づいているふうはなかった。いつも穏やかな平和な様子で互いに何か話していた。娘の方は絶えず快活に口をきいていた。老人の方は口数が少なく、時々何とも言えぬ親愛さを目の中にたたえて娘を見やっていた。

マリユスはいつしか機械的に、その道に歩みこむ癖になっていた。そしていつもそこで彼らに出会った。

そのありさまは次のようである。

マリユスはその道を通りかかる時、いつも好んで彼らのベン

チがある方とは反対の端からやっていった。そしてずっと道をたどつてゆき、ふたりの前を通り、それから後返つて、やって来た方の端まで戻り、それからまた新たに同じことを初めるのだった。彼は散歩のうちにその往復を五、六回も続け、また一週間のうちにそういう散歩を五、六回はしたが、それでも彼らとはあいさつもかわさなかつた。ところがその男と娘とは、人の目を避けてるらしくたけれども、いや反対に、人の目を避けてたがために、学校の帰りや撞球たまつきの帰りなどに時々苗木栽培地ペビニエールのまわりを散歩する五、六人の学生から、自然に注意されるようになった。撞球の方の仲間であつたクールフェーラックも、時々ふたりの姿を認めたが、娘がきれいでないのを見て、すぐにわざとそれを避けるようにした。そして彼はパルト人のように、逃げながらふたりに綽名あだなの槍やりをなげつけてしまった。娘の長衣

と老人の頭髮とが特に目についたので、娘をラノアール（黒）嬢と呼び、父をルブラン（白）氏と呼んだ。もとよりふたりの身の上を知つてゐる者はなく名がわからなかつたので、右の綽名あだなが一般に通用することになった。学生らは言った、「ああルブラン氏がベンチにきてる！」そしてマリユスも他の者らと同じく、便宜上その知らない人をルブラン氏と呼んでいた。

われわれもまた学生らと同じように、たやすく話を進めるために彼をルブラン氏と呼ぶことにしよう。

かくて最初の一年間マリユスは、ほとんど毎日きまつた時間に彼らの姿を見た。彼にとつては、老人の方は多少好ましかつたが、娘の方は一向おもしろくもなかつた。

物語がようやくここまで進んできた時、すなわちこの二年目に、マリウスのリュクサンブール逍遙しょうようはちよつと中絶した。それは彼自身にもなぜだかよくわからなかったが、とにかく六カ月近くもその道に足を踏み入れなかった。ところがついにまたある日、彼はそこに戻つていった。さわやかな夏の朝のことで、晴れた日にはだれもそうであるがマリウスもごく愉快的気持ちになつていた。耳に聞こえる小鳥の歌や、木の葉の間からちらと見える青空などが、心の中にはいつて来るかと思われた。

彼はまつすぐに「自分の道」へ行つた。そしてその一端に達すると、あの見なれたふたりがやはりいつものベンチに腰掛けてるのを認めた。ところが近寄つてゆくと、老人の方は同じ人だったが、娘の方は人が変わつてるように思えた。今彼の目の

前にあるのは、背の高い美しい女で、大きくなりながらまだ幼時の最も無邪気な優美さをそなえてる時期であり、ただ十五歳という短い語によつてのみ伝え得るとらえ難い純潔な時期であつて、ちようどその年頃の女の最も魅力ある姿をすべてそなえていた。金色の線でぼかさされたみごとな栗色くりいろの髪、大理石でできてるような額、薔薇ばらの花弁でできてるような頬ほお、青白い赤味、目ざめるような白さ、閃光せんこうのように微笑がもれ音楽のように言葉がほとぼしり出る美妙な口、ラファエロが聖母マリアに与えたらうと思われるような頭と、その下にはジャン・グージョンがヴィーナスに与えたらうと思われるような首筋。そしてその愛くるしい顔立ちをなお完全ならしむるためには、鼻がまた美しいというよりもかわいものだった。まつすぐでもなく、曲がつてるでもなく、イタリー式でもギリシャ式でもなく、パリ

式の鼻だった。言い換えれば何となく伶俐れいりそうで繊細で不規則で純潔であつて、画家を困らせ詩人を喜ばせる類の鼻だった。

彼女のそばを通つた時、彼はその目を見ることができなかつた。その目はいつも下に向けられていた。影と貞純とのあふれてる長い栗色の睫毛まつげだけが、彼の目にはいつた。

それでもなおこの麗わしい娘は、自分に話しかける白髪の男に耳を傾けながらほほえんでいた。目を伏せながら浮かべるあざやかなその微笑ほど、愛くるしいものは世になかつた。

初めのうちマリユスは彼女のことを、その男の別の娘で、前の娘の姉でもあろうと思つた。しかし、いつもの逍遙しょうようの癖から二度目にベンチに近寄つた時、注意深く彼女をながめた時、彼はそれがやはり同じ人であることを認めた。六カ月のうちに小娘は若い娘となつた、ただそれだけのことだつた。そういう

ことは最も普通に起こる現象である。またたくまにほころんでたちまちに薔薇の花となつてしまふような時期が、女の子にはある。昨日までは子供として気にも留めないが、今日はもはや気がかりなしには見られないようになる。

さてその娘は、ただに大きくなつたばかりではなく、理想的になつていた。四月にはいれば世の中は三日見ぬ間に桜となるように、六カ月で彼女には美を着飾るに足りたのである。彼女の四月がきたのであつた。

貧乏で憔悴しょうすいしていた人が、目ざむるようににわかにか窮迫から富裕となり、あらゆる金使いをして、たちまちにぜいたくにみごとにまばゆきまでになるのは、世に時として見らるることである。それは金が舞い込んできたからである、期限の金を昨日受け取ったからである。その若い娘もその定期金を受け取つて

いたのである。

そしてまた彼女は、フラシ天の帽子やメリノの長衣や学校靴がっこうぐつや赤い手などをしていなくて、もう寄宿生らしいところはなかった。美とともに趣味も生じたのである。別に取り繕った様子もないが、さつぱりした豊かな優美さをそなえた服装みなりをしていた。黒い緞子の長衣と同じ布の肩衣と白い縮紗クレープの帽子をつけていた。支那象牙ぞうげの日がさの柄をいじってる手は、白い手袋を通していかにも繊細なことが察せられ、絹の半靴はその足の小さいことを示していた。近くを通ると、その全身の粧よそおいからは若々しいしみ通るようなかおりが発していた。

老人の方は前と何の変わりもなかった。

二度目にマリウスが近寄った時、娘は眼瞼まぶたを上げた。その目は深い青空の色をしていた。しかしその露あわでない青みのうち

には、まだ子供の目つき以外に何物もなかった。彼女は無関心にマリウスをながめた。あたかもシコモルの木の下を走る小猿こざるをでも見るがようで、またはベンチの上に影を投げてる大理石の水盤をでも見るがようだった。そしてマリウスの方でも、もう他の事を考えながら逍遙しょうようを続けた。

彼は娘がいるベンチのそばをなお四、五度は通つたが、その方へ目も向けなかった。

それからまた毎日のように、彼は例によつてリユクサンブルにき、例のとおり「父と娘」とをそこに見い出した。しかしもうそれを気に留めなかった。その娘が美しくなつた今も、醜くかつた以前と同じく、彼は別に何とも考えなかった。彼はやはり、彼女が腰掛けてるベンチのすぐそばを通つていた。それが彼の習慣となつていた。

## 三 春の力

空気の温暖なある日、リククサンブールの園は影と光とにあふれ、空はその朝天使らによつて洗われたかのように清らかであり、マロニエの木立ちの中では雀がすずめ小さな声を立てていた。マリユスはその自然に対して心をうち開き、何事も考えず、ただ生きて呼吸を続けてるのみで、あのベンチのそばを通つた。その時あの若い娘は彼の方へ目を上げ、ふたりの視線が出会つた。

こんどは若い娘の視線の中に何があつたか？ マリユスもそれを言うことはできなかつたであろう。そこには何物もなかつた、またすべてがあつた。それは不思議な閃光せんこうであつた。

彼女は目を伏せ、彼は逍遙を続けた。

今彼が見たところのものは、子供の率直単純な目ではなかつた。半ば開いてまたにわかふちに閉じた神秘的淵であつた。

ごく若い娘もそういう一瞥いちべつをする時がある。そこに居合わたし人こそ災いである。

まだ自分で知らない一つの魂のそういう最初の一瞥いちべつは、空における曙あけぼののようなものである。ある不可知な輝き渡る何物かの目ざめである。尊むべき闇やみをにわかぼくぜんに漠然と照らし、現在のあらゆる無心と将来のあらゆる熱情とから成っている、その意外なる光耀こうようの危険な魅力は、何物をもつてしても写し出すことはできないであろう。偶然におのれを示し、また他を待っている、一種の定かならぬ愛情である。無心のうちに知らず知らずに張られ、自ら欲せずにもまた知らずに人の心をとらえる、一種の罨わな

である。一個の婦人のようにながむる乙女おとめである。

その一瞥の落ちる所から深い夢が生まれぬことは、きわめてまれである。あらゆる純潔とあらゆる熱情とは、その聖きよき致命的な輝きのうちに集まつており、婀娜あだな女の十分に仕組んだ秋波よりもなお強い魔力を有していて、かおりと毒とに満ちたほの暗いいわゆる恋と呼ぶる花を、人の心の奥ににわかにかせる。

その夕方屋根裏の室へやに帰りついて、マリユスは自分の服装をながめ、初めて自分のきたなさと不作法と「平素ふだんの」服装でリュクサンブールに散歩に行く非常な愚かさとを気づいた。その平素の服装というのは、リボンの所まで押しつぶされた帽子と、馬方のような粗末な靴くつと、膝ひざの所が白けてる黒いズボンと、肱ひじの所がはげかかつてる黒い上衣とであつた。

## 四 大病のはじまり

翌日例の時刻に、マリウスは戸棚から新しい上衣とズボンと帽子と靴を取り出した。そしてその完全な武具に身を固め、手袋をはめ、きわめてめかし込んで、リュクサンブールに出かけた。

途中彼はクールフェーラックに出会ったが、そ知らぬ風をして通りすぎた。クールフェーラックは帰つてから友人らに言った。「今僕はマリウスの新しい帽子と上衣に出会ったよ。奴さんやつこは中にくるまっていた。きつと試験でも受けに行くんだらう。ひどくぼんやりしていた。」

リュクサンブールに着くと、マリウスは池を一周し、白鳥を

ながめ、それからまた、苔こけのために頭が黒くなり臀しりが片一方なくなつてゐるある像の前に長くたたずんで、それをながめた。池のそばには、腹の便々たる四十かっこの市民がいて、五歳ばかりの男の兎の手を引いていたが、それにこんなことを言つていた。「何でも度を過こしてはいけない。専制主義と無政府主義とからは、同じくらいに遠く離れていなければいけない。」マリウスはその市民の言に耳を傾けた。それから彼はも一度池を一周した。そしてついに「自分の道」の方へ進んで行つたが、それも徐々に、またあたかもいやいやながら行くがようだった。ちようど無理に引つ張られてるようでもあれば、また同時に行くのを引き止められてるようでもあった。しかし彼は自らそれらのことに少しも気づかず、いつものとおりでであると思つていた。

道に出てみると、向こうの端にルブラン氏と若い娘とが「彼らのベンチ」にきているのがわかった。彼はずっと上まで上衣のボタンをかけ、しわができないようにと上衣をよく引つ張り、一種の満足な心地でズボンの輝いた艶つやを見回し、そしてベンチに向かつて進んでいった。その進み方のうちには進撃の趣があり、また確かに征服の下心もあつたに違いない。それでここに、「ハンニバルはローマへ向かつて進んだ」と言うように、「彼はベンチへ向かつて進んだ」と言おう。

とは言え彼の態度はまったく機械的であつて、いつものとおりの頭と仕事との専心は少しも中断されていなかつた。得業トクゴト士提要はばかな書物で、人間精神の傑作としてラシーヌの三つの悲劇を梗概こうがいしモリエールの喜劇はただ一つしか梗概してないのを見ると、よほどの愚人が書いたものに違いない、と彼はその

時考えていた。けれど耳には鋭い音が鳴り渡っていた。ベンチの方へ近寄りながら、彼は上衣のしわを伸ばし、目を若い娘の上に据えていた。道の向こうの端は、彼女のために漠然ぼくぜんとした青い輝きで満たされてるかのよう<sup>に</sup>に思えた。

近づくに従って彼の歩みはますますゆるやかになつてきた。ある距離までベンチに近づくと、道の先端まではまだだ**いぶ**あつたが、そこで立ち止まり、自分でもどうした訳か知らないで足を返した。向こうの端まで行かなかつたことをさえ自ら知らなかつた。娘が彼の姿を遠くから認め、その新しい服装をしたりつぱな様子を見たかどうか、それさえわからなかつた。けれども彼は、だれかに後ろから見らるる場合に自分の姿をよく見せようとして、まっすぐに背を伸ばして歩いた。

彼は道の反対の端まで行き、それからまた戻つてきて、こん

どは前よりもずっとベンチに近づいて来た。そして木立ち三本をへだてるだけの所までやってきたが、そこでもうどうしても先へ進めないような気がして、ちよつと躊躇ちゆうちよした。娘の顔が自分の方へ差し向けられてるのを見るように思った。それでも彼は男らしい激しい努力をして、ためらう心を押さえつけ、前方へ進んでいった。やがて彼はまつすぐに身を固くして、耳の先までまつかになり、右にも左にもあえて目もくれず、政治家のように手を上衣の中にさし込んで、ベンチの前を通りすぎた。そしてそこを、その要塞ようさいの大砲の下を、通つてゆく時、恐ろしく胸が動悸どうきするのを感じた。彼女は前日のとおり、緞子どんすの長衣と縮紗クレープの帽子とをつけていた。「彼女の声」に違いない言い難い声を彼は聞いた。彼女は静かに話をしていた。きわめてきれいだった。それだけのことを、彼は彼女を見ようともしなかつた。

けれども心に感じた。彼は考えた。「フランソア・ド・ヌーシャトー氏が自筆だとしてジル・ブラスの刊行本の初めにつけたマルコ・オブルゴン・ド・ラ・ロンダに関する論説は、実は私が書いたのだと知つたら、彼女もきつと私に敬意と尊敬とを持つに違いないんだが。」

彼はベンチの所を通りすぎ、すぐ先の道の端まで行き、それからまた戻つてきて、も一度美しい娘の前を通つた。がこんどはまっさおになつていた。強い不安しか感じなかつた。彼はベンチと娘とから遠ざかつていった。そして彼女の方に背を向けながら、後ろから彼女に見られてるような気がして、思わずよろめいた。

それから彼はもうベンチに近寄らなかつた。道の中ほどに立ち止まつて、今までかつてしなかつたことであるが、横目をし

ながらそのベンチに腰をおろしてしまい、漠然たる心の底で考えた。要するに、自分が嘆賞してるその白い帽子と黒い上衣とのあの人たちも、自分のみがき立てたズボンと新しい上衣とに対して、全然無感覚であることはできないだろうと。

十五分ばかりそうしていた後、円光にとりまかれてるベンチの方へまた歩き出そうとするかのように、彼は立ち上がった。けれどもそこに立ったまままで身動きもしなかった。あすこに娘とともに毎日腰掛けている老紳士の方でも、きつと自分に気がつき、自分の態度をおそらく不思議に思ったであろうと、十五カ月以来初めて彼は考えた。

そしてまた初めて彼は、心のうちでとは言え、ルブラン（白）氏などという<sup>あだな</sup>綽名でその知らない紳士を呼んでいたことに、あの不敬さを感じた。

そして彼は頭をたれ、手にしてるステッキの先で砂の上に物の形を描きながら、数分間じつとしていた。

それから突然向きを変え、ベンチとルブラン氏とその娘とを後ろにして、自分の家へ帰っていった。

その日彼は夕食を食いにゆくことを忘れた。晩の八時ごろそれに気づいたが、もうサン・ジャック街までやって行くにはあまり遅かったので、なあにと言つて、一片のパンだけをかじつた。

彼は上衣にブラシをかけ、丁寧にそれを畳んでから、ようやく寢床にはいった。

## 五 ブーゴン婆さんのたびたびの驚き

ブーゴン婆さん——と言うのは、ゴルボー屋敷の借家主で門番で兼世帯女である婆さんで、実際は前に言ったとおりブルゴンという名だったが、何物をも尊敬したことのないひどいクルフェーラックの奴やつが、そう名づけてしまったのである（訳者注　ブーゴン婆とはぐずり婆の意）。——ブーゴン婆さんは、その翌日、マリウスがまた新しい上衣を着て出かけるのを見て、あきれてしまった。

マリウスはまたリュクサンブールの園に行つたが、道の中ほどにあるベンチより先へは行かなかつた。前のように彼はそこに腰掛け、遠くからながめて、白い帽子と黒い長衣とまたことに青い輝きをはつきり見た。彼はそこを動きもせず、リュクサンブールの門がしまる時によく帰つていった。ルブラン氏とその娘とが帰つてゆく姿は見えなかつた。それで彼は、ふた

りはウエスト街の門から出て行つたのだろうと推定した。その後、数週間後のことであつたが、その時のことを考えてみた時、彼はその晩どこで夕食をしたかどうしても思い出せなかつた。

その翌日、もう三日目であつたが、ブーゴン婆さんはまた驚かされた。マリユスは新しい上衣を着て出かけたのである。

「まあ三日続けて！」と彼女は叫んだ。

彼女はあとをつけてみようとした。しかしマリユスは早く大

またに歩いてゐた。あたかも河馬がかもしか羚羊を追つかけるようなも

のだった。二、三分とたたないうちに、彼女はマリユスの姿を

見失ひ、息を切らして戻つてきた。喘息ぜんそくのためにほとんど息を

つまらして、ひどく怒つてゐた。彼女はつぶやいた。「毎日いい

方の服をつけて、おまけに人をこんなに駆けさしてさ、それで

いいつもりかしら！」

マリユスはまたリユクサンブルにおもむいた。

若い娘はルブラン氏とともにそこにきていた。マリユスは本を読んでるようなふうをして、できるだけ近づいていったが、それでもまだよほど遠くに立ち止まった。それから自分のベンチの方へ戻って腰を掛け、小道のうちを無遠慮な雀すずめが飛び回るのをながめ、自分が嘲あざけられてるような気がしながら、四時間もじつとしていた。

そういうふうにして二週間ばかり過ぎた。マリユスはもう散歩をするためにリユクサンブルに行くのではなく、いつも同じ場所になぜだか自分でも知らないでただすわりに行つた。一度そこへつくと、もう一步も動かなかつた。彼は人目につかないようにと朝から新しい上衣を着た、そしてまた来る日も来る日も同じようにした。

彼女はまさしく驚嘆すべきほど美しかった。しいて批評がましい一つの難点をあぐれば、その悲しそうな目つきとうれしそうな微笑との間の矛盾で、それが彼女の顔に何か心迷ったような趣を与え、ためにある瞬間には、そのやさしい顔は愛くるしいままで異様になるのだった。

## 六 囚われ

二週間目の終わりのある日、マリユスは例のとおり自分のベンチにすわって、手に書物を開いていたが、もう二時間にもなるのに一ページも読んでいかなかった。と突然彼は身を震わした。道の向こうの端で一大事が起こったのである。ルブラン氏と娘とはベンチを離れ、娘は父親の腕を取り、ふたりはマリユスが

おる道の中ほどへ向かつてやつてきたのである。マリユスは書物を閉じ、それからまた開き、次にそれを読もうとつとめた。彼は震えていた。円光はまつすぐに彼の方へやつてきつつあった。「ああ、姿勢をなおす暇もない、」と彼は考えた。そのうちにも白髪の男とその若い娘とは進んできた。彼にはその間が、一世紀ほど長いように思われ、また一瞬間にすぎないようにも思われた。「何しにこちらへ来るんだらう？」と彼は自ら尋ねた。「ああ、彼女がここを通つてゆく！ その足は、自分から二歩と離れないこの道の砂を踏んでゆく！」彼は気が顛倒していた。「ごく美しい男ともなりたかった。勲章でも持つていたかった。ふたりの歩み寄つてくる調子をとつた静かな音が聞こえた。ルブラン氏が怒つた目つきを自分に向けはすまいかとも想像した。「何か自分に話しかけるだらうか、」とも考えた。彼は頭を

たれた。そしてまた頭を上げた時、ふたりはすぐそばにきていた。若い娘は通つていった。通りすがりに彼をながめた。考え込んだようなやさしきで彼をじつとながめた。マリウスは頭から足の爪先までぞつとした。もう長い間一度も彼女の方へ行かなかつたことを難じられたような気がし、私の方から参りましたと言われたような気がした。その輝いた深い瞳ひとみの前に、マリウスは眩惑げんわくされてしまった。

彼は頭の中が燃えるように感じた。彼女の方から自分の所へきてくれた、何という幸いだろう。そしてまた彼女は、いかにじつと自分を見てくれたろう！ 彼女は今まで見たよりも一段と美しく彼には思えた。女性の美と天使の美とをいっしょにした美しさである。ペトラルカをして歌わしめダンテをしてひざまずかしめる美しさである。彼はあたかも青空の中央に漂つて

るような思いをした。同時に彼は、自分の靴くつにほこりがついていたので非常に心苦しかった。

彼女はまたこの靴をも見たに違いない、と彼は思った。

彼女の姿が見えなくなるまで、彼はその後ろを見送った。それから気が狂ったようにリュクサンブールの園の中を歩き初めた。時とするとひとりですら笑ったり声高に語ったりしがちだった。まったく夢を見ているようで、子もりの女どもまで彼が近づいて来ると、めいめい自分が恋せられてるんだと思ったほどである。

彼は街路でまた彼女に会いはすまいかと思つて、リュクサンブールを出た。

彼はオデオンの回廊の下でクールフェーラックに行き会つた。「いつしよに食事をしにこいよ、」と彼はクールフェーラックに

言つた。彼らはルーソーの家に行き、六フラン使い果たした。マリユスは鬼のようによく食べた。給仕にも六スー与えた。食後のお茶の時に、彼はクールフェーラックに言つた。「君は新聞を読んだか。オードリ・ド・プイラヴォーの演説は実にりっぱじゃないか。」

彼はすっかり恋に取つつかれていた。

食事をすますと、彼はクールフェーラックに言つた。

「芝居をおごろう。」彼らはポルト・サン・マルタン座へ行つて、アドレーの旅籠屋はたごやでフレデリックの演技を見た。マリユスはすきにおもしろがつた。

同時に彼はまたひどく気が立っていた。芝居から出て、ひとりの小間物屋の女が溝どぶをまたいでその靴下留めが見えたのを、頑固がんこにふり返りもしなかつた。「僕はあ、あ、いう女をも喜んで採集

するんだがな、」と言つたクールフェーラックの言葉に、彼はほとんど嫌悪けんおの念をいだいた。

クールフェーラックは翌日、彼をヴォルテール珈琲店コーヒーに招いた。マリユスはそこに行つて、前日よりまあいっそうむさぼり食つた。彼はすつかり考え込んでおり、またごく快活だった。機会あるごとにすぐに高笑いをしたが、つてゐるかのようだった。ひとりの田舎者いなかものに紹介されるとそれを親しく抱擁した。学生の一団がテンプルのまわりに陣取つていた。国家がわざわざ金を出してソルボンヌ大学で切り売りさしてゐるばかりか、講義のことを論じていたが、次にその談話は、多くの辞書やキシユラの韻律法などにある誤謬ごびゅうや欠陥のことに落ちていった。マリユスはその議論をさえぎつて叫んだ。「それでも十字勲章をもらうのは悪くないぞ！」

「これはおかしい！」とクールフェーラックはジャン・プルーヴェールに低くささやいた。

「いや、」とジャン・プルーヴェールは答えた、「奴はまじめなんだ。」

実際それはまじめだった。マリユスは大なる情熱が起こつてこようとする楽しいまた激烈な最初の時期に際会していた。

ただ一度の目つきが、すべてそういう変化をもたらしたのである。

火坑には既に火葉がつめられている時、火災の準備が既にでき上がっている時、それより簡単なことはない。一つの瞥見べっけんはすなわち口火である。

事は既に終わった。マリユスはひとりの女に恋した。彼の運命は未知の世界にふみ込まんとしていた。

婦人の一瞥は、表面穏やかであるが実は恐るべきある種の歯車にも似ている。人は毎日平和に事もなくそのそばを通り過ぎ、何らの懸念も起こさない。ある時は、それが自分のそばにあることさえも忘れてしまっている。行き、きたり、夢想し、語り、笑っている。が突然とらえられたことを感ずる。その時はもはや万事終わりである。歯車は人を巻き込み、瞥見は人を捕える。どこからということなく、またいかにしてということなく、思いつくがらして思想の一端からでも、うつかりしてすき間からでも、人を捕えてしまう。それは身の破滅である。全身引き込まなければやまない。不可思議な力から驚わしづかみにされる。身をもがいてもむだである。人間の力ではいかんともすることできない。精神も幸福も未来も魂もすべてが、車の歯から歯へ、苦悶くもんから苦悶へ、懊惱おうのうから懊惱へと、陥つてゆく。そして

あるいは悪い女の力に支配されるか、あるいは気高い心の婦人に支配されるかに従つて、人がその恐るべき機械から出て来る時には、あるいは汚辱によつて面目を失つているか、あるいは情熱によつて面目を一新しているかだけである。

## 七 推察のままに任せらるるU文字の事件

孤立、すべてからの分離、矜持きょうじ、独立、自然に対する趣味、日々の物質的活動の欠除、自分のうちに引きこもつた生活、貞節な心のひそかな争闘、万物に対するやさしい恍惚こうこう、などはいにマリユスをして情熱と呼ぶるところのものにとらえらるる素地をこしらえていた。父に対する崇拜の念はしだいに一つの信仰となり、あらゆる信仰と同じくそれも心の奥に引つ込ん

でしまつていた。そして今第一の正面に何物かが必要となつて  
いた。そこに恋がきたのである。

まる一月はかくて過ぎた。その間マリユスは毎日リユクサン  
ブルの園に行つた。その時間が来れば何物も彼を引き止める  
ことはできなかつた。「あいつは勤務中だ」とクールフェーラッ  
クは言つた。マリユスは歡喜のうちに日を過ぎしていった。若い  
娘も彼の方に目をつけてゐることは確かだつた。

彼はついに大胆になつて、あのベンチに近寄つていつた。け  
れどももうその前を通ることをしなかつた。一つは臆病おくびょうな本能  
からと、また一つには恋する者の注意深い本能からだつた。「父  
親の注意」をひかない方がいい、と彼は思つていた。彼は深い  
マキアヴェリ式の権謀を用いて、彫像の台石や樹木の後ろに自  
分の地位を選び、そしてできるだけよく娘の方から見えるよう

にし、できるだけ老紳士の方からは見えないようにした。時とすると半時間も、レオニダスかスパルタクスか何かの像の陰にじつとたたずんで、手に書物を持ち、その書物から静かに目を上げて、美しい娘の方を見ようとするこゝもあつた。すると彼女の方でもぼんやりした微笑を浮かべて、彼の方へかわいい横顔を向けた。白髪の人とごく自然にまた静かに話をしながら、彼女はその処女らしいまた熱情のあふれた夢見るような目を、マリユスの上に据えるのだつた。世界の最初の日からイヴが知つていた、また人生の最初からすべての女が知つてゐる、古い太古からのやり方である。彼女の口はひとりの方へ返事をし、彼女の目つきはもひとりの方へ返事をしていた。

けれども、ルブラン氏の方でもついに何事かに気づいたことは想像される。なぜなら、マリユスがやってゆくと、しばしば彼

は立ち上がって歩き出した。彼はよくいつもの場所を離れ、道の他の端にあるグラディアトゥールの像のそばのベンチに腰掛け、あたかもそこまでマリウスがついて来るかを見ようとするがようだった。マリウスはその訳を了解せず、その失策をやってしまった。「父親」はしだいに不正確になり、もう毎日「自分の娘」を連れてこなかった。時とするときひとりやってきた。するとマリウスはそこに止まっていなかった。それがまたも一つの失策だった。

マリウスはそういう徴候には少しも気を留めなかった。臆病な状態から、避くるを得ない自然の順序として、盲目の状態に陥っていった。彼の恋は募ってきた。毎夜その夢を見た。その上意外な幸福がやってきた。それは火に油を注ぐようなもので、また彼の目をいつそう盲目ならしむるものだった。ある日の午

後、たそがれ頃に、「ルブラン氏とその娘」とが立ち去つたベンチの上に、彼は一つのハンカチを見いだした。刺繡ししゅうもないごくあつさりしたハンカチだったが、しかしまつ白で清らかで、言うべからざるかおりが発してゐるように思えた。彼は狂喜してそれを拾い取つた。ハンカチにはU・Fという二字がついていた。マリユスはその美しい娘については何にも知るところがなかつた、その家からも名前も住所も知らなかつた。そしてその二字は彼女についてつかみ得た最初のものだつた。大事な頭文字で、彼はすぐその上に楼閣を築きはじめた。Uというのはきつと呼び名に違ひなかつた。彼は考えた、「ユルスユールかな、何とないいい名だろう！」彼はそのハンカチくちびるに唇をつけ、それをかき、昼は胸の肌はだにつけ、夜は脣にあてて眠つた。

「彼女の魂をこの中に感ずる！」と彼は叫んだ。

しかるにそのハンカチは実は老紳士ので、たまたまポケットから落としたのだった。

その拾い物の後はいつも、マリユスはそれに唇をつけ、それを胸に押しあてながら、リュクサンブールに姿を現わした。美しい娘はその訳がわからず、ひそかな身振りでそのことを彼に伝えた。

「何という貞節さだろう！」とマリエスは言った。

## 八 老廃兵といえども幸福たり得る

われわれは貞節、という語を発したことであるし、また何事も隠さないつもりであるから、「彼のユルスユール」は恍惚こうこうのうちにあるマリユスにきわめてまじめな苦しみを与えたことが一

度あるのを、ここに述べなければならぬ。それは彼女が、ルブラン氏を促してベンチを去り道を逍遙しやうようした幾日かのうちの、ある日のことだった。晩春の強い風が吹いて篠懸すずかけの木の梢こずえを揺すっていた。父と娘とは互いに腕を組み合わして、マリユスのベンチの前を通り過ぎた。マリユスはそのあとに立ち上がり、その後ろ姿を見送った。彼の心は狂わんばかりで、自然にそういう態度をしたらしかった。

何物よりも最も快活で、おそろく春の悪戯いたずらを役目としているらしい一陣の風が、突然吹いてきて、苗木栽培地ペピニエールから巻き上がり、道の上に吹きおろして、ヴィルギリウスの歌う泉の神やテオクリトスの歌う野の神にもふさわしいみごとな渦巻きの中に娘を包み込み、イシスの神の長衣よりいつそう神聖な彼女の長衣を巻き上げ、ほとんど靴下留めくつしたどの所までまくってしまった。

何とも言えない美妙なかつこの片脛かたはぎが見えた。マリユスもそれを見た。彼は憤慨し立腹した。

娘はひどく当惑した様子で急いで長衣を引き下げた。それでも彼の憤りは止まなかつた。——その道には彼のほかだれもいなかったのは事実である。しかしいつもだれもないとは限らない。もしだれかいたら！ あんなことが考えられようか。彼女が今したようなことは思つてもいやなことである。——ああしかし、それも彼女の知つたことではない。罪あるのはただ一つ、風ばかりだ。けれども、シェリュバンの中にあるバルトロ的氣質が（訳者注　フィガロの結婚中の人物で、前者は女に初心な謹厳な少年、後者は嫉妬深い後见人）ぼんやり動きかけていたマリユスは、どうしても不満ならざるを得ないで、彼女の影に対してまで嫉妬しつとを起こしていた。肉体に関する激しい異様

な嫉妬の念が人の心のうちに目ざめ、不法にもひどく働きかけてくるのは、皆そういうふうにして初まるのである。その上、この嫉妬の念を外にしても、そのかわいらしい脛はぎを見ることは、彼にとつては少しも快いことではなかった。偶然出会う何でもない婦人の白い靴下くつしたを見せられる方が、彼にとつてはまだしもいやでなかつたらう。

「彼のユルスユール」は、道の向こうの端まで行き、ルブラン氏とともに引き返してきて、マリウスが再び腰をおろしていたベンチの前を通つた。その時マリウスは氣むずかしい荒い一瞥いちべつを彼女に与えた。若い娘はちよつと身を後ろにそらせるようにし、それとともに眼瞼まぶたを上の方に上げた。「まあどうなすつたのだらう！」という意味だつた。

それは彼らの「最初の争い」だつた。

マリウスが目の叱責しっせきを彼女に与え終わるか終わらないうちに、一人の男がその道に現われた。それは腰の曲がったしわだらけな白髪しろがみの老廃兵らうはいで、ルイ十五世式の軍服をつけ、兵士のサン・ルイ会員章かいじんしやうたる、組み合わせた剣のついてる小さな楕円形だえんけいの赤ラシヤしやを胴たうにつけ、その上、上衣かたそでの片袖かたそでには中に腕うでがなく、頤あごには銀髯ぎんぜんがはえ、一方の足は義足ぎそくだった。マリウスはその男の非常に満足まんぞくげな様子ようすがそれと見て取らるるような気がした。またその皮肉くわにくな老人らうじんが自分のそばをびっこひいて通りながら、ごく親しい愉快ういきそうな目配めばりせをしたように思えた。あたかも偶然ぐうぜんにふたりは心を通じ合つて、いつしよに何かうまいことを味わつたとでも、自分に伝えてるらしく彼には思えた。その剣の端はしくれの老耄おいぼれめが、いったい何でそう満足まんぞくげにしてるのか。奴やつの義足ぎそくと娘むすめの脛はざとの間に何の関係があるか。マリウスは嫉妬しやくとの発作はつさく

に襲われた。「彼奴あいつもいたんだらう。あれを見たに違いない！」と彼は自ら言った。そして彼はその老廃兵をなきものにしたいとまで思った。

時がたつに従つていかなる尖端きつさきも鈍つてくる。「ユルスユール」に対するマリユスの憤りも、たとい正しいまた至当なものであつたとしても、やがて過ぎ去つてしまった。彼はついにそれを許した。しかしそれには多大の努力を要し、三日の間というものは不平のうちうちに過ぎ過ぎした。

とは言うものの、そんなことことのあつたにもかかわらず、またそんなことがあつたために、彼の情熱はますます高まつて狂わんばかりになつた。

彼女、彼女はユルスユールという名であることを、マリユスがいかにして発見したか、否発見したと思つたか、それは読者の既に見てきたところである。

欲望は愛するにつれて起こってくる。彼女がユルスユールという名であることを知つたのは、既に大したことである、しかもまたきわめて些事<sup>さじ</sup>である。マリユスは三、四週間のうちにその幸福を食い尽してしまつた。彼は新たに他の幸福を欲した。彼は彼女がどこに住んでるかが知りたくなつた。

彼はグラデアトゥールのベンチの策略に陥つて、第一の失策を演じた。ルブラン氏がひとりで来る時にはリユクサンブールの園に止まることをしないで、第二の失策を演じた。それからまた第三の失策をやつた。それは非常な失策だつた。彼は「ユ

ルスユール」のあとをつけたのである。

彼女はウエスト街の最も人通りの少ない場所に住んでいた。見たところ質素な、四階建ての新しい家だった。

それ以来マリユスは、リユクサンブルで彼女に会うという幸福に加えて、彼女のあとにその家までついてゆくという幸福を得た。

彼の渴望は増していった。彼女の名前を、少なくともその幼名、かわいい名、本当の女らしい名を、彼は知っていた。彼女の住居をも知った。そしてこんどは、どういう身分であるかを知りたくなった。

ある日の夕方、その家までふたりのあとについて行った時、ふたりの姿が正門から見えなくなった時、彼は続いてはいつて行き、勇敢にも門番に尋ねた。

「今帰つていった人は、二階におらるる方ですか。」

「いいえ、」門番は答えた、「四階にいる人です。」

それでまた一步進んだわけである。そしてその成功はマリユスを大胆ならしめた。

「表に向いてる室へやですか。」と彼は尋ねた。

「えー！」と門番は言つた、「人の家というものは皆往来に向けて建ててあるものですよ。」

「そしてあの人はどういう身分の人ですか。」とマリユスはまた尋ねた。

「年金があるんです。ずいぶん親切な人で、大した金持ちというのではないが、困る者にはよく世話をして下さいさるんです。」

「名前は何というんですか。」とマリユスはまたきいた。

門番は頭を上げて、そして言つた。

「あなたは探偵たんでいですか？」

マリユスはかなり当惑したがしかし非常に喜んで立ち去った。だいたい歩を進めたわけである。

「しめた、」と彼は考えた、「ユルスユールという名前であることもわかったし、年金を持つてる者の娘であることもわかったし、あのウエスト街の四階に住んでいることもわかった。」

その翌日、ルブラン氏と娘とは、わずかな間しかリユクサンブルに止まっていなかった。まだ日の高いうちに立ち去ってしまった。マリユスはいつものとおりウエスト街まで彼らのあとについて行つた。正門の所へ行くと、ルブラン氏は娘を先の中へ入れて、その門をくぐる前に立ち止まり、ふり返つてマリユスをじつとながめた。

次の日、彼らはリユクサンブルにこなかつた。マリユスは

一日待ちぼけをくつた。

晩になつて、彼はウエスト街に行き、四階の窓に燈火あかりがさしてゐるのを見た。彼はその燈火が消えるまで窓の下をうろついた。その次の日、リュクサンブールへはふたりともこなかつた。マリユスは終日待つていて、それからまた窓の下の夜の立ち番をした。それが十時までかかつた。夕食は時と場合に任した。熱は病人を養い、恋は恋人を養う。

彼はそういうふうにして一週間を過ごした。ルブラン氏と娘とはもうリュクサンブールに姿を見せなくなつた。マリユスは種々悲しい推察をした。昼間正門の所で待ち伏せすることはなしかねた。晩に出かけて行つて、窓ガラスにさしてゐる赤い光をながめることだけで満足した。時とするとその窓に人影がさして、それを見る彼の胸は激しく動悸どうきした。

八日目、彼が窓の下にやって行つた時、そこには光が見えなかつた。彼は言つた。「おや、まだランプがついていない。でももう夜だ。どこへか出かけたのかしら。」彼は待つてみた。十時まで、十二時まで、ついに夜中の一時になつた。四階の窓には何の光もささず、また家の中にだれもはいつてゆく者もなかつた。彼はひどく沈みきつて立ち去つた。

翌日——彼はただ、明日は明日はと暮らして、言わば、彼にとつては今日というものはなかつたのである——翌日、彼はまたリュクサンブールで彼らのいずれをも見かけなかつた。恐れていたとおりでつた。薄暗くなつてからその家の前へ行つた。窓には何の光もなかつた。鎧戸よろいどがしめてあつた。四階はまっ暗だつた。

マリユスは正門をたたき、はいつて行つて、門番に言つた。

「四階の人は？」

「引つ越しました。」と門番は答えた。

マリユスはよろめいた。そして弱々しく言った。

「いつたいいつですか。」

「昨日です。」

「今どこに住んでいられますか。」

「一向知りません。」

「ではこんどの住所を知らして行かれなかつたんですか。」

「そうです。」

そして門番は頭を上げて、マリユスに気づいた。

「やああなたですか。」と彼は言った。「それじゃあなたはやはり警察の方ですね。」

第七編 パトロン・ミネット

一 鋤坑と坑夫

人間のあらゆる社会は皆、劇場でいわゆる奈落なるものを有している。社会の地面は至る所発掘されている。あるいは善を掘り出さんがために、あるいは悪を掘り出さんがために。そしてそれらの仕事は互いに積み重なっている。そこには上方の鋤坑もあれば、下方の鋤坑もある。そういう薄暗い地下坑は、時として文明の下に影を没し、また無関心で不注意なるわれわれ

によつて足下に蹂躪じゆうりんさるることもあるが、それ自身に上部と下部とをそなえている。十八世紀におけるフランスの百科辞典は、やはりその一つの坑であつて、ほとんど地上に現われてるものであつた。初代キリスト教をひそかにはぐくんできていたあの暗黒は、やがてローマ皇帝の下に爆発して光明をもつて人類を満たさんがためには、ただ一つの機会を要するのみだつた。聖なる暗黒のうちには、実に潜在せる光明があつたのである。火山が蔵する影のうちには、やがて炎々と輝き出すべき可能性がある。熔岩ようがんもすべてその初めは暗黒である。最初の弥撒ミサが唱えられた瑩窟えいくつは、単にローマの一洞窟どうくつだつたのである。

社会の組織の下には、驚くべく複雑な废墟はいきよが、あらゆる種類の発掘が存している。宗教の坑があり、哲学の坑があり、政治の坑があり、経済の坑があり、革命の坑がある。あるいは思想の

鶴嘴つるはし、あるいはは数字の鶴嘴、あるいはは憤怒の鶴嘴。一つの瑩窟えいくつから他の瑩窟へと、人々は呼びかわし答え合う。あらゆる理想郷は、それらの坑によつて地下をへめぐる。四方に枝を伸ばしてゆく。あるいは互いに出会つて親交を結ぶ。ジャン・ジャック・ルーソーはおのれの鶴嘴をディオゲネスに貸し、ディオゲネスは彼におのれの提灯ちようちんを貸す。あるいはまた互いに争闘する。カルヴェインはソチニの頭髮をつかむ。しかしながら、それらの力が一つの目的に向かつて進むのを、何物も止め妨ぐることはできない。暗黒の中を往来し上下して、おもむろに上層と下層とを置き換え外部と内部とを交代せしむる、その広汎こうはんなる一斉の活動を、何物も止め妨ぐることはできない。それは隠れたる広大なる蠢動しゅんどうである。しかし社会は、表面をそのままにして内臓を変化せしめつつあるその発掘に、ほとんど気づかないでい

る。そして地下の層が数多いだけに、その仕事も雑多であり、その採掘も種々である。けれどそれらの深い開鑿かいさくからいつたい何が出て来るのか。曰いわく、未来が。

地下深く下れば下るほど、その労働者は不可思議なものとなる。社会哲学者らが見て取り得る第一層までは、仕事は善良なものである。しかしその一層を越せば、仕事も曖昧あいまいざつぱく雑駁なものとなり、更に下に下れば恐るべきものとなる。ある深さに及べば、もはや文明の精神をもつてしては入り得ない坑となる。そこはもはや、人間の呼吸し得べき範囲を越えた所で、それより先に怪物の棲居すまいとなるべきものである。

下に導く段階はまた不思議なものである。その各段は、哲学の立脚きやくし得る各段であつて、そこには、あるいは聖なるあるいは畸形きけいなる種々の労働者がひとりずつおる。ヨハン・フスの下

にルーテルがおり、ルーテルの下にデカルトがおり、デカルトの下にヴォルテールがおり、ヴォルテールの下にコンドルセーがおり、コンドルセーの下にロベスピエールがおり、ロベスピエールの下にマラーがおり、マラーの下にバブーフがおる。そういうふうにして続いてゆく。更に下の方に、目に見えるものと見えないものとの境界の所には、他のほの暗い人影がおぼろに認められる。それはおそらく、いまだこの世に存しない人々であろう。昨日の人は今は幽鬼であるが、明日の人は今はまだ浮遊のものである。精神の目のみがそれらを漠然と認め得るのである。まだ生まれざる未来の仕事は、哲学者の幻像の一つである。

胎児の状態にある陰府よみの中の世界、何という異常な幻であるか！

サン・シモン、オーエン、フリーエなどもまたその側面坑の中におる。

それら地下の開鑿者かいざくしゃらは皆、自ら知らずしてある目に見えない聖なる鎖に結ばれていて、各自孤立してはいはしないが、多くは常に自ら孤独であると考えている。そして実際、彼らの仕事は種々であり、ある者の光明とある者の炎とが互いに矛盾することもある。ある者は楽しく、ある者は悲壮である。けれども、その相違のいかにかわらず、それらの労働者らは皆、最高のものから最低のものに至るまで、最賢のものから最愚のものに至るまで、一つの類似点を持っている。すなわち無私ということ。マラーもイエスと同じくおのれを忘れている。彼らは皆おのれを捨て、おのれを脱却し、おのれのことを考えていない。彼らは自己以外のものを見ている。彼らは一の目を有して

いる。その目はすなわち絶対なるものをさがし求めている。最高の者は一瞬いちほんのうち天をすべて収めている。最下の者も、いかにいまだ空漠たろうとも、なおその眉目びもくの下に無窮なるもののかすかな輝しるしきを持っている。そのなすところが何であろうとも、かかる標しるしを、星の瞳ひとみを、有している者ならば、すべて皆尊むべきではないか。

影の瞳はまた他の標である。

そういう瞳より悪が始まる。目に光なき者こそは、注意すべき恐るべき者である。社会のうちには、暗黒なる坑夫もいる。発掘はやがて埋没となり、光明もやがて消えうせるような地点が、世にはあるものである。

以上述べきたった鉱坑の下に、それらの坑道の下に、進歩と理想郷とのその広大なる地下の血脈系の下に、はるか地下深く

に、マラーより下、バブーフより下、更に下、はるか遠く下に、上方の段階とは何らの関係もない所に、最後の坑道がある。恐るべき場所である。われわれが奈落ならくと呼んだのはすなわちそれである。それは暗黒の墓穴であり、盲目の洞穴である。どん底である。

そこは地獄と通じている。

## 二 どん底

このどん底においては無私むじは消滅する。悪魔は漠然ぼくぜんと姿を現わし、人は自己のこのみを考えている。盲目の自我ごが、咆え、漁りあさ、模索し、かみつく。社会のウゴリノがこの深淵しんえんのうちにおる（訳者注 ウゴリノとは飢の塔のうちに幽閉されて餓死せ

る子供らの頭を咬める人——ダンテの神曲)。

その墓穴の中にさまよつて荒々しい人影は、ほとんど獸類ともまたは幽鬼とも称すべきものであつて、世の進歩なるものを念頭にかげず、思想をも文字をも知らず、ただおのれ一個の欲望の満足をし計つていない。彼らはほとんど何らの自覚も持たず、心の中には一種の恐るべき虚無を蔵している。ふたりの母を持つてゐるが、いずれも残忍なる継母であつて、すなわち無知と困窮とである。また嚮導者<sup>きやうどうしや</sup>としては欠乏を持つてゐる。そしてそのあらゆる満足はただ欲情を満たすことである。彼らは恐ろしく貪慾<sup>どんよく</sup>である。換言すれば寧猛<sup>どうもう</sup>である、しかも暴君のごとくにではなく、猛虎<sup>もうこ</sup>のごとくに。それらの悪鬼は、難渋より罪惡に陥つてゆく。しかもそれは必然の経過であり、恐るべき変化であり、暗黒の論理的帰結である。社会の奈落<sup>ならく</sup>にはい回つ

てるものは、もはや絶対なるものに対する痛切な要求の声ではなく、物質に対する反抗の念である。そこにおいて人は竜ドラゴンとなる。飢渴がその出発点であり、サタンとなることがその到達点である。そういう洞穴どうけつから凶賊ラスネールが現われて来る。

われわれは前に第四編において、上層の鉱区の一つ、すなわち政治的革命的哲学的の大坑道の一つを見てきた。既に述べたとおりそこにおいては、すべてが気高く、純潔で、品位あり、正直である。そこにおいても確かに、人は誤謬ごびやうに陥ることがあり、また実際陥つてもいる。しかし壮烈さを含む間はその誤謬も尊むべきである。そこでなさるる仕事の全体は、進歩という一つの名前を持つている。

今や他の深淵しんえん、恐るべき深淵を、のぞくべき時となった。

われわれはあえて力説するが、社会の下には罪惡の大洞窟だいでうくつが

存している。そして無知が消滅する日まではそれはなお存するであろう。

この洞窟は、すべてのものの下にあり、すべてのものの敵である。いつきいに対する憎悪である。この洞窟はかつて哲学者を知らず、その剣はかつてペンに鑄つぶされたことがない。その黒色はインキ壺つぼの崇高なる黒色と何らかの関係を有したことがない。その息づまるばかりの天井の下に痙攣けいれんする暗黒の指は、かつて書物をひもとき新聞をひらいたことがない。バブーフも強賊カルトウーシュに比すればひとりの探検家であり、マラーも凶漢シンデルハンネスに比すればひとりの貴族である。この洞窟どうくつはいつきいのものものの転覆を目的としている。

しかりいつきいもののもの。そのうちには、彼がのろう上層の坑道えんおも含まれる。彼はその厭悪えんおすべき蠢動しゅんどうのうちに、啻ただに現在

の社会制度を掘り返すのみでなく、なお哲学をも、科学をも、法律をも、人類の思想をも、文明をも、革命をも、進歩をも、すべてを掘り返す。その名は単に窃盜、売笑、殺戮さつりく、刺殺である。彼は暗黒であり、混沌こんとんを欲する。彼をおおう屋根は無知で作られてある。

他のすべてのもの、上層のすべての洞窟は、ただ一つの目的をしか有しない、すなわちこの洞窟を除去することである。哲学や進歩が、同時にその全器官をそろえて、現実の改善ならびに絶対なるものの静観によつて、到達せんと目ざす所は実にこの一事にある。無知の洞窟を破壊するは、やがて罪惡の巢窟を破壊することである。

以上述べきたつたところの一部を数言につづめてみよう。曰く、社会の唯一の危険は暗黒にある。

人類はただ一つである。人はすべて同じ土でできている。少なくともこの世にあつては、天より定められた運命のうちには何らの相違もない。過去には同じやみ、現世には同じ肉、未来には同じ塵ちり。しかしながら、人を作る捏粉ねりこに無知が交じればそれを黒くする。その不治の黒色は、人の内心にしみ込み、そこにおいて悪となる。

三 バベ、グールメル、クラクズー、およびモンパ  
ルナス

クラクズーにグールメルにバベにモンパルナスという四人組の悪漢が、一八三〇年から一八三五年まで、パリーの奈落ならくを支配していた。

グールメルは、あたかも失脚したヘラクレス神のような男だつた。その巢をアルシュ・マリオンの下水道に構えていた。身長六尺、大理石のような胸郭、青銅のような腕、洞穴どうけつから出るような呼吸、巨人のような胴体、小鳥のような頭蓋ずがい。あたかもファルネーゼのヘラクレス神の像が、小倉のズボンと綿ビロードの上衣をつけた形である。そういう彫刻的な体軀たいくをそなえたグールメルは、怪物をも取りひしぎ得たであろうが、自ら怪物となることはな容易であつた。低い前額、広い顛顛こめかみ、年齢四十足らずで目尻めじりには皺しわが寄り、荒く短い頭髮、毛むくじやらの頬ほお、猪いのししのような髯ひげ、それだけでもおよそその人物が想像さるるだろう。彼の筋肉は労働を求めていたが、彼の暗愚はそれをきらつてゐた。まったく怠惰な強力にすぎなかつた。うかとした機会でも人を殺すことができた。植民地生まれの男だと一般に思われて

いた。一八一五年にアヴィニヨンで運搬夫となっていたことがあるので、ブリュヌ元帥（訳者注 一八一五年アヴィニヨンにて暗殺され河中に投ぜられし人）にもいくらか手をつけたことがあるに違いない。その後運搬夫をやめて悪漢となったのである。

バベの小柄なのは、グールメルグールメルの粗大と対照をなしていた。バベはやせており、また物知りだった。身体は薄い薄いが、心は中々見透かし難かった。その骨を通して日の光は見られたが、その瞳ひとみを通しては何物も見られなかった。彼は自ら化学者だと言っていた。ボベーシュの仲間にはいつて道化役者となり、またボビノの仲間にはいつて滑稽家こっけいかとなっていたこともある。サン・ミイエルでは喜劇を演じたこともある。気取りやで、話し上手で、大げさにほほえみ、大げさに身振りをした。「国の首領」の

石膏像や肖像を往来で売るのを商売にしていた。それからまた歯抜きもやった。市場で種々な手品を使つてみせた。一つの屋台店を持つていたが、それにラツパと次の掲示とをつけていた。

——諸アカデミー会員歯科医バベ、金属および類金属に關し物理的実験を試み、齒を抜き、同業者の手の及ばざる齒根の治療をなす。価、齒一本一フラン五十サンチーム、二本二フラン、三本三フラン五十サンチーム、好機を利用せよ。——（この「好機を利用せよ」というのは、「でき得る限り齒を抜くべし」という意味であつた。）彼は妻帯して子供を持つていた。しかし妻も子供らもその後どうなつたか自ら知らなかつた。ハンケチでも捨てるように彼らを捨ててしまったのである。新聞を読むことができたが、それはその暗黒な社会での一異彩だつた。ある日、まだその屋台店のうちに家族をいっしょに引き連れていた

頃、メツサジエー紙上で、ある女が牛のような顔をした子を生んだが子供も丈夫にしているということを読んで、彼は叫んだ。「これは金儲けになる！　だが俺の女房はそんな子供を設けてくれるだけの知恵もねえんだからな。」

それから後、彼はすべてをよして「パリーに手をつけ」初めた。これは彼自身の言葉である。

クラクズーとは何であったか。暗夜そのものであった。彼は空が黒く塗られるのを待つて姿を現わした。夜になると穴から出てきたが、夜が明けないうちにまたそこへ引つ込んでいった。その穴はどこにあるか、だれも知ってる者はなかった。まっくらな中でも、仲間の者にまで背中を向けて口をきいた。そしてクラクズーというのも彼の実際の名前ではなかった。彼は言っていた、「俺はパ・デュ・トゥー（皆無）というんだ。」もし蠟燭

の光でもさそうものなら、すぐに仮面をかぶった。彼はこわい  
ろ使いだつた。バベはよく言った、「クラクズーは二色の声を持  
つて、夜の鳥だ。」彼は朦朧もうろうとした恐ろしい、ぶらつき回つて  
男だつた。クラクズーというのは緋名あだなであつて、果たして何か  
名前を持つてゐるかさえもわからなかつた。口よりも腹から声を  
出すことが多いので、果たして声というものを持つてゐるかさえ  
もわからなかつた。だれもその仮面をしか見たことがないので、  
果たして顔を持つてゐるかさえもわからなかつた。幻のように彼  
は忽然こつぜんと姿を消した。出て来る時も、まるで地面から飛び出  
てくるかと思われるほどだつた。

痛ましい者と言えばおそらくモンパルナスであつたらう。ま  
だ少年で、二十歳にも満たず、きれいな顔、桜桃さくらんぼにも似た唇、  
みごとなまつ黒い頭髮、目に宿つてゐる春のような輝き、しかも

あらゆる悪徳にしみ、あらゆる罪悪を望んでいた。悪を消化しつくしたので、更にひどい悪を渴望していた。浮浪少年から無頼漢となり、無頼漢から強盗と変じたのである。やさしく、女らしく、品があり、頑健がんけんで、しなやかで、かつ獐猛どうもうだった。一八二九年のスタイルどおりに、帽子の左の縁を上げて髪の毛を少し見せていた。強盗をして生活していた。そのフロック型の上衣は上等の仕立てではあったが、まったくすり切れていた。彼は困窮のうちに沈み殺害をも犯しつつしかもめかしやであった。この青年のあらゆる罪悪の原因は、美服をまといたいという欲望だった。「お前さんはきれいなね、」と彼に言ったある一人の浮気女工は、彼の心のうちに一点の暗黒を投じ、そのアベルをしてカインたらしめたのである。自分のきれいであることを知って、彼は更に優美ならんことを欲した。しかるに第一の

優美は怠惰である。そして貧しい者の怠惰はすなわち罪悪である。いかなる浮浪の徒も、モンパルナスくらいに人に恐れられていた者はあまりない。十八歳にして彼は既に後に数多の死屍しかばねを残していた。この悪漢のために、両腕をひろげ顔を血にまみらしてたおれた通行人も、一、二に止まらない。縮らした頭髪、ぬりつけた香油、きちつとした上衣、女のような腰つき、プロシヤの将校のような上半身、周囲に起こる町娘らの賛美のささやき、気取った結び方をした襟飾りえりかざ、ポケットの中にしのぼした棍棒こんぼう、ボタンの穴にさした一輪の花、そういうのがこの人殺しの洒落者しやれものの姿であつた。

#### 四 仲間の組織

それら四人組みの悪党は、プロテウスの神のように自由に姿を変え、警察の網の目をぬけてはい回り、「樹木や炎や泉など種々の姿となつて」名探偵めいたんていヴィドツクの容赦なき目をもののがれんとつとめ、互いに名前や詐術を貸し合い、自身の暗黒のうちうちに潜み、秘密な穴にのがれ、互いに隠し合い、仮装舞踏会でつけ鼻を取り去るようようにすぐすぐにありさまを変え、あるいは四人がひとりであるかのように見せかけ、あるいは名警官ココ・ラクールルでさえも四人を一群の者であると誤るほど巧みに大勢に見せかけた。

それら四人の者は、実は四人ではなかつたのである。パリーで大仕掛けに仕事をしてる四つの頭を持った一個の不可思議な盗賊であつた。社会の窖あなぐらに住む恐るべき悪の水すいし※<sup>1</sup>であつた。

その分岐とその網目のような下層の脈絡とによつて、バベとグールメルとクラクズーとモンパルナスとの四人は、広くセーヌ県内の闇撃を一手に引き受けていた。彼らは通行人に対して、下層からのクーデターを行なつた。この種の仕事を考えついた者、夜の仕事を思いついた者は、皆その実行を彼らにはかつた。四人の悪漢は草案を供給さるればそれをうまく舞台に上せた。彼らはその筋書きに従つて仕事をした。彼らはいつても、何か肩を貸す必要がありまた相当に利益のある悪事には、それに相応した適当な人員を貸してやることもできた。力づくの仕事には共犯人を呼び集めることもできた。一群の暗闇くらやみの役者を持つていて、社会の底のあらゆる悲劇に自由に使つていた。

通常夕方に彼らは起き上がつて、サルペートリエール救済院の近くの野原で会合した。そしてそこで種々相談をこらした。

それから十二時間の夜の間は彼らのもので、それをいかに使うべきかを定めた。

パ、ト、ロ、ン、・ミ、ネ、ツ、ト、といふのがどん底の社会でこの四人組みの仲間に与えられてる名前だった。日々に消えうせつつある古い不思議な俗語では、パ、ト、ロ、ン、・ミ、ネ、ツ、ト、(子猫親方)といふのは朝の意味であつて、犬と狼との間といふのが夕の意味であるのと同じである。このパ、ト、ロ、ン、・ミ、ネ、ツ、トといふ呼び名は、おそらく彼らの仕事が終わる時刻からきたものである。夜明けは幽霊は消えうせ盗賊が分散する時なのである。四人の者はそういう異名で知られていた。重要裁判長がかつて、ラスネールをその獄屋に見舞つて、彼が否認してる罪悪を尋問したことがある。「ではだれがそれをしたのだ。」と裁判長は尋ねた。するとラスネールは、司法官にとつては謎なぞにすぎないが警察にとつ

ては明らかにわかる次の答えをした。「たぶんパトロン・ミネツトでしよう。」

ある場合には、登場人物の名前だけを見てその芝居のいかなるものであるかが察せられる。それと同じく、賊徒の名前だけを見てその一群がいかなるものであるか推察されることがある。でパトロン・ミネツトの重なる手下がいかなる呼び名を持つていたかを次にあげてみよう。それらの名前はみんな特殊の記録の中に出ているものである。

パンショー、別名プランタニエ、別名ビグルナイユ。

ブリュジョン（ブルジョンの一系統があつた。これについてはあとで一言する。）

ブーラトリユエル、前にちよつと述べたことのある道路工

夫。

ラヴーヴ。

フィンステール。

オメール・オギユ、黒人。

マルデイソアール。

デペーシュ。

フォントルロア、別名ブークテイエール。

グロリユー、放免囚徒。

パールカロス、別名デュボン氏。

レスプラナード・デュ・スユド。

プーサグリーヴ。

カルマニヨレ。

クリユイドニエ、別名ビザロ。

マンジュダンテル。

レ・ピエ・ザン・レール。

ドウミ・リアール、別名ドゥー・ミルアール。

その他

他は略すとしよう。それらは最悪の者ではないから。そして上に述べたような名前は皆それぞれ特殊な相貌そうぼうを持っている。そしてそれも単に個人を現わすのみではなく、その種類を代表しているものである。それらの名前は各、文明の下層に生ずる醜い菌の各種類に相当するものである。

これらの者は、めったに顔を明るみにさらすことをしないので、往來で普通行き会うような人のうちにはいなかった。昼になると、夜の荒々しい仕事に疲れて眠りに行った。あるいは石灰窯せきたんがま

三の中に、あるいはモンマルトルやモンルージュのすたれた石坑の中に、時としては下水道の中に。彼らは地の中にもぐり込んでいた。

その後そういう者らはどうなったか？ 彼らはやはり存在している。彼らは常に存在していたのである。ホラチウスもその事を語っている、「娼婦、薬売、乞食、道化役者。」そして社会が現状のままである間は、彼らもやはり現状のままにいるだろう。その窖あなぐらの薄暗い天井の下に、彼らは絶えず社会の下漏したもれから生まれ出て来る。常に同じような妖怪となって現われて来る。ただ彼らの名前と外皮とのみが異なるばかりである。

個人は消滅するが、その種族は存続する。

彼らは常に同じ能力を持っている。乞食こじきから浮浪人に至るまで、種族はその純一性を保っている。彼らはポケットの中の金

入れを察知し、内隠しの中の時計をかぎつける。金や銀は彼らに一種のにおいを放つ。また盗まれたような様子をしている人のいい市民もいる。そういう市民を彼らは根気よくつけ回す。外国人や田舎者いなかものが通るのを見れば、彼らは蜘蛛くものように身を震わす。

ま夜中の頃、人なき街路で、彼らに出会いまたはその影を見る時、人は慄然りつぜんとする。彼らは人間とは思われない。生ある靄もやでできてるかのような姿をしている。あたかも彼らは常に闇やみと一体をなしており、やみと見分けがつかず、影以外に何らの魂をも持たないかのようなのである。そして彼らが夜陰から脱け出してくるのはただ一瞬時の間のみであつて、しばし恐るべき生命に生きんがためのみであるかのように思われる。

そういう悪鬼を消散させんには、何が必要であるか。光明で

ある。<sup>ちよういつ</sup>漲溢せる光明である。<sup>あけぼの</sup>曙の光に対抗し得る蝙蝠<sup>こうもり</sup>は一つもない。どん底から社会を照らすべきである。

## 第八編 邪悪なる貧民

一 マリユスひとりの娘をさがしつつある男に会う

夏は過ぎ、秋も過ぎて、冬となった。ルブラン氏も若い娘もリユクサンブールの園に姿を見せなかった。マリユスはただ、あのやさしい美しい顔をも一度見たいとのみ念じていた。彼は絶えずさがしていた。至る所をさがし回った。しかしその影をも見い出すことはできなかつた。マリユスはもはや心酔せる夢想家でもなく、決然たる熱烈な確乎かっこたる男でもなく、大胆に運

命を切り開かんとする者でもなく、未来の上にも未来をつみ重ねて夢みる頭脳でもなく、方案や計画や矜持きょうじや思想や意志に満てる若き精神でもなかつた。彼は実に迷える犬であつた。彼は暗い悲しみに陥つた。もはや万事終わつたのである。仕事もいやになり、散歩にも疲れ、孤独にもあきはてた。広漠こうぼくたる自然も昔は、種々の姿や光や声や忠言や遠景や地平や教訓に満ち満ちていたが、今はもう彼の前にむなしく横たわつてるのみだつた。すべてが消えうせたように彼には思えた。

彼は常に思索を事としていた。なぜなら他に仕方もなかつたからである。しかし彼はもはや自分の思想にも心樂しまなかつた。思想が絶えず声低く提議してくることに對してひそかにこゝう答えた、「それが何の役に立つか。」

彼は幾度となくおのれを責めた。なぜ自分は彼女の跡を見つけ

たか。彼女を見るだけで既に幸福ではなかったか。彼女も自分の方を見ていた。それだけでも既に至上のことではなかったか。彼女も自分を愛しているらしかった。それでももう十分ではなかったか。自分はいつたい何を得ようと欲したのか。それだけでたくさんではなかったか。自分は道にはずれていた。自分は誤っていた……。その他いろいろ自ら責めた。マリユスの性質としてそれらのことは少しもうち明けなかったが、クールフェーラックはやはりその性質上すべてをだいたいさとつた。そして初めは、マリユスが恋に陥つたのを意外に感じながらも、それを祝していた。それからマリユスが憂鬱ゆううつに沈み込んだのを見て、ついにこう彼に言った。「君はまったくまずかったんだ。まあちとショーミエールにでも遊びにこいよ。」

一度、九月の晴れた日にそそのかされて、マリユスはクール

フェーラックとボシユエとグランテールとが誘うままに、ソールの舞踏を見に行つた。まことに夢のような話ではあるが、そこであるいは彼女に会うかも知れないと思つたのである。がもとよりさがしてゐる女は見当たらなかつた。「だがいつたい、見失つた女は大概ここで見つかるものだがな、」とグランテールは横を向いてつぶやいた。マリユスは仲間をそこに残して、ひとり歩いて帰つて行つた。彼はすべてがものう懶く、熱に浮かされ、乱れた悲しい目つきを暗夜のうちに据え、宴樂の帰りのにぎやかな連中を乗せてそばを通りすぎてゆく楽しい馬車の響きとほこりとに脅かされ、意気消沈して、頭をはつきりさせるために途上の胡桃くるみの木立ちのかおりを胸深く吸い込みながら、家に帰つていった。

彼はしだいに深く孤独の生活にはいつてゆき、心乱れ氣力を

失い、内心の苦悶に身を投げ出し、罫わなにかかった狼おおかみのように苦しみの中をもがき回り、姿を消した彼女を至る所にさがし求め、まったく恋のためにぼけてしまった。

一度ある時、妙な人に出会って、彼は不思議な感に打たれた。アンヴァリード大通りのそばの小さな裏通りで、一人の男と行き会ったのである。その男は労働者のような服装をして、長いひさし庇のついた無縁帽ふちなしぼうをかぶっていたが、その下からまっ白い髪の毛が少し見えていた。マリユスはその白髪しろかみの美しさに心ひかれて、その男をじつとながめてみた。男はゆっくり歩いていて、何か苦しい瞑想めいそうにふけつてるようだった。そして妙なことには、マリユスはまったくルブラン氏を見るような気がした。同じ頭髪、帽子の下から見えてる限りでは同じ横顔、同じ歩きかた、そしてただ少し寂しすぎる点が違つただけだった。しかしル

ブラン氏が、どうして労働者の服をつけてるのだろう、どういう訳だろう、その仮装は何の意味だろう？ マリユスは少なからず驚いた。それから彼はようやく我に返って、第一にその男の跡をつけてみようとした。あるいはさがしてゐる糸口をついに見いだしたのかも知れない。いずれにしても、も一度その男を近くからながめ、謎なぞを解かなければならない。そう彼は考えついていたが、もう時がおくれている。男はもはやそこにいなくなつた。ある狭い横町に曲がつたのである。マリユスはもうその姿を見いだすことができなかつた。そしてこの遭遇は、数日間彼の頭を占めていたが、そのうちに消えうせてしまった。彼は自ら言つた、「結局、他人の空そら似にに過ぎなかつたのだろう。」

マリユスはなお続けてゴルボー屋敷に住んでいた。そしてそののだれにも気をつけていなかった。

実際その頃、ゴルボー屋敷には彼とジョンドレットの一家だけしか住んでいなかった。彼はジョンドレットの負債を一度払ってやったことがあるが、その父にも母にも娘らにもかつて口をきいたことはなかった。他の借家人らは、引越したか、死んだか、または金を払わないので追い出されるかしてしまっていた。

その冬のある日、太陽は午後になって少し現われたが、それも二月の二日、すなわち古い聖燭節の日であった。このちよつと姿を現わした太陽は、やがて六週間の大寒を示すものであつて、あのマティユー・レンスベルグが次の古典的な二行の句を

得たのもそれからである。

日をして輝き閃かしめよ、

さあれ熊は洞穴に帰るなり。

マリユスは外に出かけた。夜のやみが落ちようとしていた。ちようど夕食の時間だった。いかに美しい愛に心奪われていても、悲しいかな食事はしなければならぬ。

彼は家の戸口をまたいで外へ出た。ちようどその時、ブーゴン婆さんは戸口を掃除しながら、次のおもしろい独語をもらしていた。

「この節は安い物と言って何がある？ みんな高い。安い物はただ世間の難渋だけだ。難渋だけは金を出さないでもやつて

来る。」

マリユスはサン・ジャック街へ行こうと思つて、市門の方へ大通りをゆるゆる歩いて行つた。頭をたれて物思いに沈みながら歩いていった。

突然彼は、薄暗がりの中にだれかから押しつけられるのを感じた。ふり返ると、ぼろを着たふたりの若い娘だつた。ひとり  
は背が高く、やせており、ひとりはそれより少し背が低かつたが、ふたりとも物におびえ息を切らして、逃げるように大急ぎで通つていった。ふたりはマリユスに気づかず、であいがしら出會頭に彼につき当たつたのだつた。薄ら明りにすかして見ると、ふたりは色青ざめ、髪をふり乱し、きたない帽子をかぶり、も裳は破れ裂け、足には何もはいてなかつた。駆けながら互いに口をきいていた。大きい方がごく低い声で言つた。

「いぬがきたのよ。もちつとであげられるところだった。」  
もひとりのが答えた。「私ははつきり見たわ。でただもう一目散よ。」

マリユスはその変な言葉でおおよそさとった。憲兵か巡查かがそのふたりの娘を捕えそこなつたものらしい、そしてふたりはうまく逃げのびてきたものらしい。

ふたりは彼の後ろの並み木の下にはいり込み、暗闇くらやみの中にしてばらくはほの白く見えていたが、やがて消え失せてしまった。マリユスはしばらくたたずんでいた。

それから歩み続けようとすると、自分の足元の地面に鼠色ねずみいろの小さな包みが落ちてゐるのに気づいた。彼は身をかめてそれを拾ってみた。封筒らしいもので、中には紙でもはいつていそうだった。

「そうだ、」と彼は言った、「あのあわれな女どもが落としていつたんだらう。」

彼は足を返し、声を揚げて呼んでみたが、はやふたりの姿は見えなかった。それでもう遠くへ行つたことと思ひ、その包みをポケットの中に入れ、そして食事をしに出かけて行つた。

途中、ムーフタール街の路地で、彼は子供の柩ひつぎを見た。黒ラシャでおおわれ、三つの台の上に置かれて、一本の蠟燭ろうそくの火に照らされていた。暗がりのふたりの娘のことが思ひ出された。

「あわれな母たち！」と彼は考へた。「自分の子供が死ぬるのを見るよりなおいつそう悲しいことがある。それは自分の子供が悪い生活をしてるのを見ることだ。」

そのうちに、彼の悲しみの色を変えさへしたそれらの影は頭から消え去つてしまつて、彼はまたいつもの思ひに沈み込んだ。

リユクサンブールの美しい木の下で、さわやかな空気と光との中で過ごした、愛と幸福との六カ月間のことをまたしのびはじめた。

「私の生活は何と陰鬱いんうつになったことだろう！」と彼は自ら言った。「若い娘らはやはり私の目の前に現われて来る。ただ、昔はそれがみな天使に見えたが、今は食屍鬼ししくいおにのような気がする。」

### 三 一体四面

その晩、マリユスは床につこうとして着物をぬいでいた時、上衣のポケットの中に、夕方大通りで拾った包みに手を触れた。彼はそれを忘れていたのである。そこで彼は考えた、包みを開いてみたらどうにかなるだろう、もし実際彼女らのものだった

ら、中にはたぶんその住所があるだろう、そしてとにかく、落  
とし主へ返せるような手掛かりがあるかも知れない。

彼は包み紙を開いた。

包み紙には封がしてなかった。そして中には、同じく封がし  
てない四つの手紙がはいっていた。

それぞれあて名がついていた。

四つともひどい煙草たばこのにおいがしていた。

第一の手紙のあて名はこうだった。「下院前の広場……番地、  
グリユ、シュレ、侯爵夫人閣下。」

中にはおそらく何か所要の手掛かりがあるかも知れない、そ  
の上手紙は開いているので読んでも一向さしつかえないだろう、  
とマリユスは考えた。

手紙の文句は次のとおりだった。

## 侯爵夫人閣下

寛容と憐愍れんびんとの徳は社会をいつそう密接に結び合わせしむるものに御座候そうろう。公正のために身をささげ正法の聖なる主旨に愛着して身をささげ、その主旨を擁護せんがために、血潮を流し財産その他いつさいを犠牲に供し、しかも今や落魄らくはくの極にあるこの不幸なるスペイン人の上に、願わくは閣下のキリスト教徒たる感情を向けたまい、慈悲いちべつの一瞥を投ぜられんことを。全身負傷を被り居る教育あり名誉あるこの軍人をして、なおそのあわれなる生を続けしめんがために、閣下は必ずや助力を惜しまれざるべしと存じ候。閣下の高唱せらるる人道の上に、また不幸なる一国民に対し閣下が有せらるる同情の上に、あらかじめ期待を掛け申

し候<sup>そうろう</sup>。彼らの祈願は閣下の入れたもう所となり、彼らの感謝の念は長く閣下の御名を忘れざるべしと信じ申候。

ここにつつしんで敬意を表し候。

フランスに亡命し今国へ帰らんとして旅費に窮せるスペイン王党の騎兵大尉

ドン・アルヴァレス

署名には何らの住所もついていなかった。マリユスは第二の手紙にその住所がありはすまいかと思った。そのあて名はこうだった。「カセツト街九番地、モンヴェルネー伯爵夫人閣下。」マリユスはその中に次の文句を読んだ。

伯爵夫人閣下

私事は六人の子供を持てるあわれなる母にて、末の児はわずかに八カ月になり候。この児の出産以来私は病氣にかかり、五カ月以前からは夫にすてられ、今は何の収入の途もなく、ただ貧苦の底に悩みおり候。

伯爵夫人閣下の御慈悲を望んで、深き敬意を表し申候。

バリザールの家内

マリユスは第三の手紙を開いたが、それもやはり哀願のもので、次のように書かれていた。

サン・ドウニ街にてフェール街の角、小間物貿易商、選

## 拳人パブルジョー殿

ここにあえて一書を呈して、フランス座へ戯曲一篇を送りたる一文人へ、貴下の御あわれみと御同情とを賜わらんことを懇願仕まつり候<sup>そうろう</sup>。その戯曲は、題材を歴史に取り、場面を帝国時代のオーヴェルニュにいたしたるものに候。文体は自然にして簡潔、多少の価値はあるものと自信仕まつり候。歌詞も四カ所これ有り候。滑稽<sup>こっけい</sup>とまじめと奇想とは、種々の人物と相交わり、全篇に漂えるロマンチズムの軽き色合に交錯し、筋は不思議なる発展をなし、感動すべき多くの変転を経て、光彩陸離たる種々の場面のうちにからみゆくものに御座候。

主として小生の目ざせる点は、現代人の刻々に要求する所を満足させんことに候。換言すれば、ほとんどあらゆる

新奇なるふうにその方向を変ずる、かの定見なき笑うべき風見とも言うべき流行、を満足させんことに候。

かかる特長あるにもかかわらず、座付きの作者らの嫉妬しつとと利己心とは、小生を排斥せんとするやも知れずと懸念いたし候。新参の者が常に受くる冷遇を、小生とてもよく存じおり候えば。

貴下には常に文人を保護したまわる由を承り候まま、あえて娘をつかわして、この冬季にあつても食も火もなき困窮の状を具申いたさせ候。何とぞ今度の戯曲並びに今後の作を貴下にささげんとの微意を御受け下されたく候。かくて小生は、貴下の保護を受くるの光榮に浴し、貴下の名をもつて小生の著述を飾るの光榮に浴せんことを、いかほど希望いたしおるやを申し上げたくと存候。もし貴下にして

いくらかなりと御補助を賜わらば、小生は直ちに一篇の詩を作りて、感謝の意を表すべく候。そうろう小生は力の及ぶ限りその詩を完全なるものたらしめ、なおまた、戯曲の初めに挿入そうにゆうして舞台に上する前、あらかじめ貴下のもとへ御送り申すべく候。

パブルジョー殿並びに夫人へ、小生の深き敬意を表し候。

文士ジャンフロー

追白、四十スーほどにてもよろしく候。

娘をつかわして小生自身参上いたさざるを御許し下されたく、実は悲惨にも服装の都合上外出いたしかね候次第に御座候。

マリユスはついに四番目の手紙を開いた。あて名はこうだつた。「サン・ジャック・デュ・オー・パ会堂の慈悲深き紳士殿。」中には次の文句がしたためてあつた。

### 慈愛深き紳士殿

もし拙者の娘と御同行下され候わば、一家困窮のきわみなる状態にあることを御認め下さるべく、また身元証明書は御覧に供すべく候。

かかる手記を御覧候わば、恵み深き貴下は必ずや惻隱そくいんの情を起こし下さるべしと存候。真の哲学者は常に強き情緒を感じずるものに候えば。

同情の念深き紳士殿、最も残酷なる窮乏に一家の者苦し

みおり候。しかして何かの救助を得んために政府よりその証明を得るなどは、いかに悲痛なることに候ぞや。他人より救助せらるるを待ちながら、しかも飢餓に苦しみ飢餓に死するの自由さえもなきもののごとくに候。運命はある者にはあまりに冷酷に、またある人にはあまりに寛大にあまりに親切にこれ有り候。貴下の御来臨を待ち申し候。あるいはおぼし召しあらば御施与を待申候。しかして拙者の敬意を御受け下されたく願上げ候。

大人閣下のきわめて卑しき従順なる僕しもべ

俳優 ファバントウー

それら四通の手紙を読み終わつたが、マリユスは前と同じく

何らの手掛かりも得なかった。第一に、どの手紙にも住所がついていなかった。

次に手紙は、ドン・アルヴァレスとバリザールの家内と詩人ジャンフローと俳優ファバントゥーと、四人の違った人からのものらしかったが、不思議にも四つとも同じ筆蹟だった。

四つとも同一人からのものでないとするならば、それをいかに解釈したらいいか？

その上、ことにそう考えさせることには、四通とも同じ粗末な黄色い紙であり、同じ煙草たばこのにおいがしていた。そして明らかに文体を変えてはあるが、同じような文字使いが絶えず平気に現われてきて、文士ジャンフローもスペインの大尉も何ら異なるところがなかった。

この小秘密を解かんとつとめることは、まったくむだな骨折

りだった。もしそれが拾い物でなかったら、単に人をからかうものとしか思われなかつたらう。その上マリウスは悲しみのうちに沈んでいたので、偶然の悪戯いたずらを取り上げるだけの余裕もなく、街路の舗石しきいしが彼に試みたようなその遊びに心を向けるだけの余裕もなかつた。あたかも四通の手紙の間の目隠し鬼になつてからかわれてるような気がした。

またその手紙はマリウスが大通りで出会つた二人の娘のものだということを示すものも、何もなかつた。要するに何らの価値もない反故ほぐにすぎないことは明らかだつた。

マリウスは四つの手紙をまた包み紙に入れて、室へやの片すみになげすて、そして床についた。

翌朝七時ごろ、彼は起き上がつて朝食をし、それから仕事にかかろうとした。その時静かに扉とびらをたたく者があつた。

いつたい彼は所持品と言つては何もなかつたので、かつて、扉に錠をおろさなかつた。ただ時として急ぎの仕事をしてる時は錠をおろすこともあつたが、それもごくまれにしかなかつた。また外出する時でさえ、錠かぎを錠前に差し込んだままにしておいた。「泥坊がはいりますよ、」とブーゴン婆さんはよく言つた。「盗まれるものは何もありません、」とマリユスは答えていた。けれども実際、ある日古靴ふるぐつを一足盗まれたことがあつて、ブーゴン婆さんの言つたとおりになつた。

扉は再び初めのようにごく軽くだたかされた。

「おはいりなさい。」とマリユスは言つた。

扉は開いた。

「何か用ですか、ブーゴン婆さん。」とマリユスはテーブルの上の書物と書き物とから目を離さないで言つた。

するとブーゴン婆さんのでない別の声が答えた。

「ごめんなさい。あの……。」

その声は鈍く乱れしわがれ濁っていて、ウオツカ火酒や焼酎しようちゆうで喉のどをつぶした老人のような声だった。

マリユスは急にふり返った。そこにはひとりの若い娘がいた。

#### 四 困窮の中に咲ける薔薇ばら

まだうら若い娘がひとり、半ば開いた扉とびらの所に立っていた。

光のさしこむ屋根裏の軒窓がちょうど扉と向き合ったところにあつて、彼女の顔を青白い光で照らしていた。色の悪いやせ衰えた骨立った女で、冷え震えている裸体の上には、ただシャツと裳衣とをつけてるだけだった。帯の代わりに麻糸をしめ、頭

のりボンの代わりに麻糸を結わえ、とがった両肩はシャツから現われ、褐色の憂鬱ゆううつな顔には血の気がなく、鎖骨のあたりは土色をし、赤い手、半ば開いてる色あせた口、抜け落ちた歯、ほの暗い大胆な賤いやしい目、未熟な娘のかっこうで腐敗した老婆の目つきだった。五十歳と十五歳とがいつしよになつた形だった。全体が弱々しくまた同時に恐ろしい生物で、人をして震え上がらしむるかまたは泣かしむる生物だった。

マリウスは立ち上がつて、夢の中に現われて来る影のようなその女を、惘然ぼうぜんとして見守つた。

ことに痛ましいのは、彼女は生まれつき醜いものでなかつたことである。ごく小さい時には美しかったに違いない。年頃の容色はなお、汚行と貧困とから来る恐ろしい早老のさまと戦つていた。一抹いちまつの美しさがその十六歳の顔の上に漂つていて、冬

の日の明け方恐ろしい雲の下に消えてゆく青白い太陽のように見えていた。

その顔にマリユスは全然見覚えがないでもなかつた。どこかであつて見たことがあるような気がした。

「何か御用ですか。」と彼は尋ねた。

若い娘は酒に酔つた囚徒のような声で答えた。

「マリユスさん、手紙を持つてきたのよ。」

彼女はマリユスと名を呼んだ。彼女がやはり彼に用があつてきたことは疑いなかつた。しかし彼女はいつたい何者なのか、どうしてマリユスという名を知つたのか？

彼がこちらへと言うのも待たないで、娘ははいつてきた。彼女はつかつかとはいつてきて、驚くばかりの平気さで、室へやの方々を見回し、取り乱した寢床をながめた。足には何もはいていな

かつた。裳衣の大きな裂け目からは、長い脛はぎとやせた膝ひざとが見えていた。彼女は震えていた。

彼女は實際手に一通の手紙を持っていて、それをマリユスに渡した。

マリユスは手紙を開きながら、その大きな封糊がまだ湿っているのに気づいた。使いの者は遠くからきたのではないに違いなかった。彼は手紙を読み下した。

隣の親切なる青年よ！

小生は貴下きげが六カ月以前小生の家賃を御払い下され候好意を聞き及び候そうろう。小生は貴下の幸福を祈り候。小生らは一家四人にて、この一週間一片のパンすらもなく、しかも家内は病気にかかりおり候こと、万事は長女より御聞き取り

下されたく候。もし小生の思い違いに候わずば、寛大なる貴下はこの陳述に動かされ、小生に些少さししょうの好意を寄せ恵みをたれんとの念を起こしたまわることを、期待して誤りなきかと信じ申候。

人類の恩恵者に対して負うべき至大の敬意を表し候。

ジヨンドレット

追白——小生の長女は、マリユス殿、貴下の御さし図を待ち申すべく候。

その手紙は、前日の晩からマリユスの頭を占めていた不思議な事件のさなかにきたので、あたかも窖あなぐらの中に蠟燭ろうそくをともしたようなものだった。すべてが突然明らかになった。

その手紙は他の四通の手紙と同じ所からきたものだ。同じ筆蹟、同じ文体、同じ文字使い、同じ紙、同じ煙草たばこのにおい。五つの手紙、五つの話、五つの名前、五つの署名、そしてただ一人の筆者。スペインの大尉ドン・アルヴァレス、不幸なる女バリザール、劇詩人ジャンフロア、老俳優ファバントウー、それらは四人のジョンドレットにすぎなかつた。ただしそれもジョンドレット自身が果たしてジョンドレットという名前であるとするばである。

マリユスはもうかなり長くその屋敷に住んでいたが、前に言つたとおり、その賤いやしい隣人については、会う機会はめつたになく、一瞥いちべつを与えることさえもまれであつた。彼は他に心を向けていた。心の向かうところに目も向くものである。実は廊下や階段でジョンドレット一家の者に行き会うことは、一度ならず

あつたはずであるが、彼にとって彼らは皆単に影絵にすぎなかつた。彼は少しも注意を払つていなかった。それで前日の晩、大通りでジョンドレットの娘らにつき当たりながらも——それは明らかに彼女らに相違なかつた——だれであるか一向わからなかつたほどで、自分の室へやにはいつてきた娘に対しても、嫌悪けんおと憐愍れんびんとの感を通して、どこかほかで会つたことがあるというぼんやりした覚えがあるに過ぎなかつた。

しかるに今やすべてが明らかにわかつてきた。彼は事情を了解した。隣にいるジョンドレットは、困窮の揚げ句、慈善家の慈悲をここのを仕事としてゐること。種々の人の住所を調べてゐること。金持ちで慈悲深そうな人々へ仮りの名前で手紙を書き、娘なんかどうなろうとかまわぬいほどのひどい状態にあるので、娘らに危険を冒して手紙を持って行かしてゐること。運命

と賭事かけごとをし、娘らをその賭物としてること。また前日娘らが逃げ出しながら息を切らしおびえていた所を見、耳にしたあの変な言葉から察すると、おそらくふたりは何かよからぬことをしていたに違いないこと。そしてそれらのことから結論すると、この人間社会のまんなかにおいて、子供とも娘とも婦人ともつかないふたりの悲惨な者が、不潔なしかも罪のない怪物の一種が、困窮のために作り出されたこと。それをマリユスは了解した。

悲しむべき者ら、彼らには名前もなく、年齢もなく、雌雄しゆうの性もなく、彼らにとつてはもはや善も悪も空名であつて、幼年時代を過ぎるや既に世に一物をも所有せず、自由をも徳義をも責任をも有しない。昨日開いて今日ははや色あせたその魂は、往來に投げ捨てられ泥にしぼんでただ車輪にひかれるのを待つ

ばかりの花のようなものである。

さはあれ、驚いた痛ましい目でマリユスが見守っているうちにも、若い娘は幽霊のように臆面もなく室へやの中を歩き回っていた。自分の肉体が露わであることなどは少しも気にしないで、室の中を騒ぎ回った。時とすると、破れ裂け取り乱したシャツはほとんど腰の所までたれ下がった。それでも彼女は、椅子いすを動かしたり、戸棚とだなの上にある化粧道具をかき回したり、マリユスの服にさわってみたりして、すみずみまで漁あさり初めた。

「あら、」と彼女は言った、「鏡があるのね。」

そしてあたかも自分ひとりであるかのように、切れぎれの流行歌やばかな反唱句などを口ずさんだが、しわがれた喉音こうおんのためにも悲しげに響いた。しかしそういう厚顔の下にも、言い知れぬ気兼ねと不安と卑下とが見えていた。不作法は一つの

恥である。

そういうふうには彼女が室へやの中を飛び回り、言わば日の光に驚きあるいは翼を折った小鳥のように飛んでるのを見るくらい、およそ世に痛ましいものはなかつた。異なつた教育と運命との下にあつたならば、その若い娘の快活で自由な態度にも、おそらくある優しきと魅力とがあつたであろう。動物のうちにあつては、鳩ほととぎすに生まれたものが鸚みどりと変わることは決してない。そういう変化はただ人間のうちにのみ見られる。

マリユスは思いに沈んで、彼女を勝手にさしておいた。

彼女はテーブルに近づいた。

「ああ、本が！」と彼女は言った。

彼女の曇つた目はある光に輝いた。そしていかなる人の感情のうちにもある喜ばしい自慢の念をこめた調子で、彼女は言つ

た。

「あたし読むことができるのよ。」

彼女はテーブルの上に開いてあった一冊の書物を元気よく取り上げて、かなりすらすらと読み下した。

……ボーデュアン將軍は、旅団の五大隊をもつてウーゴモンの城を奪取すべしとの命令を受けぬ、城はワートルロー平原……の

彼女は読むのを止めた。

「ああ、ワートルロー、あたしそれを知ってるわ。昔の戦争ね。うちのお父さんとうも行ったのよ。お父さんは軍人だったのよ。うちの者はみなりっぱなボナパルト党だわ。ワートルローって、

イギリスと戦<sup>いくさ</sup>した所ね。」

彼女は書物を置いて、ペンを取り、そして叫んだ。

「それからまたあたし、書くこともできてよ。」

彼女はペンをインキの中に浸して、マリユスの方へ向いた。

「見たいの？ ほら今字を書いて見せるわ。」

そしてマリユスが何か答える間もなく、彼女はテーブルのま  
ん中にあつた一枚の白紙へ書いた。

「いぬがいる。」

それからペンを捨てた。

「字は違つてないでしょう。見て下さいよ。あたしたちは学問  
をしたのよ、妹もあたしも。前からこんなじゃなかったのよ。  
あたしたちだつて……。」

そこで彼女は急に口をつぐんで、どんよりした瞳<sup>ひとみ</sup>をじつとマ

リユスの上に据え、そして笑い出しながら、あらゆる苦しみをあらゆる皮肉で押さえつけたような調子で言った。

「ふーん！」

そして快活な調子で次の文句を小声で歌い出した。

お腹なかがすいたわ、お父さん。

食くう物がないよ。

身からだ体が寒いわ、お母さん。

着る物がないよ。

震えよ、

ロロツト！

泣けよ。

ジャツコー！

そういう俗歌を歌い終わるが早いか彼女は叫んだ。

「マリユスさん、あなた時々芝居へ行つて？ あたし行くのよ。あたしには小さい弟があつて、役者たちと友だちなので、時々切符をくれるの。でも向こう棧敷さじきはきらいよ。窮屈きうくつできたなくて、どうかすると乱暴な人や臭い人がいつぱいいるんだもの。」  
それから彼女はつくづくとマリユスをながめ、妙な様子をして言った。

「マリユスさん、あなたは自分が大変いい男なのを知ってるの？」  
そして同時に同じ考えがふたりに起こつた。それで娘は微笑したが、マリユスは顔を赤くした。

彼女は彼に近寄つて、片手をその肩の上に置いた。

「あなたはあたしを気にも留めてないが、あたしはマリユスさ

ん、あなたを知つてよ。ここでもよく階段の所で会つたわ。それから、オーステルリツツ橋の近くに住んでるマブーフという爺じいさんの家へあなたが行くのを、何度も見たわ、あの近所を歩いてる時に。あなた、そう髪の毛を散らしてる所がよく似合つてよ。」

彼女はやさしい声をしようとしていたが、そのためにただ声が低くなるばかりだった。あたかも鍵キのなくなつてる鍵盤けんばんの上では音が出ないように、彼女の言葉の一部は喉頭こうとうから唇くちびるへ来る途中で消えてしまった。

マリウスは静かに身を引いていた。

「お嬢さん、」と彼は冷ややかな厳格さで言つた、「たぶんあなたらしい包みがそこにあります。あなたにお返ししましょう。」そして彼は四つの手紙がはいつてる包みを取つて彼女に差し

出した。

彼女は手を打って叫んだ。

「まあ方々ががしたのよ。」

それから急に包みを引ったくつて、その包み紙を開きながら言った。

「ほんとに妹とふたりでどのくらいさがしたか知れやしない！あなたが拾ってくれたのね。大通りででしょう。大通りに違くないわ。駆けた時に落としたのよ。そんなばかなことをしたのは妹なのよ。家へ帰ってみるとないんだもの。打たれたくないもんだから、打たれたって何の役にもたたないから、ほんとに何の役にもたたないから、全くよ、だからわたしたちはこう言ったの、手紙はちゃんと持って行ったがどこでも断わられてしまつたつて。それが手紙はみんなここにあつたのね。どうしてあな

たそれがあたしのだとわかつて？ ああそう、筆蹟てでね。では  
昨晚ゆうべあたしたちが道でつき当たったのは、あなただったのね。  
ちつとも見えなかつたんだもの。あたしは妹に言ったの、男だ  
ろうかつて。すると妹は、そうらしいと言つたわ。」

そう言つてるうちに彼女は、「サン・ジャック・デュ・オー・  
パ会堂の慈悲深き紳士殿」というあて名の手紙を開いてしまつ  
た。

「そう、」と彼女は言つた、「これは弥撒ミサへゆくお爺じいさんへやる  
手紙よ。ちょうど時間だわ。あたし持つてつてこよう。朝御飯  
が食べられるだけのものをもらえるかも知れない。」  
それから彼女は笑い出してつけ加えた。

「今日の朝御飯はあたしたちにとつては何だかあなたにわかっ  
て？」  
一昨日おとといの朝御飯と、一昨日の晩御飯と、昨日きのうの朝御飯と

昨日の晩御飯と、それだけをみんないつしよに今朝<sup>けさ</sup>食<sup>け</sup>べることになるのよ。かまやしない、お腹<sup>なか</sup>がはち切れるほど食<sup>け</sup>べてやるわ。」

それでマリユスは、その不幸な娘が自分の所へ求めにきたものが何であつたかを思い出した。

彼はチョツキの中を探つたが、何もなかつた。

娘はしゃべり続けた。あたかもマリユスがそこにいるのも忘れてしまつたがようだつた。

「あたしはよく晩に出かけていくの。何度も帰つてこないこともあるわ。ここに来る前、去年の冬は、橋の下に住んでたのよ。冷え切つてしまわないように皆重なり合つてたわ。妹なんか泣いててよ。水つてほんとに悲しいものね。身を投げようかと思つたが、でもあまり寒そうだからといつも思い返したの。出かけ

たい時はすぐにひとりで出かけてよ。溝みぞの中に寝ることもよくあるわ。夜中に街路まちを歩いてると、木が首切り台のように見えたり、大きい黒い家がノートル・ダームの塔のように見えたり、また白い壁が川のように見えるので、おや向こうに水があるって思うこともあるのよ。星がイリュミネーションあかりの燈あかりのように見えて、ちようど煙が出たり、風に吹き消されたりしてるよ。で、また耳の中に馬が息を吹き込んでるような気がしてびっくりするのよ。夜中なのに、バルバリーのオルガンの音だの、製糸工場の機械の音だの、何だかわからない種々なものが聞こえてよ。だれかが石をぶつつけるようなの、夢中に逃げ出すの、あたりがぐるぐる回り出すの、何もかも回り出すのよ。何にも食べないでいると、ほんとに変なものよ。」

そして彼女は我を忘れたようにマリユスをながめた。

マリウスは方々のポケットを探り回したあげく、ついに五フランと十六スーを集め得た。それが現在彼の持つてる全部だつた。「まあこれで今日の夕食は食えるし、明日あすのことはどうにかなるだろう、」と彼は考えた。そして十六スーを取つて置き、五フランを娘に与えた。

娘はその貨幣をつかんだ。

「まあ有り難い、」と彼女は言った、「太陽おひさまが照つてる！」

そしてあたかもその太陽が、彼女の頭の中の怪しい言葉の雪崩なだれを解かす力でも持つてたかのように、彼女は言い続けた。

「五フラン！ 光つてるわ、王様だわ、このでこの中にね。しめだわ。あなたは親切なねんこだわ。あたしあなたにぞつこんでよ。いいこと、どんたくだわ。二日の間は、灘なだと肉とシチュー、たつぷりやつて、それに気楽なごろだわ。」

そんな訳のわからぬことを言つて、シャツを肩に引き上げ、マリユスにていねいにおじぎをし、それから手で親しげな合い図をし、そして扉とびらの方へ行きながら言つた。

「さようなら。でもとにかく、あのお爺じいさんをさがしに行つてみよう。」

出がけに彼女は、ひからびたパンの外皮が戸棚の上の塵ちりの中にかびかかっているのを見つけて、それに飛びかかり、すぐにかじりつきながらつぶやいた。

「うまい、堅い、歯が欠けそうだ。」

それから彼女は出て行つた。

## 五 運命ののぞき穴

マリユスはもう五年の間、貧困、欠乏、窮迫のうちに生きていた。しかし彼はまだ本当の悲惨を知らなかったことに気づいた。彼は本当の悲惨を今しがた見たのであった。彼の目の前を通って行ったあの悪鬼こそそれだったのだ。実際、男の悲惨のみを見たとして、まだ本当のものを見たとは言えない、女の悲惨を見なければいけない。女の悲惨のみを見たとしてまだ本当のものを見たとは言えない、子供のそれを見なければいけない。

最後の困窮に達する時、男はまた同時に最後の手段に到着する。ただ彼の周囲の弱き者こそ災いである！ 仕事、賃金、パン、火気、勇氣、好意、すべてを男は同時に失う。外部に日の光が消えたようになる時、内部には精神の光が消える。その暗黒のうちにおいて彼は、弱い女や子供と顔を合わせる。そして彼らをしいて汚辱のうちにはいらせる。

その時こそ戦慄せんりつすべきあらゆることが可能になる。絶望をかこむ困壁はもろく、どこからでも直ちに悪徳や罪惡きよに通い得る。

健康、青春、名誉、うら若き肉身の初心なる聖きよき羞恥しゆうち、情操、

処女性、貞節など、すべて魂の表皮は、手段を講ずる模索によつ

て、汚賤おせんに出会いそれになれゆく模索によつて、悲惨なる加工

を受くる。父、母、子供、兄弟、姉妹、男、女、娘、すべての

者は、性と血縁と年齢と醜惡と潔白との差別なく暗澹あんたんたる混乱

のうちにからみ合い、あたかも鉞石が作らるるように一つに凝

結する。互いに寄り合つて運命の破屋の中にうづくまる。互い

に悲しげに見合わせる。おお不運なる者らよ！ いかに青ざめ

てることか。いかに冷えきつてることか。われわれよりもはる

かに太陽から遠い星の中にいるかのようである。

あの若い娘はマリユスにとって、暗黒の世界からつかわされ

たもののようであつた。

彼女はマリユスに、暗夜の恐ろしい一面を開いて見せた。

マリユスは、今まで空想と情熱とに心奪われて、隣の者らには一瞥いちべつをも与えなかつたことを、自ら難じた。彼らの家賃を払つてやつたことは、ただ機械的の行為で、人の皆なすところである。しかし彼マリユスは、なおよりよきことをなすべきではなかつたろうか。人の住む境域を越えた暗夜のうちに手探りで生きてゐるそれらの捨てられたる人々は、ただ一重の壁でへだたつていたのみではなかつたか。彼は彼らと肱ひじをすれ合はしてゐた。彼こそはある意味において、彼らが触れ得る人類の最後の鎖の環わであつた。自分のそばに彼らが生きてゐる物音が、否むしろ瀕死ひんしのあえぎをしてるのが、聞こえていたのである。しかも彼はそ

れに少しも注意をしなかった。日々に、刻々に、壁を通して、彼らが歩き行き来たり語るのが聞こえていた。しかも彼は耳を貸そうともしなかった。そして彼らの言葉のうちにはうめきの声が交じっていたが、彼はそれに耳を傾けようとしなかった。彼の頭は他にあつて、夢想に、不可能の光輝に、空漠くうぼくたる愛に、熱狂に向いていた。しかるに一方では、同じ人間が、イエス・キリストを通じての同胞が、民衆としての同胞が、彼のそばに苦しんでいた。甲斐かひなき苦しみをしていた。その上彼は、彼らの不幸の一部を助成し、彼らの不幸をいつそう重くしていた。なぜなれば、彼らがもし他の隣人を持つていたならば、彼よりもいつそう非空想的で注意深い隣人を持つていたならば、普通の恵み深い人を持つていたならば、必ずや彼らの困窮はその人の認むるところとなり、彼らの窮迫のありさまはその人の気づ

くところとなつて、既に久しい前から彼らは収容せられ救われていたかも知れない。もとより彼らの様子は、きわめて退廃し、腐敗し、汚れ、嫌悪けんおすべきものとはなつていたけれど、しかし零落したる者は多く墮落するが常である。その上、不運なる者と汚れたる者という二つが混合し融合して、一つの宿命的な言葉、惨めみじなる者という一語を成すがような一点が、世にはある。そしてそれもだれの誤ちであるか？　そしてまた、その墮落が底深ければ深いほどいつそう大なる慈悲を与うべきではないか。

そうマリウスは自ら訓戒した。時として彼は、真に正直な人に見らるるように、自ら自分の教訓師となり、過度に自分を叱責しつせきすることがあった。で今やそうしながら、ジョンドレットの一家をへだてる壁をじつと見守つた。あたかも彼は、憐愍れんびんの情に満ちてる目でその壁を貫き、その不幸な人々をあたためんとし

てるかのようにだった。壁は割り板と角材とでささえられた薄い漆喰しつくいで、前に言つたとおり、言葉と声音とをはつきり通さしていた。今までそれに気づかなかつたとは、マリユスもよほどの夢想家だつたに違いない。ジョンドレットの方にもまたマリユスの方にも、何らの壁紙もはつてなかつた。粗末な構造が露わに見えていた。マリユスはほとんど自ら知らないで、その壁を調べてみた。時としては夢想も思想がなすように物を調べ観察し精査する。マリユスは突然飛び上がった。高く天井に近い所に、三枚の割り板がよく合わないでできてる三角形の穴が一つあるのを、気づいたのである。そのすき間をふさいでいたはずの漆喰はなくなつていた。戸棚の上に乗れば、そこからジョンドレットのきたない室の中は見られる。哀憐あいにんの情にも、好奇心があり、またあるべきはずである。そのすき間は一種ののぞき穴になつ

ていた。不運を救わんがためには、それをひそかにながめることも許される。「彼らはどういう者であるか、またどんな状態にいるか、少し見てやろう、」とマリユスは考えた。

彼は戸棚の上にはい上がり、瞳ひとみを穴にあてがい、そしてながめた。

## 六 巢窟そうくつ中の蛮人

都市にも森林と同じく、その最も猛悪なる者が身を隠して洞窟どうくつがある。ただ都市にあつては、かく身を隠す者は、寧猛どうもうで不潔で卑小で、一言にして言えば醜い。森林にあつては、身を隠す者は、寧猛で粗野で偉大で、一言にして言えば美しい。両者の巢窟を比ぶれば、野獣の方が人間よりもまさっている。洞

窟ろうおくは陋屋ろうおくよりも上である。

マリウスが見たところのものは一つの陋屋であつた。

マリウスは貧乏でその室へやはみすぼらしかつた。それでも彼の貧乏は気高く、彼の室は清潔だつた。ところが彼が今のぞき込んだ部屋は、賤いやしく、きたなく、臭く、不健康で、薄暗く、嫌悪けんおすべきものだつた。家具としてはただ、一脚の藁椅子わらいす、こわれかかつた一個のテーブル、数個の欠けた古壇ふるびん、それから両すみにある名状すべからざる二つの寢床。明りとしてはただ、蜘蛛くもの巣の張りつめた四枚ガラスの屋根裏の窓。その軒窓からは、人の顔を幽霊の顔くらいに見せるわずかな光が差し込んでいた。壁は癩病らいびょうやみのようなありさまを呈し、種々の傷跡がいつぱいあつて、あたかも恐ろしい病のために相好をくずされたかのようだつた。じめじめした気がそこからにじみ出していた。木炭

で書きなぐつた卑猥な絵が見えていた。

マリウスが借りてる室には、とにかくどうにか煉瓦が敷いてあつた。ところがその室には、石も敷いてなければ板も張つてなかつた。人々は黒く踏みよごされた古い漆喰の上をじかに歩いていて、そのでこぼこの床の上には、ほこりがこびりついて、かつて箒をあてられたこともなく、古い上靴や靴やきたないぼうろなどがあちこちに取り散らされていた。でも室には暖炉が一つあつて、そのために借料が年に四十フランだったのである。暖炉の中には種々なものはいつていた、火鉢、鍋、こわれた板、釘にかかつてるぼろ、鳥籠、灰、それから少しの火まで。二本の燃えさしの薪が、寂しげにくすぶつていた。

室の惨状を一段と加えるものは、それが広いことだつた。つき出た所や、角になつてる所や、暗い穴になつてる所があり、高

低の屋根裏や湾や岬があつた。そのために底の知れぬ恐ろしいすみずみができて、拳のように大きな蜘蛛や、足のような大きな草鞋虫や、あるいはまた何か怪物のような人間までが、そこにうずくまつていそうだった。

寢床の一つは扉の近くにあり、一つは窓の近くにあつた。二つともその片端は暖炉に接していて、マリユスの正面になつていた。

マリユスがのぞいてる穴の隣のすみには、黒い木の枠にはいつた色刷りの版画が壁にかかつていた。その下の端には「夢」と大字で書かれていた。それは眠つてる女と子供とを描いたもので、子供は女の膝の上に眠つていて、一羽の鷺が嘴に王冠をくわえて雲の中を舞つており、女はなお眠つたまま子供の頭にその王冠のかぶさらないようにと払いのけていた。遠景には、栄

光に包まれたナポレオンが、黄色い柱頭のついてる青い大きな円柱によりかかっていたが、その円柱には次の文字が刻まれていた、「マレンゴー、アウステルリッツ、イエナ、ワグラム、エロツト。」

その額縁の下の方には、長めの一種の鏡板が下に置かれて、斜めに壁に立てかけてあつた。裏返された画面、おそらく向こう側に書きなぐつてある額面か、あるいは壁から取りはずされてそのままはめ込むのが忘られた姿鏡のようでもあつた。

テーブルの上にはマリユスはペンとインキと紙とを認めたが、その前には、六十歳ばかりの男がすわつていた。男は背が低く、やせて、色を失い、荒々しく、狡猾こうかつで残忍で落ち着かない様子であつて、一言にして言えば嫌悪けんおすべき賤奴せんどだつた。

もしラヴァーテル（訳者注 人相学の開祖）がその面相を見

たならば、禿鷹はげたかと代言人との混同した相をそこに見いだしたであらう。肉食の鳥と訴訟の男とは、互いに醜くし合い互いに補い合つて、訴訟の男は肉食の鳥を野卑にし、肉食の鳥は訴訟の男を恐ろしくなしていた。

その男は長い半白の髯ひげをはやしていた。女のシャツを着ていたが、そのために毛むくじやらの胸と灰色の毛が逆立つてる裸の腕とが見えていた。そのシャツの下には、泥まみれのズボンが見え、また足指のはみ出た長靴ながぐつも見えていた。

彼は口にパイプをくわえ、それをくゆらしていた。部屋の中にはもう一片のパンもなかつたが、それでも煙草たばこだけはあつた。彼は何か書いていたが、おそらくマリユスが先刻読んだような手紙であらう。

テーブルの片端には、赤つぽい古い端本はほんが一冊見えていた。

書籍縦覧所の古い十二折型の体裁から見ると、それは小説の本  
らしかった。表紙には太い大文字で次の書名が刷つてあつた。  
「神、王、名誉、および婦人。デユクレー・デユミニル著。一八  
一四年。」

物を書きながら男は大声に口をきいていた。マリユスはその  
言葉を聞き取つた。

「死んだからつて平等ということにはねえんだ！ ペール・ラシエー  
ズの墓地を見てみる。身分のある奴やつらのは、金のある奴らのは、  
上手かみての石の舗しいてあるアカシヤの並み木道にある。そこまで馬  
車で行けるんだ。身分の低い者、貧乏な者、不幸な者、なんか  
のはどうだ。みな下手しもてにある。泥が膝ひざまでこようつて所だ、穴  
の中だ、じめじめしてる所だ。早く腐るようにそんな所へ入れ  
られるんだ。墓まいりをするつたつて、地の中へめいり込むよ

うにしなけりや行かれやしねえ。」

そこで彼はちよつと言葉を切つて、拳こぶしでテーブルの上をたたき、齒ぎしりしながら付け加えた。

「ええ、世界中を食つてもやりてえ！」

四十歳くらいともまた百歳くらいとも見える太い女が、跣足はだしで暖炉のほとりにかがんでいた。

女もただ、シャツ一枚と、古ラシャのつぎのあたつたメリヤスの裳衣一枚をつけてるだけだった。粗布の前掛けが裳衣の半ばを隠していた。彼女は腰を折つてかがんではいたが、背はごく高そうに見えた。亭主と比ぶれば大女だった。白髪交じりの赤茶けたきたない金髪を持つていたが、爪の平たい艶つやのある大きな手でそれを時々かき上げていた。

女のそばには、一冊の書物が開いたまま下に置いてあつた。

テーブルの上のと同じ体裁で、おそらく同じ小説の続きでもあろう。

一方の寢床の上には、身体の細長い色の青い小娘が腰掛けてるのが見えていた。半裸体のままで、足をぶら下げ、何も聞きも見もせずまた生きてもいないような様子だった。

確かに、マリユスの所へやつてきた娘の妹に違いない。

年齢は十一か十二くらいに見えた。しかしよく注意して見ると、十五歳にはなつてゐるらしかった。前後大通りで「ただ、もう、一目散よ」と言つたのは、その娘だった。

彼女は長く小さいまままでいてそれから急ににわかには伸びてゆく虚弱なたちの子供だった。赤貧がそういう哀れな人間を作り出すのである。彼らには幼年時代も少女時代もない。十五歳でまだ十二歳くらいに見え、十六歳では既に二十歳くらいにも見

える。今日は小娘で、明日ははや一人前の女である。あたかも一生を早く終えんがために年をまたぐかのようなのである。

今のところまだその娘は、子供の様子をしていて。

それからまた、その住居のうちには何ら仕事をしてるさまも見えなかった。何かの機械もなく、糸取り車もなく、何らの道具もなかった。ただ片すみに、怪しい鉄片が少しばかりあった。そういう陰鬱いんうつな怠慢こそ、絶望の後にきたり、死の苦しみの前に来るものである。

マリウスはしばしその惨憺さんたんたる室の内部をながめていた。それは墓の内部よりもいつそう恐ろしいものだった。そこでは、人の魂がうごめき人の生命があえいでるのが感じられるのだった。

屋根裏の部屋、あなぐら 窖、社会の最下層をはいまわるある貧人らが

いる賤しい溝、それはまったくの墓場ではなく、むしろ墓場の控え室である。しかしながら、富者らがその邸宅の入り口に最も華美をつくすがように、貧者らのすぐそばにある死も、その玄関に最大の悲惨をこらすがように思われる。

男は黙つてしまい、女は口もきかず、若い娘は息さえもしていないようだった。ただ紙の上をきしるペンの音ばかりが聞こえていた。

やがて男は書く手を休めずつぶやいた。

「愚だ、愚だ、すべて愚だ！」

ソロモンの警語（訳者注 空なるかな空なるかなすべて空なり！）をそのまま言いかえたその言葉に、女はため息をもらした。

「お前さん、いらいらしなさんなよ。」と彼女は言った。「身体

でも悪くしちやつまらないよ、あんた。あんな人たちにだれかまわらず手紙を書くなんて、うちの人もあまり気がよすぎるといふものよ。」

悲惨のうちにあると、寒気のうちにいるように、人は互いに身体を近寄らせるが、心は互いに遠ざかるものである。この女はうち見たところ、心のうちにある愛情の限りをつくして亭主を愛していたらしいが、一家の上に押つかぶさった恐ろしい赤貧から来る互いの日々の口論のうちに、その愛も消えうせてしまったのである。亭主に対してはもはや愛情の灰のみしか、彼女のうちには残っていないなかつた。けれども、よく世にあるとおり、やさしい呼び方だけは消えずに残っていた。彼女はいつも亭主に言った。あんた、お前さん、うちの、人、などと。それも心は黙っているのにただ口の先だけで。

男はまた書き初めていた。

## 七 戦略と戦術

マリユスは胸をしめつけられるような思いがして、間に合わせのその一種の観測台からおりようとした。その時ある物音が聞こえたので、彼は気をひかれてそこに止まっていた。

部屋の扉とびらが突然開かれたのだった。

姉娘あねが闕しきいの所に現われた。

足には太い男の靴くつをはき、靴から赤い踝くるぶしの所まで泥をはね上げ、身にはぼろぼろの古いマントを着ていた。一時間前マリユスが見た時はそのマントを着ていなかっただが、それはおそらく彼の同情をひかんがために扉とびらの所に置いてきて、出しなにもまた

着て行つたものであろう。彼女ははいつてき、後ろに扉を押し閉ざし、息を切らしてゐるのでちよつと立ち止まつて休み、それから勝ちほこつた喜悅の表情をして叫んだ。

「来るよ！」

父は目をその方に向け、女房は顔をその方に向けたが、妹は身動きもしなかつた。

「だれが？」と父は尋ねた。

「旦那だんながよ。」

「あの慈善家か。」

「そうよ。」

「サン・ジャック会堂の？」

「そうよ。」

「あの爺じいさんか？」

「そうよ。」

「それが来るのか。」

「今あたしのあとから来るのよ。」

「確か。」

「確かよ。」

「では本当にあれが来るのか。」

「辻馬車つじばしやで来るわ。」

「辻馬車で。ロスチャイルドみたいだな。」

父は立ち上がった。

「どうして確かだつてことがわかるんだ。辻馬車で来るんなら、どうしてお前の方が先にこられたんだ。少なくともうちの所だけは言っておいたろうね。廊下の一番奥の右手の戸だとよく言ったのか。まちがわなけりやいいがな。でお前は教会堂で会った

んだね。手紙は読んでくれたのか。お前に何と言った。」

「まあまあお父さん！」と娘は言った。「何でそうせき立てるのよ。こうなんだよ。あたしが教会堂にはいると、向こうはいつもの所にいた。あたしはおじぎをしてね、手紙を渡してやったのさ。向こうはそれを読んでくれてね、私にきくのよ、『お前さんはどこに住んでいますか、』って。『旦那様だんなさま、私が御案内しましょう、』と答えると、こういったのよ。『いや所を知らしておくれ。娘が買い物をしなければならぬから、私はあとから馬車に乗って、お前さんと同じくらいに着くようにする。』それであたしは所を知らしてやったわ。家を知らせると、向こうはびつくりして、ちよつともじもじしてるようだったが、それからこう言ったの。『とにかく、私が行くから。』弥撒ミサがすんでからあたしは、あの人を娘といつしよに教会堂から出るのを見た

わ、それから辻馬車に乗る所も。あたしちゃんと、廊下の一番奥の右手の戸だつて言つておいたよ。」

「それでもどうしてきつと来ることがわかるんだ。」

「馬車がプテイー・バンキエ街へ来るのを見たのよ。だから駆けてきたんだわ。」

「どうしてその馬車だつてことがわかる？」

「ちゃんと馬車の番号を見といたんだよ。」

「何番だ。」

「四百四十番よ。」

「よしお前は伶俐りこうな娘こだ。」

娘はまじまじと父を見つめ、そして足にはいてる靴くつを見せながら言つた。

「伶俐りこうな娘かも知れないわ。だがあたしはもうこんな靴はごめ

んよ、もうどうしたつていやよ。第一身体からだに悪いし、その上みつともないわ。底がじめじめして、しよつちゆうぎいぎい言うのくらい、いやなものつたらありはしない。跣足はだしの方がよつぽどましだわ。」

「もつともだ。」と父は答えた。そのやさしい調子は娘の荒々しい言い方と妙な対照をなしていた。「だが教会堂へは靴をはかなくちははいれねえからな。貧乏な者だつて靴をはかなきやならねえ。神様の家へは跣足では行かれねえよ。」と彼は苦々にがにがしくつけ加えた。それからまた頭を占めてる問題に返つて言った。「ではきつと来るんだな?」

「すぐあたしのあとにやつて来るよ。」と娘は言った。

男は身を起こした。顔には一種の輝きがあつた。

「おいお前、」と彼は叫んだ、「聞いたか。今慈善家が来るんだ。」

火を消しておけよ。」

女房はあきれ返つて身動きもしなかつた。

父親は軽業師かるわざしのようにすばやく、暖炉の上にあつた口の欠けた壺つぼを取り、燃えさしの薪の上に水をぶちまけた。

それから姉娘の方へ向いて言つた。

「お前は椅子いすの藁わらを抜くんだ。」

娘はそれが何のことだかわからなかつた。

父は椅子をつかみ、踵かかとで一蹴ひとけりして、腰掛け台の藁を抜いてしまつた。彼の足はそこをつきぬけた。足を引きぬきながら、彼は娘に尋ねた。

「今日は寒いか。」

「大変寒いわ。雪が降つてるよ。」

父は窓の近くの寢床にすわつてた妹娘の方を向いて、雷のよ

うな声で怒鳴った。

「おい、寢床からおりろ、なまけ者が。いつもつくねんとしてばかりいやがる。窓ガラスでもこわせ。」

娘は震えながら寢床から飛びおりた。

「窓ガラスをこわせたら！」と父はまた言った。

娘は呆氣あっけに取られて立っていた。

「わからねえのか。」と父はくり返した。「窓ガラスを一枚こわせと言うんだ。」

娘はただ恐ろしさのあまり父の言葉に従って、爪先で背伸びをし、拳こぶしをかためて窓ガラスを打った。ガラスはこわれて、大きな音をして下に落ちた。

「よし。」と父は言った。

彼は着実でまた性急だった。部屋のすみずみまで急いで見回

した。

彼の様子はちょうど、戦争が初まろうとする時に当たって、早くも最後の準備をする將軍のようだった。

それまで一言も口をきかなかつた母親は、ようやく立ち上がった、ゆっくりとした重々しい声で尋ねた。その言葉は凍って出て来るかのようだった。

「あんた、何をするつもりだね？」

「お前は寢床に寝ている。」と男は答えた。

その調子は考慮の余地を人に与えなかつた。女房はそれに従つて、寢床の上に重々しく身を横たえた。

そのうちに、片すみですすり泣く声が出た。

「何だ？」と父親は叫んだ。

妹娘はなおすみっこにうづくまつたまま、血にまみれた拳こぶしを

出して見せた。窓ガラスをこわす時けがしたのである。彼女は母親の寢床のそばに行つて、黙つて泣いている。

こんどは母親が身を起こして叫んだ。

「まあごらんよ。何てばかなことをさせたもんだね。ガラスなんかこわさしたから手を切つたんじゃないか。」

「その方がいい。」と男は言つた。「初めからそのつもりだ。」

「なんだつて、その方がいいつて？」と女は言つた。

「静かにしろ！」と男は答え返した。「俺は言論の自由を禁ずるんだ。」

それから彼は自分が着ていた女のシャツを引き裂いて、細い布片をこしらえ、それで娘の血にまみれた拳こぶしを急いで結わえた。

それがすむと、彼は満足げな目つきで自分の裂けたシャツを見おろした。

「おまけにシャツもだ。」と彼は言った。「なかなかいい具合に見える。」

凍るような風が窓ガラスに音を立てて、室へやの中に吹き込んできた。外の靄もやも室にはいつてきて、目に見えない指でぼーっとほごされるほの白い綿のようにひろがつていった。ガラスのこわれた窓からは、雪の降るのが見られた。前日聖燭節の太陽で察せられた寒気が、果たしてやってきたのである。

父親はぐるりとあたりを見回して、何か忘れたものはないかと調べてるようだった。それから、古い十能を取上げて湿った薪たきぎの上に灰をかぶせ、すっかりそれを埋めてしまった。

それから立ち上がって、暖炉に寄りかかって言った。

「さあこれで慈善家を迎えることができる。」

八 陋屋ろうおくの中の光

姉娘は父親の所へ寄つてきて、彼の手の上に自分の手を置いた。

「触さわつてごらん、こんなに冷いわ。」と彼女は言った。

「なあんだ、」と父は答えた、「俺おれの方がもつと冷い。」

母親は性急に叫んだ。

「お前さんはいつでもだれよりも上だよ、苦しいことでもね。」

「黙つてろ。」と男は言った。女は一種のにらみ方をされて黙つてしまった。

陋屋ろうおくの中は一時静まり返った。姉娘は平気な顔をしてマントの裾すその泥を落としていた。妹の方はなお泣き続けていた。母親は両手に娘の頭を抱えてやたらに脣くちびるをつけながら、低くささや

いていた。

「いい児だからね、泣くんじゃないよ、何でもないからね。泣くとまたお父さんに怒られるよ。」

「いやそうじゃねえ。」と父は叫んだ。「泣け、泣け。泣く方がいいんだ。」

それから彼は姉娘の方へ向いて言った。

「どうしたんだ、こないじゃねえか。こなかったらどうする。火は消す、椅子いすはこわす、シャツは裂く、窓ガラスはこわす、そして一文にもならねえんだ。」

「おまけに娘にはけがをさしてさ！」と母親はつぶやいた。

「おい、」と父親は言った、「この屋根はべらぼうに寒いじゃねえか。もしこなかったらどうするんだ。これはまた何て待たせやがるんだ。こうも思ってるんだろう、『なあに待たしておけ、

それがあたりまえだ！』本当にいまいました奴らだ。締め殺してでもやったら、どんなにいい気持ちでおもしろくて溜飲りゅういんが下がるかわからねえ。あの金持ちの奴らをよ、みんな残らずさ。どいつもこいつも慈悲深そうな顔をしやがって、体裁ばかりつくりやがって、弥撒ミサには行くし、坊主には物を送ったり阿諛おべつかを使ったりしやがる。そのくせ俺おれたちより上の者だと思ひ込んで、恥をかかせにやっつきやがる。着物を施すなんて言いながら、四スーも出せばつりがこようっていうぼろを持つてくるし、それにまたパンとくるんだ。そんなもの俺は欲しくもねえ。皆わからずやばかりだ。俺おれが欲しいなあ金だ。ところが金ときては一文も出しやがらねえ。金をくれても飲んでしまうと言ってやる。俺たちは酒飲みでなまけ者だと言ってやる。そして御当人は！ 奴らはいったい何だい。若わえ時には何をしてきたん

だい。泥坊じやねえか。そうでもなけりやあ金持ちになれるわけはねえ。ええ、世間は四すみから持ち上げて、すぽっと投げ出しちまうがいい。みんなつぶれつちまうかも知れねえ。つぶれなくつても、皆無一文になるわけだ。それだけ儲けもうものだ。——だがあの慈善家のばか野郎、いったい何をしてるんだ。本当に来るのか。ことによると番地を忘れたかな。あの爺じいの畜生め……。」

その時軽く扉とびらをたたく音がした。男は飛んでいつて扉を開き、うやうやしくおじぎをし、景慕のほほえみを浮かべて、叫んだ。「おはいり下さい。御親切な旦那だんな、また美しいお嬢様も、どうかおはいり下さい。」

年取ったひとりの男と若いひとりの娘とが、その屋根部屋の入り口に現われた。

マリユスはまだのぞき穴の所を去つていなかつた。そして今彼が受けた感じは、とうてい人間の言葉をもつては現わせない。現われたのは実に彼女だつた。

およそ恋をしたことのある者は「彼女」という語の二字のうちに含まれる光り輝く意味を知っているであろう。

まさしく彼女であつた。マリユスは突然眼前にひろがった光耀たる霧を通して、ほとんど彼女の姿を見分けることができないうくらいだつた。がそれはまさしく、姿を隠したあのやさしい娘だつた、六カ月の間彼に輝いていたあの星だつた、あの瞳、あの額、あの口、消え去りながら彼を暗夜のうちに残したあの美しい顔だつた。その面影は一度見えなくなつたが、今また現われたのである。

その面影は再び、この影の中に、この屋根部屋の中に、この

醜い陋屋ろおくの中に、この恐ろしい醜悪の中に、現われきたつたのである。

マリユスは我を忘れておののいた。ああまさしく彼女である！  
彼は胸の動悸どうきのために目もくらむほどだった。まさに涙を流さ  
んばかりになった。ああ、あれほど長くさがしあぐんだ後ついにめぐり会おうとは！ 彼はあたかも、自分の魂を失っていたのをまた再び見いだしたような気がした。

彼女はやはり以前のとおりで、ただ少し色が青くなつてゐただった。その妙たえなる顔は紫ビロードの帽子に縁取られ、その身体は黒縹くろじゆす子の外套がいとうの下に隠されていた。長い上衣の下からは絹はんぐつの半靴はんぐつにしめられた小さな足が少し見えていた。

彼女はやはりルブラン氏といつしよだった。

彼女は室へやの中に数歩進んで、テーブルの上にかなり大きな包

みを置いた。

ジョンドレットの姉娘は、扉とびらの後ろに退いて、そのビロードの帽子、その絹の外套、またその愛くるしい幸福な顔を、陰気な目つきでながめていた。

## 九 泣かぬばかりのジョンドレット

部屋はきわめて薄暗かったので、外からはいつてくるとちよあなぐらうど窖へでもはいったような感じがする。それで新来のふたりは、あたりのぼんやりした物の形を見分けかねて、少しく躊躇ちゆうちちよしながら進んできた。しかるに家の者らは、屋根裏に住む者の常として薄暗がりになれた目で、彼らの姿をすっかり見て取ることができて、じろじろうちながめていた。

ルブラン氏は親切そうなたまた悲しげな目つきで近づいてきて、  
ジョンドレットに言った。

「さあこの包みの中に、新しい着物と靴足袋くつたびと毛布とがはいっ  
ています。」

「神様のような慈悲深いお方、いろいろありがとう存じます。」  
とジョンドレットは頭を床にすりつけんばかりにして言った。  
——それから、ふたりの客があわれな部屋へやの内部を見回してる  
間に、彼は姉娘の耳元に身をかがめて、低く口早に言った。

「へん、俺が言ったとおりにじゃねえか。ぼろだけで、金は一文  
もくれねえ。奴らやつはみんなさうだ。ところでこの老耄おいぼれにやった  
手紙には、こちらの名前は何として置いたつくな。」

「ファバントウーよ。」と娘は答えた。

「うむ俳優だったな、よし。」

それを思い出したのはジョンドレットに仕合わせだった。ちよ  
うどその時ルブラン氏は、彼の方へ向いて、名前を思い出そう  
としてるような様子で彼に言った。

「なるほどお気の毒です、ええと……。」

「ファバントウーと申します。」ジョンドレットは急いで答えた。  
「ファバントウー君と、なるほどそうでしたな、ええ覚えてい  
ます。」

「俳優をしまして、元はよく当てたこともございますので。」

そこでジョンドレットは、この慈善家を捕うべき時がきたと思  
い込んだ。で彼は、市場いちばやし香具師のような大げさな調子と大道乞食だいどうこじき  
のような哀れな調子とをなймаぜた声で叫んだ。「タルマの弟子でし  
でございます、旦那だんな、私はタルマの弟子でございます。昔は万  
事都合がよろしゅうございましたが、只今では誠に不運な身の

上になりました。旦那ごらん下さいまし、パンもなければ火もございませぬ。ただ一つの椅子いすは藁わらがぬけ落ちています。こんな天気窓ガラスはこわれています。それに家内まで寝ついていまして、病気なのでございます。」

「御気の毒に。」とルブラン氏は言った。

「子供までけがをしています。」とジョンドレットは言い添えた。小娘は知らない人がきたのに紛らされて、「お嬢様」をながめながら泣きやんでいた。

「泣けつたら、大声に泣けよ。」とジョンドレットは彼女に低くささやいた。

と同時に彼はそのけがした手をつねった。彼はそれらのことを手品師のような早業はやわざでやってのけた。

娘は大声を立てた。

マリユスが心のうちで「わがユルスユール」と呼んでいた美しい若い娘は、すぐにその方へやっていった。

「まあかわいいそうなお子さん！」と彼女は言った。

「お嬢様、」とジョンドレットは言い進んだ、「この血の出ている手首をごらん下さいまし。日に六スーズつもらつて機械で仕事をしていますうちに、こんなことになりました。あるいは腕を切り落とさなければならぬかも知れませんのです。」

「そうですか。」と老人は驚いて言った。

小さな娘はその言葉を本気に取つて、いかにもうまく泣き出した。

「全くのことでごさいますして、実にどうも！」と父親は答えた。しばらく前からジョンドレットは、その慈善家を変な様子でじろじろながめていた。口をききながらも、何か記憶を呼び起こ

そうとでもするように、注意して彼の様子を探ってるらしかった。そして新来のふたりが小娘にその負傷した手のことを同情して尋ねてる間に乗じて、彼は突然、ぼんやりした元氣のない様子で寢床に横たわつてる女房のそばへ行き、低い声で言った。

「あの男をよく見ておけ！」

それからルブラン氏の方を向き、哀れな状態を口説き続けた。「旦那だんな、ごらんのとおり私は、着る物としては家内のシャツ一枚きりでございまして、それもこの冬の最中にすっかり破れ裂けています。着物がなかったので外に出られないような始末でございませう。着物一枚でもありましたら、私はマルス嬢（訳者注 当時名高い女優）の所へでも行くのでございますが。嬢は私を知っています。ましてごく鼻屑ひいきにしてくれませう。まだトウル・デ・ダム街に住んでるのでございませうか。旦那も御存じですかど

うか、私は嬢といつしよに田舎いなかで芝居を打つたことがあります。私もいつしよに大成功でございました。で只今でもセリメーヌ（訳者注 モリエールの喜劇中の人物で機才ある美人——マルス嬢をさす）は、きつと私を救つてくれますでしょう。エルミールはベリゼールに物を恵んでくれますでしょう（訳者注 前者はモリエールの喜劇中の人物で正直なる婦人、後者は伝説中の人物で零落せる將軍。——マルス嬢とジョンドレット自身とを指す）。ですがこの姿ではどうにもできません。その上一文の持ち合わせもありません。まったく家内が病氣なのに無一文なのでございます。娘がひどいけがをしているのに無一文なのでございます。家内は時々息がつまります。年齢としのせいでもございませうが、また神経も手伝っています。どうかいたさなくてはなりません。また娘の方も同様で。と申して、医者も薬

も、どうして払いましょう、一文もありません。ですからまあ  
わずかなお金でも跪ひざまずいて押しただくような始末でございます。  
芸術なんていうものもこうなつてはみじめなものでございます。  
美しいお嬢様、それから御親切な旦那だんなさま様、さようではございま  
せんか。あなた方は徳と親切とを旨むねとされて、いつも教会堂へ  
おいででございますが、私のかわいそうな娘もまた教会堂へお  
祈りに参つていきますので、毎日お姿をお見かけいたしております。  
私には娘どもを宗教のうちに育てたいのでございます。芝居  
へなんぞはやりたくないと思いましたが。賤いやしい者の娘はえ  
てつまずきやすいものでございます。私はつまらないことは決  
して聞かせません。いつも名誉だの道徳だの徳操だのを説いて  
きかせています。娘どもに尋ねてもみて下さいませ。まつすぐ  
の道を歩かなければなりません。娘どもは父として私をいただ

いています。ちゃんとした家庭を持たぬのがはじまりで、しま  
いには賤しい稼かせぎに身を落とすような不幸な者どもではござい  
ません。家なしの娘からだれかまわすの夫人となるのが常であ  
ります。ですが、ファバントゥーの一家にはそんな者はひとり  
もありません。私は娘どもをりっぱに教育したのでありまし  
て、ただ正直になるように、温順になるように、尊い神様を信  
ずるようにと願っております。——それから旦那、りっぱな旦那  
様、私どもが明日どんなことになるかは御承知でもございま  
すまい。明日は二月四日で、いよいよの日でございませう。家主  
に待ってもらった最後の日でございます。もし今晚払いをしま  
せんと、明日は、姉娘と、私と、熱のある家内と、けがをして  
いる子供と、私ども四人はここから外に、往来に、追い出され  
てしましまして、宿もなく、雨の中を、雪の中を、路頭に迷わ

なければなりません。かようなわけでございます、旦那様。四期分の、一年分の、借りがあるのでございまして、六十フランになつております。」

ジョンドレットは嘘うそを言った。家賃は四期で四十フランにしなければならずであるし、またマリユスが二期分を払つてやつてから六カ月しかたつていないので、四期分の借りができてゐるわけもなかった。

ルブラン氏はポケットから五フランを取り出して、それをテーブルの上に置いた。

ジョンドレットはそのわずかな暇に姉娘の耳にささやいた。

「ばかにしてる、五フランばかりでどうしろつていうのか。椅子いすとガラスの代にもならねえ。せめて入費いりめぐらいは置いてくがあたりまえだ。」

その間にルブラン氏は、青いフロックの上に着ていた大きなかつしよく褐色がいとうの外が套いをぬいで、それを椅子の背に投げかけた。

「ファバントウー君、」と彼は言った、「私は今五フランきり持ち合わせがないが、一応娘を連れて家に帰り、今晚またやってきました。払わなければならないというのは今晚のことです  
ね……。」

ジョンドレットの顔は不思議な色に輝いた。彼は元気よく答えた。

「さようでございます、尊だんなさまい旦那様。八時には家主の所へ持つて参らなければなりません。」

「では六時にやってきます、そして六十フラン持つてきましょう。」

「ほんとに御親切な旦那様！」とジョンドレットは夢中になっ

て叫んだ。

そしてすぐに彼は低く女房にささやいた。

「おい、あいつをよく見ておけよ。」

ルブラン氏は若い美しい娘の腕を取って、扉とびらの方へ向いた。

「では今晚また、皆さん。」と彼はいった。

「六時でございますか。」とジョンドレットはきいた。

「正六時に。」

その時、椅子いすの上にあつた外套がいとうがジョンドレットの姉娘の目

に止まつた。

「旦那だんな、」と彼女は言った、「外套をお忘れになつています。」

ジョンドレットは恐ろしく肩をそばだて、燃えるような目つきで娘をじろりとにらめた。

ルブラン氏はふり返つて、ほほえみながら答えた。

「忘れたのではありません。それは置いてゆくのです。」

「おお私の恩人様、」とジョンドレットは言った、「実に情け深い旦那様、私は涙がこぼれます。せめて馬車までお供さして下さいませ。」

「外に出るなら、」とルブラン氏は言った、「その外套をお着なさい。ひどく寒いですよ。」

ジョンドレットは二言と待たなかった。彼はすぐにその褐色かつしよくの外套を引っかけた。

そしてジョンドレットが先に立つて、三人は室へやを出て行つた。

## 十 官営馬車賃——一時間二フラン

マリユスはその光景をすっかりながめた。しかし実際は何も

はつきり見て取ることはできなかつた。彼の目は若い娘の上に据えられており、彼の心は、彼女がその室に一步ふみ込むや否や、言わば彼女をつかみ取り彼女をすっかり包み込んでしまつてゐた。彼女がそこにゐる間、彼はまったく恍惚たる状態にあつて、あらゆる物質的の知覚を失い、全心をただ一点に集注してゐた。彼がながめていたものはその娘ではなくて、縺子の外套とビロードの帽子とをつけた光明そのものだつた。シリウス星が室の中にはいつてきたとしても、彼はそれほど眩惑されはしなかつたであらう。

若い娘が包みを開き、着物と毛布とをそこにひろげ、病氣の母親に親切な言葉をかけ、けがした娘にあわれみの言葉をかけてる間、彼はその一挙一動を見守り、その言葉を聞き取ろうとした。その目、その額、その美貌、その姿、その歩き方を彼は皆

知っていたが、その声の音色はまだ知らなかった。かつてリユクサンブールの園でその数語を耳にしたように思ったこともあったが、それも確かにそうだとはいわからなかった。そして彼女の声をきくならば、その音楽の響きを少しでも自分の心のうちにしまい込むことができれば、十年ほど自分の生命を縮めても惜しくないと思つた。けれどもジョンドレットの哀願の声やラツパのような嘆声に、彼女の声はすっかり消されてしまった。マリユスは狂喜とともに憤怒の情をさえ覚えた。彼は目の中に彼女の姿を包み込んでいた。その恐ろしい陋屋ろうおくのうちの怪物どもの間に、神聖なる彼女を見いだそうとは、夢にも思いがけないことだった。彼は墓がまの間に蜂雀ほうしやくを見るような気がした。

彼女が出て行つた時、彼はただ一つのことときり考えなかつた、

すなわち、そのあとに従い、その跡をつけ、住所を知るまでは決して離れず、少なくともかく不思議にもめぐり会った以上はもはや決して見失うまいということ。で彼は戸棚とだなから飛びおり、帽子を取った。そして扉とびらのつつ手に手をかけまさに外に出ようとした時、ふと足を止めて考えた。廊下は長く、階段は急であり、その上ジョンドレットは饒舌おしゃべりだから、ルブラン氏はまだおそらく馬車に乗ってはいないだろう。もしルブラン氏が、廊下でか階段でかまたは門口の所でふり返つて、この家の中に自分がいることに気づきでもしようものなら、きつと警戒して再び自分からのがれようとするだろう。そしてそれでまた万事おしまいである。何としたらいいものか。少し待つとしようか。しかし待つてる間に、馬車は走り去ってしまうかも知れない。マリウスはまったく困惑した。がついに彼は危険をおかして室へやを

出た。

もう廊下にはだれもいなかった。彼は階段の所へ走つていった。階段にもだれもいなかった。大急ぎで階段をおり、大通りに出ると、ちょうど馬車がプティー・バンキエ街の角を曲がって市中へ帰つてゆくのが見えた。

マリユスはその方へ駆けていった。大通りの角までゆくと、ムーフタール街を走り去る馬車がまた見えた。しかしもうほとんど遠くなので、とうてい追いつけそうもなかった。後を追つて駆け出す、そんなこともできない。その上、足にまかして追つかける者があれば馬車の中からよく見えるので、老人はすぐに自分だということに気づくに違いない。しかしちょうどその時、思いがけなくもふとマリユスは、官営馬車が空のままで大通りを過ぎるのを認めた。今はもう、その馬車に乗つて先の馬車の

跡をつけるよりほかに方法はなかった。そうすれば安心して確実にまた危険の恐れもない。

マリウスは手を挙げて御者を呼びとめ、そして叫んだ。「時間ぎめで！」

マリウスはえり飾りもつけていず、ボタンの取れた古い仕事服を着、シャツは胸の所の一つの襞が裂けていた。

御者は馬を止め、目をまばたき、マリウスの方へ左の手を差し出しながら、人差し指と親指との先を静かにこすつてみせた。

「何だ？」とマリウスは言った。

「先にお金をどうか。」と御者は言った。

マリウスは十六スーきり持ち合わせがないことを思い出した。

「いくらだ？」と彼は尋ねた。

「四十スー。」（訳者注 四十スーは二フランに当たる）

「帰つてきてから払おう。」

御者は何の答えもせず、ただラ・パリス（訳者注 素朴な小唄）の節を口笛で吹いて、馬に鞭むちを当てて行つてしまった。

マリウスは茫然ぼうぜんとして馬車が行つてしまふのをながめた。持ち合わせが二十四スー足りなかつたために、喜びと幸福と愛とを失つてしまい、再び暗夜のうちに陥つてしまった。せつかく目が見えてきたのにまた見えなくなつてしまった。彼は苦々にがにがしく、そして実際深い遺憾の念をもつて、その朝あのみじめな娘に与えた五フランのことを思つた。その五フランさえ持つていたら、救われ、よみがえり、地獄と暗黒とから脱し、孤独や憂愁やひとり身から脱していたであろう。自分の運命の黒い糸をあこがねいろの黄金色の美しい糸に結び合わせる事ができたであろう。しかるにその美しい糸口は、彼の目の前にちよつと浮かび出たば

かりで、また再び断ち切れてしまったのである。彼は絶望して家に帰った。

ルブラン氏は晩に再びやって来ると約束した、そしてその時こそはうまく跡をつけてやろう、そう彼は考え得たはずである。しかし先刻夢中になつてのぞいている時、彼はその約束の言葉をもほとんど聞き取り得なかつたのである。

家の階段を上つてゆこうとした時彼は、大通りの向こう側、バリエール・デ・ゴブラン街の寂しい壁の所に、「慈善家」の外套がいとうにくるまつたジョンドレットの姿を認めた。ジョンドレットは他のひとりの男に口をきいていた。その男は場末の浮浪人とも言い得るような人相の悪い奴やつらのひとりだった。そういう奴らは、曖昧あいまいな顔つきをし、怪しい独語を発し、悪いことをたくらんでいそうな風付きであつて、普通は昼間眠っているもので、

それから推すと夜分に仕事をしてるものらしい。

ふたりは立ちながら身動きもしないで、渦巻うずまき降る雪の中で話をしていた。その互いに身を寄せ合ってるさまは、確かに警官の目をひくべきものだったが、マリユスはあまり注意を払わなかつた。

けれども、彼はいかに心が悲しみに満たされていたとは言え、ジョンドレットが話しかけてるその場末の浮浪人にどこか見覚えがあるような気がしてならなかつた。何だかパンシヨーという男に似てるようだった。パンシヨーと言えば、クールフェーラックがかつて教えてくれた男で、またその付近ではかなり危険な夜盗だとして知られてる男で、別名をプランタニエもしくはビッグルナイユと言っていた。その名前は前編で読者の既に見たところである。このパンシヨー一名プランタニエ一名ビッグル

ナイユは、後に多くの刑事裁判のうちに現われてきて、ついに有名な悪党となった者であるが、当時はただ名が通つてるといふだけの悪者にすぎなかつた。そして今日では既に、盗賊強盗らの間にひとりの伝説的人物となつている。彼は王政の終わり頃にはもう一方の首領となつていた。夕方、まさに夜にならんとする頃、囚人らが集まつて低くささやき合う時には、彼はフォルス監獄の獅子ししの窖あなぐら（訳者注 ある中庭）での噂うわさの種となつた。その監獄に行くと、一八四三年に三十人の囚徒が白昼未曾有の脱獄をはかつた時に使つた排尿道が路地の下を通つてる所、ちょうど便所の舗石しきいしの上の方の囲壁の上に、パン、シヨ、トという彼の名前を読むことができた。それは彼が脱獄を企てたある時に、自ら大胆にもそこに彫りつけたものである。一八三二年にも、警察は既に彼に目をつけていたが、その頃彼はまだ本当に舞台

に立つてはいなかつたのである。

十一 惨めなる者悲しめる者に力を貸す

マリユスはゆるい足取りで家の階段を上つて行つた。そして自分の室へやにはいろいろとする時、自分のあとについてくるジョン・ドレットの姉娘の姿を廊下に認めた。彼女は彼にとっては見るも不快の種だつた。彼の五フランを持つてるのは彼女だつた。今更それを返せと言つたところで仕方がない。官営馬車はもうそこにいず、またあの辻馬車つじばしやは遠くに行つていた。その上彼女は金を返しすまい。また先刻きたあの人たちの住所を彼女に尋ねても、たぶんむだだろう。彼女はとうていそれを知つてゐるわけではない。なぜなら、ファバントウーと署名されていた手紙

のあて名は、サン・ジャック・デュ・オー・パ、会堂の慈悲深き紳士殿としてあつたばかりだから。

マリユスは室にはいつて、後ろに扉とびらを押ししめた。

しかし扉はしまらなかつた。ふり返つて見ると、半ば開いた扉を一つの手がささえていた。

「何だ？ だれだ？」と彼は尋ねた。

それはジョンドレットの姉娘だつた。

「あああなたですか、」とマリユスはほとんど冷酷に言つた、「またきたんですか。何か用ですか。」

娘は何か考へてゐらしく、返事もしなかつた。朝のような臆面おくめんなさはもうなかつた。はいつてもこないで、廊下の陰の所に立つていた。マリユスはただ半開きの扉とびらからその姿を見るだけだつた。

「さあどうしたんです。」とマリユスは言った。「何か用があるんですか。」

娘は陰鬱いんうつな目を上げて彼を見た。その目には一種の光がぼんやりひらめいていた。彼女は彼に言った。

「マリユスさん、あなたはふさいでるわね。どうかしたの？」

「私が！」とマリユスは言った。

「ええ、あなたがよ。」

「私はどうもしません。」

「いいえ。」

「本当です。」

「いいえきつとそうだわ。」

「かまわないで下さい。」

マリユスはまた扉を押しやったが、娘はなおそれをささえて

いた。

「ねえ、あなたはまちがってるわ。」と彼女は言った。「あなたはお金持ちでもないのに、今朝大變親切にしてくれたでしょう。だから今もそうして下さいな。今朝あたしに食べるものをくれたでしょう、だからこんどは心にあることを言つて下さいな。何かあなたは心配してるわ、よく見えてよ。あたしあなたに心配させたくないのよ。どうしたらいいの。あたしでは役に立たなくて？ あたしを使つて下さいな。何もあなたの秘密を聞くつていうんじゃないわ、そんなこと言わなくてもいいわよ。でもあたしだつて役に立つこともあつてよ。あなたの手伝いぐらいあたしにもできるわ、あたしは父さんの用を助けてるんだもの。手紙を持つていくとか、人の家へいくとか、方々尋ね回るとか、居所をさがすとか、人の跡をつけるとか、そんなこと

ならあたしにもできてよ。ねえ、何のことだかあたしに言つて下さいな。どんな人の所へだつて行つて話してきてあげるわ。ちよつとだれかが口をききさえすれば、それでよくわかつてうまくいくこともあるものよ。ねえあたしを使つて下さいな。」

ある考えがマリユスの頭に浮かんだ。人はおぼれかかる時は一筋の藁わらにもあえてすがろうとする。彼は娘のそばに寄つた。

「聞いておくれ……。」と彼は娘に言つた。

彼女は喜びの色に目を輝かしてそれをさえぎつた。

「ええあたしにそう親しい言葉を使つて下さいな！ あたしの方がほんとにうれしいわ。」

「ではね、」と彼は言つた、「お前はここに、あの……娘といつしよにお爺じいさんを連れてきたんだね。」

「ええ。」

「お前はあの人たちの住所を知ってるのかい。」

「いいえ。」

「それを僕のためにさがし出してくれよ。」

娘の陰鬱いんうつな目つきはうれしそうになっていたが、そこで急に曇つてきた。

「あなたが思っていたことはそんなことなの。」と彼女は尋ねた。

「ああ。」

「あの人たちを知ってるの。」

「いいや。」

「では、」と彼女は早口に言った、「あの娘さんを知っていないのね、そしてこれから知り合いになりたいと言うのね。」

あの人たちというのがあの娘さんと変わったことのうちには、

何かしら意味ありげなまた苦々しいものがあった。にがにが

「とにかくお前にできるかね。」とマリユスは言った。

「あの美しいお嬢さんの居所を聞き出してくることね？」

あの美しいお嬢さんというその言葉のうちには、なお一種の影があつて、それがマリユスをいらいらさした。彼は言った。

「まあ何でもいいから、あの親と娘との住所だ。なにふたりの住所だけだよ。」

娘はじつと彼を見つめた。

「それであたしに何をくれるの。」

「何でも望みどおりのものを。」

「あたしの望みどおりのものを？」

「ああ。」

「ではきつときがし出してくるわ。」

彼女は頭を下げ、そして突然ぐいと扉とびらを引いた。扉はしまつた。

マリユスはひとりになった。

彼は椅子いすの上に身を落とし、頭と両腕とを寢台の上に投げ出し、とらえ所のない考えのうちに沈み、あたかも眩暈げんうんでもしてゐるかのようだった。朝以来起こってきたあらゆること、天使エンゼルの出現、その消失、あの娘の今の言葉、絶望の淵ふちのうちに漂ってきた希望の光、それらが入り乱れて彼の頭にいつぱいになっていた。

突然彼はその夢想から激しく呼びさまされた。

彼はジョンドレットの高いきびしい声を耳にしたのである。

その言葉は彼の異常な注意をひくものだった。

「確かにそうだ、俺おれはそうと見て取ったんだ。」

ジョンドレットが言ってるのはだれのことだろうか？ だれを  
いつたい見て取ったのか。それはルブラン氏のことなのか。「わ  
がユルスユール」の父親のことなのか。でもジョンドレットは  
いつたい彼を知ってるのか。自分の生涯を暗闇くらやみから救つてくれ  
るあらゆる手掛かりは、かくも突然にまた意外に得られようと  
するのか。自分の愛する者はだれであるか、あの若い娘はいか  
なる人であるか、その父親はいかなる人であるか、遂にそれが  
わかろうとするのか。ふたりをおおっていた濃い闇もまさに晴  
れようとするのか。ヴェールはまさに引き裂かれんとするのか。  
ああ天よ！

彼は戸棚の上にのぼった、というよりもむしろ飛び上がった。  
そして例の壁の小穴の近くに位置を占めた。

彼は再びジョンドレットの陋屋ろうおくの内部を見た。

## 十二 ルブラン氏の与えし五フランの用途

一家の様子には前と変わった所はなく、ただ女房と娘たちとが包みの中のものを取り出して、毛の靴下くつしたやシャツをつけていたばかりだった。新しい二枚の毛布は二つの寝台の上にひろげられていた。

ジョンドレットは今帰ってきたばかりらしかった。まだ外からはいつてきたばかりの荒い息使いをしていた。ふたりの娘は暖炉のそばに床ゆかの上にすわって、姉の方は妹の手を結わえてやつていた。女房は暖炉のそばの寢床の上に身を投げ出して驚いたような顔つきをしていた。ジョンドレットは室へやの中を大またにあちこち歩き回っていた。彼は異様な目つきをしていた。

女房は亭主の前におずおずして呆氣あつけに取られてるようだったが、やがてこう言った。

「でも本当かね、確かかね。」

「確かだ。もう八年になるんだが、俺おれは見て取つたんだ。奴やつだ  
と見て取つた。一目でわかつた。だが、お前にはわからなかつたのか。」

「ええ。」

「でも俺おれが言つたじゃねえか、注意しろつて。全く同じかつこ  
うで、同じ顔つきで、年も大して取つてはいねえ。世間にはど  
うしたわけのものか少しも老ふけねえ奴やつがいる。それから声まで  
そっくりだ。ただいい服装なをしてるだけのことだ。全く不思議  
な畜生だが、とうとうとらえてやつたというもんだ。」

彼は立ち止まって、娘らの方へ言った。

「お前たちは出て行くんだ。——ばかだな、あれに気がつかないか。」「」

娘らは父の言うとおりに出てゆこうとして立ち上がった。

母親はつぶやいた。

「手にけがをしてるのに……。」

「外の風に当たればなおる。」とジョンドレットは言った。「出て行け。」

明らかに彼にはだれも口答えができないらしい。ふたりの娘は出て行つた。

ふたりが扉とびらから出ようとした時、亭主は姉娘の腕をとらえ、一種特別な調子で言った。

「お前たちはちようど五時にここへ帰つて来るんだぞ、ふたりいつしよに。用があるんだから。」

マリウスは更に注意して耳を澄ました。

女房とふたりきりになると、ジョンドレットはまた歩き出し、黙つて室へやの中を二、三度回つた。それからしばらくの間、着ていた女シャツの裾すそをズボンの帯の中に押し込んでいた。

突然彼は女房の方を向き、腕を組み、そして叫んだ。

「も一つおもしろいことを聞かしてやろうか。あの娘はな……。」

「え、なに？」と女房は言った、「あの娘が？」

マリウスはもう疑えなかつた。まさしくそれは「彼女」のことに違ひなかつた。彼は非常な懸念で耳を傾けた。彼の全生命は耳の中に集中していた。

しかしジョンドレットは身をかがめ、女房に低い声でささやいた。それから身を起こして、声高に言い添えた。

「彼女あれだ！」

「さっきのが？」と女は言った。

「そうだ。」と亭主は言った。

およそいかなる言葉をもつてしても、女房の言ったさつき、  
が？ という語のうちにもつてたものを伝えることはできな  
いだろう。驚駭きょうがいと憤慨ぼんがいと憎悪ぞうおと憤怒ぼんぬとがこんがらがって一つの  
恐ろしい高調子になつて現われたのである。亭主から耳にささ  
やかれた数語、それはおそらくある名前だつたらうが、それを  
聞いたばかりでこの大女は、ぼんやりしていたのがにわかには  
び上がつて、いとうべき様子から急に恐るべき様子に変わった  
のである。

「そんなことがあるもんかね！」と彼女は叫んだ。「家の娘ど  
もできえ跣足はだしのまままで長衣ながいもない始末しまつじゃないかね。それに、  
縺子しゆすの外套がいとう、ビロードの帽子ぼうし、半靴はんぐつ、それからいろいろなもの、

身につけてるものばかりでも二百フランの上になるよ。まるでお姫様だね。いいえお前さんの見違いだよ。それに第一、彼女は醜い顔だった、今のはそんなに悪くもないじゃないか。全く悪い方じゃない。彼女のはずはないよ。」

「いや大丈夫彼女だ。今にわかる。」

その疑念の余地のない断定を聞いて、女房は大きな赤ら顔を上げて、変な表情で天井を見上げた。その時マリユスには、亭主よりも彼女の方がはるかに恐ろしく思えた。それは牝虎の目つきをした牝豚のようだった。

「ええッ！」と彼女は言った、「うちの娘どもを気の毒そうな目で見やがったあのきれいな嬢さんの畜生が、乞食娘だつて。ええあのどてっ腹を蹴破つてでもやりたい！」

彼女は寝台から飛びおり、髪の毛を乱し、小鼻をふくらまし、

口を半ば開け、手を後ろに伸ばして拳こぶしを握りしめ、しばらくじつと立っていた。それから、そのまま寢床の上に身を投げ出した。亭主の方は女房に気も留めずに、室へやの中を歩き回っていた。

しばらく沈黙の後、彼は女房の方へ近寄って、その前に立ち止まり、前の時のように両腕を組んだ。

「も一ついいことを聞かしてやろうか。」

「何だね。」と彼女は尋ねた。

彼は低い短い声で答えた。

「かねぐら金蔵ができたんだ。」

女房は「気が違つたんじゃないかしら」というような目つきで、じつと彼をながめた。

彼は続けて言った。

「畜生！　今まで長い間というものの、火がありや腹がへるしパ

ンがありや凍えるつてわけだった。もう貧乏は飽き飽きだ。俺おれもみんなも首が回らなかつたんだ。笑い事じゃねえ、冗談じゃねえ、くそおもしろくもねえや、狂言もおやめだ。へった腹にかき込んで、かわいた喉のどにつき込むんだ。食い散らして眠つて何にもしねえ。そろそろこちらの番になつてきたんだ。くたばる前に一度は金持ちにもならなけりやあね！」

彼は室へやをぐるりと一回りしてつけ加えた。

「ほかの奴やつらのようにね。」

「いつたい何のことだよ？」と女房は尋ねた。

彼は頭を振り、目をまばたき、何か述べ立てようとする大道香具師だいどうやしのように声を高めた。

「何のことかというのか、まあ聞けよ。」

「しッ！」と女房は言つた。「大きな声をしなさんな。人に聞か

れて悪いことだったら。」

「なあに、だれが聞くもんか。お隣か。奴やつこさんさつき出て行つたよ。いたつてあのおばかさんが聞きなんかするもんか。だがさつき出かけるのを見たんだ。」

それでも一種の本能からジョンドレットは声を低めた。しかしマリユスに聞こえないほど低くはならなかつた。幸いにも雪が降っていて大通りの馬車の音を低くしていたので、マリユスはその会話をすっかり聞き取ることができた。

マリユスが聞いたのは次のような言葉だつた。

「よく聞け。黄金の神様がつかまつたんだ。つかまつたも同じことだ。もう大丈夫だ。手はずはでき上がってる。仲間にも会つてきた。あいつは今晚六時に来る。六十フランを持ってきやがる。どうだ、俺おれの口上はうめえだろう、六十フラン、家主、二

月四日。実は一期分も借りはねえんだからな、ばか野郎だ。がとにかく六時にあいつはやつて来る。ちやうど隣の先生も飯を食いに行く時分だ。ビュルゴン婆さんも町に皿洗いに行つてる時分だ。家の中にはだれもいやしねえ。お隣は十一時までには帰らねえ。娘どもには番をさしておく。お前は手伝わなくちやいけねえ。野郎降参するにきまつてる。」

「もし降参しなかつたら？」と女房は尋ねた。

ジョンドレットはすごい身振りをして言った。

「やつつけてしまふばかりさ。」

そして彼は笑い出した。

彼が笑うのを見るのは、マリユスにとつては初めてだった。その笑いは冷ややかで静かで、人を慄然りっぜんたらしむるものがあった。

ジョンドレットは暖炉のそばの戸棚を開き、古い帽子を取り出し、袖でその塵を払って頭にかぶった。

「ちよつと出かけるぜ。」と彼は言った。「まだ会つて置かなくちやならねえ者もいる。みないい奴やつばかりだ。まあ仕上げを御覽ごろうじろだ。なるべく早く帰つてくる。うめえ仕事だ。家に気をつけておけよ。」

そして両手をズボンの隠しにつつま込み、ちよつと考えていたが、それから叫んだ。

「あいつが俺に気づかなかつたのは、もつけの仕合わせというものだ。向こうでも気がついたらもうきやしねえ。危うく取りもらす所あこひげだつた。この髯ひげのおかげで助かつたんだ。このおかしな頤髯あこひげでな、このかわいいちよつとおもしろい頤髯あこひげでな。」

そして彼はまた笑い出した。

彼は窓の所へ行つた。雪はなお降り続いていて灰色の空を隠していた。

「何てひどい天気だ！」と彼は言った。

それから外套がいたうの襟えりを合わした。

「こいつあ少し大きすぎる。」そしてつけ加えた。「だがまあいいや。あいつが置いてゆきやがったんで大きに助からあ。これになかつたら外へも出られねえし、何もかも手違いになる所だつた。世の中の事つてどうかこうかうまくゆくもんだ。」

そして帽子を眼深まぶかに引き下げながら、彼は出て行つた。

戸口から彼が五、六歩したかどうかと思われるくらいの時、扉とびらは再び開いて、その間から彼の荒々しいそしてずるそうな顔が現われた。

「忘れていた。」と彼は言った。「火鉢ひばちに炭をおこしておくんだ

ぜ。」

そして彼は女房の前掛けの中に、「慈善家」がくれた五フラン貨幣を投げ込んだ。

「火鉢に炭を？」女房は尋ねた。

「そうだ。」

「幾いくます榊さかきばかり？」

「二榊もありやあいい。」

「それだけなら三十スーばかりですむ。残りでごちそうでも買おうよ。」

「そんなことをしちやいけねえ。」

「なぜさ？」

「大事な五フランをむだにしちやいけねえ。」

「なぜだよ？」

「俺おれの方でまだ買うものがあるんだ。」

「何を？」

「ちよつとしたものだ。」

「どれくらいかかるんだよ。」

「どこか近くに金物屋があつたね。」

「ムーフタール街にあるよ。」

「そうだ、町角まちかどの所に、わかつてる。」

「でもその買い物にいくらかかるんだよ。」

「五十スーか……まあ三フランだ。」

「ではごちそうの代はあまり残らないね。」

「今日は食物くいものどころじゃねえ。もつと大事なことがあるんだ。」

「そう、それでいいよ、お前さん。」

女房のその言葉を聞いて、ジョンドレットは扉しひらをしめた。そ

してこんどは、彼の足音が廊下をだんだん遠ざかつていって急いで階段をおりてゆくのを、マリユスは聞いた。

その時、サン・メダール会堂で一時の鐘が鳴った。

### 十三 ひそかに語り合う者は悪人の類ならん

マリユスは夢想家ではあつたが、既に言つたとおり、また生来堅固な勇敢な男であつた。孤独な瞑想めいそうの習慣は、彼のうちに同情と哀憐あいれんとの念を深めながら、おそらく激昂げっこうする力を減じたであろうが、憤慨の力は少しもそこなわれずにいた。彼はバラモン教徒のような慈悲心と法官のような峻嚴しゅんげんさを持つていた。蛙かえるをあわれむとともに蛇へびを踏みつぶすだけの心を持つていた。しかるに彼が今のぞき込んだ所は、蝮まむしの穴であつた。彼が見た

所のものは、怪物の巢であつた。

「かかる悪人どもは踏みつぶさなければいけない。」と彼は自ら言つた。

解決されるかと思つていた謎なぞは一つも解かれなかつた。否かえつてすべてはますます不可解になつた。リュクサンブールの美しい娘についてもまたルブラン氏と呼んでいる男についても、ジョンドレットが彼らを知つてゐるといふことのほかには何らの得る所もなかつた。そして耳にした怪しい言葉を通してようやく彼にはつきりわかつたことは、ただ一事にすぎなかつた。すなわち、ある待ち伏せが、ひそかなしかも恐ろしい待ち伏せが、今計画されてゐるといふこと。ふたりとも、父親の方は確かに、娘の方もたぶん、大なる危険に遭遇せんとしてゐること。自分はふたりを救わなければならぬこと。ジョンドレットの

者らの忌むべき策略の裏をかき、その蜘蛛くもの巣を破つてしまわなければならぬこと。

彼はちよつとジョンドレットの女房に目を注いだ。彼女は片すみから古い鉄の火鉢ひばちを引き出し、また鉄屑てつくずの中に何かさがしていた。

彼は音を立てないように注意してできるだけ静かに戸棚からおりた。

今なされつつある事柄に対して恐怖の念をいだきながらも、またジョンドレット一家の者らに対して嫌悪けんおの感をいだきながらも、彼は自分の愛する人のために力を尽くすようになったと考へて、一種の喜びを感じた。

しかしどうしたらいいものか？ ねらわれてるふたりに知らせると言つたところで、ふたりをどこに見いだすことができよ

う。マリユスはその住所を知らなかった。ふたりはちよつと彼の目の前に現われて、それから再びパリーの深い大きな淵ふちの中に沈んでしまったのである。あるいは晩の六時に、ルブラン氏がやつて来る時に、扉とびらの所に待っていて、罨わなのあることを知らせるとしようか。しかしジョンドレットとその仲間の者らは、自分が待ち受けてるのを見つけるに違いない。あたりには人もいないし、向こうの方が強いので、彼らは何とでもして自分を捕えてしまうか、または自分を遠ざけてしまうだろう。そうすれば自分が助けようと思つてる人もそれで破滅だ。ちようど一時が鳴ったばかりである。待ち伏せは六時にすつかりでき上るはずだ。それまでには五時間の余裕がある。

なすべき道はただ一つきりなかった。

彼はいい方の服をつけ、絹の襟えり巻まきを結び、帽子を取り、ちよ

うど苔こけの上を跣足はだしで歩くように少しも音を立てないで出て行った。

その上幸いにも、ジヨンドレットの女房はなお続けて鉄屑てつくずの中をかき回していた。

外に出ると彼は、すぐにプティー・バンキエ街の方へ行つた。その街路の中ほどに、ある所はまたげそうな低い壁があつて、向こうは荒れ地になつていた。そこを通る時分には、彼はすっかり考え込んでゆつくり足を運んでいた。そして雪のために足音もしなかつた。その時突然彼は、すぐ近くに人の話し声を聞いた。ふり返つてみると、街路はひっそりして、人影もなく、まっ昼間であつた。しかもはつきり人声が聞こえていた。

彼はふと思いついてそばの壁の上から向こうをのぞいてみた。果たしてそこには、ふたりの男が壁に背を向け、雪の上にか

がんで、低く語り合っていた。

ふたりとも彼の見知らぬ顔だった。ひとりはだぶだぶの上衣をつけた髯ひげのある男で、もひとりはぼろをまとった髪の毛の長い男だった。髯のある方は丸いギリシヤ帽をかぶっていたが、もひとりは何もかぶらず、髪の上に雪が積っていた。

ふたりの上に頭をつき出して、マリユスはその言葉をよく聞き取ることができた。

長髪の男は相手を肱ひじでつつ突いて言った。

「パトロン・ミネットの力を借りれば、しくじることにはねえ。」  
「そうかな。」と髯の男は言った。

長髪の方は続けた。

「ひとりには五百弾でいいだろう。もしどじつても、五年か六年、まあ長くて十年だ。」

相手はやや躊躇ちゆうちゆうして、ギリシヤ帽の下を指でかきながら答えた。

「そつちは實際だからな。そんな目にあつちやあ。」

「大丈夫しくじりつこはねえ。」と長髪の方は言った。「爺とつつあんの小馬車に馬をつけとくんだから。」

それから彼らはゲイテ座で前日見た芝居のことを話し初めた。マリユスは歩き出した。

不思議にも壁の後ろに隠れ雪の中にうずくまつてるそれらふたりの男の曖昧あいまいな話は、何だかジョンドレットの恐ろしい計画に關係があるらしく、マリユスには思われてならなかつた。どうしてもあのこと、らしかつた。

彼はサン・マルソー郭外の方へ行つて、見当たり次第の店で、警察部長の居所を尋ねた。

ポントアーズ街十四番地というのを教えられた。

マリユスはその方へ行つた。

パン屋の前を通つた時、晩の食事はできないかも知れないと思つて、二スーのパンを買い、それを食べた。

道すがら彼は天に感謝した。彼は考えた。今朝ジョンドレットの娘に五フランやつていなければ、自分はルブラン氏の馬車について行つて、その結果何にも知らなかつたに違いない、そしてジョンドレット一家の者の待ち伏せを妨ぐるものもなく、ルブラン氏はそれで破滅になり、またおそらく娘もともに破滅の淵ふちに陥つてしまつたであらう。

#### 十四 警官二個の拳骨げんこつを弁護士に与う

ポントアーズ街十四番地にきて、マリユスはその二階に上がり、警察部長を尋ねた。

「部長さんはお留守です。」とひとりの小僧が言った。「ですが代理の警視はおられます。お会いになりますか。急ぎの用ですか。」

「そうです。」とマリユスは言った。

小僧は彼を部長室に案内した。中格子なかごうしの後ろに、ストーブに身を寄せ、三重まわしの大きなマントの袖そでを両手で上げている、背の高い男がひとりそこに立っていた。四角張った顔くちびる、唇の薄い引き締まった口、荒々しい半白の濃い頬鬚ほおひげ、ふところの中まで見通すような目つき、それは透徹する目ではなくて、探索する目と言う方が適當だった。

その男は獯猛どうもうさと恐ろしさとにおいてはあえてジョンドレッツ

トに劣りはしなかつた。番犬も時とすると、狼おおかみに劣らず出会つた者に不安を与えることがある。

「何の用かね。」と彼はぞんざいな言葉でマリユスに尋ねた。

「部長さんは？」

「不在だ。私わたしがその代理をしている。」

「ごく秘密な事件ですが。」

「話してみたまえ。」

「そしてごく急な事件です。」

「では早く話すがいい。」

その男は平静でまた性急であつて、人をこわがらせまた同時に安心させる点を持つていた。恐怖と信頼とを与えるのだった。マリユスは彼にできごとを語つた。——ただ顔を知つてゐるばかりの人ではあるが、その人が今夜、待ち伏せに会うことになつ

ている。——自分はマリユス・ポンメルシーという弁護士であるが、自分のいる室へやの隣が悪漢そうくつの巢窟そうくつで、壁越しにその計画をすつかり聞き取った。——罨わなを張った悪漢はジョンドレットとかいう男である。——共犯者もいるらしい。たぶん場末の浮浪人どもで、なかんずくパンショー一名プラントニエ一名ビグルナイユという男がいる。——ジョンドレットの娘どもが見張りをするだろう。——ねらわれてる人は、その名前もわからないので、前もって知らせる方法もない。——そしてそれらのことは晩の六時に、オピタル大通りの最も寂しい所、五十・五十二番地の家で、実行されることになっている。

その番地を聞いて、警視は顔を上げ、冷ややかに言った。

「では廊下の一へや番奥の室へやだろう。」

「そうです。」とマリユスは言った、そしてつけ加えた。「その

家を御存じですか。」

警視はちよつと黙っていたが、それから靴くつの踵かかとをストーブの火口で暖めながら答えた。

「そうかも知れないね。」

それから、マリユスにというよりもむしろその襟飾えりかぎりにでも口をきいてるように目を下げて、半ば口の中で続けて言った。

「パトロン・ミネットが多少関係してるに違いない。」

その言葉にマリユスは驚いた。

「パトロン・ミネット、」と彼は言った、「ほんとに私はそういう言葉を耳にしました。」

そして彼は、プティー・バンキエ街の壁の後ろで、長髪の男ひげと髯ひげの男とが雪の中で話していたことを、警視に語った。

警視はつぶやいた。

「髪の長い男はブリュジョンに違いない。髯のある方は、ドウ・ミ・リヤール一名ドゥー・ミリヤールに違いない。」

彼はまた眼瞼まぶたを下げて、考え込んだ。

「その爺とつつあんというのも、およそ見当はついてる。ああマントを焦がしてしまった。いつもストーブに火を入れすぎるんだ。五十・五十二番地と。もとのゴルボーの持ち家だな。」

それから彼はマリユスをながめた。

「君が見たのは、その髯ひげの男と髪の長い男きりかね。」

「それとパンショーです。」

「その辺をぶらついてるお洒落しやれの小男を見なかつたかね。」

「見ません。」

「では植物園にいる象のような大男は？」

「見ません。」

「では昔の手品師のような様子をした悪者は？」

「見ません。」

「四番目に……いやこいつはだれの目にもはいらない、仲間も手下も使われてる奴も、彼を見たことがないんだから、君が見つけなかったからって怪しむに足りん。」

「見ません。いつたいそいつらは何者ですか。」とマリユスは尋ねた。

警視は言った。

「その上まだ奴らの出る時ではないからな。」

彼はまたちよつと口をつぐんだが、やがて言った。

「五十・五十二番地と。家は知ってる。中に隠れようとすれば、役者どもにきつと見つかる。そうすればただ芝居をやらずに逃げるばかりだ。どうも皆はにかみやばかりで、見物人をいやが

るからな。そりゃあいかん、いかん。少し奴らに歌わしたり踊らしたりしたいんだがな。」

そんな独語を言い終わって、彼はマリユスの方へ向き、じつとその顔を見ながら尋ねた。

「君はこわいかね。」

「何がですか？」とマリユスは言った。

「その男どもが。」

「まああなたに対してと同じくらいなものです。」とマリユスはぶしつけに答えた。その警官が自分に向かつてぞんざいな言葉ばかり使ってるのを、彼はようやく気づき初めていた。

警視はなおじつとマリユスを見つめ、一種のおごそかな調子で言った。

「君はなかなか勇気のあるらしい正直者らしい口のきき方をす

る。勇氣は罪惡を恐れず、正直は官憲を恐れずだ。」

マリウスはその言葉をさえぎった。

「それはとにかく、どうなさるつもりです。」

警視はただこう答えた。

「あの家に室へやを借りてゐる者は皆、夜分に帰つてゆくための合かぎ鍵かぎを持っている。君も一つ持つてゐるはずだね。」

「ええ。」とマリウスは言った。

「今そこに持つてゐるかね。」

「ええ。」

「それを私わしにくれ。」と警視は言った。

マリウスはチョッキの隠しから鍵を取つて、それを警視に渡し、そして言い添えた。

「ちよつと申しておきますが、人数を引き連れてこられなけれ

ばいけません。」

警視はマリユスに一瞥いちべつを与えた。ヴォルテールがもし田舎出いなかでのアカデミー会員から音韻の注意でも受けたら、やはりそんな一瞥いちべつを与えたことだろう。そして警視は、太い両手をマントの大きな両のポケットにずぶりとつつ込み、普通は拳骨げんこつと言わるる鋼鉄の小さなピストルを二つ取り出した。彼はそれをマリユスに差し出しながら、口早に強く言った。

「これを持って、家に帰って、室へやに隠かくれていたまえ。不在らしく見せかけなくちやいかん。二つとも弾たまがこもってる。一艇いつちように二発ずつだ。よく気をつけて見ているんだ。壁に穴があると聞いたね。奴やつらがやってきたら、しばらく勝手にさしておくがいい。そしてここだと思ったら、手を下す時だと思ったら、ピストルを打つんだ。早すぎتهはいかん。それから私わしの仕事だ。ピス

トルを打つのは、空へでも、天井へでも、どこでもかまわん。ただ早くしすぎないことだ。いよいよ仕事が始まるまで待つんだ。君は弁護士と言ったね、それくらいのことにはわかつてるだろう。」

マリウスは二挺のピストルを取って、上衣のわきのポケットの中に入れた。

「それじゃふくらんで外から見える。」と警視は言った。「それよりズボンの両方の隠しに入れるがいい。」

マリウスはピストルを各、ズボンの両の隠しに入れた。

「もうこれで一刻もぐずぐずしておれない。」と警視は言った。「今何時だ？<sup>なんじ</sup> 二時半か。それは七時だったな。」

「六時です。」とマリウスは言った。

「まだ充分時間はある、が余るほどはない。」と警視は言った。

「今言ったことを少しでも忘れてはいかん。ぽーんとピストルを一つ打つんだぞ。」

「大丈夫です。」とマリユスは答えた。

そしてマリユスが出て行くこうとして扉とびらのとっ手に手をかけた時、警視は彼に呼びかけた。

「それから、それまでに何か私わしに用ができたなら、ここに自分で来るか使いをよこすかしたまえ、警視のジャヴェルと言つてくればわかる。」

## 十五 ジョンドレット買い物をなす

それから少したつて、三時ごろ、クールフェーラックがボシエと連れ立って、偶然ムーフタール街を通つた。雪はますます

降りしきつて、空間を満たしていた。ボシユエはクールフェーラックにこんなことを言っていた。

「こう綿をちぎったような雪が落ちて来るのを見ると、何だか天には白い蝶ちようの疫病でも流行してるらしく思えるね。」

と突然ボシユエは、変な様子をして市門の方へ街路を歩いて行くマリユスの姿を認めた。

「おや、」とボシユエは叫んだ、「マリユスだ。」

「僕も知ってる。」とクールフェーラックは言った。「だが言葉をかけるのはよそうや。」

「なぜだ。」

「気を取られてるんだ。」

「何に？」

「あの顔つきを見たらわかるじゃないか。」

「顔つきつて？」

「だれかの跡をつけてるような様子だ。」

「なるほどそうだ。」とボシユエは言った。

「まああの目つきを見てみたまい。」とクールフェーラックはまた言った。

「だがいつたいだれの跡をつけてるんだらう。」

「いずれかわいひ者に違ひない。夢中になつてゐるんだ。」

「だがね、」とボシユエは注意した、「街路にはかわいひのかの字も見えないじゃないか。女なんてひとりもいやしない。」

クールフェーラックはよくながめた、そして叫んだ。

「男の跡をつけてるんだ。」

実際、後ろからでも灰色の髻ひげがよく見えてゐるひとりの男が帽子をかぶつて、マリユスから二十歩ばかり先に歩いてゐた。

その男は大きすぎて身体によく合わないま新しい外套がいとろうをつけ、泥にまみれてるぼろぼろになったひどいズボンをはいていた。

ボシユエは笑い出した。

「あの男はいつたい何だい。」

「あれか、」とクルルフエーラックは言った、「まあ詩人だね。詩人って奴やつはよく、兎うさぎの皮売りみたいなズボンをはき、上院議員みたいな外套を着てるものだ。」

「マリユスがどこへ行くか見てやろうよ、」とボシユエは言った、「あの男がどこへ行くか見てやろうよ。ふたりの跡をつけてやろう、おい。」

「ボシユエ!」とクルルフエーラックは叫んだ、「エーグル・ド・モー(モーの驚わし)、なるほど君はすてきな獣だね。男の跡をつけてる男を、また追っかけて行こうというんだからな。」

それで彼らは道を引き返した。

マリウスは実際、ムーフタール街をジョンドレットが通るのを見て、その様子をうかがっていたのである。

ジョンドレットは後ろから既に目をつけられていようとは夢にも思わないで、まっすぐに歩いて行つた。

彼はムーフタール街を離れた。マリウスはグラシユーズ街の最も下等な家の一つに彼がはいるのを見た。十五分ばかりして彼はそこから出てきて、それからまたムーフタール街に戻つてきた。当時ピエール・ロンパール街の角かどにあつた金物屋に彼は足を止めた。それからしばらくしてマリウスは、彼がその店から出て来るのを見た。彼は白木の柄のついた冷やりとするような大きな鑿のみを、外套がいのうの下に隠し持っていた。プティー・ジャンティイー街の端まで行つて彼は左に曲がり、足早にプティー・

バンキエ街へはいった。日は暮れようとしていた。ちよつとやんだ雪はまた降り出していた。マリユスは同じプティー・バンキエ街の角に身を潜めた。街路にはやはり人の姿も見えなかつた。マリユスはジョンドレットの跡をつけてその街路に出るのをやめた。それはマリユスにとって幸いだった。なぜなら、彼が先刻長髪の男と髻ひげの男との話を聞いた低い壁の所まで行くと、ジョンドレットはふり返つてながめ、跡をつけてる者も見てる者もないのを確かめ、それから壁をまたぎ、姿を消してしまつたのである。

その壁に囲まれた荒れ地は、あまり評判のよくない古い貸し馬車屋の後庭に続いていた。その馬車屋はかつて破産したことがあつたが、まだ小屋の中には四、五台の古馬車を持つていた。ジョンドレットの不在の間に帰つてゆく方が伶俐りこうだとマリユ

スは考えた。その上もうだいたい遅くもなっていた。毎晩早くから、ビュルゴン婆さんは町に皿洗いに出かけて、いつも戸を閉ざすことにしていたので、家の戸はきまつて暮れ方には締まりがしてあつた。ところがマリユスは鍵かぎを警視に渡してしまった。それで急いで帰る必要があつた。

夕方になつていた。夜は刻々に迫つていた。地平線の上にもまた広い大空のうちにも、太陽に照らされた所はただ一カ所あるきりだつた、すなわち月が。

月はサルペートルエール救済院の低い丸屋根のかなたに、赤く上りかけていた。

マリユスは大またに歩いて五十・五十二番地へ帰つてきた。その時まだ戸は開いていた。彼は爪先だつて階段を上り、廊下の壁伝いに自分の室へやにすべり込んだ。読者の記憶するとおり、

廊下の両側は屋根部屋やねべやで、その頃皆あいていて貸し間になっていた。ビュルゴン婆さんはいつもそれらの扉とびらをあけ放しにしていた。マリユスはそれらの扉の一つの前を通る時、その空室の中にじつと動かない四つの人の顔が、軒窓から落ちる昼のなごりの明るみにぼんやりほの白く浮き出してるのを、ちらと見たような気がした。しかし彼は自分の方で人に見られたくなかったので、それを見届けようともしなかった。彼はついに、人に見られもせずまた音も立てずに自分の室にはいり込んだ。ちようど危うい時だった。ビュルゴン婆さんが出かけて家の戸がしまる音を、それから間もなく彼は聞いた。

十六 一八三二年流行のイギリス調の小唄こうた

マリウスは寝台に腰掛けた。五時半ごろだった。事の起こるまでにはただ三十分を余すのみだった。あたかも暗闇くらやみの中で時計の秒を刻む音をきくように、彼は自分の動脈の音を聞いた。そしてひそかに到来しつつある二つの事がらを思いやった、一方から歩を進めつつある罪惡と他方からきつつある法權とを。彼は恐れてはいなかった、しかしまさに起こらんとする事を考えてはある戦慄せんりつを禁じ得なかった。意外のできごとに突然襲われた人がよく感ずるように彼にもその一日はまったく夢のように思われた。そして何か悪夢につかれてるのでないことを確かめるために、彼はズボンの隠しの中で鋼鉄の二挺のピストルの冷ややかさに手を触れてみなければならなかった。

雪はもうやんでいた。月はしだいに冴さえてきて靄もやから脱し、その光は地に積った雪の白い反映と交じって、室へやの中に暁のよ

うな明るみを与えた。

ジョンドレットの室の中には明りがあつた。マリウスは壁の穴が血のように赤い光に輝いてるのを見た。

その光はどうしても蝋燭ろうそくのものらしくは思えなかつた。そしてまたジョンドレットの室の中には、何ら動くものもなく、だれも身動きもせず口もきかず、呼吸の音さえ聞こえず、氷のような深い沈黙に満たされていて、もしその光がなかつたら、墓場かとも思われるほどだつた。

マリウスは静かに靴くつをぬいで、それを寝台の下に押し込んだ。数分過ぎ去つた。マリウスは表の戸がぎーと開く音を聞いた。重い早い足音が階段を上つてき、廊下を通つていつて、それから隣の室へやの掛け金が音高くはずされた。それはジョンドレットが帰つてきたのだつた。

すぐに多くの声が聞こえ出した。一家の者は皆室の中にいた。ちようど狼おおかみの子が親狼の不在中黙つてるようにな、一家の者は主人の不在中黙つていたまでである。

「俺おれだ。」と主人は言った。

「お帰んなさい。」と娘らは変な声を立てた。

「どうだったね？」と母親は言った。

「この上なしだ。」とジョンドレットは答えた。「だがばかに足が冷てえ。うむ、なるほどお前はうまくおめかしをしたな。向こうに安心させなけりやいけねえからな。」

「すっかり出かけるばかりだよ。」

「言つといた事を忘れちゃいけねえ。うまくやるんだぜ。」

「大丈夫だよ。」

「と言うのはな……。」とジョンドレットは言いかけて、皆まで

言わずにしまった。

マリウスは彼が何か重いものをテーブルの上に置く音を聞いた。たぶん買ってきた鑿のみでもあつたらう。

「ところで、」とジョンドレットは言った、「みな何か食つたか。」  
「ああ、」と母親は言った、「大きい馬鈴薯じゃがいもを三つと塩を少し。ちようど火があるから焼いたんだよ。」

「よし、」とジョンドレットは言った、「明日はごちそうを食いに連れてつてやる。家鴨あひるの料理とそれからいろいろなものがついてさ、まるでシャルル十世の御殿の晚餐ばんさんのようにな。すつかりよくなるんだ。」

それから声を低めて彼はつけ加えた。

「鼠ねずみの口はあいてるし、猫ねこどもももうきている。」

そしてなおいつそう声を低めてまた言った。

「それを火の中に入れて置け。」

マリユスは火箸ひばしかまたは何か鉄器で炭をかき回す音を聞いた。

ジョンドレットは続けて言った。

「音のしねえように扉とびらの脇ひしがね金ろうには蠟ろうを引いて置いたか。」

「ああ。」と母親は答えた。

「今何時だ。」

「もうすぐに六時だろう。サン・メダールでさつき半はんが打ったんだから。」

「よし。」とジョンドレットは言った。「娘どもは見張りをしなくちやいけねえ。おい、ふたりともこつちへきてよく聞きな。」  
しばらく何かささやく声をした。

ジョンドレットはまた高い声をあげた。

「ビュルゴン婆さんは出て行ったか。」

「ああ。」と母親は言った。

「隣にもだれもいねえんだな。」

「一日留守だったよ、それに今は食事の時分じゃないか。」

「確かだね。」

「確かだよ。」

「まあとにかく、」とジョンドレットは言った、「いるかどうか見に行つたつてさしつかえねえ。おい娘、ろうそく蠟燭を持って見てきな。」

マリウスは四つばいになつて、こつそり寝台の下にはいり込んでんだ。

彼が隠れ終わるか終わらないうちに、すぐ扉しきりのすき間から光が見えた。

「お父さん、」という声がした、「出かけてるよ。」

それは姉娘の声だった。

「中にはいつたのか。」と父親が尋ねた。

「いいえ、」と娘は答えた、「でも鍵が扉かぎについてるから、きつと出かけたんだよ。」

父親は叫んだ。

「でもまあはいつてみる。」

扉が開いた。マリユスはジョンドレットの姉娘が手に蠟燭を持ってはいつて来るのを見た。その様子は朝と少しも変わって  
いなかつたが、ただ蠟燭の光で見るといつそう恐ろしく見えた。

彼女は寝台の方へまっすぐに進んできた。マリユスはその間  
言葉にもつくし難いほど心配した。しかし彼女がやってきたの  
は、寝台の側に壁に掛かつてる鏡の所へであつた。彼女は爪先  
で伸び上がつて、鏡の中をのぞいた。隣の室には鉄の道具を動

かす音が聞こえていた。

娘は手の平で髪をなでつけ、鏡に向かつてほほえみながら、その気味の悪いつぶれた声で歌った。

われらの恋は七日なりけり。

ああたのしみのいかに短き、

八日の愛も難かりければ！

恋は永えとこしなるべきに、

恋は永えなるべきに！

その間マリユスは震えていた。そして自分の荒い息使いはきつと彼女の耳につくに違いないという気がした。

娘は窓の方へ行つて、外を見ながら、いつもの半ば気ちがい

じみた様子で声高に言った。

「パリーも白いシャツをつけた所は何て醜いだろう！」

そしてまた鏡の所へ帰ってきて、自分の顔をまっ正面から映してみたり少し横向きに映してみたりして、様子をつくつていた。

「おい、」と父親が叫んだ、「何をしてるんだ。」

「寝台の下や道具の下を見てるのよ。」と彼女はやはり髪を直しながら答えた。「だれもいやしないわ。」

「ばか！」と父親はどなった。「早く帰ってこい。ぐずぐずしてるんじゃないえ。」

「今行くよ、今すぐ。」と彼女は言った。「ほんとにちよつとの暇もありゃあしない。」

そして小声に歌った。

誉れを求めて君去りゆかば、  
何処いずこまでもと我追いゆかん。

彼女は最後に鏡をじろりと見て、扉とびらを後ろにしめながら出て行つた。

しばらくするとマリユスは、廊下にふたりの娘の跣足はだしの足音を聞いた。そしてまた、彼女らに呼びかけてるジョンドレットの声を聞いた。

「よく気をつけるんだぞ。ひとり市門の方で、ひとりはプティー・バンキエ街の角かどだ。ちよつとでも家の戸口から目を離してはいけねえ。何か見えたらすぐにやってこい、大急ぎで飛んでくるんだ。はいる時の鍵かぎは持つてるね。」

姉の方はつぶやいた。

「雪の中に跣足で番をさせるなんて！」

「明日はまっかな絹靴きぬぐつを買ってやらあね。」と父親は言った。

ふたりの娘は階段をおりていった。そしてすぐに下の戸のしまる響きが聞こえたのでみると、ふたりは外に出て行ったらしい。

家の中にいるのはもう、マリユスとジョンドレット夫婦ばかりだった。それからまたあるいは、空室の扉の向こうの薄暗がりの中にマリユスがちらと見た怪しい人々ばかりだった。

## 十七 マリユスが与えし五フランの用途

マリユスは今や例の観測台の位置につくべき時だと思った。

そして青年の身軽さをもつてすぐに壁の穴の所へ立つた。

彼はのぞいた。

ジョンドレットの部屋の内部は不思議な光景を呈していた。マリユスが先刻見た怪しい光の源もわかった。緑青のついた燭台しよくだいに一本の蠟燭ろうそくがともっていたが、室へやを実際に照らしてるのはそれではなかった。暖炉の中に置かれて炭がいつぱいおこつてるかなり大きな鉄火ばちから、室の中全体が照り返されてるようだった。それはジョンドレットの女房が午前から用意しておいたものである。炭は盛んにおこつて、火鉢ひばちはまっかになつており、青い炎が立ちのぼつて、火の中に差し込まれて赤くなつてる鑿のみの形をはつきり浮き出さしていた。その鑿はジョンドレットがピエール・ロンバール街で買ったものである。扉とびらのそばの片すみには、何か特別の用に当てるためのものらしい品ふたところが二処

に積んであつて、一つは鉄の類らしく、一つは繩なわの類らしかつた。すべてでそういうありさまは、何が計画されてるかを知らない者には、至つて気味悪くも感ぜられ、また同時に何でもないことのようにも感ぜられたろう。そして火に照らされてる室の中は、地獄の入り口というよりもむしろ鉄工場かじやのようだった。しかしその光の中にいるジョンドレットは鍛冶屋かじやというよりもむしろ悪魔のような様子をしていた。

火鉢の焼けている熱さは非常なもので、テーブルの上の蠟燭もその方面が溶けかかつて、斜めに減つていきつつあつた。デイオゲネスが凶賊カルトウーシュに変じたとしたらそれにもふさわしいような、銅製の古い龕燈がんどうが一つ、暖炉の上に置いてあつた。

火鉢はほとんど消えた燃えさしのそばに炉の中に置いてあつ

たので、炭火のガスは暖炉の煙筒の中に立ちのぼっていて、室には何らのにおいもひろがっていないかった。

月は窓の四枚の板ガラスからさし込んで、炎の立ってるまっかな屋根部屋の中にほの白い光を送っていた。そして実行の刹那にもなお夢想家であるマリユスの詩的な精神には、それがあたかも地上の醜い幻に交じった天の思想の一片であるかのように思われた。

こわれた一枚の窓ガラスから空気が流れ込んできて、いつそうよく炭火のにおいを散らし、火鉢のあるのを隠していた。

ジョンドレットの巣窟は、ゴルボー屋敷について前に述べておいた所でわかるとおり、凶猛暗黒な行為の場所となり罪悪を隠蔽する場所となるのに、いかにもふさわしかった。それはパリーのうちでの、最も寂しい大通りの、最も孤立した家の最も

奥深い室であつた。もし待ち伏せなどということが人の世になつたとしても、そこにおればきつとそれが発明されようと思われれるほどだつた。

家の全奥行きと多くの空室とが、その巢窟を大通りからへだてていた。そしてそこについてる唯一の窓は、壁と柵さくとに囲まれた広い荒れ地の方に向いていた。

ジョンドレットはパイプに火をつけ、藁わらのぬけた椅子いすの上ですわつて、煙草たばこを吹かしていた。女房は低い声で彼に何やら言つていた。

もしマリユスがクールフェーラックであつたなら、言い換えれば絶えずあらゆる機会に笑うような人であつたなら、彼はジョンドレットの女房を見た時必ずふきだしていたに違いない。シャルル十世の即位式に列した武官の帽子にかなり似寄つた羽

のついた黒い帽をかぶり、メリヤスの裳衣の上に格子縞こうしじまの大きな肩掛けを引っかけ、その朝娘がいやがった男の靴くつをはいていた。そういう服装が先刻ジョンドレットをして感嘆せしめたのである。「うむ、<sup>四</sup>なるほどお前はうまくおめかしをしたな。向こうに安心させなけりやいけねえからな。」

ジョンドレットはルブラン氏からもらった少し大きすぎる新しい外套がいたうを相変わらず着ていた。そしてその外套とズボンとが妙な対照をなして、クールフェーラックに詩人だろうという考えを起こさした時と同じ様子だった。

突然ジョンドレットは声を高めた。

「ところでちよつと思ひ出したが、こんな天気では馬車で来るにきまつてる。龕灯がんどうをつけて、それを持って下に行け。下の戸の後ろに立っているんだ。馬車の止まる音を聞いたら、すぐに

あけてやれ。はいつてきたら、階段と廊下とで明りを見せてやるがいい。そして奴やつがここにはいる間に、お前は急いでおりてゆき、御者に金を払い、馬車を返してしまえ。」

「その金は？」と女房は尋ねた。

ジヨンドレットはズボンの隠しを探つて、五フラン取り出して渡した。

「これはどうしたんだよ。」と女房は叫んだ。

ジヨンドレットは堂々と答えた。

「それは今朝けさ隣の先生がくれたものだ。」

そして彼はつけ加えた。

「ねえ、椅子いすが二ついるだろうね。」

「どうするのに？」

「すわるのにさ。」

その時マリウスは、女房が事もなげに次のような答えをしたのを聞いて、ぞつと背中に戦慄せんりつを覚えた。

「それじゃあ、隣のを持ってこよう。」

そして彼女はすばしこく扉とびらをあけて廊下に出た。

マリウスにはとうてい、戸棚とだなからおりて寝台の所へ行きその下に隠れるだけの時間がなかった。

「蠟燭ろうそくを持ってゆけ。」とジョンドレットは叫んだ。

「いいよ。」と女房は言った。「かえつて邪魔だよ、椅子を二つ持たなくちゃならないからね。それに月の光が明るいのよ。」

マリウスは女房の重々しい手が暗がりに扉の鍵かぎを探ってる音を聞いた。扉は開いた。彼はその場所に、恐れと驚きとのため

に釘付けくぎづにされたように立ちすくんだ。  
ジョンドレットの女房ははいつてきた。

軒窓から一条の月の光がさして、室の中のやみを二つに分けていた。その一方のやみは、マリユスがよりかかつてる壁の方をすっかりおおつていたので、彼の姿はその中に隠されていた。女房は目を上げたが、マリユスの姿に気づかなかつた。そしてマリユスが持つていた二つきりの椅子を二つとも取つて、室を出てゆき、後ろにがたりと扉をしめていった。

彼女は部屋に戻つた。

「さあ椅子を二つ持つてきたよ。」

「そこで、向こうに龕灯がある。」と亭主は言った。「早くおりに行け。」

女房は急いでその言葉に従い、ジョンドレットただひとり室の中に残つた。

彼はテーブルの両方に二つの椅子を置き、炭火の中に鑿を置

きかえ、暖炉の前に古屏風ふるびょうぶを立てて火鉢ひばちを隠し、それから繩なわの積んである片すみに行き、そこに何か調べるようなふうに身をかがめた。その時マリユスは、今まで何かわからなかったその繩なわみたいなのは、実は木の棧かきと引っかけけるための二つの鈎かぎとがついてるきわめて巧みにできた繩梯子なわぼしじだということがわかった。

その繩梯子と、それから扉とびらの後ろに積んだ鉄屑てつくずの中に交じつてる荒々しい道具、まったくの鉄棒なんかは、その朝ジョンドレットの室の中になかったもので、確かにその午後マリユスの不在中に持ち込まれたものに相違なかつた。

「あれはみな刃物師の道具だな。」とマリユスは考えた。

もしマリユスに今少しその方面の知識があつたら、彼は刃物師の道具だと思つたもののうちに種々なものを認むることがで

きたろう、すなわち、錠前を破つたり扉をこじあげたりする道具や、切つたり断ち割つたりする道具などで、盗賊仲間でちびおよびばさと言わるる二種の恐ろしい道具だった。

二つの椅子をそなえたテーブルと暖炉とは、ちょうどマリユスの正面になっていた。火ばちが隠されたので、室はもう蠟燭で照らされてるばかりだった。そしてテーブルの上や暖炉の上のちよつとした物でさえ、大きな影を投じていた。口の欠けた水差しは、壁のほとんど半分に影を投じていた。室の中には何とも言えぬ恐ろしいぞつとするような静けさがたたえていた。今にも何か非常なことが起こりそうだった。

ジョンドレットはよほど何かに気を取られてると見えて、パイプの火の消えたのも知らずにいたが、それからまた立つてきて椅子に腰掛けた。蠟燭の光で、顔の荒々しい狡猾そうな角張つ

た所が、いつそうよく目立つた。そして眉をまゆひそめたり急に右手を開いたりして、あたかもその陰惨な内心で最後にも一度ひとりで問いひとりで答えてるかのようだった。そういう自分ひとりの問答のうちに、彼は急にテーブルの引き出しを開き、中に隠してあった料理用の長いナイフを取り出し、指の爪を切つてみてその刃を試ためした。それがすむと、ナイフをまた引き出しにしまつて、それをしめた。

マリウスの方では、ズボンの右の隠しにあるピストルをつかみ、それを引き出して引き金を上げた。

引き金を上げる時ピストルは、鋭いはつきりした小さな音を出した。

ジョンドレットはぎくりとして、椅子の上に半ば身を起こした。

「だれだ？」と彼は叫んだ。

マリユスは息をこらした。ジョンドレットはちよつと耳を澄ましたが、やがて笑い出しながら言った。

「なんだばかな。壁板の音だ。」

マリユスはピストルを手に握りしめた。

十八 向かい合える二個の椅子

突然遠い単調な鐘の響きがガラスを震わした。サン・メダール会堂で六時を報じ初めたのである。

ジョンドレットはその一響きごとに頭を動かして数えた。六つの響きを聞いた時、指先で蠟燭ろうそくの芯しんをつまんだ。

それから彼は室へやの中を歩き出し、廊下の方に耳を傾け、また

歩き出し、また耳を傾けた。「なにきさえすれば！」と彼はつぶやいた。それからまた椅子の所へ戻った。

彼がそこにすわるかすわらないうちに、扉とびらが開いた。

ジョンドレットの女房がそれを開いたのだった。彼女は廊下に立って、ぞつとするような愛想を顔に浮かべていた。龕灯がんどうの穴の一つからもれる光がその顔を下から照らしていた。

「どうぞ旦那様だんなさま、おはいり下さいまし。」と彼女は言った。

「おはいり下さいませ、御親切な旦那様。」とジョンドレットは急いで立ち上がって言った。

ルブラン氏が現われた。

彼はいかにも朗らかな様子をしていて、妙に尊く思われた。

彼はテーブルの上にルイ金貨を四個（八十フラン）置いた。

「ファバントウ君、」と彼は言った、「これは君の家賃と当座の

入用のためのものです。その他のことは御相談するとしましよう。」

「神様があなたにむくいて下さいますように、御慈悲深い旦那様。」  
とジョンドレットは言った。

それから彼は急いで女房に近寄った。

「馬車を返せ。」

亭主がルブラン氏にお世辞をあびせかけ椅子を進めてる間に、女房はそつとぬけ出した。そして間もなく戻ってきて亭主の耳にささやいた。

「すんだよ。」

朝から降り続いていた雪は深く積っていたので、馬車のきたのも聞こえなければ、また馬車が帰ってゆくのも聞こえなかった。

そのうちにルブラン氏は腰を掛けた。

ジョンドレットはルブラン氏と向き合つた椅子に腰をおろした。

さてこれから起こるべき光景をよく理解せんために、読者は次のことを頭に入れておいていただきたい。凍りつくような寒い夜、雪が積つて月光の下に広い経帷子きようかたびらのように白く横たわつて寂莫せきぼくたるサルペトリエールの一郭、そのすごい大通りと黒い楡にれの並み木の長い列とを所々赤く照らしてる街灯の光、ひとりの通行人もなさそうな周囲四半里ばかりの間、その静寂と物すごさと暗夜とのまんなかにあるゴルボー屋敷、その屋敷の中に、その寂莫たる一郭の中に、その暗黒の中にあつて、ただ一本の蠟燭ろうそくに照らされてるジョンドレットの広い屋根部屋やねべや、その部屋の中に向き合つてテーブルについてるふたりの男、一人は

落ち着いた静かなルブラン氏、ひとりにはほほえんでる恐ろしい  
ジョンドレット、また片すみには牝めすの狼おおかみのようなジョンドレッ  
トの女房、それから壁の後ろには、人に見えない所にたたずん  
で、一語も聞きもらさず一挙動も見落とすまいとして、目を見  
張りピストルを握りしめてるマリユス。

マリユスは一種不安な胸騒ぎを覚えたが、何らの恐怖をも感  
じなかつた。彼はピストルの柄を握りしめて心を落ち着けた。  
「いつでも好きな時にあの悪党を押さえつけてやろう、」と彼は  
考えていた。

どこか近くに警官が潜んでいて、約束の合い図を待つて今に  
も腕を差し伸ばそうとしてるもののように、彼は感じていた。

その上、ジョンドレットとルブラン氏とのその恐しい会合か  
ら、自分の知りたく思つてることについて何かの手掛かりが得

られはすまいかと、彼は望んでいたのである。

十九 気にかかる暗きすみ

ルブラン氏は腰をおろすや否や、寢床の方を見やった。だれも寝てはいなかった。

「けがをしたかわいそうな娘さんはいかがです。」と彼は尋ねた。「よくありません。」とジョンドレットは心配そうなまた感謝してるような微笑をして答えた。「大変悪うございます。それで姉に連れられて、ブールブ療院へ繃帯ほうたいしてもらいに行きました。間もなくお目にかかるでございましょう、すぐに帰って参りますから。」

「御家内はだいぶおよろしいようですね。」とルブラン氏は女房

の変な服装をじろりと見やつて言った。彼女はその時、既に出口を扼やくしてるかのようにルブラン氏と扉とびらとの間に立つて、威嚇いかくするようなまたほとんど戦わんとしてるような態度で彼を見守っていた。

「家内はもう死にかかっているのでございます。」とジョンドレットは言った。「ですが旦那様だんなさま、非常に元気がございましてな、女というよりはまつたく牛とでも申したいくらいで。」

女房はその贅辞ぜいじに動かされて、媚こびられた怪物が嬌態しなを作るような様子で言った。

「あなたはいつもほんとに親切でね、ジョンドレット。」

「ジョンドレットですつて。」とルブラン氏は言った。「私はまたファバントウー君というのだと思つていましたか。」

「ファバントウー一名ジョンドレットでありまして、」と亭主は

急いで言った、「俳優の雅号でございませう。」

そしてルブラン氏に気づかれぬようちよつと肩をそびやかして女房をたしなめ、力をこめた媚びるような調子で言い進んだ。「いや、この家内と私とは、いつも仲よく暮らしていますんで、そういうことでもなかつた日には、もう世に何の楽しみもございませぬ。私どもはそれほど不仕合わせなので、旦那様。腕はあつても仕事はありませぬ、元氣はあつても働く所がありません。いったい政府はどうしているのでしょうか。私は決して旦那、過激党ではございませぬ、騒ぎを起こす者ではございませぬ、政府に楯をつく者ではございませぬ。ですが私がもし大臣にでもなりましたら、断じてこんな状態にはして置きませぬ。まあたとえば、私は娘どもに紙細工の職業でも覚えさせたかつたのです。なに職業を？ とおっしゃるのですか。さようです、職

業で、ほんのちよつとした職業で、パンを得るだけのもののございます。何という落ちぶれかたでしょう。旦那様。昔の姿と比べては何という零落でございました。ほんとに、盛んな時のものは何一つ残ってはいません。ただ一つだけで何にも残ってはいません。ただ一つと申しますのは、ごく大事にしています画面ですが、それをも手離そうというのでございます。何しろ食っては行かなくちやなりませんので、まったく食ってだけはゆかなくちやなりませんので。」

ジョンドレットがそういうふうには、考え深い狡猾こうかつそうな顔の表情を保ちながらも表面上何ら前後の考えもなさそうなふうでしやべつているうちに、マリユスはふと目をあげて、今まで見なかつたひとりの男を室へやの奥に認めた。その男は、扉とびらの音も立てずに静かにはいつてきたのである。紫色の毛編みのチョッキ

を着ていたが、それもすり切れよごれ裂けた古いもので、折り目の所には皆穴があいていた。それからまた、綿ビロードの大きなズボンをはき、足には木靴きぐつをつつかけ、シャツも着ず、首筋を出し、刺青いれずみした両腕を出し、顔はまっ黒に塗られていた。彼は黙つて腕を組んだまま、近い方の寝台に腰をおろしていたが、ちようどジョンドレットの女房の後ろになつていたので、ただぼんやりその姿が見えるきりだった。

注意を伝える一種の磁石的な本能から、ルブラン氏はマリユスとほとんど同時にその方を顧みた。彼は驚きの様子を自らおさえることができなかった。そしてそれはジョンドレットの目をのがれなかった。

「ああなるほど、外套がითでございますか。」とジョンドレットは叫んで、機嫌きげんを取るようなふうでそのボタンをかけた。「私によく

合います。まったくよく合います。」

「あの人はだれです。」とルブラン氏は言った。

「あれでございますか。」とジョンドレットは言った。

「隣の男でありまして、どうか決しておかまいなく。」

その隣の男というのは、不思議な顔つきをしていた。けれども、そのサン・マルソー郭外には化学製造工場がたくさんあって、その職工は多くまっ黒な顔をしてることがあった。ルブラン氏の様子は、静かに大胆に安心しきつてるがようだった。彼は言った。

「で、何のお話でしたかな、ファバントウ君。」

「話と申しますのは、実は旦那様。」とジョンドレットは言いながら、テーブルの上に肱ひじをつき蟒蛇うわばみのようなじつとすわったやさしい目でルブラン氏をながめた。「私は画面を一つ売り払いた

いと申しかけた所でございましたが。」

扉とびらの所で軽い音がした。第二の男がはいつてきて、ジョンドレットの女房の後ろに寝台に腰掛けた。第一の男と同じように、両腕を出し、インキか煤すすかで顔すずを塗りつぶしていた。

その男も文字どおりに室へやにすべり込んできたのであるが、ルブラン氏の注意をのがれることはできなかつた。

「どうかお気になさいませんように。」とジョンドレットは言つた。「みんなこの家にいるものでございます。ところで今の話でございしますが、私に残っていますのは一枚の画面きりで、それも貴重なものでして……。まあ旦那、ごらん下さいませ。」

彼は立ち上がつて、壁の所へ行つた。その下の方に、前に述べた鏡板が置いてあつた。彼はそれを裏返して、やはり壁に立てかけた。それはなるほど何か画面らしいもので、わずかに蠟燭ろうそく

の光で照らされていた。マリウスはジョンドレットが自分とその画面との間に立っているのので、何が描いてあるかはつきり見て取ることができなかつた。しかしちよつと見た所、粗末な書きなぐりのものらしく、その主要人物らしいのには、見世物の看板か屏風びょうぶの絵かに見えるようなまなましい色彩が施してあつた。

「それは何ですか。」とルブラン氏は尋ねた。

ジョンドレットは勢いよく言つた。

「大家の絵でして、非常な価値ねうちのあるもので、旦那様だんなさま。私はふ

たりの娘と同じぐらいにこれを大事にしています、種々の思ひ出がこもっているのでございます。ですが今申しましたとおり、まったくのところ、ごく困っているものですから、これを売ってしまいたいと存じまして……。」

偶然にか、それとも多少不安を感じ初めたのか、ルブラン氏はその画面をながめながらもちらと室へやのすみを見やった。そこには今や四人の男がいた。三人は寝台に腰掛け、ひとりとびらは扉かまちのそばに立っていた。四人とも腕をあらわにし、身動きもしないで、顔は黒く塗られていた。寝台に腰掛けてる三人のうちの一ひとは、壁によりかかって目を閉じ、あたかも眠ってるかのようなだった。その男はもう老人で、まっ黒な顔の上に白い髪があるありさまは何とも言えない不気味さだった。他のふたりはまだ若そうで、ひとりは髯ひげをはやしており、ひとりは髪の毛を長くしていた。だれも靴くつをはいていなかった。上靴をはいてない者は跣足はだしのままだった。

ジョンドレットはルブラン氏の目がその男らの上にすえられてるのを認めた。

「みな親しい仲の者で、近所の者でございます。」と彼は言つた。「顔を黒くしていますのは、炭の中で仕事をしているからでして、みな暖炉職工でございます。どうかお気になさらないで、旦那、まあ私のこの画面を買つて下さいませ。どうか不幸をあわれんで下さいませ。高くとは申しません。がまあどれぐらいの価値ねうちだとおぼし召されますか。」

「だが、」とルブラン氏は言いかけて、ジョンドレットの顔をまともにじつとながめ、用心するようなふうであつた、「それは何か旅籠屋はたごやの看板ですね。三フランぐらいはしますかな。」

ジョンドレットは静かに答えた。

「紙入れをお持ち合わせでございませうか。千エキュール（五千フラン）なら申し分ありませんが。」

ルブラン氏はすつくと身を起こし、壁を背にして、急いで室へや

の中を見回した。左手の窓の方にはジョンドレットがおり、右手の扉とびらの方にはその女房と四人の男とがいた。四人の男は身動きもしなければ、また彼を見てる様子さえもなかった。ジョンドレットはぼんやりした瞳ひとみをして悲しそうな調子を張り上げ、泣くような声でまた話し出した。それでルブラン氏も今日の前におるこの男は貧乏のために気でも狂ったのではないかと思つたかも知れない。

「もしこの画面でもお買い下さらなければ、まったく旦那様だんなさま、」とジョンドレットは言った、「私はもう策の施しようもありませんで、川にでも身を投げるよりほか仕方がございません。私はふたりの娘に、合わせ紙の仕事を、お年玉用のボール箱をこしらえる仕事を習わせようと思つていますんです。それにはガラスが下に落ちないように向こうに板のついたテーブルだの、

特別な炉だの、木と紙と布とに使い分けする強さの違つたそれぞれの糊のりを入れる三つに仕切つてある壺つぼだの、それからまた、厚紙を切る截たち包丁、形を取る型、鉄をうちつける金槌かなづち、ピンセット、その他いろんなものがあります。そしてそれでいくらく取れるかと言えば、日に四スーだけでございます、それも十四時間働きづめでして。箱一つでき上がるには十三遍も細工人の手をくぐります。しかも紙はぬらさなければならぬし、汚点しみをつけてはいけませんし、糊のりは熱くしておかなければならぬし、まったくやりきれません。そして日に四スーです。それでまあどうして暮らしてゆきましょう。」

そういうふうな語りながらジョンドレットは、彼を見守つてるルブラン氏の方を少しも顧みなかった。ルブラン氏の目はジョンドレットを見つめ、ジョンドレットの目は扉とちらを見つめていた。

マリユスの熱心な注意はふたりの上に代わる代わる向けられた。ルブラン氏は自ら問うようなふうだった。「この男はばかなのかな？」 ジョンドレットは冗漫と懇願とのあらゆる調子で二、三度くり返した。

「川にでも身を投げるよりほか、もう仕方がございません！ 先日もそのつもりで、オーステルリツツ橋のわきを三段ほどおりにゆきました。」

と突然、彼の鈍い瞳は怪しい炎に輝き、小さな身体は伸び上がって恐ろしい様子になり、ルブラン氏の方へ一歩進み、そして雷のような声で彼は叫んだ。

「そんなことではないんだ！ 貴様には俺おれがわかるか？」

ちようどそれは、部屋へやの扉が突然開いて、青麻のだぶだぶの上衣を着、黒紙の仮面をつけた三人の男が見えた時だった。第一の男はやせていて、鉄のついた長い棒を持っていた。第二の男は巨人のような体軀たいくで、屠牛用とぎゅうようの斧おのを頭を下にして柄のまんなかを握っていた。第三の男は肩幅が広く、第一の男ほどやせてもいなければ第二の男ほど太くもなくて、どこかの牢獄の戸から盗んででもきたようなばかに大きな鍵かぎを握りしめていた。ジョンドレットはそれら三人の男が来るのを待っていたものらしい。そして棍棒こんぼうを持ったやせた男と彼との間に速い対話が初まった。

「すっかり用意はできてるか。」とジョンドレットは言った。  
「できてる。」とやせた男は答えた。

「だがモンパルナスはどこにおる。」

「あの色役者は、立ち止まってお前の娘と話をしていた。」

「どっちの娘だ。」

「姉の方よ。」

「下に辻馬車つじばしやはきてるか。」

「きてる。」

「例の小馬車に馬はついてるか。」

「ついてる。」

「いいやつを二頭か。」

「すてきなやつだ。」

「言つといた所で待ってるな。」

「そうだ。」

「よし。」とジョンドレットは言った。

ルブラン氏はひどく青ざめていた。彼は今やいかなる所へ陥つたかを了解したかのように、室へやの中のものぐるりと見回した。そしてまわりを取り囲んでる人々の方へ順々に向けられる彼の頭は、注意深そうにかつ驚いたようにおもむろに首の上を動いた。しかし彼の様子のうちには、恐怖のさまは少しも見えなかつた。彼はテーブルをもつて即座の堡壘ほらいとした。そして一瞬間前まではただ親切な老人としか思われなかつた彼は、今やにわか闘士の姿に変わつて、椅子いすの背にその頑丈がんじょうな拳こぶしを置き、驚くべき恐ろしい態度を取つた。

かかる危険を前にして確固毅然きぜんたるその老人は、ただ何ということもなく本来からして勇氣と親切とを兼ねそなえてるもののように思われた。おのれの愛する女の父に当たる人は、おのれに対して決して他人ではない。マリユスはその名も知らぬ老

人について自ら矜ほこりを感じた。

ジョンドレットが、「あれはみな暖炉職工でございませぬ、」と言った腕のあらわな男どものうちの三人は、鉄くずの中を探つて、ひとりは大きな鋏はさみを取り、ひとりは重い火ばしを取り、ひとりは金槌かなづちを取つて、一言も発せずとひらに扉から斜めに並んだ。年取つた男はなお寝台の上に腰掛けていて、ただ目を開いたばかりだった。ジョンドレットの女房はそのそばに腰掛けていた。

マリウスはもう数秒のうちに自分が手を出すべき時が来るだろうと考えた。彼は廊下の方へ天井を向けて右手を上げ、ピストルを打つ用意をした。

ジョンドレットは棍棒こんぼうの男との対話を終えて、再びルラブンの氏の方へ向き、彼独特のおさえつけたような恐ろしい低い笑いをしながら、前の問いをくり返した。

「それじゃ貴様には俺おれがわからねえのか。」  
ルブラン氏は彼を正面からじつと見て答えた。

「わからない。」

するとジョンドレットはテーブルの所までやっていった。そして蠟燭ろうそくの上から身をかがめ、腕を組み、その角張った獐猛どうもうな頤あごをルブラン氏の落ち着いた顔にさしつけ、ルブラン氏があとにさがらないくらいにできるだけ近く進み出て、まさにかみつかんとする野獣のようなその姿勢のまま叫んだ。

「俺おれはファバントウーというんじゃねえ、ジョンドレットといふんでもねえ。俺はテナルディエという者だ。モンフェルメイユの宿屋の亭主だ。いいか、そのテナルディエなんだ。さあこれで貴様、俺がわかつたらう。」

ほとんど見えないくらいの赤みがルブラン氏の額にちらと浮

かんだ。そして彼は例の平静さで、震えもしなければ高まりもしない声で答えた。

「いつこうわからない。」

マリユスの耳にはその答えもはいらなかった。その暗闇くらやみの中にそのとき彼を見た者があつたならば、駭然がいぜんとし呆然ぼうぜんとして打ちひしがれたような彼の様子が見られたであろう。ジョンドレットが「俺は、テナル、デ、イ、エ、という者だ」と言つた瞬間に、マリユスはあたかも心臓を貫かれる刃の冷たさを感じたかのように、全身を震わして壁にもたれかかった。それから合い図の射撃をしようとして待ち構えていた右の腕は静かにたれ、ジョンドレットが「いい、いい、そのテナル、デ、イ、エ、なんだ」とくり返した時には、力を失つた彼の指は危うくピストルを落としかけた。本名を現わしたジョンドレットは、ルブラン氏を動かす得なかつたが、マ

リユスを顛倒さした<sup>五</sup>。ルブラン氏が知らないらしいそのテナル  
デイエという名前を、マリユスはよく知っていた。そしてその  
名前は彼にとつていかなる意味を有するかを読者は思い出すだ  
ろう。その名前こそ、父の遺言のうちにしるされ、彼が常に心  
にいだいていたものである。彼はその名前を、頭の奥に、記憶  
の底に、また、「テナルデイエという者予の生命を救いくれたり、  
もし予が子にして彼に出会わば、及ぶ限りの好意を彼に表すべ  
し、」という神聖なる命令のうちに、常に納めていたのである。  
その名前こそ、読者の記憶するとおり、彼の心が帰依して居るも  
のの一つであつた。彼はそれを父の名前といつしよにして崇拜  
していた。しかるに現在この男がテナルデイエであろうとは！  
長い間いたずらにさがしあぐんでいたモンフェルメイユの宿屋  
の主人であろうとは！ 彼はついにその男を見いだしたが、そ

れもいかにしてであつたか。父を救つた男は悪漢だつたのである。マリユスが身をささげて仕えんと望んでいたその男は、怪物だつたのである。このポンメルシー大佐を救つてくれた男は、今やある暴行を行なわんとしていた。マリユスにはその暴行がいかなる形式のものであるかまだ明らかにはわからなかつたけれども、とにかく殺害らしく思われるものだつた。しかもその暴行はだれに向かつて加えられんとしているのか！ ああ何たる宿命ぞ、いかに苦にがき運命の愚弄ぐろうぞ！ 父は柩ひつぎの底から彼に、でき得る限りの好意をテナルディエにつくすよう命じていた、そして四年の間彼は、父に対するその負債おいめを果たさんとの念しか持つていながつた。しかるに、警官をして罪惡の最中における悪漢を捕えさせんとする瞬間に当たつて運命は彼に叫んだ。「その男こそテナリディエである！」ワーテルローの勇ましい戦場

で弾丸の雨下する中に救われた父の生命に対して、その男に彼はついに何をむくいんとするのか、絞首台をもつてむくいんとするのか。もしテナルデイエを見いだすこともあつたら、直ちに馳<sup>は</sup>せ寄つてその足下に身を投じようと、彼はかねて期していた。そして今実際彼を見いだしはしたが、しかしそれは彼を刑執行人の手に渡さんがためだったのであるか。父はマリウスに「テナルデイエを救え」と言っていた、しかるにマリウスはテナルデイエを打ちひしいでその敬愛せる聖<sup>きよ</sup>き声に答えんとするのか。その男は身の危険を冒して父を死より救い、父はその男を子たるマリウスに頼んでおいたのに、マリウスは今自らその男をサン・ジャックの広場に処刑さして、それを父の墓前にささげんとするのか。父が自らしたためた最後の意志をかくも長い間胸にいだいていながら、まさしくその正反対をなさんとは、

何という運命の愚弄ぐろうであろう！ しかしまた一方に、その待ち伏せを見ながらそれを妨げんともせず、被害者を見捨て殺害者を許さんとするのか！ かかる悪漢に対して何らか感謝の念をいだき得るものであろうか。四カ年以来マリユスが持つていたあらゆる考えは、その意外の打撃によつてずたずたに引き裂かれてしまった。彼は身を震わした。すべては彼の一存にかかつていた。彼の眼前に争っているそれらの人々は、おのずから彼の手中にあつた。もし彼がピストルを打つたならば、ルブラン氏は救われテナルディエは捕えられるだろう。もしピストルを打たなければ、ルブラン氏は犠牲に供され、テナルディエはあるいは身を脱するだろう。一方を倒しても、また他方を見殺しにしても、いずれも悔恨の念は免れぬ。何となすべきか？ いずれを選ぶべきか？ 最も強き記憶、内心の深き誓い、最も神

聖なる義務、最も尊き文言、それにそむくべきか。父の遺言にそむくべきか。あるいはまた罪惡の行なわるるのを見過ごすべきか。一方には父のために懇願する「わがユルスユール」の声が聞こえるように思われ、他方にはテナルデイエのことを頼む大佐の声が聞こえるように思われた。そして彼は氣も狂わんばかりの心地がした。膝も身体をささえきれなくなつた。しかも眼前の光景は切迫していて、熟慮のひまさえもなかつた。自分が左右し得ると思つていた旋風にかえつて運び去らるるがやうなものだつた。彼はほとんど氣を失いかけた。

その間にテナルデイエは——われわれは以後彼をこの名前で呼ぶことにしよう——われを忘れたやうにまた勝利に酔うたがやうに、テーブルの前をあちらこちら歩いてた。

彼は手のうちに蠟燭をつかみ、蠟は壁にはねかかり火は消え

かかったほどの激しさでそれを暖炉の上に置いた。

それから彼は恐ろしい様子でルブラン氏の方をふり向き、こういう言葉を吐きかけた。

「焼けた、焦げた、煮えた、蒲焼かばやきだ！」

そして彼は恐ろしい勢いでまた歩き出した。

「ああ、」と彼は叫んだ、「とうとう見つけたよ、慈善家さん、ぼろ着物の分限者さん、人形をくれた奴やつこさん、老耄おいぼれのジョクリスさん！（訳者注 ジョクリスとはお人よしの典型的人物）ああお前さんにはわしがわからないのかね。ちようど八年前、一八二三年のクリスマススの晩に、モンフェルメイユのわしの宿屋へきたなあ、お前さんではなかったらうよ。ファンテーヌの娘のアルーエツトというのをわしの家から連れ出したなあ、お前さんではなかったらうよ。黄色い外套がいのうを着ていたのはな、そ

して今朝<sup>けさ</sup>わしの所へきた時のようにぼろ着物の包みを手に下げていたのはな。おい女房、よその家へ毛糸の靴下<sup>くつした</sup>をつめ込んだ包みを持って行くのは、この男の癖と見えるな、この慈善顔をした老耄<sup>らう</sup>め<sup>め</sup>のな。分限者さん、お前さんは小間物屋かね。貧乏人に店のがらくたをくれやがって、へん、笑わせやがるよ。お前さんに俺<sup>おれ</sup>がわからねえって？ だがな、俺の方ではわかつてるんだ。お前がここに鼻をつつ込みやがった時からすぐに見て取ったんだ。宿屋だからと言ってやたらに人の家へ入り込みやがって、みじめな着物をつけてさ、一文の銭をこうような貧乏な様子をしてさ、人をだまかし、大きなふうをして、米櫃<sup>こめびつ</sup>をまき上げやがって、森の中で人を脅かしやがって、そのくせ人が落ちぶれてると、大きすぎる外套<sup>がいとう</sup>だの病院にあるようなぼろ毛布を二枚持つてきて、すました顔をしてやがる。それでうまく

ゆくと思うと大まちがえだ、老耄おいぼれの乞食こじきめが、誘拐かどわか者かしめが！」

彼はふと言いやめて、ちよつと心の中で独語してゐるように見えた。ちよつと彼の憤怒は、ローヌ川のように穴の中へでも落ちたかのように見えた。そしてひそかに独語したことに大声で結末をつけるかのように、テーブルを拳こぶしでたたいて叫んだ。

「しかもお人よしのようなふうをしやがつてさ。」

そしてルブラン氏の方へ言いかけた。

「おい、お前は以前によくも俺おれをばかにしやがつたな。俺の不運のもととはみんなお前だぞ。わずか千五百フランで大事な娘を取つてゆきやがつたからだ。娘はな、たしか金持ちの子供だつたんだ。それまでにずいぶん金も送つてきた。俺はその娘を一生の食いのものにするつもりでいたんだ。あの宿屋じゃあずいぶん損をしたんだが、その娘さえいりやあどうにかなつたらうと

いうものだ。あんなつまらねえ宿屋つたらねえや、ぜいたくな  
ばか騒ぎばかりしてさ、俺の方じゃあ能のうもなくすつかり食いつ  
ぶしてしまつたからな。あああの店へきやがって酒を飲んだ奴やつ  
どもにやあ酒がみな毒とでもなつたらなあ！ いやそんなこた  
あどうでもいいや。おいお前はな、あのアルーエツトを連れて  
行く時には、俺を愚図とでも思つて笑いやがつたらうな。あの  
森の中では大きな棒を持つていやがつたな。あの時はお前の方  
が強かつたさ、だがこんどはそうはいかねえや。切り札は俺の  
方にあるんだ。お気の毒だがお前の方が負けだ。ははあおかし  
いや、ちゃんちやらおかしいや。うまく毘わなに落つこちやがった。  
俺は言つてやつたよ、俳優でございませす、私はファバントウと  
申します、マルス嬢やムューシユ嬢といつしよに芝居をしたこ  
ともございませす、二月四日に家主に金を払わなくてはなりませ

んとさ、それに奴さんやつし少しも気がつかねえんだ、期限は二月四日じゃなくて一月八日になつてゐるつてことをな。ばか野郎め！そしてつまらねえフィリップ（訳者注 ルイ・フィリップ王の肖像がある二十フラン金貨）を四つ持つてきやがった。恥知らずめ！せめて百フランでも持つて来りやあまだしもだ。だがまあうまく俺のおもしろくもねえ策に乗りやがった。ほんにおかしいや。俺はひとりおれでこう言つていたんだ。『おばかさん、さあつかまえたぞ。今朝けさはてめえの足をなめてやる、だが晩になつてみる、心臓までもしやぶつてやるからな。』

テナルデイエはしやべるのをやめた。彼は息を切らしていた。その小さな狭い胸は、鍛冶屋かじやの鞆ふいこのように六あえいでいた。その目は賤いやしい幸福の色に満ちていた。恐れていた者をついにうち倒し媚こびていた者をついに侮辱してやったという残忍卑怯ひきょうな弱

者の喜びであり、巨人ゴライアスの頭を土足にかける侏儒しゅじゆの喜びであり、もはや身を守り得ないほど死ひんに瀕ひんしてはいるがまだ苦痛を感じずるくらいの命はある病める牡牛おうしを、初めて引き裂きかけた豪狗ごうくの喜びである。

ルブラン氏は彼の言葉を少しもさえぎらなかつた。しかし彼が言いやめた時にこう言つた。

「私には君の言うことがわからない。君は何か思い違いをしてゐるようだ。私はごく貧しい者で、分限者なんかではない。私は君を知らない。だれかと人違いをしたのでしよう。」

「なんだと、白ばつくれるな。」とテナルディエはうめき出した。「冗談を言うない。ぐずぐずぬかしやがつて、老耄おいぼれめが。貴様、覚えていねえのか。俺がわからねえのか。」

「失礼だがわからない。」とルブラン氏は丁寧な調子で答えた

が、それはかかる場合に何だか力強く妙に聞こえた。「君はどうも悪党らしいが。」

人の知るとおり、けんお嫌悪すべき輩やからはすべていら立ちやすいものであり、怪物はすべて怒りやすいものである。悪党という言葉  
を聞いて、テナルデイエの女房は寝台から飛びおり、テナルデイエは握りつぶさんばかりに椅子いすをつかんだ。「じつとしてろ。てめえは！」と彼は女房に叫んだ。そしてルブラン氏の方へ向き直った。

「悪党だと！なるほどな、金のある奴やつらは俺たちのことをそうぬかしやがる。なるほどそれに違えねえ。俺おれは破産をし、身を隠し、食うものもねえし、金もねえし、それで悪党だ。もう三日というもの何にも口にしねえ、それで悪党だ。それに貴様がらは、足を暖かくし、サコスキの上靴うわぐつをはき、毛のはいった外がい套とう

を着、大司教のような様子をし、門番のついた家の二階に住み、松露を食い、正月には四十フランもするアスパラガスを食いちらし、豌豆えんどうを食い、口一杯にほおばり、そして寒いかどうか知りてえ時には、シュヴァリエ技師の寒暖計がいくらさしてるか新聞で見やがる。だがな、本当の寒暖計は俺たちだ。時計台の角かどの河岸かしに出て、何度の寒さかを見にゆく必要はねえんだ。俺たちは脈の血が凍り心臓にも氷がはるのを感じるんだ。そしては、神もねえのかつて言うんだ。そういう時に貴様らは、俺たちの巢にやってきやがって、そうだ巢にやってきやがって、悪党だなんてぬかすんだ。だがな俺たちは、貴様らを食つてやるんだ。金持ちのちびども、貴様らを貪り食むさばつてやらあな。おい分限者さん、よく覚えておくがいい。俺はな、身分のある男だったんだ、免状を持つていたんだ、選挙の資格もあつたんだ、りっぱ

な市民だったんだ、この俺がだぜ、ところが貴様にはそういうものが一つもねえんだろう、貴様にはな！」

そこでテナルデイエは扉とびらのそばに立つてる男どもの方へ一歩進んで身を震わしながら言った。

「人の所へきやがつて、靴直くつなおしかなんぞにでも言うような口をききやがるんだぜ。」

それからまた、更に怒り立ってルブラン氏の方へあびせかけた。

「そしてまたこういうことも覚えておいてもらおうぜ、慈善家さん！俺おれはな、後ろ暗え人間じゃねえんだ。名前を明しもしねえで人の家へ子供を取りに来るような者じゃねえんだ。俺はもとフランスの軍人だ、勲章でももらつていい人間だ。ワーテルローに行つてよ、何とかいう伯爵の將軍を戦争中に救つたん

だ。名前をきかされたが、声が低くて聞き取れなかった。あり、  
が、とうとうというだけは聞こえた。そんな礼の言葉なんかより、名  
前を聞き取った方がよかつたんだが。そうすればまた尋ね出す  
こともできようつてわけさ。この絵はな、ブラッセルでダヴィ  
ドが描いたものなんだ。何が描いてあるかわかるか。この俺を  
描いたんだ。ダヴィドは俺の手柄を後の世まで残そうと思つた  
んだ。その將軍を背にかついで、弾丸たまの下をくぐつて運んでゆ  
くところだ。物語はざつとこのとおりさ。俺は何もその將軍に  
世話になつていたわけじゃねえ。他人も同様さ。それでも俺は  
生命を捨ててその人を助けた。その証明書はポケットに一杯あ  
らあ。俺はワートルローの名高い兵士だぞ。ところで、親切に  
それだけ言つてきかしてやつたからには、これでおしまいにし  
よう。つまり俺は金がほしいんだ。たくさんな金が、莫大ばくだいな金

がほしいんだ。うんと言わなきやあ、やつつけてしまえばかりだ、いいか。」

マリユスは心の苦悩を多少おさえ得て、耳を傾けていた。そして最後の疑念もすべて消えてしまった。その男こそまったく、父の遺言にあるテナルデイエだったのである。そしてテナルデイエが父の忘恩を非難するのを聞き、自分は今や必然にその非難を至当のものたらしめんとしていることを思つて、マリユスは身を震わした。彼の困惑はますます深くなつた。その上、テナルデイエの言葉、その語調、その身振り、一語ごとに炎をほとばしらすその目つき、またすべてを暴露する悪心の爆発、虚勢と卑劣と、傲慢ごうまんと丁重と、憤激ぐまいと愚昧ぐまいとその混合、真実の苦情と虚偽の感情とのその混淆こんこう、暴戾ぼうれいの快感をむさぼる悪人らしいその破廉恥、醜い魂のその厚顔なる赤裸、あらゆる苦しみと憎

しみとが結びついてるその火炎、すべてそれらのもののうちには、害悪のごとく嫌悪けんおすべきまた真理のごとく痛切なる何物かが存していた。

大家の画面、テナルデイエがルブラン氏に買ってくれと言い出したダヴィドの絵は、もう読者もほぼ察し得たであろうが、実は彼の宿屋の看板にほかならなかつた。それは読者の記憶するとおり、彼が自分で描いたものであつて、モンフェルメイユにおける失敗以来なお取つて置いた唯一のものだつた。

ちようどテナルデイエの位置がマリユスの視線を妨げないようになつたので、マリユスは今その絵らしいものをながめることができた。なるほどその塗りたくつてある中に、戦争らしいありさまと、背景の煙と、ひとりの男をかついでる人間とが認められた。それがすなわちテナルデイエとポンメルシーとのふ

たりで、救つた軍曹と救われた大佐とである。マリユスは酒に酔つたがようだった。その画面は父がまだ生きてるような感を彼にいだかせた。もはやそれはモンフェルメイユの宿屋の看板ではなかつた。一つの復活であり、墳墓はその口を開いて、幻影がそこに立ち現われた。マリユスは両の顛顛こめかみに心臓の鼓動を聞いた。耳にはワーテルローの大砲の響きが聞こえ、気味悪いその板の上にぼんやり描かれてる血に染まつた父の姿は、彼を脅かした。そして彼には、その怪しい幽霊が自分をじつと見つめてるように思われた。

テナルディエは一息ついて、ルブラン氏の上に血走つた瞳ひとみをすえ、低いぶつきらばうな声で言った。

「今貴様を踊らしてやる、だがその前に何か言うことがあるか。」  
ルブラン氏は黙っていた。その沈黙のうちに、しわがれ声の

忌まわしい嘲りあざけが廊下から響いた。

「薪まきでも割るなら俺おれが行くぞ。」

それはおもしろがつてる斧おのを持った男だった。

同時に、毛だらけの泥まみれの大きな顔が、歯というよりもきば牙を出してすごい笑いを浮かべながら、扉とびらの所からのぞき込んだ。

斧を持つてる男の顔だった。

「どうして面を取ったんだ。」とテナルデイエは怒って叫んだ。  
「笑つてみてえからさ。」と男は答えた。

ちよつと前からルブラン氏は、テナルデイエの挙動に目をつけすきをうかがつてるようだった。テナルデイエの方は自分の憤激に目がくらみ、頭がくらんでいた。そして、扉には番がついているし、自分は武器を持つてるのに相手は無手であるし、

女房をもひとりと数えれば相手はひとりにこちらは九人いるので、安心しきつて室へやの中を歩き回っていた。斧の男に口をきく時には、ルブラン氏の方に背を向けた。

ルブラン氏はその瞬間をとらえた。彼は椅子いすを蹴け飛ばし、テールをはねのけ、テナルデイエがふり返る間もあらせず、驚くべき敏捷びんしょうさで一躍して窓の所へ達した。窓を開き、その縁に飛び上がり、それを乗り越すのは、一瞬間の仕事だった。彼は半ば窓の外に出た。その時六つの頑丈がんじょうな手が彼をつかみ、無理無体むりむたいに彼を室の中に引きずり込んだ。彼の上に飛びかかったのは三人の「暖炉職工」だった。と同時に、テナルデイエの女房は彼の頭髪につかみかかった。

その騒ぎに、外の悪党どもも廊下からはいつて来た。寢床の上うへにいた酒に酔つてゐるらしい老人も、寝台からおりて、手に道

路工夫の金槌かなづちを持つてよろめきながら出て来た。

「暖炉職工」のひとりの顔は、蠟燭ろうそくの光に照らされていた。その塗りつぶした顔つきのうちにマリウスは、それがパンシヨール一名プランタニエ一名ビグルナイユであることを見てとつた。その男が今や、鉄棒の両端に鉛たまの丸のついてる一種の玄翁げんのうをルブラン氏の頭めがけて振り上げた。

マリウスはそれを見てもはや堪こらえることができなかつた。「お父さん、許して下さい、」と彼は心に念じて、指先で、ピストルの引き金を探つた。そして今や発射せんとした時、テナルデイエの叫ぶ声がした。

「けがをさしてはいけねえ！」

犠牲者の死物狂いの試みは、テナルデイエを激させるどころかかえつて落ち着かした。彼のうちには、獯猛どうもうな者と巧妙な者

とふたりの人間がいた。そしてその時までは、勝利に酔い、取りひしがれて身動きもしない餌物えものを前にして、獰猛な者の方が強く現われていた。しかるに犠牲者があばれ出して抵抗しかけた時に、巧妙な者の方が現われてきて優勢となった。

「けがをさしてはいけねえ！」と彼はくり返した。そして、彼自身では知らなかったが、その第一の成功として、彼はそれでピストルの発射をやめマリユスをすくしました。今や危急は去つて局面が一変したので、もう少し待つてもさしつかえない、とマリユスは思った。ユルスユールの父を見殺しにするかあるいは大佐の救い主を滅ぼすかの板ばさみの地位から自分を助け出してくれるような、何かの機会が起こるまいものでもない、と彼は思った。

恐ろしい争闘が初まっていた。ルブラン氏は老人の胸を一撃

して室のまんなかにはね倒した。それから二度後ろを払って、他のふたりの襲撃者を打ち倒し、それをひとりずつ両膝の下に押し伏せた。ふたりの悪漢は膝に押しえつけられて、ちようどかこうせき花崗石の挽臼ひきうすの下になったようにうめき声を出した。しかし残りの四人は、その恐ろしい老人の両腕と首筋とをとらえ、組み敷かれたふたりの「暖炉職工」の上に押しえつけた。かくて一方を押しえ他方に押しえられ、下の者らを押しつぶし上の者らから息をつめられ、自分の上に集まつてる人々の力をいたずらにはねのけようとしながらルブラン氏はそれら恐るべき悪党どもの下に見えなくなつて、あたかも番犬や獵犬どものほえ立つた一群の下に押しえられている猪いのししのようだった。

彼らは、ようやく窓に近い寝台の上にルブラン氏を引き倒し、じつと押しえつけたきりだった。テナルディエの女房はなお髪

の毛をつかんで離さなかった。

「てめえは引つ込んでろ、」とテナルデイエは言った。「肩掛けが破れるじゃねえか。」

女房は狼おおかみめすの牝おすが牡おすに従うように、うなりながらその言葉に従った。

「さあみんなで、」とテナルデイエは言った、「そいつの身体をさがせ。」

ルブラン氏は抵抗の念を捨てたらしかった。人々は彼の身体をさがした。しかし身につけてた物はただ、六フランはいつてる皮の金入れとハンカチばかりだった。

テナルデイエはそのハンカチを自分のポケットに納めた。

「なんだ、紙入れもねえのか。」と彼は尋ねた。

「それに時計もねえんだ。」と「暖炉職工」のひとりが答えた。

「そんなことはどうでもいい。」と大きな鍵かぎを持つてる仮面の男が腹声でつぶやいた。「なかなかすげえ爺じいだ。」

テナルデイエは扉とびらの片すみに行き、一束の縄なわを取り、それを皆の所へ投げやった。

「寝台の足に縛りつける。」と彼は言った。

そして、ルブラン氏の一撃を食つて室へやの中に長く横たわり、身動きもしないでいる老人を見て、彼は尋ねた。

「ブーラトリユエルは死んだのか。」

「いや酔つ払つてるんだ。」とビグルナイユが答えた。

「すみの方に片づけろ。」とテナルデイエは言った。

ふたりの「暖炉職工」は、足の先でその泥酔者を鉄屑てつくずの積んであるそばに押しやった。

「バベ、どうしてこう大勢連れてきたんだ。」とテナルデイエは

棍棒こんぼうの男に低い声で言った。「むだじゃねえか。」

「仕方がねえ、皆きてえつて言うから。」と棍棒の男は答えた。「どうもこの頃は不漁しけでね、さっぱり商売がねえんだ。」

ルブラン氏が押し倒された寝台は、施療院にあるようなもので、四角が荒削りの四本の木の足がついていた。

ルブラン氏はされるままに身を任した。悪党どもは窓から遠くて暖炉に近い方のその一本の足に、両足を床ゆかにつけて立たしたまま彼を縛りつけた。

すっかり縛り終えた時、テナルディエは椅子いすを持ってきて、ほとんどルブラン氏の正面に腰をおろした。彼はもう様子がすっかり変わっていた。わずかな時間のうちに彼の顔つきは、奔放な狂暴さから落ち着き払った狡猾こうかつな冷静さに変わっていた。マリユスは役人のようなその微笑のうちに、一瞬間前まで泡あわを吹

いてどなつていたほとんど獣のような口を認めかねるほどだった。彼は呆然ぼうぜんとしてその不思議な恐るべき変容を見守つた、そして猛虎もうこが代言人と早変わりしたのを見るような驚きを感じた。「旦那だんな……。」とテナルディエは言つた。

そしてなオルブラン氏を押さええてる悪人どもに少し離れるように手まねをした。

「少しどいてくれ、旦那にちよつと話があるんだ。」

皆の者は扉とびらの方へさがつた。彼は言い出した。

「旦那、窓から飛び出そうなんてよくありませんぜ。足をくじくかも知れませんか。でもまあ穏やかに話をつけようじゃありませんか。第一わしの方でも気づいたことを申さなくちやならねえ、と言うのは旦那、これだけのことに少しも声を立てなさらねえことだ。」

テナルデイエの言うのは道理で、心乱れてるマリユスはいつこう気づかなかつたが、それはまったく事実だった。ルブラン氏はわずか二、三言を発するにも少しもその声を高くしなかつた、そして窓のそばで六人の悪漢と奮闘する時でさえ、きわめて深い不思議な沈黙を守っていたのである。テナルデイエは言いつつ続けた。

「どうですかね、泥坊とか何とか少しはどなつたつて、別にわしの方では不思議とは思わねえ。場合によつちやあ、人殺し！とでもどなりてえところだ。そう言われたつてわしの方じや別に気を悪くはしねえ。うさんな奴らやつに取り巻かれた時にやあ、少しは騒ぎ立てるのがあたりまえだ。お前さんが声を立てたにしろ、それでどうしようつていうんじやねえ。猿轡さるぐつわさえもはめはしねえ。なぜかつて、それはこの室へやがごく人の耳に遠いから

だ。この室は何も取り柄はねえが、それだけはりつぱなもんだ。まるで<sup>あなぐら</sup>審みてえだ。かりに爆弾を破裂させたところで一番近所の警察にも酔っ払いの<sup>いびき</sup>躰ぐらいにしか聞こえねえ。大砲の音もぼーんというきりで、雷の響きもぷーっというきりだ。まったく都合のいい住所だ。だがとにかく、お前さんは少しも声を立てなかつた。なるほど感心な心掛けだ。わしにもよく察しはつく。ねえ<sup>だんな</sup>旦那、声を立てたら、来る者は警官だ。警官のあとから来る者は裁判官だ。ところで旦那は少しも声を立てなさらねえ。なるほど旦那の方でもわしらと同様、裁判官や警官が来るのを好みなさらねえ。それは旦那に——わしも前からうすうす察してはいましたかね——何か人に知られては都合のよくねえことがありなさるからだ。わしらの方だつてそれは同じでさあ。だから互いに話がわかるうつていうもんじゃありませんか。」

そういうふう<sup>ひとみ</sup>に話しながら、テナルディエはじつとルブラン氏の上に瞳をすえて、両眼からつき出した視線の鋭い刃を相手の心の底まで突き通そうとしてるかのようだった。その上彼の言葉は、ずるそうな穏やかな横柄さがこもってはいたが、ごく控え目でかつりっぱだとさえ言えるほどだった。そして先刻まで一強盗にすぎなかつたその悪人のうちには、なるほど「牧師になるために学問をした男」があることも感ぜられた。

捕虜が守っている沈黙、自分の生命をも顧みないほどのその注意、まず第一に叫び声を立てるのが当然であるのをじつとおさえてるその我慢、すべてそれらのことを、テナルディエの言葉によつてマリユスは初めて気づいて、あえて言うが、かなり気にかかつて心苦しい驚きを感じた。

テナルディエの道理ある観察は、クールフェーラックがルブ、

ラン、氏あだなという綽名を与えたその莊重な不思議な人物を包む不可解の密雲を、いつそう暗くするもののようにマリユスには思えた。しかし、彼が果たして何人なんびとであつたにせよ、かく繩なわに縛られ、殺害者らに取り巻かれ、言わばもう半ば墓穴の中につき込まれ、刻々にその墓穴は足下に深まりゆくにもかかわらず、またテナルディエのあるいは暴言の前にあるいは甘言の前ありながら、彼は常に顔色一つ動かさなかつた。そしてマリユスは、そういう際におけるその崇高な幽鬱ゆううつな顔貌がんぼうに対して、自ら驚嘆を禁じ得なかつた。

それこそまさしく、恐怖にとらわることなき魂であり、狼狽ろうばいの何たるかを知らない魂であつた。絶望の場合に臨んでも驚駭ききょうがいの念をおさえ得る人であつた。危機はいかにも切迫し、覆滅はいかにも避け難くはあつたけれども、水中に恐ろしい目を見張

る溺死者できししやのような苦悶くもんのさまは、少しも現われていなかった。

テナルデイエは無造作に立ち上がって、暖炉の所へ行き、そばの寝台に立てかけてあつた屏風びょうぶを取り払つた。そして盛んな火炎に満ちた火鉢ひばちが現われ、中には白熱して所々まっかになつてる鑿のみがあるのが、はつきり捕虜の目にはいった。

テナルデイエはそれからルブラン氏のそばに戻つてきて腰をおろした。

「なお先を少し言わしてもらいましようか。」とテナルデイエは言つた。「お互いに話がわからうつていうもんです。だから穏やかに事をきめましようや。さつき腹を立てたなあわしが悪かつた。どうしたのか自分でもわからねえが、あまりむちやになつて、少し乱暴な口をききすぎたようだ。たとえて言つてみりやあ、お前さんが分限者だからと言つて、金が、沢山な金が、

莫大ばくだいな金がほしいなんて言つたなあ、わしの方がまちがつていた。そりゃあお前さんにいくら金があつたところで、いろいろいろいろ入費いりめもありなさるだろうし、だれだつて同じことできあ。わしだつて何もお前さんの財産をつぶそうつていうんじゃねえ。とにかくお前さんの身をそぐようなこたあしませんや。有利な地位にいるからつて、それに乗じて人に笑われるようなことをする人間たあ違いますさあ。よござんすか、わしの方でもまあまけておいて、いくらか譲歩するとしましょう。つまり二十万フランばかりでよろしいんですがね。」

ルブラン氏は一言も発しなかつた。テナルデイエは言い続けた。

「このとおりわしは相当に事をわけて話してるつもりだ。お前さんの財産がどのくらいあるかわしは知らねえ、だがお前さん

は金に目をくれはしなさらねえつてことだけはわかつてる。お前さんのような慈悲深え人は、不仕合わせな一家の父親に二十万フランぐらいは出してくれてもよきそうもんだ。お前さんだって確かに物の道理はわかつてるはずだ。今日のように骨を折つて、今晚のように手はずをきめて、ここにきてる人たちを見てわかるとおり万事うまく仕組みをした以上は、わずかデノアイエ料理店で十五スーの赤い奴やつを飲み肉をつつつくぐらいの金じゃすまされねえつてことは、お前さんにもわかるはずだ。二十万フランぐらいの価値ねうちはありまさあね。それだけのほした金をふところから出しさえしなさりやあ、それですべて帳消しにして、お前さんに指一本さしやあしません。なるほどお前さんは、だが今二十万フランなんて持ち合わせはねえつて言いなざるだろう。なにわしもそう無茶なことは言いませんや。今そ

れをくれとは言やあしません。ただ一つお頼みがあるんでさあ。わしが言うとおりに書いてもらいてえんです。」

そこで、テナルデイエは言葉を切った。それから火鉢ひばちの方へちよつと笑顔を向けながら、一語一語力を入れて言い添えた。

「ことわつておくが、お前さんに字が書けねえとは言わせない。」その時の彼の微笑には、宗教裁判所の大法官をもうらやませるほどのものがあつた。

テナルデイエはルブラン氏のすぐそばにテーブルを押しやつて、引き出しからインキ壺つぼとペンと一枚の紙とを取り出した。彼はその引き出しを半ば開いたままにしておいたが、そこにはナイフの長い刃が光っていた。

彼はルブラン氏の前に紙を置いた。

「書きなさい。」と彼は言った。

捕虜はついに口を開いた。

「どうして書けというんです、このとおり縛られているのに。」

「なるほどな、」とテナルディエは言った、「もつともご道理だ。」

そして彼はビグルナイユの方を向いた。

「旦那だんなの右の腕を解いてくれ。」

パンシヨール一名プランタニエ一名ビグルナイユは、テナルディエの言うとおりにした。捕虜の右手が自由になった時、テナルディエはペンをインキに浸して、それを彼に差し出した。

「旦那、よく頭に入れておいてもらいましようや。お前さんは今日わしらの手の中にありますぜ。わしらの思うままに、まったく思うままにどうにでもできますぜ。人間の力ではとうていお前さんをここから助け出すことはできねえ。だがわしらだつて荒療治をしなけりやならねえようになるのはまったくいやな

んだ。わしはお前さんの名前も知らねえし、住所も知らねえ。しかしことわっておくが、お前さんがこれから書く手紙を持って行く使いの者が帰つて来るまでは、縛られたままでもいいなさらなけりやならねえ。そのつもりで、さあ書きなさるがいい。」

「何と？」と捕虜は尋ねた。

「わしの言うとおりに。」

ルブラン氏はペンを取った。

テナルデイエは口授し初めた。

「——わが娘よ……——」

捕虜は身を震わして、テナルデイエの方へ目を上げた。

「——わが愛する娘よ——と書きなさい。」とテナルデイエは言つた。

ルブラン氏はそのとおりに書いた。テナルデイエは続けた。

「——すぐにおいで……——」。

彼は言葉を切った。

「お前さんは彼女あれにそういうふうな親しい言い方をしているさるだろうな。」

「だれに？」とルブラン氏は尋ねた。

「わかつてらあな、」とテナルデイエは言った、「あの子供にさ、アルーエツトにさ。」

ルブラン氏は外見上いかにも冷静に答えた。

「何のことだか私にはわからない。」

「でもまあ書きなさい。」とテナルデイエは言った。そしてまた口授を初めた。

「——すぐにおいで。是非お前にきてほしい。この手紙を持って行く人が、お前を私の所へ案内してくれることになっている。」

私はお前を待つている。やっっておいで安心して——。」

ルブラン氏はそれをすつかり書いた。テナルディエは言った。「ああ安心して、というのは消しなさい。それは何だか普通のことでないような気を起こさして、不安に思わせるかも知れない。」ルブラン氏はその四字を消した。

「さあ署名しなさい。」とテナルディエは言った。「お前さんの名は何て言うのかな。」

捕虜はペンを置いて、そして尋ねた。

「だれにこの手紙はやるんですか。」

「お前さんにはよくわかつてるはずだ。」とテナルディエは答えた。「あの子供にさ。今言つてきかしたとおりだ。」

問題の若い娘の名を言うことをテナルディエが避けてるのは明らかだった。彼は「アルーエツト」（ひばり娘）と言いました「あ

の子供」と言いはしたが、その名前は口に出さなかつた。それは共犯者らの前にも秘密を守る巧妙な男の用心であつた。名前を言うことは「その仕事」を彼らの手に渡してしまふことだつたらう、そして彼らに必要以上のことを知らせることだつたらう。

彼は言つた。

「署名しなさい。お前さんの名は何というんだ。」

「ユルバン・ファールブル。」と捕虜は答えた。

テナルディエは猫ねこのようにすばしこく手をポケットにつつ込んで、ルブラン氏から取り上げたハンカチを引き出した。彼はそのしるしをさがして、蠟燭ろうそくの火に近づけた。

「U・F、なるほど。ユルバン・ファールブル。ではU・Fと署名しなさい。」

捕虜は署名をした。

「手紙を畳むには両手があるから、わしに渡しなさい、わしが畳むから。」

それがすむと、テナルデイエは言った。

「住所を書きなさい。お前さんの家のフ、ア、ブル嬢と。ここからそう遠くねえ所に、サン・ジャック・デュ・オー・パの付近に、お前さんが住んでることをわしは知ってる。毎日その教会堂の弥撒ミサに行きなさるのでもわかる。だがどの町だかわしは知らねえ。お前さんは今どんな場合にいるかわかっていなさるはずだと思ふ。だから名前に嘘うそを言わなかつたとおり、住所にも嘘を言わねえがいい。自分でそれを書きなさい。」

捕虜はちよつと考え込んでいたが、やがてペンを取つて書いた。

——サン・ドミニク・ダンフェール街十七番地、ユルバン・ファールブル氏方、ファールブル嬢殿。

テナルディエは熱に震えるような手つきでその手紙をつかんだ。

「女房。」と彼は叫んだ。

テナルディエの女房は急いでやって来た。

「さあ手紙だ。やることはわかつてるだろう。辻馬車つじばしやが下にある。すぐに出かけて、すぐに帰ってこい。」

それから斧おのを持つてる男の方へ言った。

「貴様はちようど面を取ってるから、うちのかみ上さんについてつてくれ。馬車の後ろに乗ってゆくがいい。例の小馬車を置いてきた所はわかつてるな。」

「わかつてる。」と男は言った。

そして斧を片すみに置いて、彼はテナルデイエの女房のあとについて行つた。

ふたりが出てゆくと、テナルデイエは半ば開いている扉とびらから顔をさし出して、廊下で叫んだ。

「何より手紙を落とさないようにしろ！ 二十万フラン持つてると同じだぞ。」

テナルデイエの女房のしわがれた声がそれに答えた。

「安心しておいで。内ふところにしまつてるから。」

一分間とたたないうちに、鞭むちの音が聞こえたが、それもすぐに弱くなつて消えてしまつた。

「よし、」とテナルデイエはつぶやいた、「ずいぶん早えや。あの調子で駆けてゆきやあ、家内は四、五十分で戻つてくる。」

彼は暖炉に近く椅子いすを寄せ、そこに腰をおろして、両腕を組

み、泥だらけの靴を火鉢の方へ差し出した。

「足が冷てえ。」と彼は言った。

テナルデイエと捕虜とともにその部屋の中にいるのは、もう五人の悪漢ばかりだった。彼らは仮面をつけたりあるいは黒く塗りつぶしたりして顔を隠しながら、なるべく恐ろしく見せかけるように、炭焼き人だの黒人だの悪魔だのの姿をまねていたが、皆のろい沈鬱ちんうつな様子をしていた。それを見ると、彼らは罪悪を犯すことをもちょうど仕事をするような具合に、至つて平気で、何ら憤激の情も憐愍れんびんの念もなしに、一種の退屈らしい様子でやつてるようだった。彼らは獣のようにすみにかたまつて黙々としていた。テナルデイエは足を暖めていた。捕虜はまた無言のうちに沈んでいた。先刻その部屋を満たしていた荒々しい騒ぎに次いで、陰惨な静けさがやってきたのである。

芯しんに大きく灰のたまつてる蠟燭ろうそくが、その広い部屋をぼんやり照らしてゐるばかりで、火鉢の火も弱くなつていた。そしてそこにおる怪物らの頭は、壁や天井に変な形の影を投げていた。

聞こえるものはただ、眠つてゐる酔つ払いの老人の静かな息の音ばかりだった。

マリユスは種々重なつてきた心痛のうちにじつと待つていた。謎なぞはますます不可解になつてきた。テナルデイエがアルーエツトと呼んだあの「子供」はいつたい何であつたらうか。彼の「ユルスユール」のことであつたらうか。捕虜はそのアルーエツトという言葉も聞いても少しも心を動かさないらしかつた、そしてごく自然に「何のことだか私にはわからない」と答えた。しかし一方に、U・Fという二字は説明された。それはユルバン・ファールブルだった。そしてユルスユールも今はユルスユールと

いう名ではなくなつた。マリユスが最もはつきり知り得たのはその一事だつた。一種の恐ろしい魅惑にとらえられて彼は、全光景を観察し見おろし得るその場所に釘付けくぎづにされてしまった。そこに彼は、目近にながめた厭いとうべきできごとから圧伏されたかのようになつて、ほとんど考えることも動くこともできなかつた。いかなる事にもあれただ何か起こることを望むだけで、考えをまとめることもできず、決心を固める術すべも知らずに、彼はただ待つていた。

「いずれにしても、」と彼は思った、「アルーエツトというのが彼女のことであるかどうか、これからはつきりわかるだろう。テナルディエの女房がそれをここへ連れて来るだろうから。その時こそ私の心は決するのだ。もし必要であれば、私はこの生命と血潮とをささげても彼女を救つてやる。いかなることがあつ

でも私はあとへは退かない。」

かくて三十分ばかり過ぎ去った。テナルデイエはある暗黒な瞑想めいそうのうちに沈み込んでるようだった。捕虜は身動きもしなかつた。けれどもマリユスは、少し前から時々間を置いて、捕虜のあたりになにか鋭いかすかな音が聞こえるように思った。

突然、テナルデイエは捕虜に言いかけた。

「ファーブルさん、今すぐに言つといた方がいいようだから聞かしてあげよう。」

その数語は、これから何か説明が初まるもののように思われた。マリユスは耳を傾けた。テナルデイエは言い続けた。

「家内はすぐに帰つて来る。そうせかないで待つていなさるがいい。アルーエツトはまったくお前さんの娘だろうから、お前さんが家に引き取つて置いてえなあたりまえだとわしも思う。」

だがちよつと聞いておいてもらいましょう。お前さんの手紙を持って、家内は娘さんに会いに行く。ところでさつきごらんとおり家内へは相当な服装なびをさしといたから、すぐに娘さんについて来るに違いない。そしてふたりは辻馬車つじばしゃに乗るが、その後ろにはわしの仲間がひとり乗つてる。市門の外のある場所には、上等の馬が二匹ついてる小馬車がある。そこまでお前さんの娘は連れてこられるんだ。そこで娘さんは辻馬車からおりて、わしの仲間といっしょに小馬車に乗る。家内はここに帰つてきて報告する、すんだと。娘さんの方には別に悪いことはしねえ。娘さんはある所まで小馬車で連れてゆかれるが、そこにじつとしてるだけだ。そしてお前さんが二十万フランの小金こがねをわしにくれるとすぐに娘さんを返してあげる。もしお前さんがわしを捕縛させるようなことをすれば、わしの仲間がアルーエツトに

手を下すばかりだ。まあざつとこういう筋道だ。」

捕虜は一言をも発しなかつた。ちよつと休んでからテナルディエは言い続けた。

「お聞きのとおり何でもねえことなんだ。お前さんの心次第で何も悪いことは起こりやあしねえ。うち明けてわしは話したんだ。よくのみ込んでおいてもらいてえと思つてな。」

彼は言葉を切つた。捕虜は口を開こうともしなかつた。テナルディエはまた言つた。

「家内が帰つてきて、アルーエツトは出かけたと言いさえすりやあ、すぐにお前さんは許してあげる。勝手に家に帰つて寝てもいい。ねえ、わしらは別に悪い計画たくらみを持つてやしねえ。」

恐るべき幻がマリユスの脳裏を過ぎよつた。何事ぞ、彼らはその若い娘を奪つてここへは連れてこないのか。あの怪物のひと

りがその娘を暗黒のうちに運び去ろうとするのか。いつたいどこへ？……そしてもしその娘が果たして彼女であつたならば！ いや彼女であることは明らかである。マリユスは心臓の鼓動も止まるような気がした。どうしたものであろう。ピストルを打つがいいか。その悪漢どもを皆警官の手に渡してしまふがいいか。しかしそれにしても、あの恐ろしい斧おのの男は若い娘を連れてやはり手の届かぬ所に行つてゐるだろう。マリユスは恐ろしい意味が察せらるるテナルデイエの数語を思つた。「もしお前さんが、わしを捕縛させるようなことをすれば、わしの仲間がアル、エ、ツトに手を下すばかりだ。」

今はもう大佐の遺言のためばかりではなく、また自分の恋のために、愛する人の危険のために、差し控えていなければならぬように彼は思つた。

既に一時間以上も前から続いたその恐ろしい情況は一瞬ごと  
に様子を変えていった。マリユスは勇を鼓して最も悲痛な推測  
を一々考慮してみた、そして何かの希望をさがし求めたが少し  
も見い出されなかつた。彼の脳裏の騒乱はその巢窟そうくつの気味悪い  
沈黙と異様な対照をなしていた。

その沈黙のうちに、階段の所の扉とびらが開いてまたしまる音が聞  
こえた。

捕虜は縛られながらちよつと身を動かした。

「うちのお上かみだ。」とテナルデイエは言った。

その言葉の終わるか終わらないうちに、果たしてテナルデイ  
エの女房が室へやに飛び込んできた。まっかになつて、息を切らし、  
あえいで、目を光らしていた。そしてその大きな両手で一度に  
両腿りょうももをたたきながら叫んだ。

「嘘うその住所だ。」

女房が引き連れていた悪漢が、彼女のあとからはいつてきて、またその斧おのを取り上げた。

「嘘の住所だと！」テナルデイエは鸚鵡返おうむがえしに言った。

女房は言った。

「だれもいやしない。サン・ドミニク街十七番地にユルバン・ファールブルなんて者はいやしない。だれにきいても知ってる者なんかいないよ。」

彼女は息をつまらして言葉を切ったが、それからまた続けて言った。

「テナルデイエ、お前さんはその爺じいさんにはかにされたんだよ。あまりお前さんも人がよすぎるじゃないか。私ならほんとにそいつの頤を四つ裂きにもしておいてかかるんだがね。意地の

悪いことをしやがったら、生きてるまま煮たててやるんだがね。そうすりゃあ、きつと本当のことを言つて娘のおる所や金を隠してる所を吐き出してしまつたに違いない。私だつたらさういうふうにやつてのけるよ。男なんて女よりはよほどばかだつて言うが、まつたくだ。十七番地なんかにはだれもいやしない。大きな門があるきりなんだ。サン・ドミニク街にはファールなんて者はいやしない。大急ぎで馬をかけさせるし、御者には祝儀をやるし、いろいろなお上さんにも聞いたが、そんな人はし、しつかり者らしいそのお上さんにも聞いたが、そんな人はてんで知らないじゃないかね。」

マリウスはほつと息をついた。ユルスユールかあるいはアルーエツトか本当の名前はわからないが、とにかく彼女は救われたのだつた。

たけり立つた女房が怒鳴りちらしてゐる間に、テナルデイエはテーブルの上に腰掛けた。彼は一言も発しないでそのままの姿勢をして、たれてゐる右足を振り動かしながら、残忍な夢に沈んでゐるような様子で、しばらく火鉢ひばちの方を見やつていた。

ついに彼は、特に獯猛どうもうなゆつくりした調子で捕虜に言った。「嘘うその住所だと、いつたい貴様何のつもりだ。」

「時間を延ばすためだ！」と捕虜は爆発したような声で叫んだ。そして同時に彼は縛られた繩なわを揺すつた。それは皆切れていった。捕虜はもはや、片足が寝台に結わえられてゐるばかりだった。

七人の男がはつと我に返つて飛びかかるすきも与えず、彼は暖炉の所に低く身をかがめ、火鉢の方に手を伸ばし、それからすつくと立ち上がった。そして今やテナルデイエもその女房も悪漢どもも、驚いて室へやのすみへ退き、呆然ぼうぜんと彼を見守つた。彼

はほとんど自由になつて恐ろしい態度をし、すごい火光がしたるばかりのまっかに焼けた鑿たがねを、頭の上に振りかざしていたのである。

ゴルボー屋敷におけるこの待ち伏せの後に間もなく行なわれた裁判所の調査によれば、二つに切り割つて特殊な細工を施した大きな一スー銅貨が、臨検の警官によつてその屋根やね根部べ屋やの中に見い出されたのだつた。その大きな銅貨は、徒刑場の気長い仕事によつて暗黒な用途のために暗黒の中で作り出される驚くべき手工品の一つであり、破獄の道具にほかならない驚くべき品物の一つだつた。異常な技術に成つたそれらの恐るべき微妙な作品が宝石細工に対する関係は、あたかも怪しい隠語の比喩ひゆが詩に対する関係と同じである。言語のうちにヴィヨンのごとき詩人らがあると同じく、徒刑場のうちにはベンヴェヌート・

チエリーニのごとき金工らがおる。自由にあこがれてる不幸な囚人は、時とすると別に道具がなくても、包丁や古ナイフなどで、二枚の薄い片に一スー銅貨を切り割り、貨幣の面には少しも疵きずがつかないように両片をくりぬき、その縁に螺旋条らせんじょうをつけて、また両片がうまく合わさるようにこしらえることがある。それは自由にねじ合わせたりねじあけたりできるもので、一つの箱となつている。箱の中には時計の撥条ぜんまいが隠されている。そしてその撥条をうまく加工すると、大きな鎖でも鉄の格子こうしでも切ることができる。その不幸な囚徒はただ一スー銅貨しか持つていないように思われるが、実は自由を所有してゐるのである。ところで、後に警察の方で捜索をした時、その部屋へやの窓に近い寝台の下で見いだされた、二つの片に開かれてる大きな一スー銅貨は、そういう種類のものであつた。それからまた、その銅

貨の中に隠し得るくらいの小さな青い鋼鉄の鋸のこぎりも見い出された。おそらく、悪漢どもが捕虜の身体をさがした時、捕虜はその大きな銅貨を持つていたが、それをうまく手の中に隠し、それから次に、右手が自由になったので、それをねじあげ、中の鋸を使つて縛られてる繩なわを切つたものである。マリユスが気づいたかすかな音とわずかな動作とは、またそれで説明がつく。見現わされるのを恐れて身をかがめることができなかつたので、彼は左足の縛りめは切らなかつたのである。

悪漢どもは初めの驚きからようやくやく我に返つた。

「安心しろ。」とビグルナイユはテナルディエに言った。

「まだ左の足が縛つてある。逃げることはできねえ。受け合いだ。あの足を縛つたなあ俺おれだぜ。」

そのうちに捕虜は声を揚げた。

「君らは気の毒な者どもだ。わしの生命はそう骨折つて大事にするほどのものはない。ただ、わしに口をきかせようとしたり、書きたくないことを書かせようとしたり、言いたくないことを言わせようとしたりするからには……。」

彼は左腕の袖をそでまくり上げてつけ加えた。

「見ろ。」

同時に彼は腕を伸ばして、右手に木の柄をつかんで持つていた焼けてる鑿を、たがねそのあらわな肉の上に押し当てた。

じゅーつと肉の焼ける音が聞こえ、拷問部屋ごうもんべやに似たにおいが

へや室にひろがった。マリユスは恐ろしさに気を失つてよろめき、悪漢どもすら震え上がった。しかしその異常な老人の顔はちよつとひきつったばかりだった。そして赤熱した鉄が煙を上げてる傷口の中にはいつてゆく間、彼は平気なほとんど荘嚴な様子で、

美しい目をじつとテナルデイエの上にすえていた。その目の中には、何ら憎悪ぞうおの影もなく、一種朗らかな威厳のうちに苦痛の色も消えうせてしまっていた。

偉大な高邁こうまいな性格の人にあつては、肉体的の苦悩にとらえられた筋肉と感覚との擾乱じようらんは、その心霊を発露さして、それを額の上に現出させる。あたかも兵卒らの反逆はついに指揮官を呼び出すがようなものである。

「みじめな者ども、」と彼は言った、「わしが君らを恐れないと同じに、君らももうわしを恐れるには及ばない。」

そして彼は傷口から鑿を引き離し、開いていた窓からそれを外に投げ捨てた。赤熱した恐ろしい道具は、回転しながら暗夜のうちに隠れ、遠く雪の中に落ちて冷えていった。

捕虜は言った。

「どうとでも勝手にするがいい。」

彼はもう武器は一つも持つていなかった。

「奴<sup>やつ</sup>を捕えろ！」とテナルディエは言った。

悪漢のうちのふたりは彼の肩をとらえた。そして仮面をつけた腹声の男は、彼の前に立ちふさがって、少しでも動いたら大鍵<sup>おおかぎ</sup>を食わして頭を打ち破つてやろうと待ち構えた。

同時にマリユスは、壁の下の方で自分のすぐ下に、低い声でかわされる次の対話を聞いた。あまり近いので、話してる者の姿は穴から見えなかった。

「こうなつたらほかに仕方はねえ。」

「やつつける！」

「そうだ。」

それは主人と女房とが相談してるのだった。

テナルデイエはゆつくりとテーブルの方へ歩み寄つて、その引き出しを開き、ナイフを取り出した。

マリウスはピストルの手を握りしめた。異常な困惑のうちに陥つた。一時間前から、彼の内心のうちには二つの声があつた。一つは父の遺言を尊重せよと彼に語り、一つは捕虜を救えと彼に語つていた。その二つの声は絶えず互いに争鬪を続けて彼をもだえさした。彼はこの瞬間まで、その二つの義務を相融和し得る道はないかと漠然と願つていた。ぼくぜんしかしそれをかなえるようなものは何も起こつてこなかつた。しかるにもはや危機は迫つており、遅滞の最後は越えられていた。捕虜から数歩の所に、テナルデイエはナイフを手にして考え込んでいた。

マリウスは昏迷こんめいしてあたりを見回した。絶望の極の最後の機械的な手段である。

と突然、彼はおどり上がった。

彼の足下に、テーブルの上に、満月の強い光が一枚の紙片を照らし出して、彼にそれを示してるかのようだった。その紙片の上に彼は、テナルデイエの姉娘がその朝書いた大きな文字の次の一行を読んだ。

——いぬがいる。

一つの考えが、一つの光が、マリユスの脳裏をよぎった。それこそ彼がさがしている方法だった。彼を苦しめてる恐るべき問題の解決、殺害者を逃がし被害者を救う方法であった。彼は戸棚の上にひざまずき、腕を伸ばし、その紙片をつかみ取り、壁から一塊の漆喰しっくいを静かにはぎ取り、それを紙片に包みそのままそれを部屋へやのまんなかに穴から投げ込んだ。

ちようど危うい時であった。テナルデイエは最後の危懼きぐもし

くは最後の用心をおさえつけて、捕虜の方へ歩を進めていた。

「何か落ちた。」とテナルディエの女房は叫んだ。

「何だ？」と亭主は言った。

女房は駆け寄って、紙に包んだ漆喰を拾った。

彼女はそれを亭主に渡した。

「どこからきたんだ。」とテナルディエは尋ねた。

「なにどこから来るもんかね、」と女房は言った、「窓からより

ほかはないじゃないかね。」

「俺おれはそれが飛んで来る所を見た。」とビッグルナイユは言った。

テナルディエは急いで紙をひらき、ろうそく蠟燭の火に近づけた。

「エポニーヌの手蹟てだ。畜生！」

彼は女房に合い図をすると、女房はすぐにそばにきた。彼は紙に書いてある一行の文句を示して、それから鈍い声でつけ加

えた。

「早く！ 梯子はしごだ。肉は鼠罠ねずみわなに入れたままで、引き上げよう。」

「首をちよんぎららずにかえ。」と女房は尋ねた。

「そんな暇はねえ。」

「どこから逃げるんだ。」とビグルナイユは言った。

「窓からよ。」とテナルデイエは答えた。「エポニーヌが窓から石をほうり込んだところを見ると、その方には手が回ってねえことがわかる。」

仮面をつけた腹声の男は、大鍵おおかぎを下に置き、両腕を高く上げて、黙ったままその手を三度急がしく開いたり握ったりした。それは船員らの間の戦闘準備の合い図みたいなものだった。捕虜をとらえていた悪漢はその手を離した。またたく間に、繩梯子なわぼしごは窓の外におろされ、二つの鉄の鈎かぎでしつかと窓縁に止められ

た。

捕虜は周囲に起こつてゐることには少しも注意をしなかつた。

彼は何か夢想しあるいは祈禱きとうしてるがようだった。

繩梯子なわばしごがつけられるや、テナルデイエは叫んだ。

「こい、上かみさん！」

そして彼は窓の方へつき進んだ。

しかし彼がそこをまたごうとした時、ビッグルナイユは荒々し

く彼の襟筋えりすじをつかんだ。

「いけねえ、古狸ふるだぬきめ、俺おれたちが先だ。」

「俺たちが先だ！」と悪漢どもは怒鳴り立てた。

「つまらねえ野郎だな、」とテナルデイエは言った、「時間をつ

ぶすばかりだ。いぬどもがきかかつてるじゃねえか。」

「じゃあ、」とひとりの悪漢が言った、「だれが一番先か籤くじび引き

をしろ。」

テナルディエは叫んだ。

「ばかども、気でも狂ったのか。のろまばかりそろってやがる。時間をつぶすばかりじゃねえか。籤引きをするっていうのか。じゃんけんか、藁屑わらくずか、名前を書いて帽子に入れてか……。」「俺の帽子ではどうだ。」と入り口の所に声がした。

皆の者は振り向いた。それはジャヴェルだった。

彼は手に帽を持って、微笑しながらそれを差し出していた。

二十一 常にまず被害者を捕うべし

ジャヴェルは日暮れに、手下を方々に張り込ませ、大通りをはさんでゴルボー屋敷と向かい合ったバリエール・デ・ゴブラ

ン街の木立ちの後ろに自ら身を潜めた。彼はまずいわゆる「ポケット」を開いて、屋敷の付近に見張りをしてるふたりの娘をその中にねじ込もうとした。しかし彼はアゼルマをしか「袋にする」ことはできなかつた。エポニーヌの方はその場所にいなくて姿が見えなかつたので、捕えることができなかった。それからジャヴェルは位置について、約束の合い図を待つて耳を傾けていた。辻馬車つじばしやが出かけたり戻つてきたりするので、彼は少なからず心配になつて、ついにたえきれなくなつた。そして多くの悪漢どもがはいり込んだのを認めていたので、確かにそこに巢があると思ひ、確かにうまいことがあるに違いないと信じて、ピストルの鳴るのをも待たずにはいつて行こうと心を決した。

読者の思い起こすとおり、彼はマリユスの合いあ鍵かぎを持つてい

たのである。

彼はちようどいい時にやつてきた。

狼狽ろうばいした悪漢らは、逃げ出そうとする時方々に投げ捨てた武

器をまたつかみ取った。またたく間に、見るも恐ろしいそれら七人の者どもは、いっしよに集まって防御の姿勢を取った。ひとりはおの斧おのを持ち、ひとりは大鍵を持ち、ひとりは玄翁げんのうを持ち、その他の者は鋏はさみや火箸ひぼしや金槌かなづちなどを持ち、テナルデイエはナイフを手に握っていた。テナルデイエの女房は娘たちが腰掛けにしていた窓の角かどにある大きな畳石をつかんだ。

ジャヴェルは帽子をかぶつて、両腕を組み、杖を小脇こわきにはさみ、剣を鞘さやに七納めたまま、室へやの中に二歩はいり込んだ。

「そこにじつとしていろ！」と彼は言った。「窓から出ちやいかん。出るなら扉とびらの方から出してやる。その方が安全だ。貴様た

ちは七人だが、こちらは十五人だ。オーヴェルニユの田舎者のいなかものようにつかみ合わなくてもいい。静かにしろ。」

ビグルナイユは上衣の下に隠し持っていたピストルを取って、それをテナルデイエの手に渡しながら、彼の耳にささやいた。

「あれはジャヴェルだ。俺はおれあいつに引き金を引くなあいやだ。貴様やってみるか。」

「やるとも。」とテナルデイエは答えた。

「じゃあ打つてみる。」

テナルデイエはピストルを取って、ジャヴェルをねらった。

三步前の所にいたジャヴェルは、彼をじつとながめて、ただこれだけ言った。

「打つな、おい、当たりやしない。」

テナルデイエは引き金を引いた。弾たまははずれた。

「それみろ！」とジャヴェルは言った。

ビグルナイユは玄翁げんのうをジャヴェルの足下に投げ出した。

「旦那だんなは悪魔の王様だ、降参すらあ。」

「そして貴様たちもか。」とジャヴェルは他の悪漢どもに尋ねた。彼らは答えた。

「へえ。」

ジャヴェルは静かに言った。

「そうだ、それでよし。俺が言ったとおり、皆おとなしい奴やつらだ。」

「ただ一つお願いがあります、」とビグルナイユは言った、「監禁中煙草たばこは許していただきてえんですが。」

「許してやる。」とジャヴェルは言った。

そして後ろをふり返って呼んだ。

「さあはいつてこい。」

剣を手にした巡査と棍棒こんぼうの類を持った刑事との一隊が、ジャヴェルの声に応じておどり込んできた。そして悪漢どもを縛り上げた。一本の蠟燭ろうそくの光がそれら一群の人々をようやく照らして、部屋へやの中はいっぱい影に満ちた。

「皆に指錠をはめろ。」とジャヴェルは叫んだ。

「そばにでもきてみろ！」と叫ぶ声があった。それは男の声ではなかったが、さりとて女の声とも言い得ないものだった。

テナルディエの女房が窓の一方の角によつて、その怒鳴り声を揚げたのだった。

巡査や刑事らは後ろにさがった。

彼女は肩掛けをぬぎすてて、帽子だけはかぶっていた。亭主はその後ろにうづくまつて、ぬぎすてられた肩掛けの下に身を

隠さんばかりにしていた。彼女はまたそれを自分の身体でおおいながら両手で頭の上の畳石を振りかざして、岩石を投げ飛ばさんとする巨人のように調子を取っていた。

「気をつけろ。」と彼女は叫んだ。

人々は廊下の方へ退いた。室のまんなかには広い空地があった。

テナルディエの女房は指錠をはめられるままに身を任した悪漢どもの方をじろりと見やつて、つぶれた喉声のどしえでつぶやいた。

ひきょうもの  
「卑怯者！」

ジャヴェルはほほえんだ。そしてテナルディエの女房がらみつけてる空地のうちに進み出た。

「近くへ来るな、行つちまえ、」と彼女は叫んだ、「そうしないとぶつつぶすぞ。」

「すごい勢いだな。」とジャヴェルは言った。「上かみさん、お前さんに男のような髯ひげがあるからって、わしにも女のような爪つめがあるからな。」

そして彼はなお進んで行つた。

テナルディエの女房は髪をふり乱し恐ろしい様子をし、足をふみ開き、後ろに身をそらして、ジャヴェルの頭をめがけて狂わんばかりに畳石を投げつけた。ジャヴェルは身をかがめた。畳石は彼の上を飛び越え、向こうの壁につき当たつて漆喰しっくいの大きな片をつき落とし、それから、幸いにほとんど人のいなかつた室へやのまんなかを、角から角とごろごろころがり戻つて、ジャヴェルの足下にきて止まつた。

同時にジャヴェルはテナルディエ夫婦の所へ進んだ。彼の大きな手は、一方に女房の肩をとらえ、一方に亭主の頭を押さえ

た。

「指錠だ！」と彼は叫んだ。

警官らは皆一度に戻つてきた。そして数秒のうちにジャヴェルの命令は遂行された。

とりひしがれたテナルデイエの女房は、縛り上げられた自分の手と亭主の手とを見て、床ゆかの上に身を投げ出して、泣き声を揚げた。

「ああ娘たちは！」

「娘どもも、もう暗い所へはいってる。」とジャヴェルは言った。

そのうちに警官らは、扉とびらの後ろに眠っている酔っ払いを見つけて、揺り動かした。彼は目をさましながらつぶやいた。

「すんだか、ジョンドレット。」

「すんだよ。」とジャヴェルが答えた。

捕縛された六人の悪漢はそこに立っていた。でも彼らはその異様な顔つきのままであつて、三人は顔をまっ黒に塗っており、三人は仮面をかぶっていた。

「面はつけておけ。」とジャヴェルは言った。

そして、ポツダム宮殿で観兵式をやるフレデリック二世のような目つきで、後は一同を見渡して、それから三人の「暖炉職工」へ向かつて言った。

「どうだビグルナイユ。どうだブリュジョン。どうだドゥー・ミリヤール。」

次に仮面をかぶつてる三人の方へ向いて、彼は斧おのの男に言った。

「どうだな、グールメル。」

それから棍棒こんぼうの男に言った。

「どうだな、バベ。」

それから腹声の男に言った。

「おめでとう、クラクズー。」

その時彼は、悪漢どもの捕虜を顧みた。捕虜は警官らがいっ  
てきてからは、一言をも発せず、じつと頭をたれていた。

「その者を解いてやれ。」とジャヴェルは言った。「そしてひとりも外へ出てはならんぞ。」

そう言つて彼は、おごそかにテーブルの前にすわつた。テーブルの上には蠟燭ろうそくとペンやインキがまだ置いてあつた。彼はポケットから印のはいつた紙を一枚取り出して、調書を書き初めた。

いつも同一なきまり文句を二、三行書いた時、彼は目を上げた。

「その男どもから縛られていた者をここに連れてこい。」  
警官らはあたりを見回した。

「どうしたんだ、」とジャヴエルは尋ねた、「その者はどこにお  
るんだ。」

悪漢どもの捕虜、ルブラン氏もしくはユルバン・ファール  
氏、もしくは、ユルスユールあるいはアルーエットの父親は、消  
えうせてしまっていた。

扉とびらには番がついていたが、窓には番がいなかった。彼は縛り  
が解かれたのを見るや否や、ジャヴエルが調書を書いてる間に、  
混雑と騒ぎと人込みと薄暗さとまただれも自分に注意を向けて  
いない瞬間とに乗じて、窓から飛び出して行つたのである。

ひとりの警官は窓の所へ駆け寄って見回した。外にはだれも  
見えなかつた。

繩梯子なわはしじはまだ動いていた。

「畜生！」とジャヴェルは口の中で言った。「あれが一番大事な奴やつだったに違いないが。」

## 二十二 第二部第三編に泣きいし子供

それらの事件がオピタル大通りの家で起こったその次の日、オーステルリッツ橋の方からきたらしいひとりの少年が、フォントーヌブロー市門の方へ向かって右手の横丁を進んで行った。まったく夜になっていた。少年は色青くやせていて、ぼろをまとい、二月の寒空に麻のズボンをつけ、声の限りに歌を歌っていた。

プティー・バンキエ街の角かどの所に、腰の曲がった婆かどさんが、街

灯の光を頼りに掃き溜めの中をかき回していた。少年は通りすがりにその婆さんにつき当たって、それからあとじさりながら大きい声で言った。

「おやあ！ 俺はまたでかいでかい犬かと思つた。」

彼はその二度目の「でかい」という言葉を、おどけた声を張り上げて言った、文字にすればその言葉だけ一段と活字を大きくすべき所である。

婆さんは怒つて立ち上がった。

「小僧め！」と彼女はつぶやいた。「かがんでいなかったら、蹴飛ばしてやるところだったに。」

少年は既に向こうに行つていた。

「シツシツ。」と彼は言った。「やはり犬には違くないや。」

婆さんは息もつまらんばかりに腹を立てて、すっかり立ち上

がった。目尻の皺しわと口角とがいつしよになつて角張つた皺だらけの蒼白そうはくな顔を、街灯の赤い光が正面から照らした。身体は影の中に隠れて、頭だけしか見えなかつた。暗夜のうちから一条の光で切り取られた「老耄おいぼれ」そのものの面かと思われた。少年はそれをじろじろながめた。

「お上かみさんも美しいがね、俺の気に入るたちのものじゃあないや。」と彼は言った。

彼はまた歩き出して、歌い初めた。

クードサボ王様（どた靴王様ぐつおうさま）

狩りに行かれぬ、

鳥の狩りに……

そう三句歌った後、彼は口をつぐんだ。彼は五十・五十二番地の家の前にきていた。そして戸がしまつてゐるのを見て、足で蹴り初めた。その大きな激しい音は、彼の少年の足よりもむしろ、その足にはいてる大人おとなの靴を示していた。

そのうちに、プティー・バンキエ街の角かどで出会った先刻の婆さんが、叫び声を立て大層な身振りをして、後ろから駆けつけてきた。

「どうしたんだね。どうしたんだね。まあ、戸が破れるじゃないか。家うちをこわしてもするのかい。」

少年はやはり蹴り続けた。

婆さんは喉のどを張り裂かんばかりに叫んだ。

「おい、人の家をそんなにしてもいいものかね。」

と突然彼女は言葉を切った。先刻の浮浪少年であることに気

づいたのである。

「おや、今の餓鬼だよ。」

「おや、お婆さんか。」と少年は言った。「こんちは、ビュルゴン ミューシユ婆さん。俺はちよつと御先祖様に会いにきたんだ。」

婆さんは老衰と醜さとをよく利用して即座にしたたか憎しみを現わす変なしかめつ面をしたが、それは不幸にも暗やみの中なので見えなかった、そして答えた。

「もうだれもないよ、おばかさん。」

「へえー。」と少年は言った。「じゃあ親父はどこにいるんだい。」

「フォルス監獄だよ。」

「おやあ！ じゃあ母親は？」

「サン・ラザール懲治監だよ。」

「なるほど！ それから姉たちは？」

「マドロンネット拘禁所だよ。」

少年は耳の後ろをかいて、ビュルゴン婆さんをながめた、そして言った。

「ほうー。」

それから彼は回れ右をして立ち去った。戸口に立っていた婆さんは、それからすぐに、冬の寒風に震えてる黒い楡にれの並み木の下を、歌を歌いながら遠ざかってゆく少年の朗らかな若い声を聞いた。

クードサボ王様

狩りに行かれぬ、

鳥の狩りに、

お輿こしは竹馬。

下をくぐらば  
二スー取られぬ。

## 後註

- 一 「顛倒していた」は底本では「転倒していた」
- 二 「これは金」に傍点
- 三 ルビの「せきたんがま」はママ
- 四 「う、む、」は底本では「うむ、」
- 五 「顛倒させた」は底本では「転倒させた」  
「ふいし」
- 六 「ふいしのように」は底本では「ふいし」  
「ふいしのように」
- 七 「さや」  
「さや」は底本では「さや」



底本：「レ・ミゼラブル（二）」岩波文庫、岩波書店  
1987（昭和 62）年 4 月 16 日改版第 1 刷発行  
「レ・ミゼラブル（三）」岩波文庫、岩波書店  
1987（昭和 62）年 5 月 18 日改版第 1 刷発行

※「ジョンドレットの女房が」の段落は、底本では天付きになっています。

※誤植の確認に「レ・ミゼラブル（四）」岩波文庫、岩波書店 1959（昭和 34）年 6 月 10 日第 12 刷を用いました。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2007 年 1 月 16 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。